

赤い土器を追う



佐久考古学会編

佐久考古 6号

赤い土器を追う

佐久考古学会編

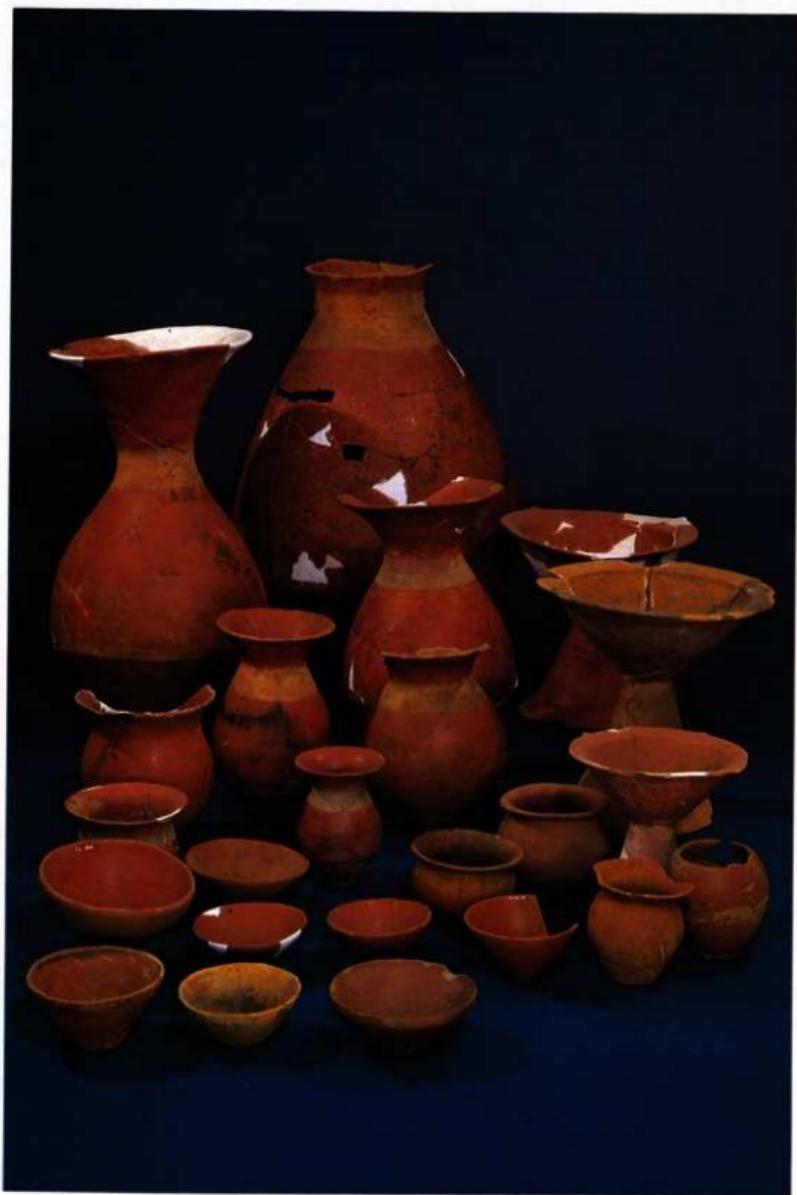
佐久考古6号

赤い土器を追う

—長野県千曲川上流域における弥生文化の展開—

1990

佐久考古学会



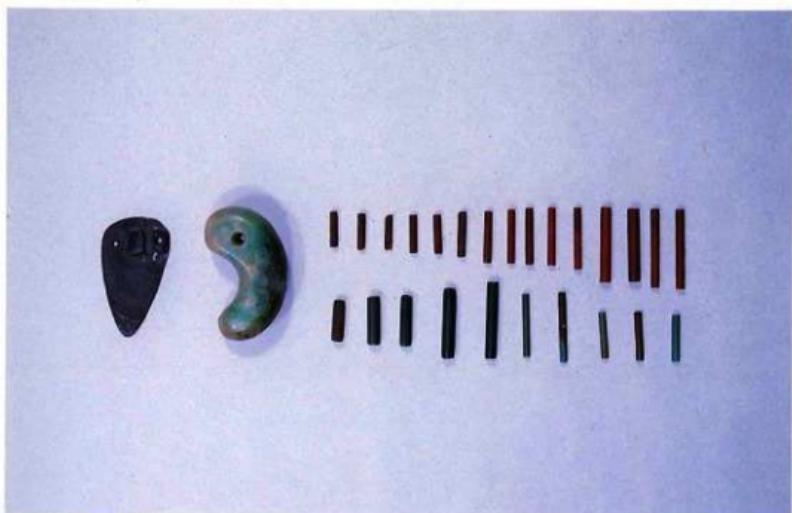
佐久平を象徴する赤い土器(弥生時代後期)



佐久町中原遺跡出土の壺(佐久町教育委員会蔵)、佐久地方の初期弥生土器である。



佐久町館遺跡出土の土偶形容器(草間吾助氏蔵)



佐久市社宮司遺跡出土 白銅製ペンダント・硬玉製勾玉・鉄石英・碧玉製管玉(伴野稀一郎氏蔵)



佐久市西八日町遺跡 Y3号住出土の弥生時代中期後半の土器セット



上直路遺跡 銅鏡と土器の出土状態



上直路遺跡 銅鏡の出土状態

『赤い土器を追う』発刊に当たり

佐久考古学会会長 由井茂也

佐久考古学会に於いては、地域研究を主として「赤い土器を追う」をテーマとした共同研究を進めてきた。今回、その成果を取り纏めて発刊の運びとなった。

赤い土器は佐久地方における弥生時代の象徴的土器である。従って赤い土器を追うことは、佐久地方における弥生時代を明らかにすることである。

佐久地方における弥生時代の遺物は、比較的早くから研究者によって着目され、特に昭和の初年に藤森栄一先生によって岩村田式土器と命名されたことで知られている。以来、多くの研究者により示唆に富む研究報告が行われてきた。また専門家を招いて講演会等も行われ一般的認識を高めてきた。

当考古学会はこうした先輩たちの学績のうえにさらに地域研究者として膨大な資料を駆使した研究を積み重ねることができたのである。

弥生時代は、新しく米作農耕の文化が導入された時代である。一度、その新しい文化が伝播すると、それまで河川の上流地帯で山麓に近い高原や台地に広く散在していた狩猟・採集を営む縄文遺跡が急速に消滅して、変わって比較的気候の穏やかな、水利に恵まれた佐久平の低平地にいくつもの集落がつくられていった。定着的な集落の形成や、生産による富の集積から複雑な社会的仕組みも始ったといわれている。

当学会が赤い土器を追い始めたころから、佐久地方全域においても農業の機械化が進み、構造改善という大型の圃場整備事業が行われた。また、民活という名のもとに高速道をはじめ地域道路網の整備、住宅団地や工場団地、ゴルフ場の造成等かつて予想しなかったような大土木工事が相次いで行われてきた。そしてこれらの開発地域では、至るところで遺跡が発見され、その多くが緊急発掘され、破壊されていった。これらの一連の発掘によって得られた資料は、想像を絶する量である。

「赤い土器を追う」は地域における長い研究とこうした大量の資料の恩恵による結晶である。佐久の文化史として高い意義をもつものと考える。唯一つ、これほど多くの緊急発掘が行われ、遺跡の破壊が行われたにもかかわらず保護・保存という問題が起らなかつたことは寂しいと思う。

この研究は一応の結末を得ることが出来たが、新しい資料は今後更に増大することが予想され、より一層の研究の進展が期待されるところである。大方の御教示・御叱正をお願いしたいと思う。また、会員の皆さんとの長期間にわたる御協力に感謝し、序文を兼ね発刊の挨拶とする次第である。

目 次

『赤い土器を追う』発刊に当たり

第1章 佐久平の弥生時代の地形と水稻米作の変遷	1
第2章 遺跡の分布	7
第1節 総論	7
第2節 諸地域の様相	9
(1) 南牧村・川上村	9
(2) 八千穂村・小海町・北相木村・南相木村	15
(3) 佐久町・白田町	20
(4) 佐久市	35
(5) 立科町・望月町・浅科村・北御牧村	88
(6) 小諸市	97
(7) 軽井沢町・御代田町	101
第3節 東部町の様相	103
(1) 地形	103
(2) 遺跡の分布	103
(3) まとめ	109
第3章 土器の移り変わり（編年）	111
第1節 はじめに	111
第2節 研究史	111
(1) 栗林式土器	111
(2) 吉田式土器	114
(3) 箱清水式土器	115
第3節 今までの編年の問題点	123
(1) 笹沢編年	123
(2) 白田編年	123
第4節 佐久地方中期後半～後期の弥生土器編年	124
(1) 大枠の時期区分	124
(2) 各期の年代決定	125
(3) 大区分の細分	125
(4) まとめ	139
(5) 蛇足 古墳時代初頭の土器	142

第4章 考察編	145
第1節 信州佐久平弥生文化の特質	145
(1) 日本最高標高地点の弥生文化	145
(2) 千曲川右岸・左岸の地域相	145
(3) 集落	148
(4) 生産遺跡	150
(5) 墓制	151
(6) 食文化	153
(7) 衣文化	153
第2節 弥生時代交通路の想定	154
第3節 弥生時代の炉再考	158
(1) 時代的様相	158
(2) 考察	160
第4節 弥生時代の特殊住居址—特にベッド状遺構を中心として—	166
(1) 研究小史	166
(2) 分布の所見	167
(3) 出土遺物の特徴	169
(4) 集落内におけるベッド状遺構設住居址	169
(5) まとめに代えて	171
第5節 千曲川流域における弥生後期土器棺について	174
(1) 研究抄史と整理の方向	174
(2) 棺に使われる土器	176
(3) 土器棺の諸形式	180
(4) 墓域・遺跡内における土器棺の位置	182
(5) A式とB式の土器棺に葬られた人	183
(6) 中部高地型鶴ヶ尾文化圏の後期土器棺	184
第6節 南佐久郡における弥生時代黎明期の土器群について	187
(1) 地理的環境と土器伝播ルート	187
(2) 出土土器の特徴	189
第7節 南佐久郡下弥生後期の遺跡分布について	192
(1) 磨製石器出土遺跡	192
第8節 赤い土器に関する一つの実験	194
第9節 赤い土器の製作技術	196
(1) 宮淵本村遺跡第5号住居址出土土器と積み上げ技法	196
(2) 赤色塗彩の方法	200
(3) 赤い土器製作実験	201
第10節 赤い土器の赤色顔料分析	204
第11節 核現象と周辺現象—赤い土器追跡の方法—	206
付　　編　分布図・一覧表	211
あとがき	
よせがき	

第1章 佐久平の弥生時代の地形と

水稻米作の空遷

佐久平の地形

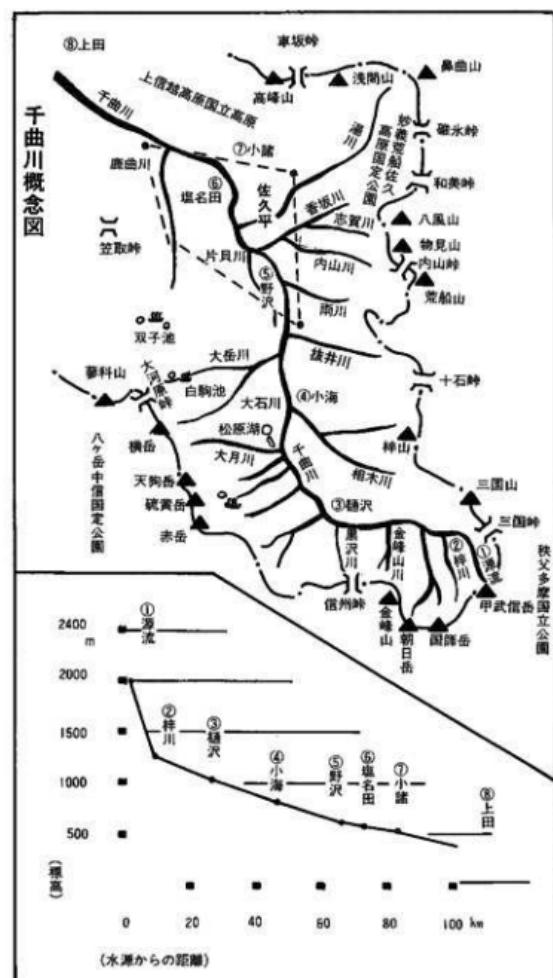
佐久平は千曲川の最上流部、南佐久郡・佐久市・北佐久郡・小諸市の二市二郡にまたがる高原盆地で、標高700m内外、南北約20km、東西最大約10kmのはば長菱形をなしている。北側は活火山浅間山(2,560m)・高峰山・烏帽子山・四阿山・白根山から岩苔山へと続く上信越高原国立公園に限られ、東側は、妙義山・荒船山・茂来山と続く妙義荒船佐久高原国定公園に境されて群馬県に接し、古来から碓氷峠・入山峠・和美峠・矢川峠・香坂峠・内山峠・星尾峠・沢口峠・余地峠・大上峠・十石峠・桙峠等多くの峠路がひらかれて、東西交通、物資流通が盛んに行われて来た。南部は秩父多摩国立公園の一部三国山(1,850m)・甲武信ヶ岳(2,468m)・金峰山(2,595m)の高峰によって甲州・武州・信州の国境をなし、分水嶺となっている。西側は赤岳(2,899m)・硫黄岳(2,742m)・蓼科山(2,530m)・霧ヶ峯・美ヶ峯台地へと続く八ヶ岳蓼科中信高原国定公園に境され、夏沢峠・中山峠・麦草峠・大河原峠・大門峠等による諏訪・佐久間の交通は古くから開かれていた。佐久平の四面は前記二国立と二国定の自然公園に囲まれ、それらを越える峠路は群馬県側18、埼玉県側2、山梨県側6、諏訪郡側7、小県郡側2の計35が挙げられ、近代交通以前の要衝であったことが推察できる。それに加えて我国には国立公園が28ヶ所・国定公園が52ヶ所、計自然公園80ヶ所が制定されているが、千葉・茨城県・大阪府にはその一つとしてないのに対し、佐久平は国立公園が2つ、国定公園も2つ存在し、自然に恵まれていることも地域の大きな誇りである。

本州第一の長流、千曲川は秩父多摩国立公園の主峰甲武信ヶ岳北斜面の川上村から源を発し、村内では西流し、村境から北流に転じる。小海町付近に至るとようやく比較的大きな流れとなり、千曲川と平行する南牧村山中の小海線のトンネルを越えると、ホッサマグナ構造線・東辺線に沿って佐久平・上田盆地・善光寺平を貫流して新潟県の一大穀倉地帯を流出して信濃川となり、日本海に流入する。総延長は369kmである。この千曲川の再上流部に開けたのが佐久平である。

佐久平の地形は、弥生時代から2000年を経た現在の地形と大きな変動がないと思われる。千曲川の流路をたどって詳細に見ると、源流地甲武信ヶ岳の北西面九合目より川上盆地に至るまでは山頂部との比高差1,300mを測る。その南西傾斜面は、原始林の繁茂する花崗岩の急峻な岩壁で形成されている。一斜千里の激流の岩間に岩魚が躍る姿や、時には原始林の樹間から優しいニホンカモシカの姿も覗き見られる。川上盆地内を緩やかに西流した後、北流に転じる樋沢部落を起点として広がる広壯な草原地帯は、戦前までは優良軍馬養成牧場であったが、現在は山間伐木が完全に行われて、大高原野菜生産地として全国にその名を轟かせている。川上村を出て北流する千

曲川は佐久山地の脈ひだを縫うように小海町から佐久町に流下し、周辺の支流を合わせて水量を増し、河岸段丘を広げて、いわゆる佐久平の南端に到達する。左岸からは鶴川・大月川・大石川・佐久市に入って抜井川・中沢川・片貝川・布施川・望月町から北御牧村にかけては蓼科山から北に下る鹿曲川、右岸からは相木川・佐久町に入って十石川・余地川から発する抜井川・佐久市に入り内山川と志賀川・香坂川の合流した滑津川・湯川・濁川などの支流を合流して川幅・水量を増し、大河の様相を呈して来る。

佐久平の南部・左岸は千曲川の冲積盆地で水利に恵まれているが、北部・右岸は浅間火山の軽石火山礫砂の堆積地で透水性に富み、地下水位も低く、江戸時代初期以来、飲用灌漑用水にも事欠くところであった。さらに下流の西部山地は蓼科山という広い受水地・涵水地をもつものの、火山性台地で古来から御牧ヶ原とともに用水には難儀した所であったが、江戸時代初期以来、世の泰平と殖産業の振興に伴って用水路の開発が進み、沃野が拡大した。



第1図 千曲川概念図

佐久平水稻米作の変遷

稻（いね）　いね科植物に属する26種のうち栽培種は2種である。アジアを中心に世界各地で広く栽培されるアジアイネ (*Oryza sativa*) と、西アフリカ、ニゼル河中流地域固有栽培種アフリカイネ (*Oryza glaberrima*) である。その他の野生種は広く熱帯湿地帯の世界各地に分布している。この2種の染色体合体は正常であるが、不稔である。また、アジアイネについては発祥原産地が、インド・インダス河流域であることが出土遺物から証明されている。

日本人の主食として長い歴史を歩んで来たイネは南方起源の導入種から、祖先によって日本特有の品種に改良されたものである。日本への伝播については弥生時代早期、紀元前3・4世紀頃まず西北部九州に上陸したことが、福岡県板付遺跡、長崎県菴畠遺跡などの発掘調査によって明らかになっている（弥生時代早期…板付・菴畠遺跡の水田址発見以前は縄文社会（晩期）と考えられていた）。

その経路は、

- 1 【南回り渡来説】 中国華南地方から台湾、琉球（沖縄）を経て島伝いに南九州に乗る
- 2 【直接渡米説】 中国、華中・江南地方の稻作民族が対馬海流に乗って直接移住して稻作を伝えたとする
- 3 【間接渡米説】 中国・揚子江下流域に源流を求めて、東進して朝鮮半島に渡り、そこから間接的に渡来したとする

以上の三説があるが、現在では【間接渡米説】がほぼ確定的となっている。

イネは気候への順応性が強く、品種改良が容易であること、また、主食として栄養価も高く、消化吸収も良好であることなどの諸条件も相俟って、日本列島に急速に普及した。弥生時代早・前期・紀元前3・4世紀から紀元前1世紀にかけては九州から東海西部・伊勢湾沿岸の西日本一帯、一息ついで弥生時代中期・紀元1世紀までには中部・関東・東北南部にまで到達した。また、最近、東北北部には日本海ルートで紀元前後頃、西日本から直接伝播したことが青森県垂柳遺跡の調査で明らかになった。北海道では明治初年頃まで南端の小部分に稻作が限られていたが、現在では全地域で栽培可能になっている。

佐久では、稻作の始まりが遅れる東日本の中でも更に一步イネの導入が遅れ、紀元1世紀頃・弥生時代中期後半（岩田町の北西の久保遺跡や瀬戸の和田上遺跡が盛期を迎える時代）になってやっと定着する。水稻栽培限界に近い高い標高に左右されたことも否めまい。標高による気温低下率は、 $0.6^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ とされている。弥生時代から稻作可能な佐久平中心部の標高は700m内外、

不毛地帯の川上村・軽井沢町は1,200mで500mの標高差は3℃平均気温差を生じる。現在のように川上村・軽井沢町での稲作を可能にするには平均気温差の克服が大命題であった。このため、佐久地方でも古代から水温を上げる為の工夫に心血が注がれたのであろう。

現在でも、稲作の限界標高は日本列島では標高740m内外、佐久地方ではだいたい720m内外と看されている。これを越えると風向き、日照時間、昼夜の温度差などが大きく異なって来ることもあり、稲作が4～5年に一度は冷害を受ける。また、余談になるが720m内外以上では、甘柿・まつは正常に育たず、1,000m以上では渋柿も育たず、りんごも成熟しない。現在でも川上村・南牧村・南北相木村・軽井沢町には甘柿の未成木は見られない。

遺跡分布を見ると、佐久地方の720m以上の地域には古墳が殆ど分布せず、弥生集落址も甚だ少ない状況が観察できる。ただし、古墳時代後期・奈良・平安時代には方法は不明確だが、品種改良、稲の自然適応、栽培技術の進歩などもあって、耕地が飛躍的に拡大したことが、集落分布域の拡大から読み取れる。また、江戸時代以降は、円錐型苗代、ぬるめ堰、冷堰、保温苗代、保温折衷苗代、依托苗代など水温上昇技術が飛躍的に進歩し、水田可耕地が更に拡大された。中でも軽井沢町古宿の荻原豊次考案の保温折衷苗代は大いに功を奏し、県知事より藍綬褒章、町より、名誉町民などの栄誉に浴した。

ところで佐久地方には○○新田と呼ばれる部落が多いが、いずれも江戸時代初期以来に開拓されたものが多い。御影新田・三河田用水・五郎兵エ新田・塩沢新田・八重原新田・十二新田、その他多くあるがいずれもこの時期のものが大部分で、米の収穫の増加と人口の増殖・国力の充実は比例しているようである。

第二次大戦になると食糧不足対策として水温上昇が考慮され、各地に用水池・貯水ダムが建設された。また、基盤整備・開田工事が行われ、化学肥料の導入、食糧の外地移入、肥培管理などと相俟って日本の食糧事情も好転したかに見えた。また、高冷地では一鍬一鍬起こした農地が高原野菜の大産地に転換して大収穫を上げている。しかし、前述したように水稻栽培限界地帯ではまだ人智の工夫・努力だけでは解決されない難問題が数多く残されている。春の晩霜低温・夏の旱害・秋の早霜急冷等々の自然災害に加え、殺虫の薬害などが4～5年に1～2回は多年の統計によれば繰り返されているのである。

イネの花は無花期で8月15～16日に穗が始めると同時に雄蕊と雄蕊が開き自花自愛する。夜間・短時間でも急冷して15℃以下になると授粉は行われず、不稔となる。開花中は最高29°～最低22°が最適で一穂の開花日数が6.2日で1日平均10%と言うのが平均値である。

佐久地方では昔から“稻作は飛穂1日、益揃い、だれこみ10日、これぞ並作”として普作（なみさく）の目安としている。佐久の盆地平坦部は旱害もなく、年累計2,500時間の日照時間を有し、連年収米量全国首位を統べている良質米多収地帯である。

第一章 佐久平の歴史時代の地形と水稲米作の変遷

1. 水稲作付面積10ha収量・収穫量(昭和30年度~平成元年度)

区分	年次	南佐久地区(地)		白山町		佐久町		小川町		上村		南牧村		北相木村		八千郷村		依久村		
		作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	作物	当季(当季)収穫量	
昭和30年度	31	2,400	520	16,600	600	507	3,200	411	520	2,200	465	1,820	129	396	513	143	431	616	90	460
	32	2,070	509	16,600	610	513	3,200	425	547	2,320	333	333	456	1520	445	142	379	533	147	410
	33	2,110	441	4,520	513	520	3,200	445	505	2,418	345	345	420	1,370	135	260	142	326	650	409
	34	2,170	479	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	148	268	255	148	255	255	267	
	35	2,230	511	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	36	2,230	511	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	37	2,230	511	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	38	2,230	511	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	39	2,270	520	11,600	513	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	40	2,280	499	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	41	2,280	499	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	42	2,280	499	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	43	2,240	491	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	44	2,230	398	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	45	1,830	684	5,320	520	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	46	1,630	466	7,570	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	47	1,520	479	7,620	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	48	1,630	511	8,170	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	49	1,630	365	6,570	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	50	1,630	511	9,600	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	51	1,630	388	6,570	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	52	1,760	533	9,600	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	53	1,520	517	8,150	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	54	1,630	509	7,620	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	55	1,440	360	5,170	500	520	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	56	1,430	455	8,840	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	57	1,420	341	4,770	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	58	1,380	460	6,530	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	59	1,420	542	7,620	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	60	1,440	538	7,620	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	61	1,440	540	7,750	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	62	1,440	531	7,750	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	
	63	1,440	531	7,750	655	565	3,200	1,340	1,340	2,688	2,575	2,575	149	333	169	314	650	444	444	

平均光年

篤農家や農事試験研究所のたゆまない素晴らしい素晴らしい研究も自然の摂理に抗するには、まだまだ、程遠いものがあるようである。

(文責 白倉盛男)

平成元年産 水稻の品種選作付状況一覧表

長野県農業技術研究所佐久支所
〔単位：アール〕

	白 田 町	佐 久 町	八 千 穂 村	小 海 町	川 上 村	南 牧 村	北 相 木 村	佐 久 市	御 代 田 町	軽 井 沢 町	小 諸 市	浅 科 村	望 月 町	立 科 町	北 御 牧 村	合 計	
コシ ヒカリ	18,093	1,185	27	22				(27) 14,968	128		6,384	36,465	23,276	31,925	29,987	(27) 256,460	
しなの こがね	464	11,487	7,743	1,771				(30) 18,850	1,687		51,081	14,688	13,492	3,381	9,216	(30) 120,540	
なかの ほまれ	(40) 20,169	2,606	102	623				20,583	231		2,217	2,123	4,698	6,860	1,923	(40) 62,135	
ホウセン ワセ		24	680	778		6	65	186	3,028	590	2,148			193		30 7,728	
美山錦																0	
しらかば 錦								12			23		2,076			2,111	
トドロキ ワセ		176						7,489			92		549	1,855		10,161	
アキ ヒカリ			636	1,048	1,017	606	281	1,704	271	376	749		1,736	49		8,473	
さわ ほなみ				32				21			279		254	116		702	
やえ こがね	209	571	1,490	1,588		3	169	2,298	4,915	82	3,308		4,247	1,326	75	20,281	
フク ホナミ		36		15							91					142	
ヨネシロ		238		1,559	1,577	224	334	274	20	3,587	15					7,828	
ハマ アサヒ				142	213		24	10		30						419	
アキ ユタカ		68	18													86	
南栄				2,039	12	1,744	44									3,839	
ササ ニシキ		11														11	
フク ヒカリ		8,039	47	1,063		226	28	826	2,987	437	12,413					26,066	
ほたか																0	
その他の	213	151	1,372	1,355		60		2,837	1,721	297	(152) 813	43	927	208	173	(152) 15,170	
水うるち 小計	(49) 39,148	24,592	12,115	12,035	12	4,846	830	945	170,058	14,988	5,399	79,513	34,099	51,448	45,720	41,404	(249) 537,252

第2章 遺跡の分布

第一節 総論

佐久地方は長野県の東端部中央にあり、東は上野（群馬県）、武藏（埼玉県）、南は甲斐（山梨県）に接し、3県の県境に位置している。軽井沢町・御代田町・小諸市・北御牧村・浅科村・立科町・望月町・佐久市の旧浅間町東村からなる北佐久地方、佐久市の旧野沢町中込町・白田町・佐久町・八千穂村・小海町・北相木村・南相木村・南牧村・川上村からなる南佐久地方の2市・7町・7村に行政区画されている。地形的には南牧・川上村南端の八ヶ岳山麓などから発する小河川を集めて、小海町・八千穂村・佐久町・白田町へと北方に向かって流れくだり、佐久市内に入って大きく西側へ流路を変え、市内を対角線状に二分した後、小諸市へと抜ける千曲川によって左岸・右岸地域に二分されている。



第2図 佐久平の位置

佐久地方における弥生時代遺跡の分布（別図参照）は、前期末から中期前半という黎明期においては南佐久地方の標高750m～1,300mの山間部の狭小な段丘平坦面に集中する傾向が見られ、他には望月町で僅かな資料が見られる程度である。気候的には冷涼な地域で、江戸時代以前は稲作の不毛地帯であったといわれ、特に南牧村・川上村は現在でも不適作地である。著名な佐久町館・中原遺跡のほか、川上村矢出川南遺跡、白田町月夜平遺跡、佐久市月明沢遺跡、望月町平石遺跡などがある。

中期後半以降になると弥生時代遺跡は、佐久地方で最も広大な平野部を有する佐久市内への進

出が顕著となる反面、前期末から中期前半の遺跡は平野部ではほとんどみられなくなる。佐久市内は、前述したように千曲川によって南北に二分されており、川によって隔てられるこの二つの地域は、地形的にも大きな違いが見られる。

佐久市北部=千曲川右岸地域は、浅間火山の噴出物、泥流・軽石流（それぞれ塚原泥流・追分軽石流と呼ばれる）が被覆する部分が多く、佐久市南部=千曲川左岸地域よりも一段高い段丘面を形成している。この段丘面には、浅間山を起点として放射状に南へ向かって流れ落ちる、湯川・濁川をはじめとする幾筋もの小河川の浸食によって形成された谷地形【当方では特に「田切り地形」と呼ばれている】が多く発達している。このため、佐久市北部の平坦部は細長い台地状の地形が幾筋も刻まれる結果となり、この台地上に多くの古代集落遺跡とともに弥生時代の集落遺跡も分布する。特に湯川・濁川が流下する岩村田・長土呂地区は佐久市内で最も該期の遺跡が密集する地域である。北西の久保・周防畠B遺跡などの発掘調査によって周知された大拠点集落のほか、未調査部分が多く不明確ではあるが、相当な集落規模が予想される円正坊・西近津・枇杷坂・一本柳など佐久地方の著名な集落遺跡群の多くが内包され、当地方の弥生文化的一大拠点が築かれていたことは想像に難くない。これらの弥生遺跡は中央に存する広大な低湿地地帯を取り囲むように馬蹄状に連なって分布しており、710m前後の標高ラインを上限として分布が希薄になる傾向がある。該期の弥生集落が相互に連携して、低湿地を基盤に強固な農業共同体が編成されていたことが想像されると共に、当時の稻作限界地点をも想定させる興味深い事象である。このほか、佐久市北部地域=千曲川右岸では滑津川沿いに和田上・戸坂・樅村など比較的大規模な弥生集落遺跡が存在する。遺跡立地は標高710mを上限とする点で湯川・濁川を中心とした地域と共に通するが、集落間相互の結束は湯川・濁川ほどの壮大さはみられない。

佐久市南部=千曲川左岸地域は、地形構成上、浅間火山の影響力が大きい北部地域とは対象的に八ヶ岳・蓼科山地とのかかわりが強い。千曲川左岸沿いに氾濫によって形成された広大に展開される沖積平野は、現在佐久平で最も肥沃な穀倉地帯であるが、弥生時代においては開拓が進行していなかったためか、遺跡の発見例は極めて少ない。濃厚な遺跡分布を示す地域は、沖積平野から一段上がった八ヶ岳・蓼科山塊末端部の裾野にあたる幾筋もの小河川に細長く仕切られた標高670~690mの丘陵地帯である。西裏・北裏遺跡群、後沢遺跡などの拠点集落のほか、舞台場遺跡などがある。

佐久市域以外の地域では、小諸市で五ヶ城・久保田、佐久町で勝間原などの各遺跡が知られている。五ヶ城・久保田遺跡は佐久市北端部に接する千曲川右岸の標高670~680mの平坦地に位置し、地形構成は佐久市北部地域と同じく、軽石流が被覆する地域である。勝間原遺跡は、佐久地方の平坦部では最も南端部にあり、千曲川左岸の標高720mの平坦部に位置する。佐久地方で大規模な弥生集落遺跡が形成され得る南限の遺跡といわれている。南佐久地方ではこの遺跡より以南

第2節 諸地域の様相

の地域は、徐々に標高が高く冷涼になり、平坦面も狭小になるため、中期後半から後期の弥生遺跡はごく小規模なものが点在するに過ぎなくなる。そして、標高800mを超えると川上村矢出川南遺跡など交通路に関連すると考えられる幾つかの遺跡で後期の土器片が数点みられる程度で、集落自体が、皆無に近い状況となってしまう。

このように佐久地方の弥生遺跡は、大規模集落の分布に限って言えば、標高670~720m程度の水源に恵まれた比較的気候が温暖な平野地に占地しており、基本的には水稻米作を基盤として発展していたことが想定される。おそらく、日本列島に展開された弥生文化の中では最も標高の高い、寒冷地に繁栄した稻作農耕文化の部類に属すると考えられ、厳しい気象条件を克服して開拓を進めた名も知らぬ我々の祖先の偉大な足跡に感動を覚えずにはいられない。

(文責 小山岳夫)

第2節 諸地域の様相

(1) 南牧村・川上村

南牧村の弥生時代の遺跡

南牧村は、八ヶ岳の東麓に位置する村である。東北は、男山々系の急峻な山陵が連なり山脚を千曲川が流下する。東南方は川上村から山梨県に境界を連ねて八ヶ岳連峰に達し、主峰赤岳の東麓に展開する。野辺山原をはじめ、板橋、海ノ口、海尻等の大高原が、高原野菜の生産地となって発達している村である。また、野辺山原は早くから、高冷地農業や植林の研究で大学などの研究施設もあり、東京大学の太陽電波観測所の大パラボラアンテナも知られている。野辺山原の最南端は、長野県と山梨県の県境になっているが、ここは日本の南北を分ける分水嶺になっている。

分水嶺の最低地点を、小海線が走っているが、それでもJRで日本の最高地点と言われている。標高1,375mである。甲州街道もこのところを通っている。現在は国道141号線と言う。

赤岳に源を発した大門川は、境川とも言われ、この地点から右折して甲府盆地に向かい富士川となるのである。同じ脊梁を流れ下って来た矢出川は、ここから左折して北流し、千曲川に合し信濃川となる。富士川をさかのぼってきた表日本の文化と千曲川をさかのぼってきた裏日本の文化が、分水嶺になる野辺山原で交流することになる。このところには、矢出川遺跡群をはじめ、先土器時代の遺跡群、更に繩文時代の数多い遺跡群の存在が知られている。野辺山原の遺跡については既に昭和の初年、八幡一郎の考古学的調査によって知られている。しかし、弥生時代の遺跡になると、高冷地の例に漏れず、このところからも姿を消してしまっている。僅かに発見され

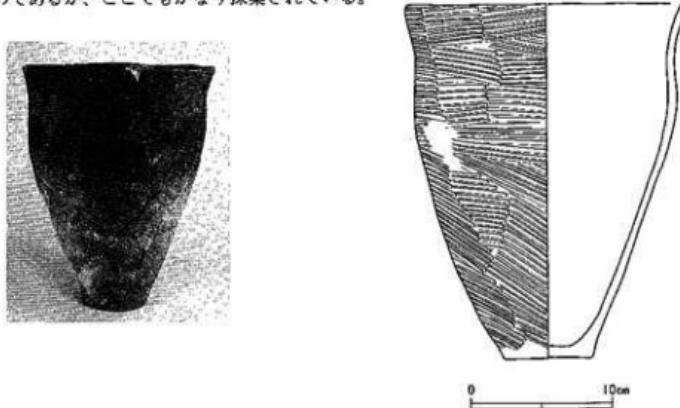
た遺物も、土器類は少なく、住居址らしい場所は発見されていない。しかし、南牧村においては、今日なお、遺跡詳細分布調査が行われていないので、今後も文化の交流地としての重要性は注意して行かなければならない。

矢出川遺跡群 (1A-No.9)

立地 矢出川遺跡は、野辺山高原の東端に位置する。有名な細石器文化の遺跡の中で、矢出川南と言わわれている場所である。現在は、三沢部落と呼ばれる中にある。東側に三沢川が流れ下り、北側に赤岳より東流してきた矢出川があり、その合流点に面して広がった平坦な山麓台地である。三沢川をさかのぼると小倉峠があり、甲州に至る旧道とも伝えられ、矢出川遺跡は広大な野辺山原への出入り口であった。

遺跡と遺物 矢出川の流路は、広い沼沢地となっているが、この沼沢地を廻るように台地の先端を横切って細い道路があり、現在の甲州街道に連なっている。この道路端に表土が剥げて地山の露出したくぼみがあって、ここで最初の土器片を見付けることができた。その後、時を経て集められた土器片が、幸いにも復原されるまでに至った(第3図)。しかし、そのところからは、これ以外の遺物は発見されず、斜面で居住に適する場所でないことも勘案すると、住居址が存在した可能性は薄い。

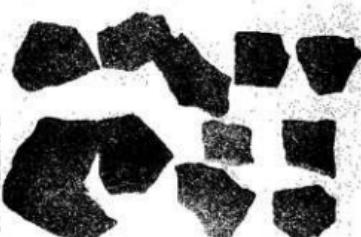
その後、京都女子大学考古学研究会・明治大学矢出川遺跡群総合調査等の分布調査により、横描波状文の土器片(次頁写真)が見付かっているが、これらは台地上の開発により、転々と表抜されたもので、住居の存する可能性はやはり薄い。弥生式の磨製石鎌は、野辺山原一帯に散布を見るものであるが、ここでもかなり採集されている。



第3図 矢出川南遺跡出土土器弥生時代前期

二ツ山遺跡 (1A-No.8)

立地 小海線野辺山駅の東北面近くに遺跡名を象徴する二つの小山が並んでいる。その山の鞍部には旧道があり、山頂では質の悪いチャートや石英などの原石が出ている。鞍部の東面には、山麓を流れる小川があり、やや広い斜面に縄文時代の遺跡があり、遺物が多く散布していた。鞍部の西面は、斜面から広い平原になり、八ヶ岳連邦を一望する。



欠出川南遺跡採集の波状文甕 (由井茂也藏)



欠出川南遺跡採集の西紀後半土器 (由井茂也藏)

遺跡と遺物 遺跡と思われるものは、西面の狭い斜面で、開墾された際、弥生土器と思われる波状文や櫛目文の土器が見付かった。黒曜石の破片も多かったが、これは弥生式の遺物と関係するかどうかは不明であり、遺構の存在も不明のままである。八幡一郎の二ツ山の弥生式土器との関連も不明である。遺物は現在、行方不明である。

ザッコの沢遺跡 (1A-No.7)

立地 板橋村の成立は、慶長13年である。甲州街道が改良され、交通が盛んになるにつれ、野辺山脈の長い道中で難儀をするものが多くなった。そのため幕府の命令で途中に宿駅が設けられた。当時、板橋村は、板橋川の開削した谷あいの平地を選んで住居を構えていた。寒冷と風雨、豪雪の激しい高原台地の方へ移り、発展したのはごく近年のことである。

1,300mの野辺山高原で最も早く水田の試作が行われたのが、このザッコの沢である。なだらかな丘陵に挟まれた広い窪地の中央には、野辺山原隨一の豊富な涌水があり、小川には春早くから芹が芽吹き、川魚が棲んでいた。地名の由来もそのことにあるらしい。

遺構と遺物 昭和7年頃、水田の開発の際に、夥しい土器が発掘されたと伝えられる。当時土器に対する关心がなく、總て捨てられたという。その中で、石斧、石匙、石鎌の類だけは、大昔のものだからと保存されていた。昭和初年、八幡一郎の南佐久郡の考古学的調査で、初めてこの遺物が紹介され、その中に磨製の石鎌も認められた。遺構は認められず、遺物もその後長年の月日でたまたま訪れた研究者等に持ち去られて数少なくなっている。

板橋遺跡 (1A-No.5)

立地 板橋遺跡は昭和初年の八幡一郎による南佐久郡の考古学的調査で紹介された。当時、板橋部落の人達が採集しておいた磨製の石鏃を中心に遺跡名が冠せられたので、場所の指定はできない。板橋川を挟んで南北の原野に発達した部落を中心に、広大な周辺をも板橋の概念で呼ぶことがある。しかし、太古より板橋川の氾濫等による交通の遮断があり、旅行者逗留などあって、至るところに遺物の散布を見ることがある。

遺跡と遺物 縄文時代の遺跡は、遺物も多く遺構も多く残されているが、弥生時代以後の遺跡・遺構の特定はできない。磨製石鏃の散布は比較的多いが、土器等は発見されていない。

ノミンドウ遺跡 (1A-No.6)

立地 ノミンドウ遺跡は古い遺跡図では位置が一定していなかった。遺跡は板橋川下流の、ノミンドウ淵と言う深い淵があったと言われる周辺にある。この辺は河岸がやや広く開削されて、付近に小さな水田などもあった。川の左岸は日向で高い断崖の中段を横切って、古くから端下(はけ)道が通っていた。現在は崖崩れで切断されて通る人はいない。この切り立ったような断崖に、八ヶ岳熔岩でできた洞穴があったという。想像に過ぎないが、この辺に古い板橋川の渡川点があって、野辺山の二ツ山に通じたとすれば、中繼点としては中原の土師器が出土する時代の遺跡が該当する。遺跡と遺物 ノミンドウの洞窟は、大きくて雨風を凌ぎ、生活することができたとう。この洞窟の中から採集された土器類が弥生式に属するものだったと伝えられている。遺物は現在伝説の中のものである。

川上村の弥生式遺跡と遺物

川上村は千曲川の源流に位置する村である。北方は男山、御墓山(おみはかやま)、扇平山などの関東山地に連なる山々が、屏風のごとく起立し、山裾の峡谷を千曲川が迂回している。東南方には三国、十文字、甲武信、金峯小川、横尾等の峻嶺を巡らし、それら山々の山麓が各所に、広大な平原を展開し、川上盆地を形成している。しかし、標高1,100~1,400mに達する川上盆地は、高冷地のため、長い歴史上水田の改発が遅れ、畑作地帯であったが、現在は高原野菜の特産地として知られるようになった。

かつては、交通の不便から山中に隔離された寒村で、米と言うものを知らない人々が多く、文化の低い村の代表のように書かれたりした。けれども村内を通る道路は古く、秩父道、三峯街道とよばれ、県内は勿論、甲州辺見台からの三峯神社参詣の唯一の道路として十文字峠が利用されて来ている。また、中世以来、山嶽信仰や、金残開発、特に近世は秩父山中や、三峯神社への物

資が、甲州や佐久平より集められ、大量に輸送されていた。川上村は、その取り次ぎ所であり、輸送路であった。また、江戸への最短距離にあり、江戸の文化の入り口でもあった。

川上村の山麓平原や、千曲川河岸の洪積段丘は、先土器時代にさかのぼり、人類の活動が始まっている大舞台である。馬場平段丘の大遺跡群をはじめ、野辺山原に接続する柏垂の大遺跡群は、先土器文化研究史の上でも知られている。

縄文時代の遺跡は、千曲川の下流から源流に至る河岸や、高原に数多く見られ、特に大深山遺跡は国の史跡に指定され知られている。かつて、秩父地方の考古学的調査に当たっていた直良信夫先生は、同地方で使用された黒曜石について和田岬産であり、原石の運搬は三国岬を越えて行われたのではないかと、岬を越えて幾度も川上村に来ている。三国岬の麓には二本木遺跡がある。

ところが縄文時代の後晩期頃から、やや減少を続けていた遺跡が、弥生時代に至ると漸減的に姿を消してしまった。弥生式の新しい農耕文化は、放浪的な狩猟生活に大革命をもたらした。人々は農耕の可能な低地を求めて移動してしまった。

川上村に残された弥生式の遺物は僅かな土器片と磨製の石鎌のみになってしまった。

久保遺跡（1B-Na3）

川上村における弥生式遺跡は、住居址とか、土器類など伴った定住性のあるものは見当たらぬ。縄文時代の遺物に混ざって発見された石鎌類の散布地が若干見られる程度である。従って、遺跡の立地等には特別の重要性があるとは思われない。

久保遺跡は、通称樅沢野辺山と称する野辺山原の北端で、千曲川のセツソ峡谷に面した地域にある。国道141号線から分かれた川上線の中間で、目標となる天然記念物の山梨の大木があり、この一帯に久保、立石など縄文時代の遺跡があり、石鎌は縄文時代の遺物と一緒に発見された。石鎌はやや大形で磨製の石墨片岩、脚部の刺込の中央近くに穿孔がある。

切草遺跡（1B-Na2）

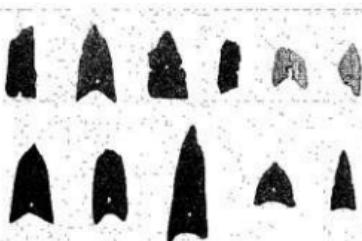
切草遺跡は、大字御所平の総称埋原にある。森山という小山の西麓に当たるのでその地名がある。埋原は矢出川を挟んで野辺山原に接続する。ここには柏垂、西の腰などの先土器時代の遺跡群があり、一帯が平原である。

先土器時代、縄文時代の遺物に混じった弥生時代の石鎌がここで発見されている。スレートを用いた円みを帯びた尖端と、半月状の刺込込み、一個の穿孔がある。中にはやや長形で槍形のものがある。尾部には刺込込みを作り、穿孔がある。

馬場平遺跡 (1B-No.1)

久保遺跡、切草遺跡とともに野辺山高原の一角にあるが、馬場平遺跡は川上盆地に入り、千曲川の河岸に近い。馬場平は先土器時代の遺跡として知られている。この遺跡の付近からも弥生時代の石鎌が2個採集されている（写真参照）。

穿孔のあるスレー式のものであり、単独の出土である。



馬場平・切草・久保遺跡採集の磨製石鎌（山井茂也蔵）

立石遺跡 (1B-No.4)

立石遺跡は広大な種沢野辺山原の東端、比高150mを測る段丘の崖端に立地し、千曲川に流入する小流の谷を隔てた南北が遺跡の範囲である。この遺跡は先土器時代から土器出現期にかかる、有茎尖頭器、微隆起線文、表裏繩文等の極めて貴重な遺物が出土しており注目されてる。

これらの遺物とともに、弥生時代後期備播波状文の土器片1点が採集されている。さらに内耳土器片4点も発見され、様々な時代の複合遺跡である。日当たりも良く、立石遺跡は生活するには好条件の場所であったと考えられる。しかし、弥生時代の遺物は微量であるため、定住の可能性は極めて希薄であると言える。

(文責 山井茂也)

(2) 八千穂村・小海町・北相木村・南相木村

八千穂村

八千穂村で弥生時代の遺物を出土しているのは、千曲川右岸地区で崎田原遺跡と、左岸地区で畠八の竹の下遺跡、八千穂高原横道原、同板沢の四ヵ所だけである。佐久町を境として南佐久南部には弥生時代遺跡が急速に減少している。これは地形による自然環境の違いによるものと思われる。

八千穂村は村の中心部を千曲川が南北に貫流していて、千曲川の東と西両地区に分けられる。そのうち川西地区は千曲川畔から西方北八ヶ岳の山頂に及ぶ広大な面積を占めるが、千曲川沿いの沖積平地は僅かで、大部分は八千穂高原と呼ばれる広大な山岳地帯とその裾野で、標高は千曲川畔の770mから2,386mの鍋枯山頂に及んでいる。弥生時代の遺物としてはこの広大な高原のうち、標高1,150mの板沢および、標高1,200mの横道原付近で、磨製石鎌が各1点表面採集されているに過ぎない。

千曲川より西の八千穂村の集落が記録のうえに現れるのは鎌倉時代末の建武2年（1335）の大徳寺文書であるが、この文書に「畠物村百貫文」と記されているばかりでなく、この村の佃の記載方式が、他の佐久平の郷村とは異なっていることなどから、当時ここは村名通りの畠物村で、まだ水田耕作が行われていなかったものと考えられる。同じ大徳寺文書にこの畠物村の下流に接する佐久町高野町の場合は「廣野郷（現在高野町）八百余貫文」とあって、水田耕作も行われていた大村であったことが推察される。この高野町はまた佐久郷の古墳の南限にもなっていて八千穂地区には古墳が存在していない等のことからみても、弥生時代には八千穂村の川西地区には稻作による古代集落は形成されていなかったものと考えられる。僅か畠八の竹の下遺跡で磨製石鎌1点が表面採集されているだけである。

畠物村からさらに大石川をさかのぼった八郡、大石両村は同文書に「案内を知らず」と記され、鎌倉時代末にはまだその年貢高さえも莊園の役人に把握されていない状態であった。その大石を更にさかのぼって、近代になってさえ耕地が開墾されていなかったような、標高1,150m～1,200mの板沢や横道原（現在NHK海外電波受信所のある付近）に磨製石鎌が出土していても、これを弥生人の定住の生活と結び付けて考えることはできない。ここは現在、埼玉県秩父市—十石峠—佐久町—大石峠—茅野市を結ぶ国道299号線の道筋に当たり、大石峠によって佐久郡南部と諏訪郡を結ぶ古代からの交通路であった。大石部落の蓬間遺跡から灰釉陶器の皿、土師器椀とともに魚網用の土鍤70個が出土していることも諏訪郡との古代交通を考えさせる資料である。板沢・横道原・竹の下出土の磨製石鎌も大石峠の交通路との関係において考えられるものと思われる。

千曲川の東方崎田原遺跡では、箱清水式土器と磨製石器が出土している。その出土状況については明らかでないが。この遺跡は千曲川から比高約70mの河岸段丘上にあって、この同じ台地上の北方約1kmには弥生時代中期初頭の壺2個を出土した佐久町海瀬の中原遺跡がある。崎田原遺跡は標高840mの高位置にあり、段丘上には豊富な湧水がある。崎田村は嘉暦4年(1329)諏訪大社の御射山祭の頭役を奉仕している有力な郷村であるから、鎌倉末期には水田耕作が行われていたものと思われる。しかし、弥生時代後期に水稻耕作が定着していたかどうかは疑問がある。崎田原遺跡は八幡一郎氏が「南佐久郡の考古学的調査」で「崎田相」として注目した南佐久地方の代表的な縄文遺跡でもある。昭和29年には開田にあたって発掘調査が行われた。縄文から平安時代の複合遺跡であって、中世崎田村の発生につながるものと考えられ、弥生時代にも小規模の定住集落が形成されていたことも想像に難くない。もしそれが水稻耕作を基盤とした集落であるならば佐久地方の最南端・最高所に位置する弥生時代の水稻農耕の限界を示す遺跡ということになるが、想像の域を出ない。

小海町

小海町は八千穂村の更に上流に位置し、千曲川沿岸沖積平地の最も狭められた峡谷部に位置する。八千穂村と同様町の中央部を千曲川が南北に貫流して、西側は八ヶ岳の広大な山麓台地を形成している。東側は関東山脈の支脈である浅来山(1,717.8m)麓の急峻な台地であるが、その間に相木川が、西北流して千曲川に注いでいる。小海町の弥生時代遺跡は、この東西の台地上と相木川に沿う小台地上に点在する小規模なものである。

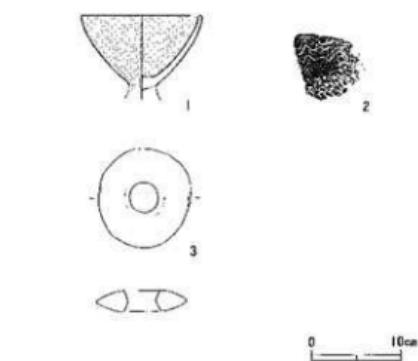
箱清水式土器を出土している穴沢遺跡と蛇石遺跡は千曲川の左岸馬流の中心街から西方へ比高差120mを急角度で上った標高970m、八ヶ岳山麓台地が千曲川の谷に張り出した先端部に位置している。蛇石遺跡はこの段丘端の斜面にあり平坦面を欠くが、穴沢遺跡はその北方に接して穴沢という沢に続く小平坦面に立地している。もとこの両遺跡は同一の遺跡で、穴沢遺跡を中心として蛇石遺跡はその周辺部に当たるものと思われる。

穴沢遺跡 (3 A-No18)

穴沢遺跡は北方に緩傾斜する山間の沢であるが、湧水があって多少の水出も作られている。縄文時代早期末の茅山式から前期中期の土器・石器が豊富で、弥生後期箱清水式土器と土師器も出土している縄文から平安時代にかけての複合遺跡である。第4図2は筆者が昭和51年5月から表採したものである。このほかに文様は消滅てしまっているが、口徑部に5条の平行する条痕文を巡らし、そのうえに波状文を描いた1片がある。

五箇遺跡 (2 A-No15)

穴沢遺跡から台地上を約4km西方に入ると八ヶ岳の山腹に抱かれるように五箇部落がある。標高1,130m、この台地上最奥の部落である。五箇部落は豊富な湧水があって小海町の有力な水源となっている。その余水でワサビ田がつくられ、小川となって集落内を流れている。この集落付近が五箇遺跡で縄文時代の石器・磨製石斧・石匙等とともに、弥生式の環状石斧と磨製石鎌が出土している。磨製石鎌は冬季分校(現公民館)の付近にあった無縫塔を移転するため、その周囲を掘った際に出土



第4図 小海町・南相木村出土土器・石器
1. 祝平遺跡
2. 穴沢遺跡
3. 五箇遺跡

した。環状石斧は昭和8年(1933)公民館の下流約200mのあいだの集落内の川で砂利採取中に同村の古田馨氏が発見したものである。環状石斧は信濃史料第1巻図版第134弥生石器のうち、3、4、5、6の4点が、これと同形のもので、出土地は北安曇郡池田町花岡山遺跡、上高井郡高山村荒井原遺跡と松本市中山、下伊那郡旦開(現阿南町)である。五箇出土の環状石斧第4図3は堅くて緻密な閃綠玢岩を磨いて造ったもので、直径10~10.5cmを測る。中央の孔は外側の直径が約4cm、両側面から内側に傾斜して中央部に鋸を造り、その内径は約3cmである。厚みは中央の孔の周囲で約2.2cm、それから周辺へ行くに従って厚みを減じ、外周は鋭い刃を形成していたものと思われるが、現在は摩滅して鋭さを減じている。刃部は所処に小さな損傷がみられる。ニューギニアの原住民の中には、このような環石の中央の孔に棒を通して柄を通して武器としているということである。五箇遺跡出土のこの環状石斧は、同所に磨製石鎌の出土していることなどと思い合わせて、弥生人が狩猟用の利器として用いたものと思われる。八ヶ岳の山腹にあって、豊富な湧水に恵まれた五箇遺跡は弥生人の狩猟のキャンプ地としてはまさに好適地であったものと思われる。また環状石斧や磨製石鎌は彼らが豊獣を祈る神聖な祭具であったのかもしれない。

小海町の千曲川右岸川東地区では、親沢から箱清水式土器が出土し、塩の平から磨製石鎌が採取されている。

親沢は秩父山系の支脈茂来山(1,717.8m)の山麓台地に位置し、1,050mの高所にあるが、南

面して比較的気候が暖かく、越えに上州・武州との支流があって、旧小海村では比較的集落形成が早く人口も多い。また、佐久平と相木方面を結ぶ高通路にも当たっていたから、弥生時代の狩猟の中繼地からキャンプ地として小集落が形成されたことも考えられる。

塩の平遺跡（2B-No17）

塩の平遺跡は磨製石器を出土している。ここは相木川の谷が造った塩の平部落の北方にあり、相木川から比高30mの小段丘上に位置する。ここからは石槍・打製石斧・磨製石斧・石皿・石匙等が出土していて、縄文時代からの集落地と考えられる。南面する小段丘で直下に相木川が流れ、背後は小海原から相木・南牧村方面にも通じ、山林原野が深いので、狩猟のキャンプ地としては好適な条件をもっている。

南相木村

南相木村は小海町から更に東南方向へ南相木川をさかのぼった谷間にあり、集落は長さ約10kmにわたって散在し、標高930~1,250mの間に分布する高冷地集落である。

弥生時代の遺跡としては、宮向・祝平の2遺跡がある。

宮向遺跡は村の入り口に近い日向部落の南方、相木川の左岸にあって、相木川とその支流小沢川の合流点の間に突出した標高930mの段丘端に位置している。出土遺物としては箱清水式土器と太形蛤刃石斧が記録されている。ここは小沢川に沿って南方にさかのぼれば、大芝峠や合羽坂峠によって、南牧村の大芝や広瀬を経て、野辺山高原から甲州方面に達する高通路に当たっている。

祝平遺跡（2B-No13）

祝平遺跡は宮向遺跡から約1km上流の祝平部落（標高970m）で県道拡幅の際、箱清水式土器・赤色塗彩の高環の坏部（第4図3）が出土した。

これらの遺跡の付近には、現在水田が開かれているが、それらは江戸時代後期以後の開田によるものである。ここは相木川に近く、山林も奥深いので、狩猟や漁獲の条件には恵まれているから、狩猟・漁労の為のキャンプか、あるいは小さな定住集落が存在したことも考えられる。

北相木村

北相木村は小海町塙の平の東方、標高910mの川又で南相木村の谷と分かれて、東に向かって相木川に沿ってさかのぼる狭くて長い谷で、奥地は梅崎、ふどう畠によって群馬県南甘楽郡上野村と接している。北相木村で弥生時代の遺物を出土しているのは京の岩と坂上の二つの遺跡である。京の岩遺跡 標高50m、弥生式後期土器の出土が記録されている。ここは相木川右岸の南面する小段丘上にあって、湧水が豊富である。付近からは縄文時代・平安時代の遺物も出土し、また、鎌倉時代末と推定される板碑も存在していた。また、五輪坂の地名もあって、原始・古代・中世に亘って生活の跡を止めている場所である。

坂上遺跡（2B-No.12）

北相木村歴史民俗資料館には、弥生時代後期という變形土器がある。かすかに塗朱のあととも認められる。村の中心部である坂上の出土とされているが、出土状況は明らかでない。坂上は北相木村では最も広い段丘面で、標高1,000m、縄文前・中・後期、平安時代の複合遺跡で戦国時代には豪族相木氏の居館跡であった。ここでも室町時代と推定される板碑が出土している。

北相木村は山間狭隘の谷間の村であるが、深い山林と相木川の清流によって狩猟・漁労の獲物は豊富である。また、梅崎やふどう畠によって上州や秩父との交通路に当たっていた。秩父地方のみに産する緑泥片岩製の板碑が坂上や京の岩に存在したことはその証である。また、京の岩遺跡の西方1km余の縄文早期の柄原岩陰遺跡からたくさんの海産の貝を出土しているのをみれば、この交通路がいかに古くからのものであったかがわかる。

また、柄原岩陰遺跡からも、横目文土器が1点出土している。僅か1点の出土では、定住というよりは、交通路の面から一時のキャンプ地であったと考えたほうが妥当であろう。

以上、北相木村の弥生遺跡は、水稻耕作を生産基盤として発達し得る可能性に薄い反面、狩猟・漁労・採集には恵まれており、これと共に小規模な畑作経営を行って生活の糧を得ていたと考えられる。そしてその地理的な存在は、信濃佐久地方と秩父関東との交通の中継点として極めて重要な位置を占めていたことは想像に難くない。

(文責 井出正義)

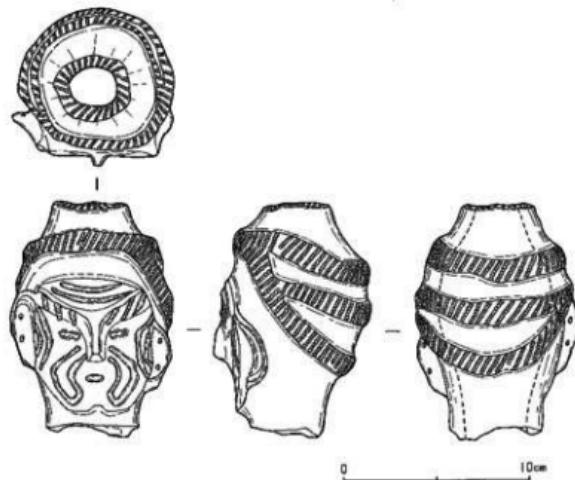
(3) 佐久町・白田町

佐久町

東西両側に佐久山地と、火山・横岳・大岳・双子峯など一連の北八ヶ岳火山が迫る幅約1kmの狭小な沖積平坦面を中心として集落形成される佐久町は中央部には千曲川が貫流しており、大きく川東（千曲川右岸）と川西（千曲川左岸）の2地区に分別される。右岸地域には十石峠から発して大野沢・矢沢、更に下で余地川と合流する抜井川と幾つかの小さな沢筋、左岸地域には双子峯を発し、雲場川と合流する北沢川と親沢川など幾つかの小さな沢筋があり、それぞれ千曲川に流れ込んでいる。佐久町における弥生時代遺跡は、これら千曲川の支流沿いに主に分布し、現6遺跡が確認されている。その状況は、中期前半代の初期弥生土器を出土する館・中原等の遺跡が標高800~830mの右岸段丘上に集中するのに対し、後期の遺跡は佐久西小学校裏・宮の本・北沢等の遺跡のように左岸の比較的開けた標高780m内外の稲作農耕可能な沖積平地に主分布するほかは、右岸の余地中谷遺跡のように標高890mの山麓中腹の緩傾斜地に点的に存在する。千曲川右岸の弥生遺跡は、大日向～十石峠をへて群馬県から埼玉県へ通じる道と余地峠を経て群馬・埼玉県へ通じる交通路に近接しており、その関連性が出土した土器様相にも現れている。

佐久西小学校裏遺跡 (3A-No24)

佐久西小学校裏遺跡は千曲川左岸、支流北沢川右岸の標高780m内外の河岸段丘上に位置する。千曲川との比高は10m内外である。八幡一郎氏が『南佐久郡の考古学的調査』の中で「本郡に於ける遺跡の双壁である。」と評価するように縄文から古墳時代まで連続とした大遺跡であった。しかし、昭和50年の宅地造成により遺跡の中心部が未調査のまま破壊され、僅かに残った東端部の一部が昭和57・58年に発掘調査された。縄文中期曾利式の住居址・土坑・縄文後期の土坑墓群が検出されたが、弥生時代の遺構・遺物は検出されず、『信濃史料』や表面採集によって箱清水式土器の存在が知られている程度である。弥生土器は小学校敷地内より出土したもので、いずれも弥生後期に比定される。このほか破片もかなり出土しており台地南北両端部に集落が営まれていたものと思われる。佐久町では最大規模の弥生集落が展開されたであろうことは、衆目の一致するところである。



第5図 佐久町館遺跡出土容器形土偶（草間吾助氏所蔵）

館遺跡（3B-No27）

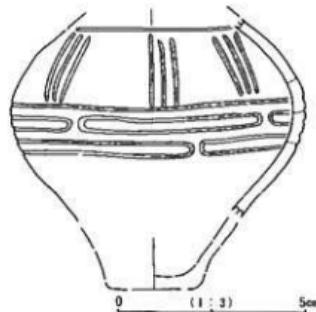
抜井川が千曲川に合する合流点近い南岸に発達した標高830m内外の段丘上に立地する。遺跡は時代別に月見石・添田・大落沢・東館・宮上の5地区に点在する。戦後の開田により、縄文後期の大落沢・月見石の地区が破壊された。この地点は直下に抜井川を見下ろす段丘上の縁辺部である。敷石住居に使用されたと思われる鉄平石が出土したり、小学校へリヤカーで運ぶほど多量の遺物が出土したことであるが、現在そのうちほんの一部が小学校に残っている程度である。また、大落沢・東館の一部は縄文中期の資料も採集されている。また、添田地区は宅地の周りに残っている畠が保存されている程度であるが、宮上地区は、りんご園・畠であるため現在も遺物の出土が絶えない。両地区は縄文晩期～弥生にかけての過渡期の土器の他、土師器・須恵器が出土している。更に館遺跡は、古代から中世にかけても私牧の経営、城館の築城と歴史の舞台として早くから開けた地区である。私牧は、滋野党と言われる根井大弥太幸親一族が軍馬を育成して強力な武士団をつくるため、望月の牧やその周辺に經營していた。幸親の子橋六郎は、この館遺跡周辺一帯に私牧を開き、抜井川段丘の月見石地区に城館を築いた。子の時期に橋六郎につかえた武士団（百姓をしていた）が使用していたと考えられる土師質土器は、宮上地区から出土している。

第5図は容器形土偶、第6図は竹管状工具で胸部上位に三本一组の縦区画、腹部上位に工字文

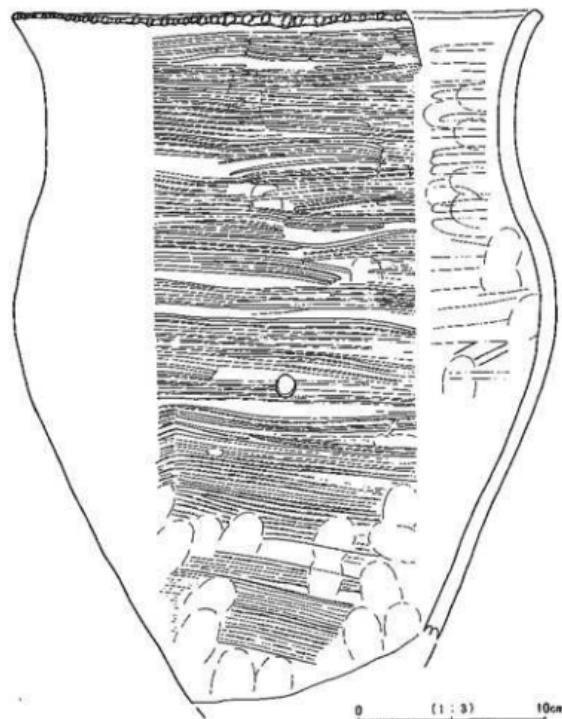
第2章 遺跡の分布

が施された壺である。第7図は、平行に条痕文が施された壺、また、破片ではあるが、貝殻条痕文が施された土器片があり、東海地方より搬入されたものかもしれない。

これらの土器についての詳細は第4章 考察編に記してある。



第6図 館遺跡出土の壺 中期前半
(草間吾助氏蔵)



第7図 館遺跡出土の壺 中期前半 (草間吾助氏蔵)

宮の本遺跡 (3A-No28)

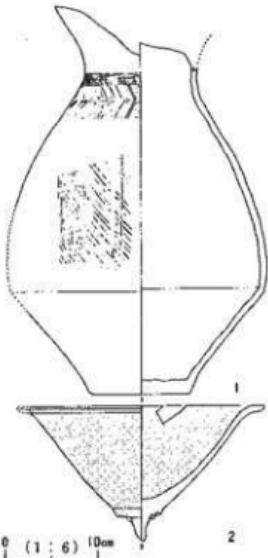
宮の本遺跡は佐久西小学校遺跡から東北方向に伸びる細長い段丘上に位置し、北に北沢川の細長い低地を隔てて北沢遺跡と対する。昭和53年に発掘調査が行われており、縄文後期の配石造構の礫内から、後期中葉以降と考えられる土器群(第8図)が検出された。そのほか、凝灰質角礫岩の直上より摩滅した土器片が多量に出土した。隣接する佐久西小学校裏遺跡からの小規模な土砂の移動に起因する所産であると考えられている。

中谷遺跡 (3B-No25)

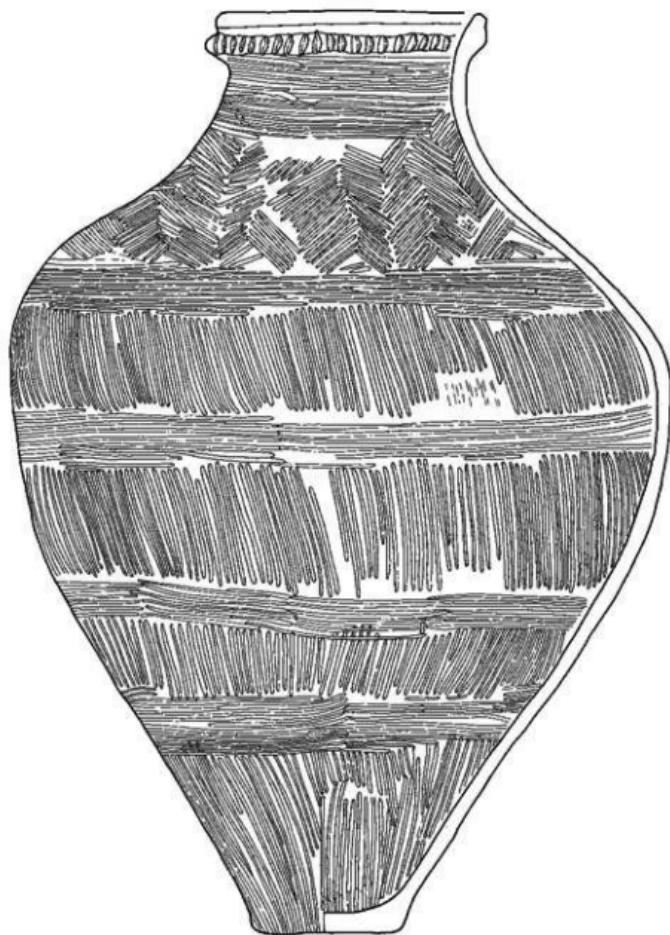
余地川を前面にして山を背負い、南面した山麓傾斜地に立地している。日当たりが良く、好適な条件をもっており、現在の中谷部落も遺跡範囲と一致する。また、緩傾斜が始まる前面に道路が貫通しており、余地峠を経て群馬県甘楽郡南牧村に通じる。『信濃史料』には箱清水式土器の出土があったことが記されているが、昭和54年3月の詳細分布調査では土師器・須恵器片5点が採集されたのみであった。佐久町での千曲川右岸の跡生後期集落はこの中谷遺跡が唯一であり、これより八千穂村・小海町にかけても分布は希薄である。

中原遺跡 (3A-No26)

千曲川と抜井川の合流点の東南側に広がる標高800m内外の河岸段丘上に位置し、一条の侵食谷を隔てて東西に対する西側段丘上に上原遺跡が立地する。昭和29年の水路工事中に壺2個体(第9・10図)が出土した。当時の工事関係者は土器出土によって煩わしい事態が生じることを恐れて、西側段丘上に対する上の原遺跡から出土した旨報告して現在に至った。こうした事情を知らなかつた笹沢浩氏は昭和50年上の原式土器と命名(註1)している。その後、昭和53年に実施した佐久町遺跡詳細分布調査により、土器を掘り出した当事者である中島誠氏から事の真相を初めて明かにされた。念のため遺跡略図を示したので、正確な出土地点の把握・訂正を願いたい。また、中島氏によれば、土器の中に骨片が入っていたとのことであり、当遺跡が再葬墓であったことも確認された。更に、数個体が現在もなお地中に埋もれている事実も明らかにされた。いずれ学術調査に向けて実現を図りたいと考えている。壺の出土した周囲はほとんどが水田であるが

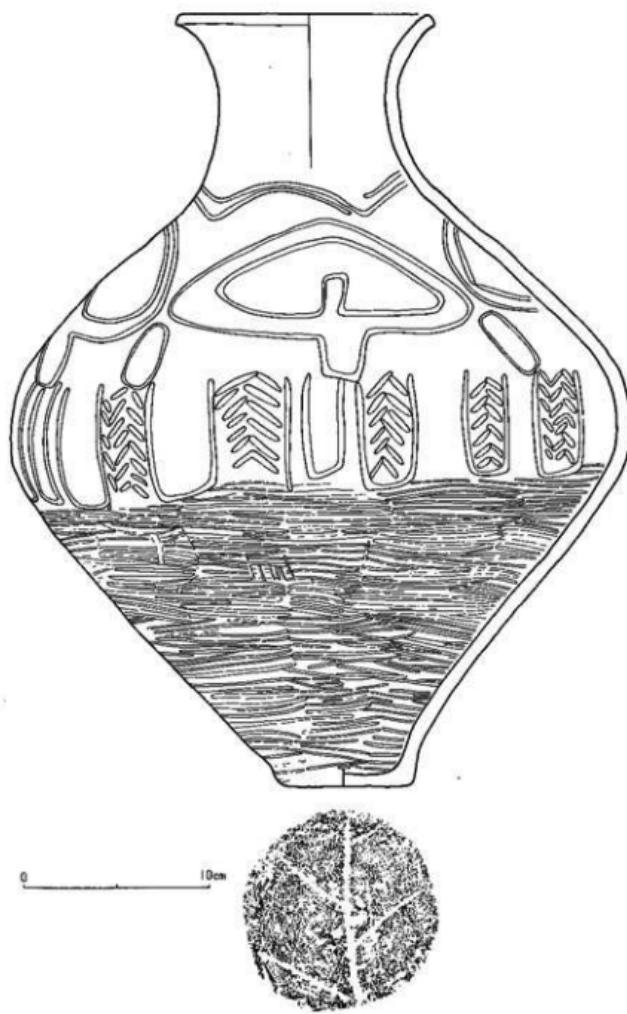


第8図 宮の本遺跡出土土器



0 (1 : 3) 10cm

第9図 佐久町中原遺跡出土土器(1) 中期初頭 (草間吾助氏蔵)



第10図 佐久町中原遺跡出土土器(2) 中期前半 (草間啓助氏蔵)

出土地点から200m南方にりんご畑があり、縄文前期～中期にかけての遺物が採集される。日当たりの良い台地であり、この周辺に当該期の聚落が存在していた可能性も有り得る。今後踏査を繰り返し行って採集に努めたい。また、土器伝播経路については二つの道筋が考えられる。一つは、館遺跡、中谷遺跡から余地岬を経て南牧村（なんもく）へ入る道と、館遺跡から大日向・十石岬を経て多野郡上野村へ通じる道が考えられ、両者は古くから交通路が開け、更に埼玉県へ通じる重要な道筋であり、土器の伝播経路については検討すべき問題を含んでいると言えよう。

（文責 島田恵子）

註1 笹沢 浩 1977 「弥生土器—中部 中部高地I—I」『考古学ジャーナル134』

白田町

白田町は佐久地方の中央南端部にあり、広大な高原盆地・佐久平野部の中では東南隅に当たる部分を占めている。同町は東西両側を蓼科山麓と、荒船山・物見山などの佐久山地に挟まれており、その間を貫流する千曲川の氾濫によって形成された狭隘な沖積平坦面と千曲川支流の片貝川（左岸）、雨川・谷川（右岸）沿いの末端部を中心として現在の水田經營がなされ、聚落も形成されている。従って、ここでは弥生時代遺跡も同様に密接する千曲川左岸・片貝川流域と右岸・雨川・谷川流域に2大別して、昭和61年より63年まで実施した「白田町遺跡詳細分布調査」をもとに遺跡分布の状況を概観することにしたい。

千曲川右岸・雨川・谷川流域

群馬県境に通じる田口峠のある荒船山などの佐久山地に源を発して西流する千曲川の支流吉沢川・雨川・谷川沿い及び、その開口部、千曲川本流沿いにも当たる谷口扇状地に弥生時代遺跡も分布する。これらの分布圏は、標高700～800mに及ぶが、月夜平遺跡など弥生時代中期初頭を除く、後期における中核的な聚落形成域は、大規模水田經營が可能な千曲川本流右岸沿いの標高720mまでの地域に絞りこんで考えるのが妥当であろう。換言すれば、この地域が北方の佐久市平野部から連続と形成される弥生聚落一大密集地の南端部に当たるのである。更に標高1,140mを測る谷川の源流地においては、岩陰に所在する弥生後期の遺跡が点的に確認されている。これらの遺跡は古道の付近にあり、群馬県地方との交流を示唆するものと考えられ、今後慎重に注意を払わなければならないだろう。

千曲川右岸に所在する弥生時代の遺跡は計24遺跡を数える。このうち、佐久市との境界に接す

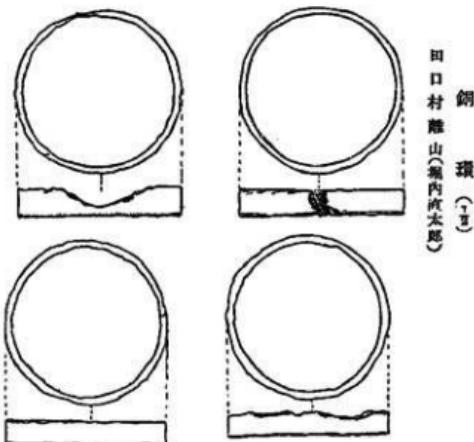
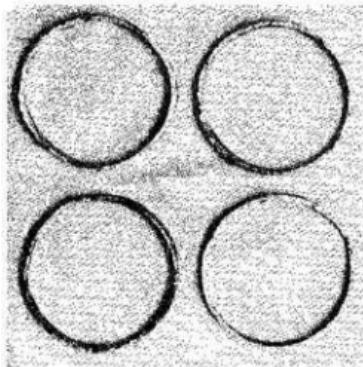
る離山遺跡から始まって、田口村に所在する遺跡は、大奈良・原・山崎・脇白山・金原、清川入・明法寺・削塚・神原道場・芦内岩陰・田中・井上・遍照寺・荒巻等15遺跡を数える。

更に荒巻地籍と隣接した入沢地籍に入ると、山際・五蓋西・湯殿入・下海戸・山の前・月通沢・水石・一つ石岩陰・滝日蔭・白窪・藤原・月夜平の9遺跡が存在する。次にこれらの遺跡を地区別にまとめてみたい。

離山遺跡（5A-No39）

相沢川が沖積地に開口する千曲川右岸の標高680mの独立丘陵上に存する。著名な銅鏡4個の発見地であり、八幡一郎氏は『南佐久郡の考古学的調査』で次のように述べている。「……昭和二年三月、田口村大字大奈良離山に道路の改修工事を行ひたる際、四ヶの銅製環及赤色素焼土器底部破片、人骨片等を発見せり。

銅製環の上観は写真にては、銅製鏡の如く見ゆるも、実は然らず、幅1cm、厚さ0.2cm、許りの青銅帶をもって第60図の如き円環とせるも、全面風化して美しき緑白色を呈す。鏡の如く腕輪、其他の装身具なりや、否やは類品知見なきを以て決して新く、暫く別種物として此處に記す。……」（同書95・96ページ）。書物には所有者・田口村、堀内直太郎氏とあり、堀内氏は小学校へ寄贈したが現在は不明である。



第11図 異山遺跡出土銅鏡（『南佐久郡の考古学的調査』より転載）

大奈良遺跡 (5 A-No40)

千曲川右岸の河岸段丘標高705m内外の微高地上に立地し、段丘下の沖積地を小海線が通している。東方の金石地区は昭和27年の開田の際、繩文中期勝板式・加曾利E式、打製石斧、石棒、石皿、多凹石、磨製石斧、石鎌、土師器の他、箱清水式土器等が多量出土し、その一部が現在五陵郭のお台所に展示されている。また、大奈良地区の集落全体が遺跡であり、庭の一部や住宅の回りの畠から、弥生後期の赤い土器や鬼高式の長胴甕などが出土しており、佐久市から続く弥生の大集落が予想される。

原遺跡 (5 A-No41)

雨川右岸の千曲川に面する標高710m内外の微高地上にあり、眼下の水田面との比高は5m内外を測る。昭和63年の発掘調査により弥生時代後期の堅穴住居址二軒が検出された。出土土器は、全器形が分かるものがないうえに欠落器種が多いが、後期後半段階に位置付き、北方に隣接する大奈良遺跡の弥生集落は原遺跡の北西側で一旦切れるようである。原遺跡の中央から東南側には12基の群集墳が所在し、周辺には古墳時代末から奈良・平安時代にかけての大集落が展開する可能性が、発掘調査、表面採集、既出資料から伺える。

山崎遺跡・脇白山遺跡 (5 A-No42、5 B-No43)

大奈良・離山遺跡に隣接した東方に所在し、標高705m内外を測る。山崎遺跡には古墳があり、勾玉・金環が出土したとのことであるが、現在は僅かに1基痕跡を見るだけである。更に東方の丘陵上の台地には脇白山遺跡が立地し、弥生後期の土器が表面採集される。

金原・清川入遺跡 (5 B-No44)

清川部落の山麓の沢に所在する遺跡である。両遺跡は現在、畑地で弥生後期、古墳～平安時代にかけての土器片が表面採集される。

明法寺・割塚・神原道場遺跡 (5 B-No45・46・62)

明法寺・神原道場遺跡は、田口城山の山麓台地に所在し、割塚遺跡は、明法寺遺跡と相対した、雨川右岸の扇状平坦地に位置し、標高は720mを測る。遺跡内には古墳一基が所在し、太形蛤刃石斧が表面採集されている。明法寺遺跡にも古墳一基が所在し、土師器・須恵器が表面採集される。また、信濃資料によれば箱清水式土器の甕・高环が出土したとのことである。神原道場遺跡からは箱清水式土器の出土があった。

芦内岩蔭遺跡（5B-No48）

吉沢川を南の眼下に見下ろす標高1,010m内外の山頂先端部に存する。昭和39年樋口昇一・藤沢平治氏によって発掘調査され、縄文時代早期・神ノ木式・有尾式・南大原式・上原式、打製石斧、凹石、弥生後期・箱清水式甕等が出土した。（「芦内遺跡調査概報」「信濃III」）

井上・田中遺跡（5A-No49・50）

雨川左岸の千曲川に面する標高710m内外の微高地に近接して存する。井上遺跡は昭和48年発掘調査が行われており、弥生時代の遺構は、溝1基しか見られなかったものの中期後半・後期前半の土器が、比較的まとまって出土した。このほか、同遺跡からは古墳時代後期の堅穴住居址4軒、縄文時代前期花積下層式土器・後期堀ノ内式土器が検出されている。また、田中遺跡からは箱清水式土器が表面採集されている。また、田中遺跡からは、栗林式・箱清水式土器、石包丁、太形蛤刃石斧が表面採集され、白田町文化センターに展示している。この地区は圃場整備が行われていないため、遺跡は水田・畑の下に埋蔵されている。千曲川右岸の遺跡では、弥生の比較的まとまった集落はここが南限であるといえる。また、千曲川左岸の勝間原遺跡は、井上遺跡と相対する位置にあり、右岸・左岸ともに南限のラインは一致する。

遍照寺遺跡（5A-No51）

雨川左岸の標高750m内外の狭隘な山麓台地上にあるが、箱清水式土器が出土している。

荒巻・山際遺跡（5A-No52・53）

小山沢の出口、標高730m内外の微高地にあり、荒巻遺跡では大正の末頃東京電力の送電線鉄塔建設の際に赤い土器が出たと伝えられている。現在でも箱清水式土器片・土師器が表面採集でき、山際遺跡内には入沢古墳群、山際1号墳がある。

五箇西・湯殿入遺跡（5B-No54）

谷川右岸・入沢の標高770m内外の山麓末端部にあり、五箇西古墳群が内包される。箱清水式土器片・土師器片が表面採集されている。

下海戸・山の前遺跡（5B-No55）

谷川右岸の標高790m内外の狭隘な平坦面上にあり、箱清水式土器・土師器・打製石斧等が表面採集されている。

月通沢・水石遺跡 (5B-No56)

谷川右岸の標高800m内外の狭険な平坦面上にあり、箱清水式土器のほか、土師器、須恵器、灰釉陶器、打製石斧等が表面採集されている。

臼塙遺跡 (5B-No59)

山腹の標高880m内外の台地上にあり、箱清水式土器が表面採集されている。

一つ石・滝日蔭遺跡 (5B-No57・58)

赤谷部落から東へ1km、赤谷川をさかのぼった国有林内で、赤谷川左岸の山麓傾斜地の岩塊の重なり合った崩壊した小岩陰滝日蔭遺跡がある。更に赤谷川の対岸200mに一つ石岩陰遺跡があり、高さ8m烏帽子状の角礫岩の孤立した巨岩の周辺に遺物が分布している。南面する日当たりの良い乾地であるが、その西方の浅い低湿地には石積み状の跡が見られる。両遺跡ともに、眼下に川を見下ろす高所に位置しており、滝日蔭遺跡からは縄文時代前期・黒浜式土器、弥生後期箱清水式土器が出土している。一つ石岩陰遺跡では縄文時代中・後期土器細片、弥生時代では後期箱清水式土器、更に、土師器・須恵器・内耳土器等が出土しているがいずれも細片である。

白田町では芦内岩陰遺跡とともにこうした岩陰遺跡から弥生時代後期箱清水式土器が出土する遺跡が、千曲川右岸で3遺跡ある。これらは近接した山間地にあり、道筋を尾根沿いにたどれば群馬県南牧村へ通じる。道筋のキャンプ的遺跡群と考えられるが、当該期の信州・上州の社会的交流を考えるうえでも重要な諸遺跡である。

藤原遺跡 (5B-No60)

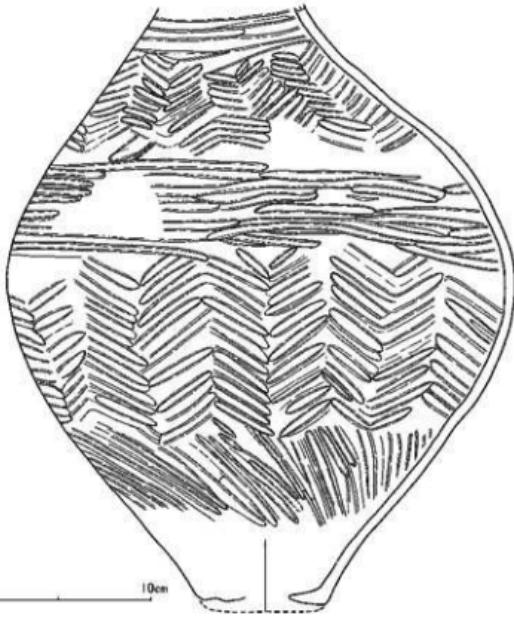
馬寄集落の東方約600m、谷川左岸の山麓台地に立地する小範囲の遺跡である。六角堂地籍から東方へ、谷川支流の小河川を渡った段丘端にあり、弥生時代後期箱清水式土器、土師器、須恵器が表面採集されている。平坦で日当たりの良い窪地である。また、谷川の対岸には下海戸・山の前遺跡、天神平・西の窪古墳群がある。

月夜平遺跡 (5A・B-No61)

谷川が千曲川流域の沖積平地にでる谷口の左岸に形成された洪積層の段丘で、西方の水田面との比高10mの西南面する台地で、標高は760m内外を測る。磯部から大宮諏訪神社に通じる道路の北方一帯の畑地果樹園に分布する。遺跡内に月夜平4号古墳が存在する。出土遺物は、(縄・前・中、後期)諸磯A式、下島式、加曾利E式、加曾利B式、堀ノ内式土器、石鎌、打石斧、磨石斧、石錐、石皿、凹石、石剣、石棒、多孔石、土偶、滑車形耳飾、土製蓋が出土している。更に磯部

地盤からは道路拡幅工事の際、長さ152cmの磨製の大石棒が出土し大宮諏訪神社に所蔵されている。発掘資料はないが、弥生時代中期初頭の壺4点（第12・13図）が『長野県考古学会誌12』に報告されているほか、箱清水式土器も表面採集されてい る。

また、本遺跡の中央部には入沢城跡が853mの山頂に築かれており、更に遺跡の左右には、十二山砦と穂部城の二つの支城があつて、



第12図 白田町入沢月夜平遺跡出土土器（1：3）



第13図 白田町入沢月夜平遺跡出土ミニチュア土器（1：2）

谷川の谷の入り口部の南北に相対して千曲川沿いの平野部からの侵入を防いでいた。【入沢城 本郭東方の尾根筋には三条の堀切を設け、二の郭の西方にも堀切がある。南方直下に曹洞宗吉祥寺があり、西方脚下には八幡社があり、やや北方にはなれて大宮諱跡神社がある。北東の山麓台地の馬寄地区には中世牧場跡がある。応仁3年（1469）、文明14年（1482）に入沢長助・長義が御符札之古書に記され、また、天文7年（1538）大井美作沙弥源昌が大井庄青沼郷八幡に寄進した譜口が現存することから、城主は入沢氏、大井氏とかわり、天文9年武田信虎に攻略され、以後廃城になったものと思われる。】

（文責 三石延雄）

千曲川左岸・片貝川流域

水源を蓼科山麓に発し、小田切久保を流れ出る片貝川は、その上流において急峻の谷間を流れ下るため、降雨のたび毎に蓼科ロームを含む肥沃な土壌を下流域に流出し、稲荷山と横山とに遡られた横山地籍・下小田切地籍・北川地籍にかけて、大氾濫原を現出する。また、片貝川は稲荷山と横山との狭隘な区間を抜けて北西方向へ向きを変えて流れだし、その支流滝川・相沢川と合流して稲荷山を起点とする千曲川沿いの自然堤防から蓼科山麓末端の白田西山にかけても継続して肥沃な氾濫原を形成している。これらの氾濫原は、標高690～720の範囲に包括され、佐久地方の平野部南端にあたる。梁田・谷地などの小字、温田などの地域名が点在しており、弥生時代における安定した水稻耕作を中心とする農業生産が可能な佐久地方の最南端地域としても推定されている。

千曲川左岸に所在する遺跡は9遺跡を数え、右岸に比較するとかなり少ない。これら遺跡の分布の在り方を概観すると、片貝川と千曲川に挟まれた白田町北西端側には、蛇塚・美里在家遺跡が所在する。また、片貝川左岸白田山の山麓には、下の城・七曲り下遺跡があり、滝川左岸の山麓には五里久保遺跡が存在する。更に、滝川と中沢川が合流して片貝川となる手前の台地には、横山遺跡があり、その南方国道141号線の西側には、勝間原の台地が小田切の平地を見下ろす立地条件に有り、ここに勝間原・丸山・栗ノ木・広沢遺跡が所在する。次に個々の遺跡に触れてみたい。

蛇塚遺跡（5A-No29）

千曲川左岸の平地に立地する。白田高等学校の北端から北へ約350mの間、西は国道141号線を西限として東へ約150mの幅をもって遺跡の範囲とする。遺跡地内に蛇塚古墳、法印塚が包括される。旧称法印塚と蛇塚遺跡は連続しているので、一体のものとして、「白田町遺跡詳細分布調査」

第2節 諸地域の様相

により蛇塚遺跡と改めた。標高は700m前後を測る。表面採集によって長さ16cm、最大幅6cmの磨製太形蛤刃石斧（白田町中荒：山下耐一氏所蔵）が発見されている。

美里在家遺跡（5A-No30）

白田町市街地の北端、国道141号線と片貝川の中間の平坦な微高地に立地するが、現在は殆ど全面が住宅街となっている。南端は白田高等学校正門前の道路から北は佳里保育園までとし、東は道路、西は低い段丘壁をもって限界とされている。栗林式土器・石製紡錘車等が表面採集されている。

七曲り下遺跡（5A-No31）

医王寺の北方に隣接し、片貝川左岸と白田西山山麓の狭くて細長い緩斜面に立地し、標高700m内外を測る。片貝川にかかる七曲り橋を中心にして南北に約200m、幅約30mの範囲に分布する。北端部は水田となっている。箱清水式土器の破片が表面採集されている。

下乃城遺跡（5A-No32）

片貝川に接し、標高700m内外の蓼科山麓医王寺山頂下の城跡の西方に沿って南西に面する低丘陵上に位置している。箱清水式土器の散布地である。

横山遺跡（5A-No33）

横山の南面傾斜地、標高710m内外の片貝川とその支流中沢川の合流点の独立丘に位置している。宅地化が進み現在は切原線道路の西側に残存するに過ぎない。過去において、磨製石鎌・箱清水式土器が採集されている。

五里久保遺跡（5A-No37）

湯原新田部手前の滝川左岸、南面する山麓緩斜面に立地する。標高805m内外を測る。弥生後期の包蔵地で箱清水式土器が採集される。

勝間原・丸山・栗の木遺跡（5A-No34~36）

片貝川流域、平坦地の東方、勝間原台地に隣接して立地する遺跡で、国道141号線から西方、片貝川流域の水田面に接するまでの西面する段丘斜面上に位置する。東方は千曲川の侵食崖で比高約15mを測り、氾濫の心配は全くない。そのため、片貝川を見下ろす台地に住居をつくり、小田切の広い平坦地に水田耕作を営んだことが理解される。弥生時代後期の箱清水式期に最も栄えた

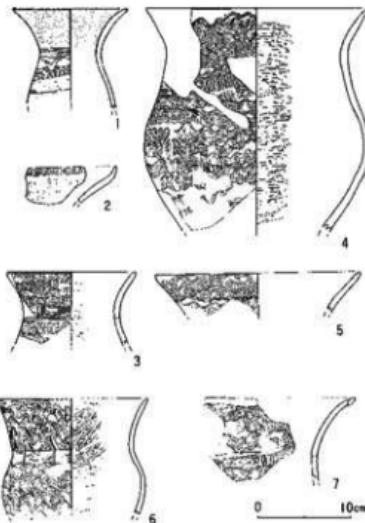
集落で、佐久平南限の弥生後期の大集落が、この3遺跡の範囲に分布している。標高は720~740mを測る。

発掘調査は、昭和62年4月、勝間原遺跡の一部約500m²を調査し、弥生時代後期箱清水式期の住居址2棟、溝1条を検出、住居址内から検出された土器の器種には壺・甕・深鉢・鉢・高環・手捏など（第14図）がある。

また、平成元年12月13日～平成2年1月14日まで丸山遺跡を約1,000m²調査した。弥生時代後期箱清水式期の住居址3棟、墓3基を検出したが耕作による破壊がひどく、器形のはっきりわかる資料の出土ではなく、遺構も判然としない面が多かったが、墓壙3基は遺存良好であった。

広沢遺跡（5A-No38）

蓼科山麓末端標高720m内外の北面傾斜地にあり、片貝川氾濫原に接する。箱清水式土器の小形壺・甕・台付甕・高環・器台（切原小学校所蔵）が表面採集されている。



第14図 勝間原遺跡出土土器（Y-2号住）
後期後半古相

（文責 黒岩忠男）

(4) 佐久市

佐久市は佐久地方のはば中央部にあり、佐久盆地平坦部の多くの部分を占めている。市内の中央部は千曲川が北西方向に向かって流れ下り、その右・左両岸に展開する広大な台地・沖積地には数多くの弥生～平安時代の古代集落遺跡がひしめきあっている。反面、縄文時代の遺跡は以外に少なく、佐久市内の平坦部が水稻農耕文化の浸透・発展に伴って活発に開拓され始めたことが伺われる。また、千曲川によって分断される右・左両岸地域は地形・地質の面でも大きな異なりを見せており、その内部で展開される文化は現在でも微妙なニュアンスの違いを感じさせる。

佐久市北部＝千曲川右岸地域

浅間火山の噴出物、泥流・軽石流（それぞれ塚原泥流・追分軽石流と呼ばれる）が被覆する部分が多く、佐久市南部＝千曲川左岸地域よりも一段高い段丘面を形成している。この段丘面には、浅間山を起点として放射状に南へ向かって流れ落ちる、湯川・瀧川をはじめとする幾筋もの小河川の浸食によって形成された谷地形〔当地方では特に「田切り地形」と呼ばれている〕が多く発達している。このため、佐久市北部の平坦部は細長い台地状の地形が幾筋も刻まれる結果となり、この台地上に多くの古代集落遺跡とともに弥生時代の集落遺跡も分布する。特に湯川・瀧川が流下する岩村田・長土呂地区は佐久市内で最も該期の遺跡が密集する地域である。北西の久保・周防畠B遺跡などの発掘調査によって周知された大拠点集落のほか、未調査部分が多く不明確ではあるが、相当な集落規模が予想される円正坊・西近津・杣杷坂・一本柳など佐久地方の著名な集落遺跡群の多くが内包され、当地方の弥生文化的一大拠点が築かれていたことは想像に難くない。これらの弥生遺跡は中央に存する広大な低湿地地帯を取り囲むように馬蹄状に連なってに分布しており、710m前後の標高ラインを上限として分布が希薄になる傾向がある。該期の弥生集落が相互に連携して、低湿地を基盤に強固な農業共同体が編成されていたことが想像されると共に、当時の稻作限界地点をも想定させる興味深い事象である。このほか、佐久市北部地域＝千曲川右岸では滑津川沿いに和田上・戸坂・樋村など比較的大規模な弥生集落遺跡が存在する。遺跡立地は標高710mを上限とする点で湯川・瀧川を中心とした地域と共通するが、集落間相互の結束は湯川・瀧川ほどの壯大きさはみられない。

湯川・瀧川流域

北西の久保遺跡 (7A-153)

地形は、湯川右岸の標高690m内外の第二段丘面にあたるが、段丘北側も現在の前川用水によって侵食されたため、幅60~80m、長さ250m、総面積15,000m²程の狭隘な独立した台地が残された。遺跡はこの台地上全面にわたって展開されており、昭和57・60年の台地上調査によって、ほぼ全貌が明らかにされた。竪穴住居址は弥生時代中期後半92軒、後期38軒、古墳時代中期18軒、平安時代後期9軒、古墳は中期から後期にかけての佐久平古段階の群集墳が19基検出された。弥生時代中期後半の住居址群は比較的短期間に造営が繰り返されたものと考えられ、土器様相



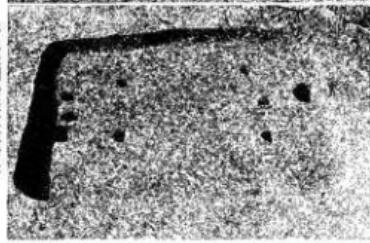
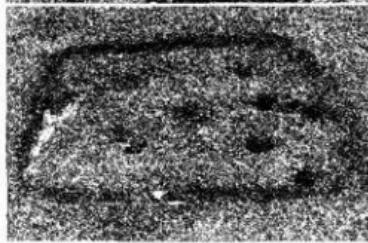
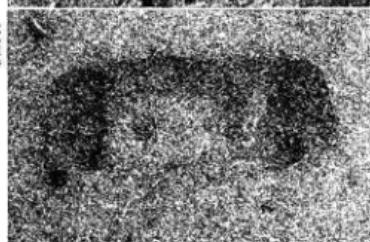
北西の久保遺跡第2次調査全景写真

から見れば、辛うじて2小間に分けられる程度である。一時期40軒前後が台地全面に亘って林立していたことになり、佐久地方では中期後半段階で最大級の拠点的集落であったと考えられる。その後一時的に集落の営みは断絶し、後期前半の中段階になって再び縮小した規模の20軒前後の集落が形成される。この集落は台地中央から南端部にかけて展開しており、台地北側には同時存在したと考えられる方形周溝墓一基と木棺墓七基によって構成される墓域がある。更に後期後半にも20軒前後の集落が営まれる。北西の久保遺跡の後期集落は中期後半に比べると縮小化が顕著であり、これが佐久地方における後期集落の拡散化現象に対応するものであるのか、あるいは当遺跡が地域内における盟主的な位置を失した結果によるものであるのか興味深い。集落構成については2軒の大形住居（床面積40m²前後）を中心として10軒前後の中・小形住居（床面積20m²前後）が取り巻く幾つかのグループによって成り立つ点において中期後半・後期共に一致する。また、本遺跡の生産基盤については台地下西側に展開する広大な第一段丘面であった可能性が高い。

第2節 諸地域の様相



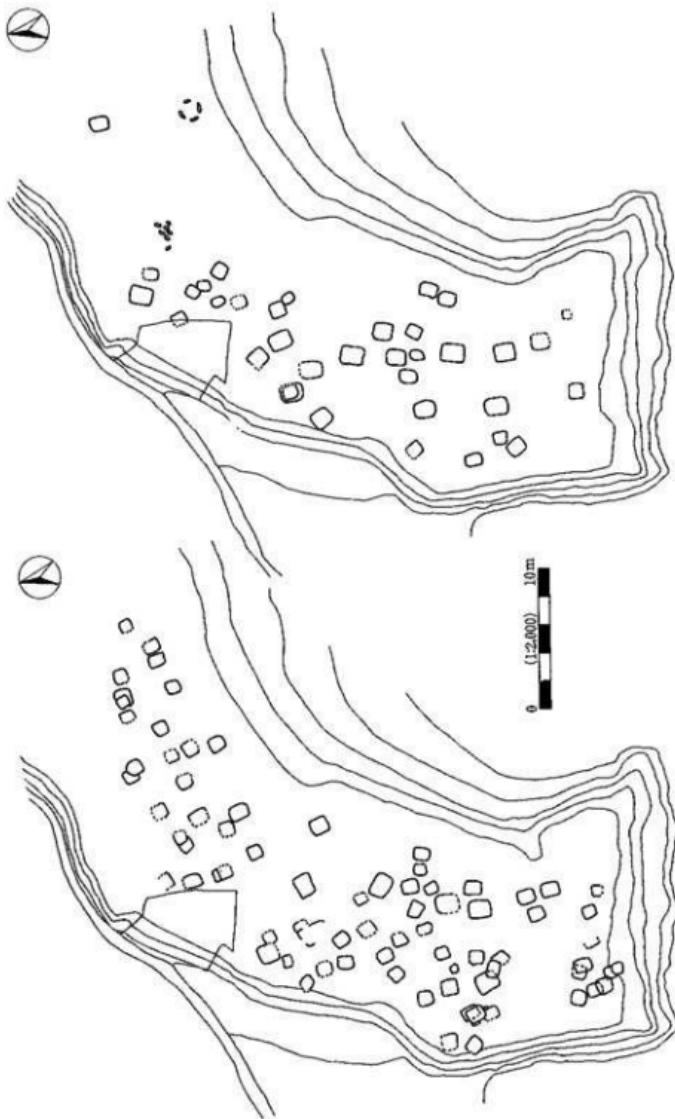
北西の久保遺跡
第1次調査全景
写真



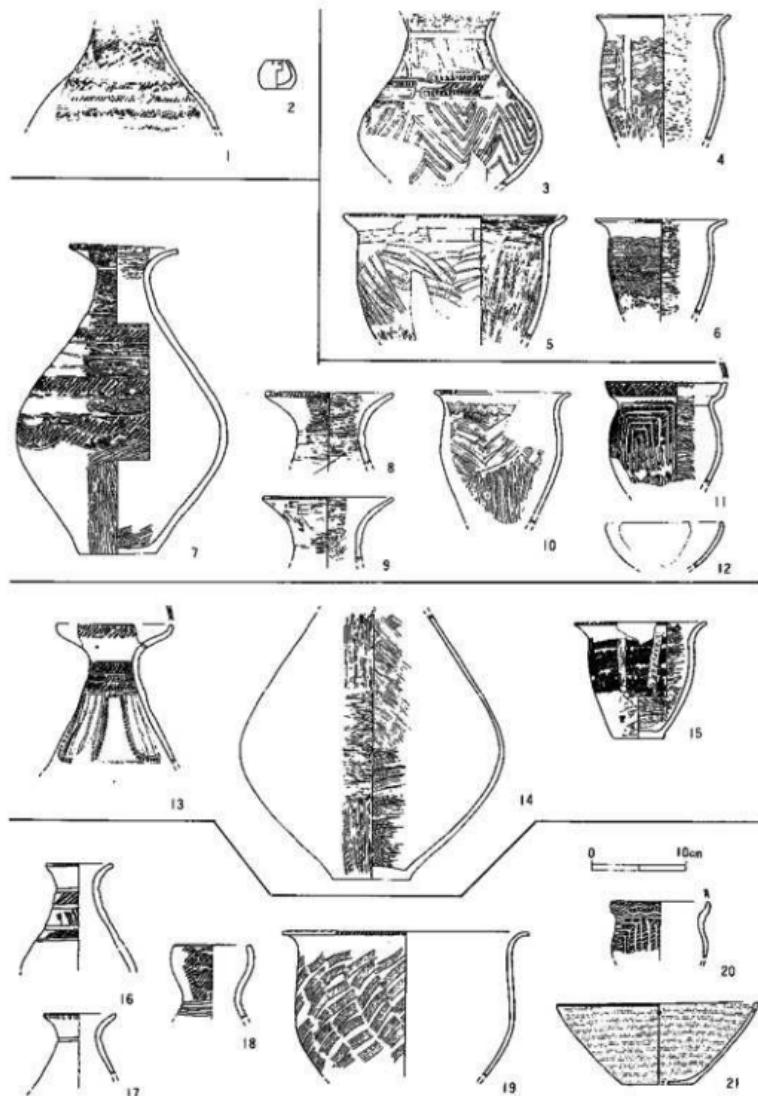
後期

第15図 北西の久保遺跡生土堆の分布

中期後半

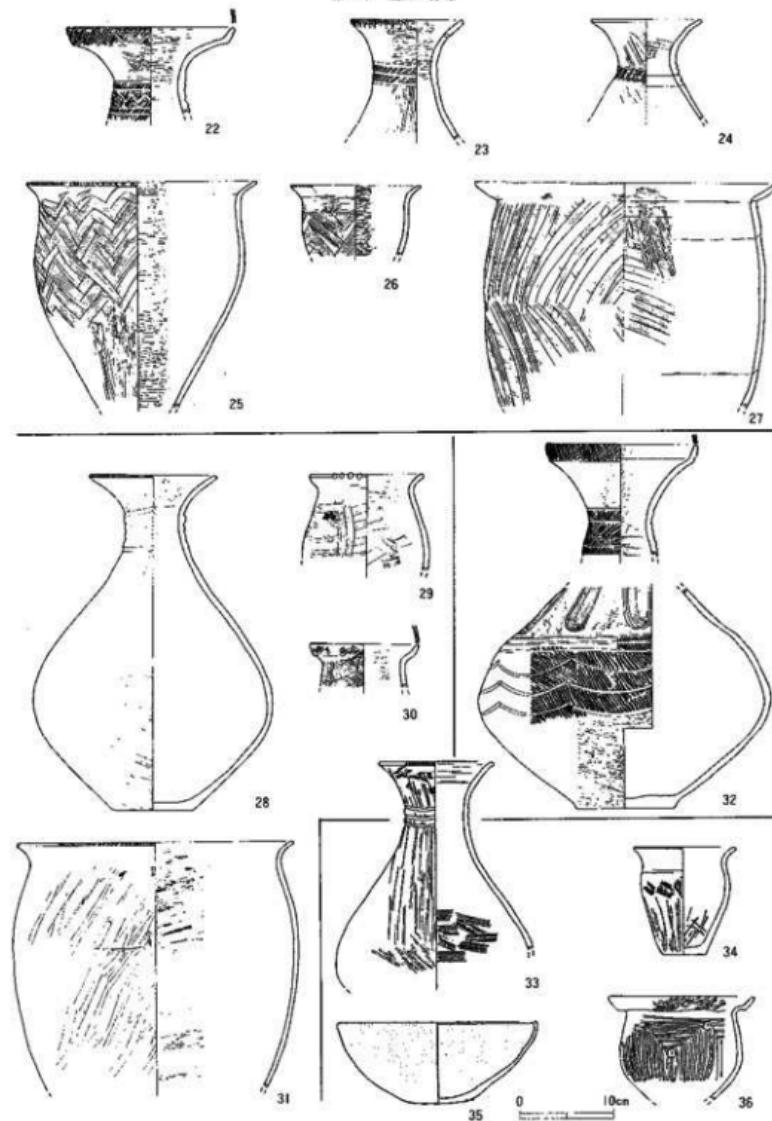


第2節 跡地域の様相



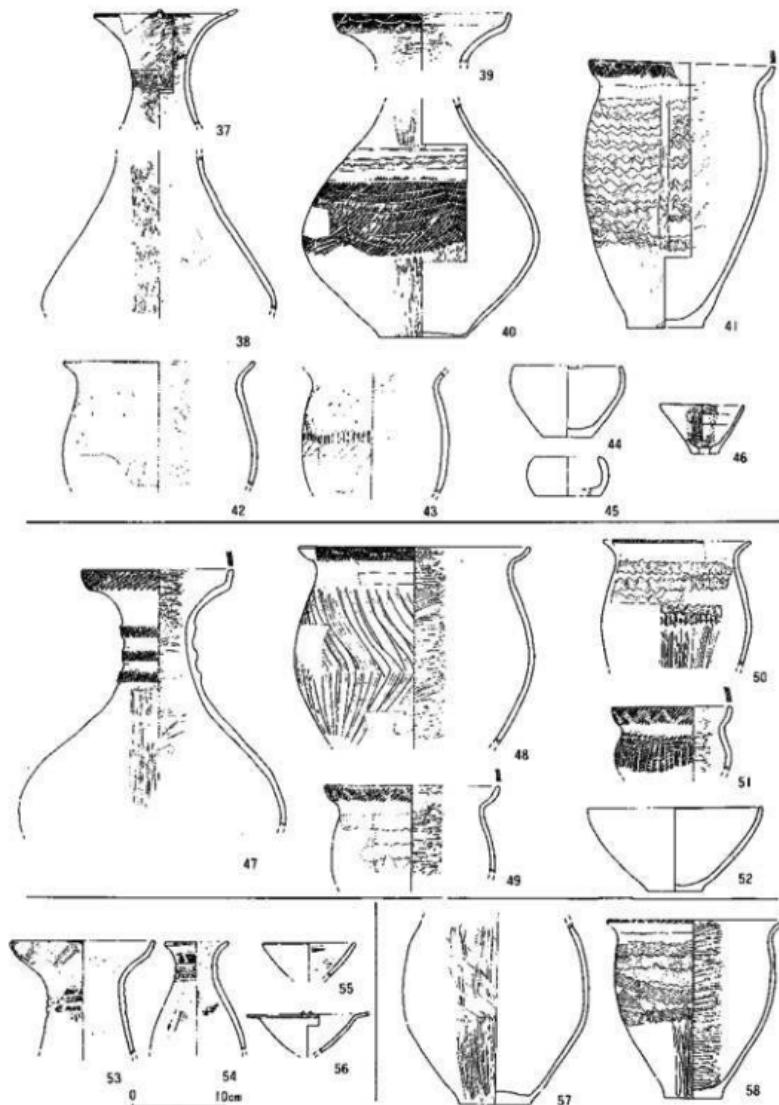
第16図 北西の久保遺跡出土土器 1~15 中期後半古相 16~21 中期後半中相 (1・2 Y71住、
2~6 Y107住、7~12 Y115住、13~15 Y128住、16~21 Y42住)

第2章 遺跡の分布

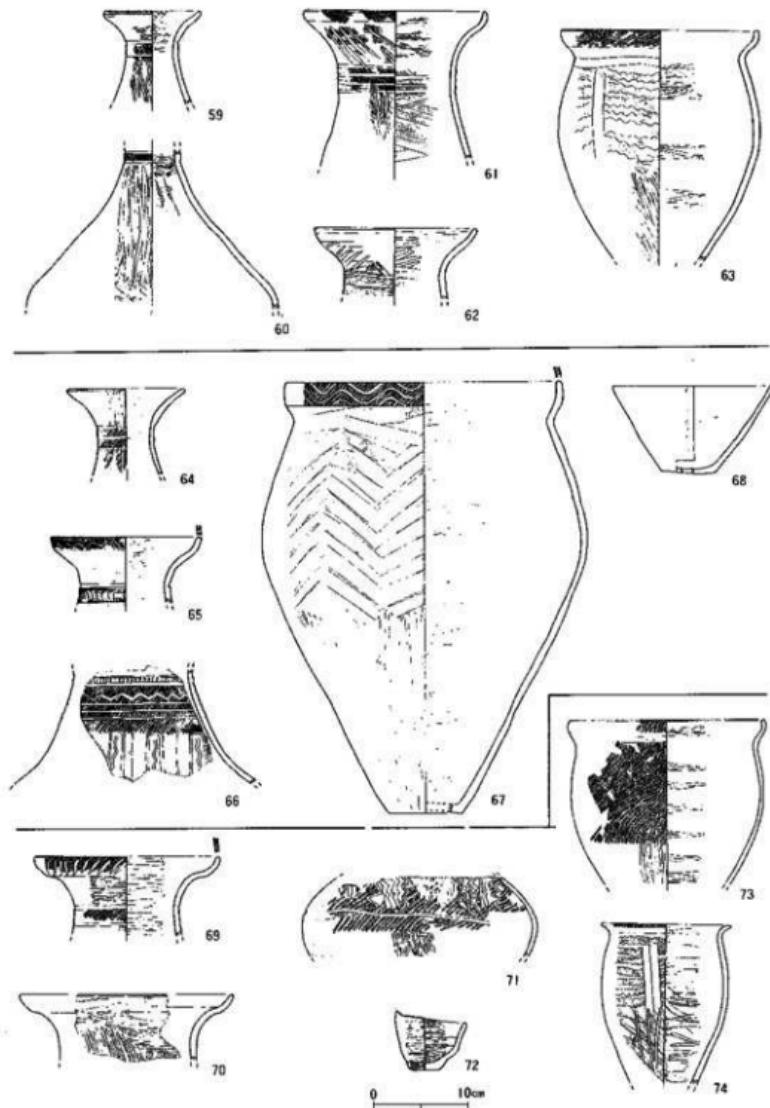


第17図 北西の久保遺跡出土土器 中期後半中相(22~27Y70住、28~31Y121住、32Y91住、33~36Y1住)

第2節 蔵地域の様相

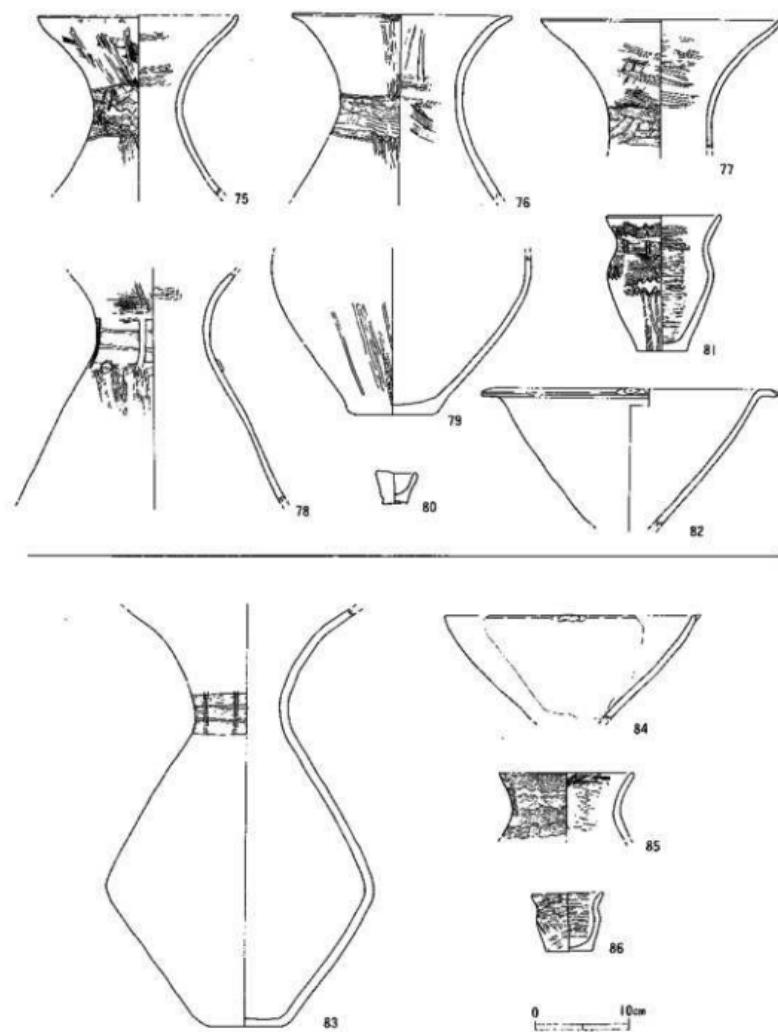


第18図 北西の久保遺跡出土土器 中期後半新相 (37~46Y122住、47~52Y126住、53~56Y88住、57・58Y98住)

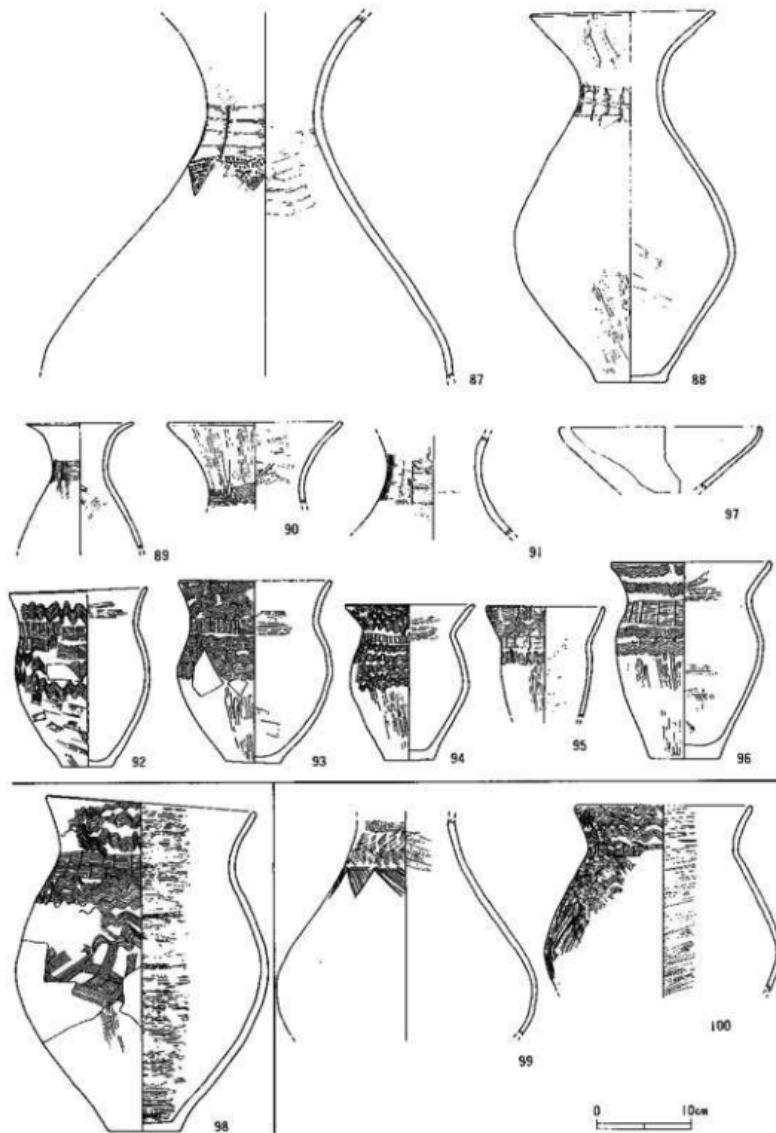


第19図 北西の久保遺跡出土土器 中期後半新相 (59~63Y68住、64~68Y69住、69~74Y85住)

第2節 諸地域の様相

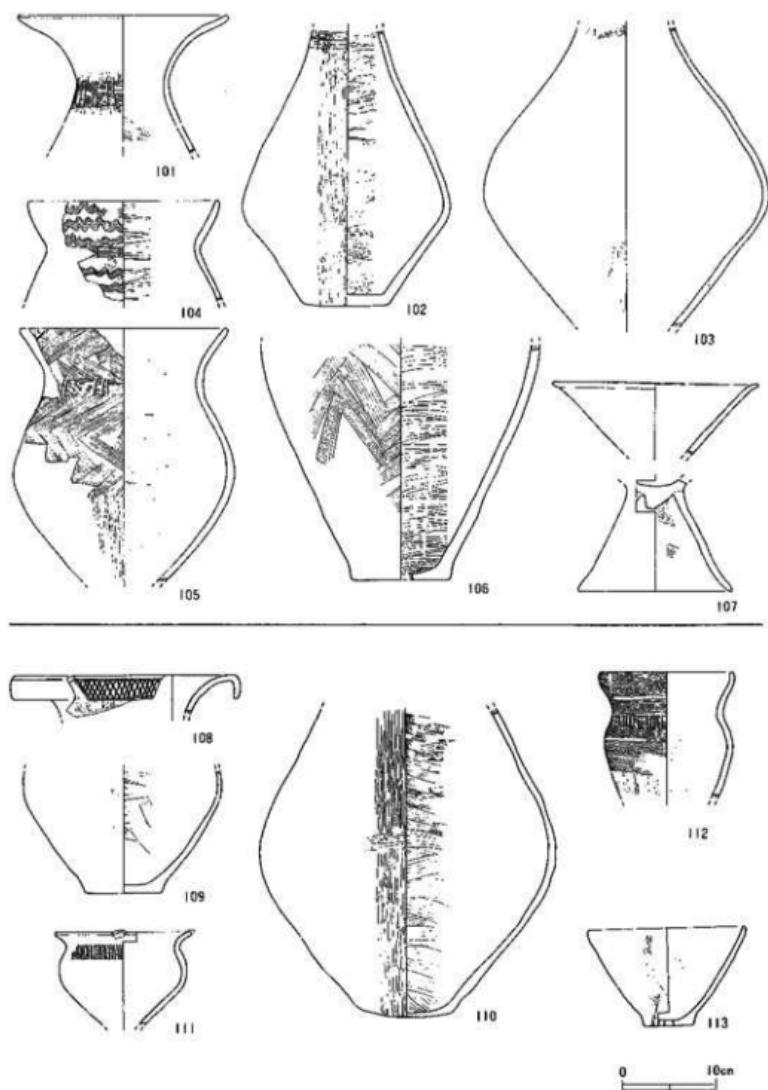


第20図 北西の久保遺跡出土土器 後期前半中相 (75~82 Y77住、83~86 Y104住)

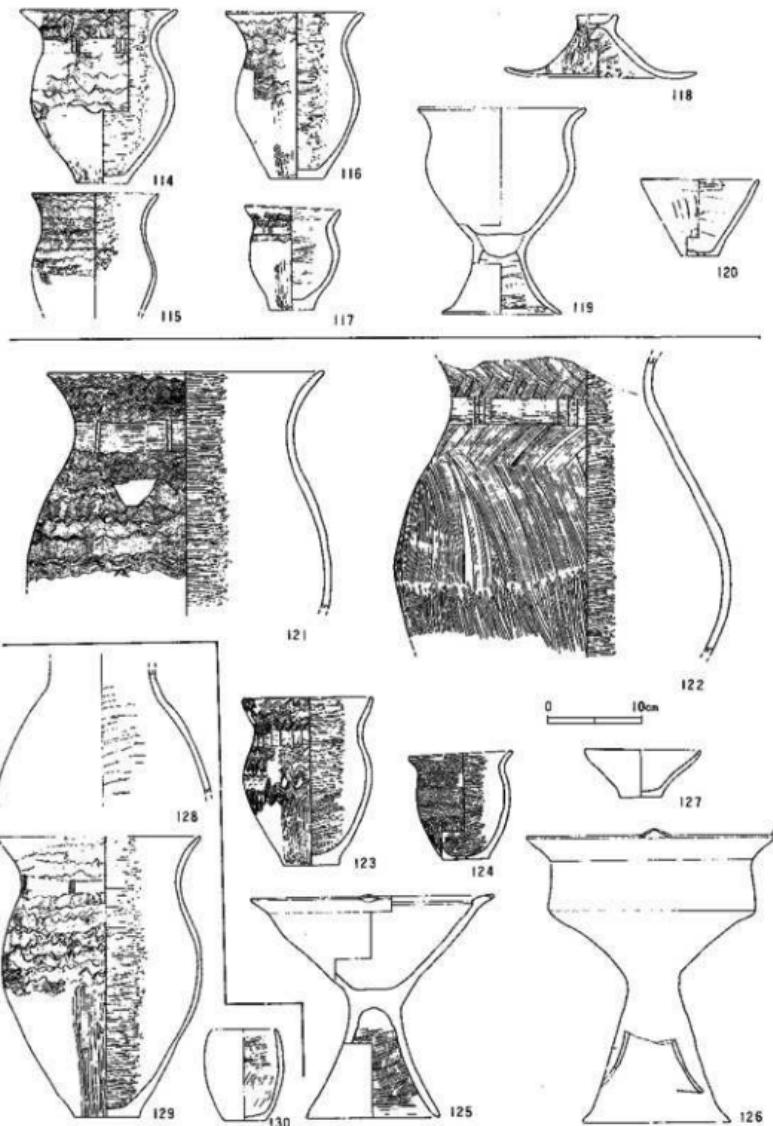


第21図 北西の久保遺跡出土土器 後期前半中相 (87~96Y66住、97Y87住、98・99Y123住)

第2節 諸地域の様相



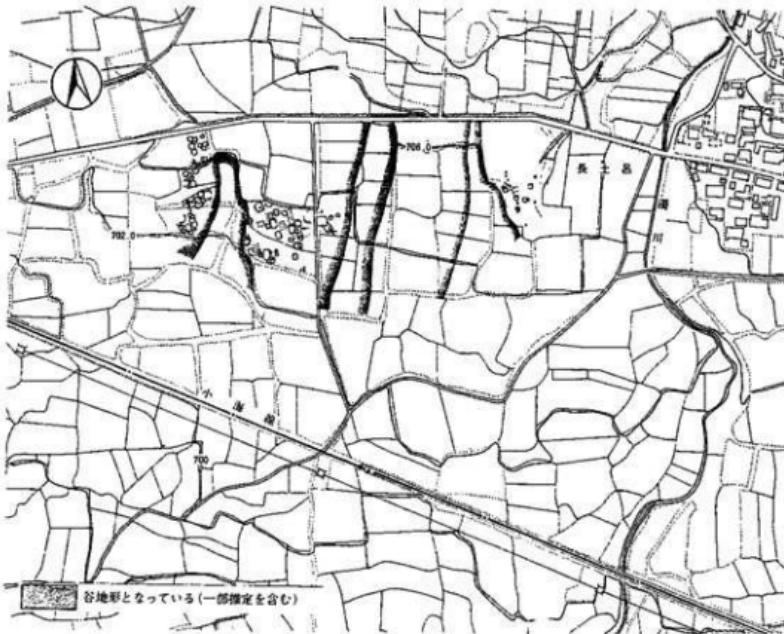
第22図 北西の久保遺跡出土土器 後期前半中相 (100~106Y 64件、107~112Y 110件)



第23図 北西の久保遺跡出土土器 後期後半古相(113~119Y93住、120~125Y100住、128~129Y120住)

周防畠B遺跡（7A-211）

石尊山北の皿の池から発する濁川と小諸市と佐久市の境界に大きく発達した和田南大田切の谷の間に挟まれた標高705m内外の微高地南辺（周防畠遺跡群の南辺に一致する）に位置している。直下の南西方向には広大な低湿地地帯が広がっており、現在の佐久市北部地帯の一大穀倉地帯を形成している。昭和55年の発掘調査により、遺跡内が数条の小谷によって刻まれていることが明らかになり、便宜的に西よりC・B・A地区と命名された。C地区は永久保存がはかられたため、詳細は不明であるが、弥生時代の住居址9軒の存在は確認されている。A地区では弥生時代後期の住居址が23軒調査され、後期前半の中段階～新段階にわたる比較的短期間の集落が形成されていたことが明らかとなった。住居は隅丸長方形プランが多く、 $5.5 \times 4.5\text{m}$ が平均的規模、 $9.6 \times 6.0\text{m}$ 、 $8.9 \times 6.3\text{m}$ が大型規模である。B地区ではこの集落に同時期対応すると考えられる墓域が発見された。南側の木棺と大形壺棺を埋葬主体とする径5m前後の円形周溝墓1基を基点として17基の不整形円形土壙墓群（合口土器棺2基を含む）によって構成されており、ガラス小玉・土器などの供獻が盛んである。



第24図 周防畠B遺跡遺構位置図

周防畠B遺跡



A地点中央部



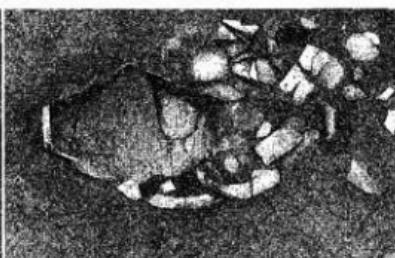
A地点北東部



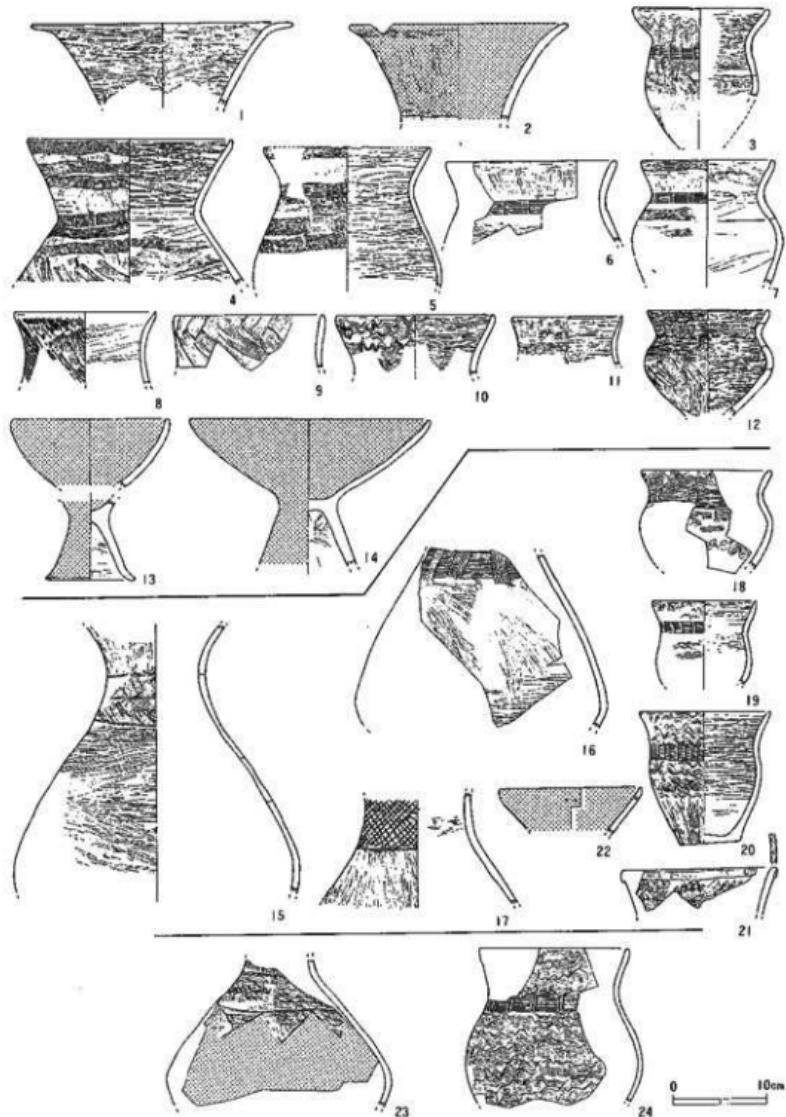
2号周溝墓 中央の凹みが木棺の痕跡



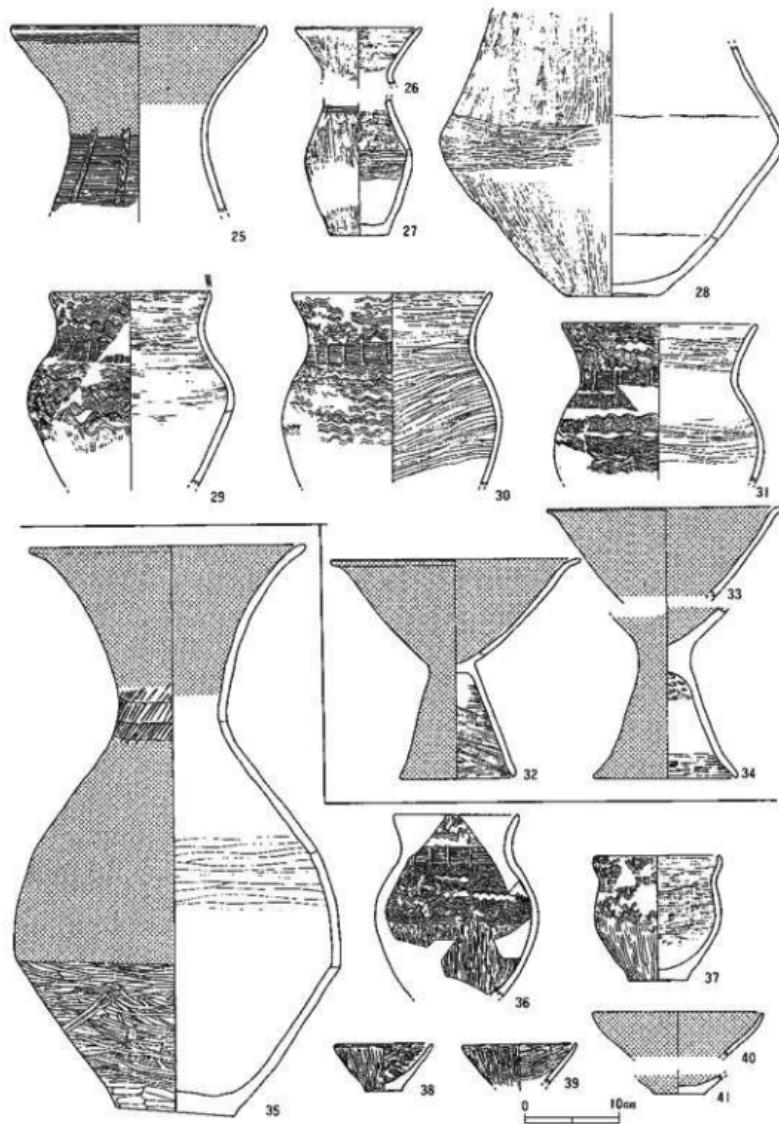
B地点 弥生墓址群



26土壤 灰棺が検出される。

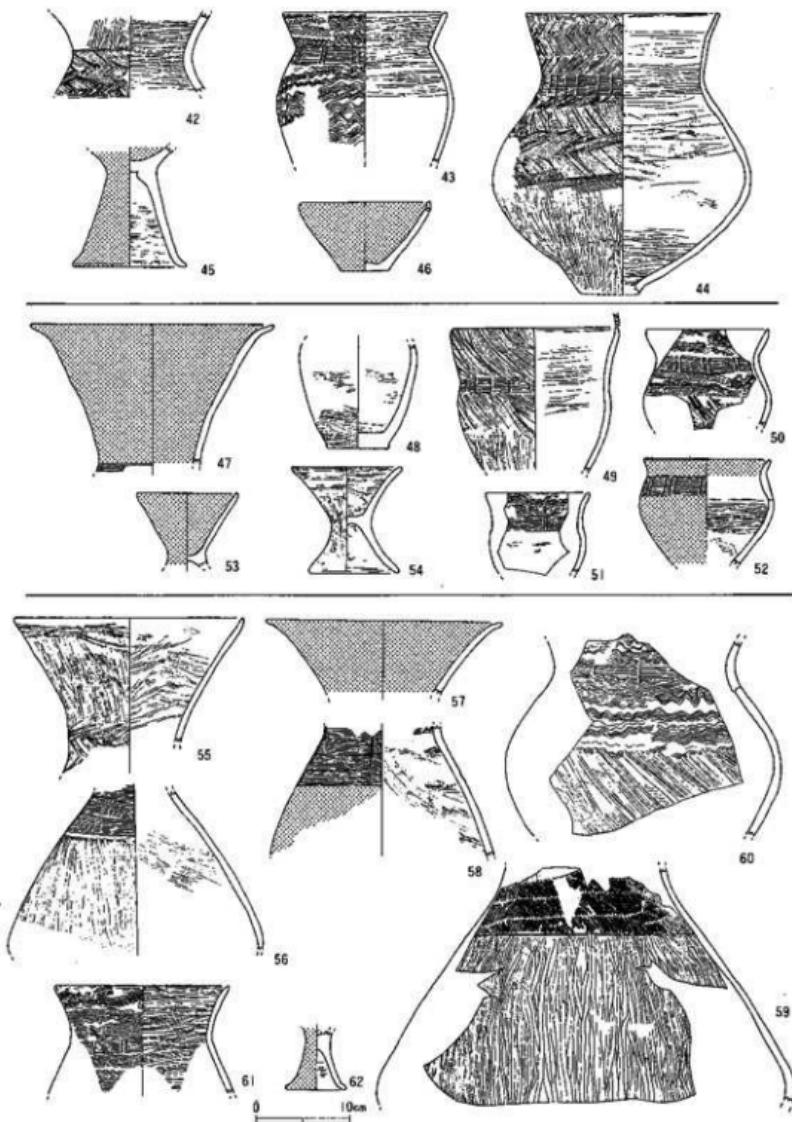


第25図 周防畠B遺跡出土土器 後期前半（1~14Y 2住、15~21Y 5住、23・24Y 7住）



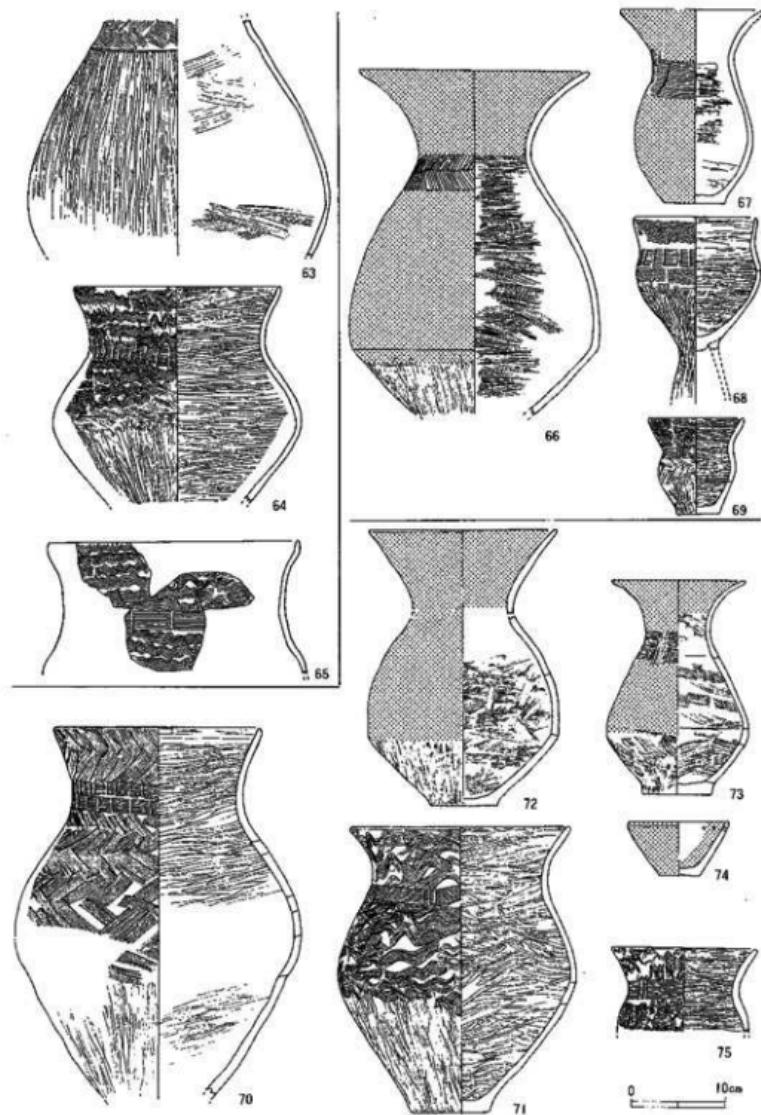
第26図 周防畠B遺跡出土土器 後期前半（25~34Y 6件、35~41Y 13件）

第2節 諸地域の様相



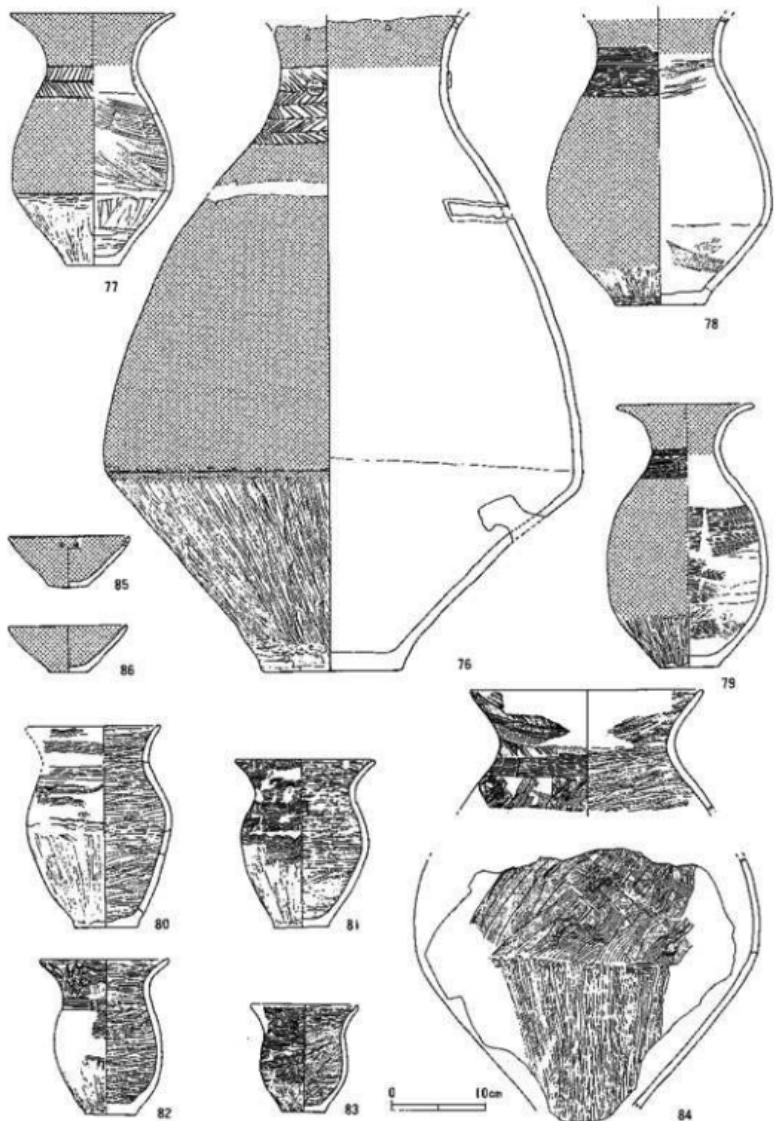
第27図 國防畠B遺跡出土土器 後期前半 (42~46Y14件、47~52Y15件、55~62Y16件)

第2章 滝跡の分布

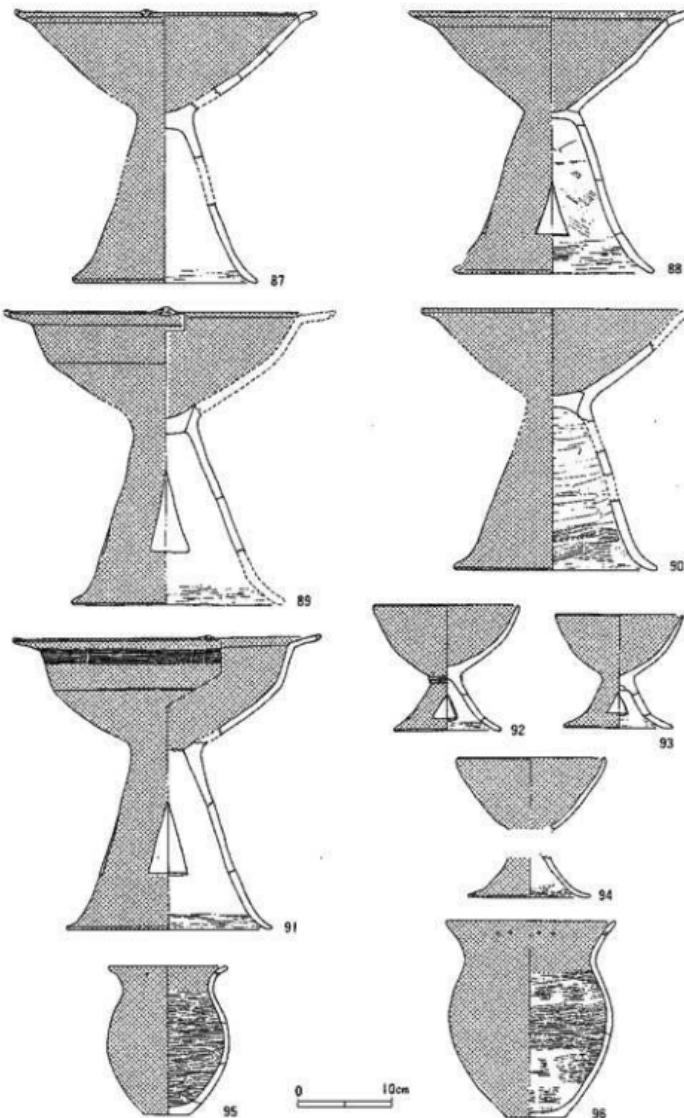


第28図 周防畠B遺跡出土土器 後期前半 (63~65Y20住、66~69 1号周溝墓、70~71 1~3号
土壙、72 15号土壙、73・74 18号土壙、75 17号土壙)

第2節 諸地域の様相

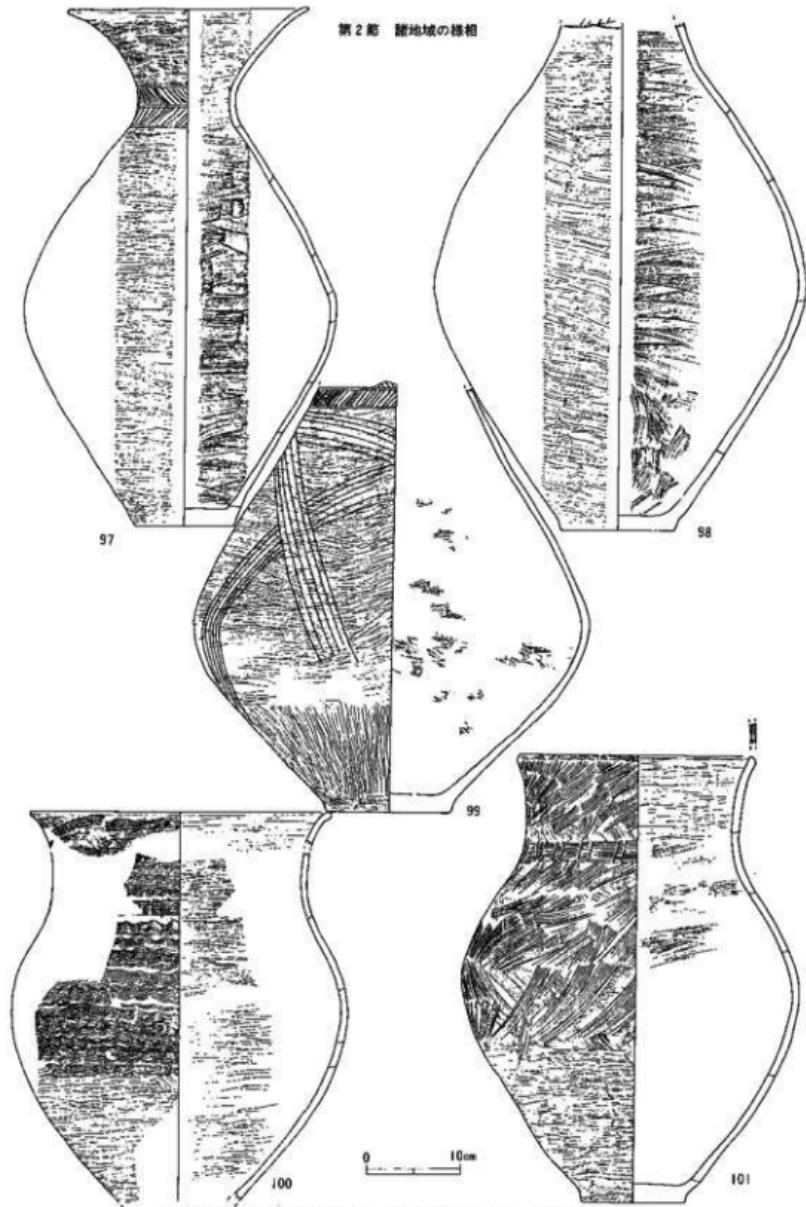


第29図 周防塙B遺跡出土土器 後期前半新相 (77~86 2号周溝墓)

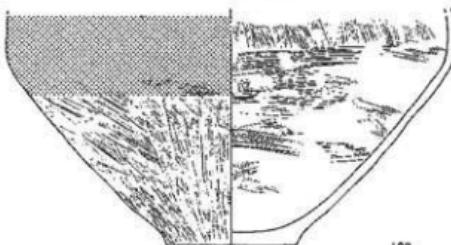


第30図 用防畠B遺跡出土土器 後期前半新相 (87-96 2号周溝墓)

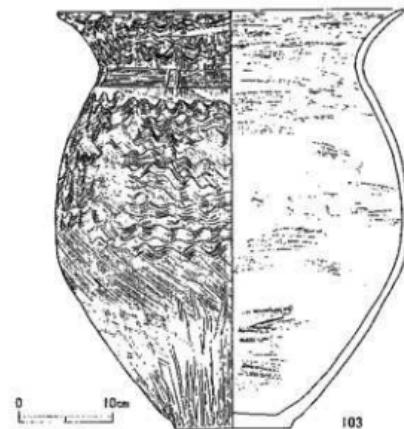
第2節 諸地域の様相



第31図 周防郡B遺跡出土土器 後期前半 (97~101 26号土壤) (叢書)



102



103

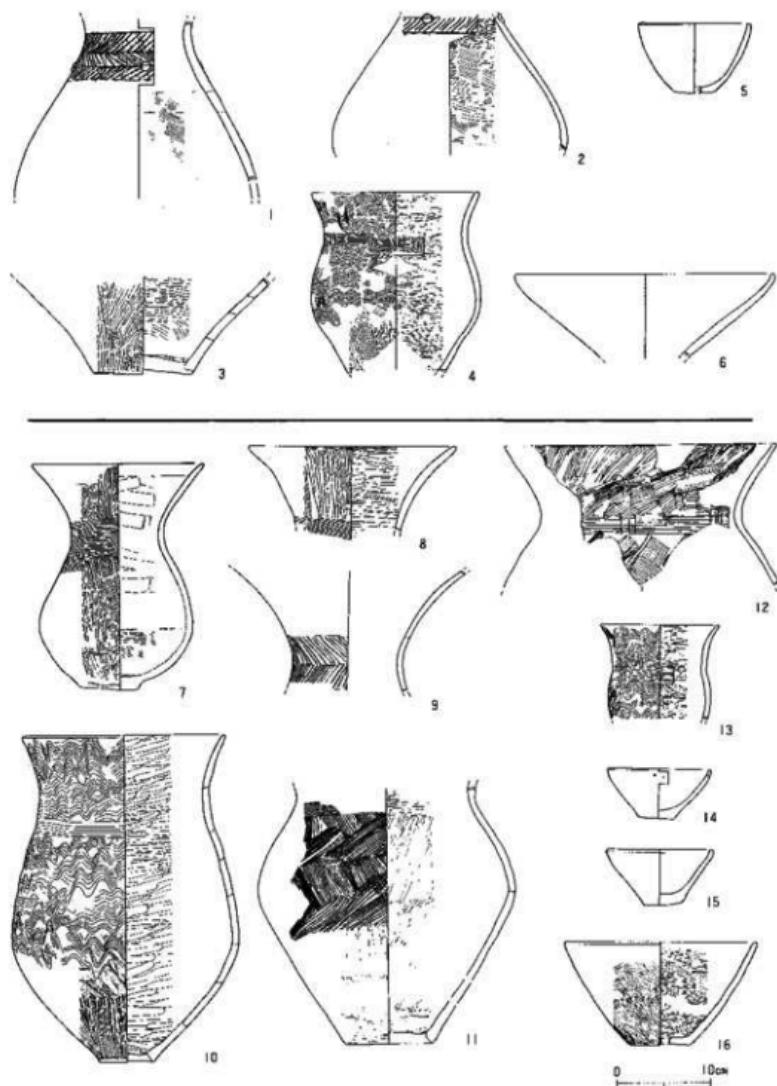
第32図 周防畠B遺跡出土土器 後期前半（102・103 27号土塚（斐桜））

西近津遺跡・森下遺跡

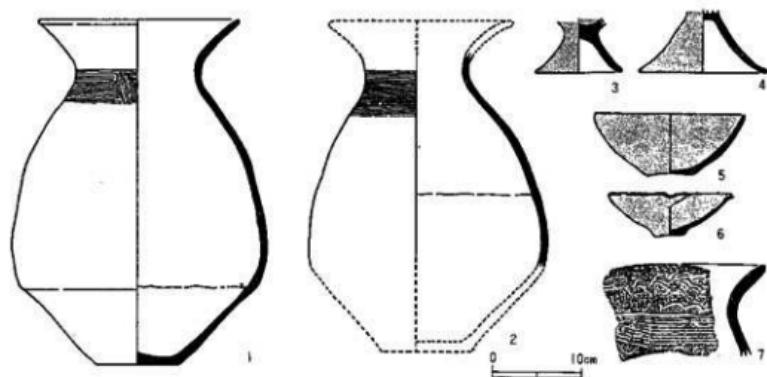
西近津・森下遺跡は佐久市西北端の小諸市境に細長く展開する西近津遺跡群内の北東隅に近接する。北は福玉用水と呼ばれる佐久・小諸市を画する深い大田切、西も浅い田切と谷地形が発達している。西近津遺跡は標高715m内外、そのすぐ下の森下遺跡は700~710m内外である。西近津遺跡は昭和46年発掘調査され、弥生時代後期の住居址1軒、古墳時代後期の住居址3軒が検出された。弥生時代後期の住居址から出土した土器（第34図）は後期終末的な様相を示しており、あるいは古墳時代初頭にまで下がる可能性もある。森下遺跡は昭和63年発掘調査され、弥生時代後期の住居址4軒、古墳時代後期～平安時代の住居址13軒、時期不明の住居址3軒が検出された。弥生時代の住居址は調査区の西側に偏在する傾向があり、標高が高くなる東側には存在しない。弥生集落形成の限界地点の一端をあらわしているものとも考えられ、注目すべき分布状況である。

出土した土器（第33図）の様相は後期前に位置付けられる。

第2節 踏地域の様相



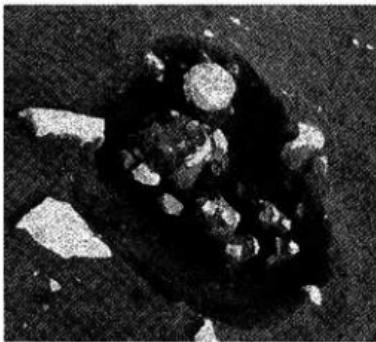
第33図 地下遺跡出土土器 (1 ~ 6 第10号住, 7 ~ 16 第12号住)



第34図 西近津遺跡出土土器（第1号住）

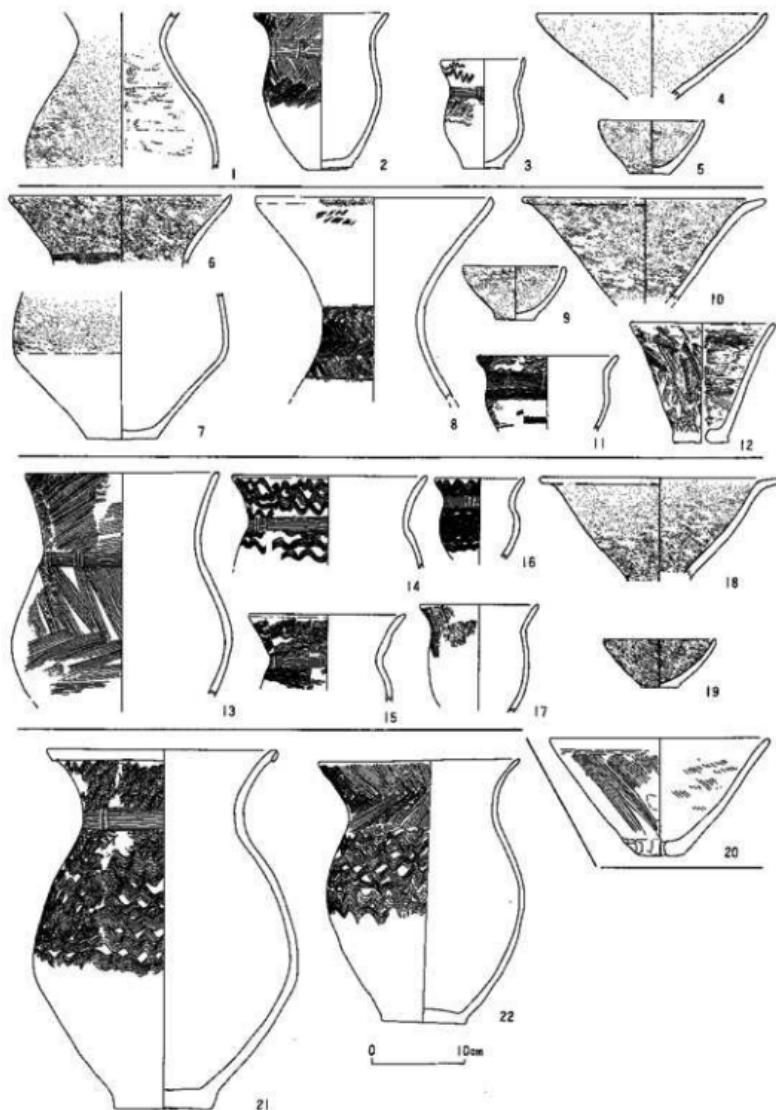
清水田遺跡・葛石遺跡（7A-No.168・169）

両遺跡は東を久保田用水、西を鶴川に浸食された標高700m内外の台地上に存する円正坊遺跡群内にあり、南側には広大な底湿地がひらけている。同遺跡群には神津猛による昭和5年の岩村田駅構内の切り通しに現れた県内最初の弥生時代住居址の発掘地も含まれている。清水田遺跡は昭和54年に発掘調査され、弥生時代後期の住居址10軒の他、古墳時代後期の住居址も検出された。弥生時代住居址から出土した土器様相（第35図）は後期後半以降に位置付けられるが、その中においても若干の時期偏差が認められる。特にY3号住居址の土器は弥生時代終末～古墳時代初頭に位置付けられるものと思われる。葛石遺跡は昭和62年に発掘調査され、円正坊遺跡群の突端部にあたり、南側の底湿地に連なることが判明した。台地部分からは弥生時代後期前半の壺棺墓が検出されたほか、底湿地部分からは弥生後期の純粋な文化層が抽出された。層内に植物遺体が含まれていたためプラントオバール分析した結果、稻料の遺体も含まれており、近隣に稻作の可能性ありとのことであった。



葛石遺跡の壺棺墓

第2節 諸地域の様相



第35図 清水田遺跡出土土器 後期後半古相（1～5 Y 2住、6～12Y 5住、13～19Y 10住）後期後半新相（21・22Y 3住）

上直路遺跡・琵琶坂遺跡 (7A-206)

両遺跡は北を渴川、南を久保田用水に挟まれた細長く展開する枇杷坂遺跡群内の中央部に近接し、上直路遺跡は標高715m内外、琵琶坂遺跡は標高720m内外の地点に位置する。上直路遺跡は昭和60年発掘調査され、弥生時代の住居址1軒が検出された。南北10m、東西7mの佐久地方最大級の規模を有し、東壁中程のベッド状造構に近接する南北推定1.6m、東西1.3mの長方形土坑内から右腕に5点、左腕に10点の銅釧が装着された成人骨が検出された(口絵)。人骨は南頭位で葬られていたようであるが、頭部は後世の搅乱のため、遺存していない遺存している人骨はいずれもそれほど強くない火を受けて小さなひびが生じているため、遺骸を埋めた後、火をかけて儀式が行われたと推定される。土坑底面・遺骸直下には木炭がひかれ、遺骸上には甕3点・高坏1点(第36・37図)がおかれていた。また、住居南壁際にも壺・甕・高坏・鉢・瓶・手捏など完形土器が30個体以上密集して出土している。後期後半に位置づくセットと考えられる。釧は鋳造品で径6cm、幅0.6~0.8cm、厚さ1.6mmを割り、円形を呈する。

琵琶坂遺跡は昭和60年の第5次調査で弥生時代後期の住居址2軒、古墳時代後期の住居址3軒が検出された。後期の住居址出土土器は後期前半に位置付けられる。



上直路遺跡の堅穴住居址を東方から



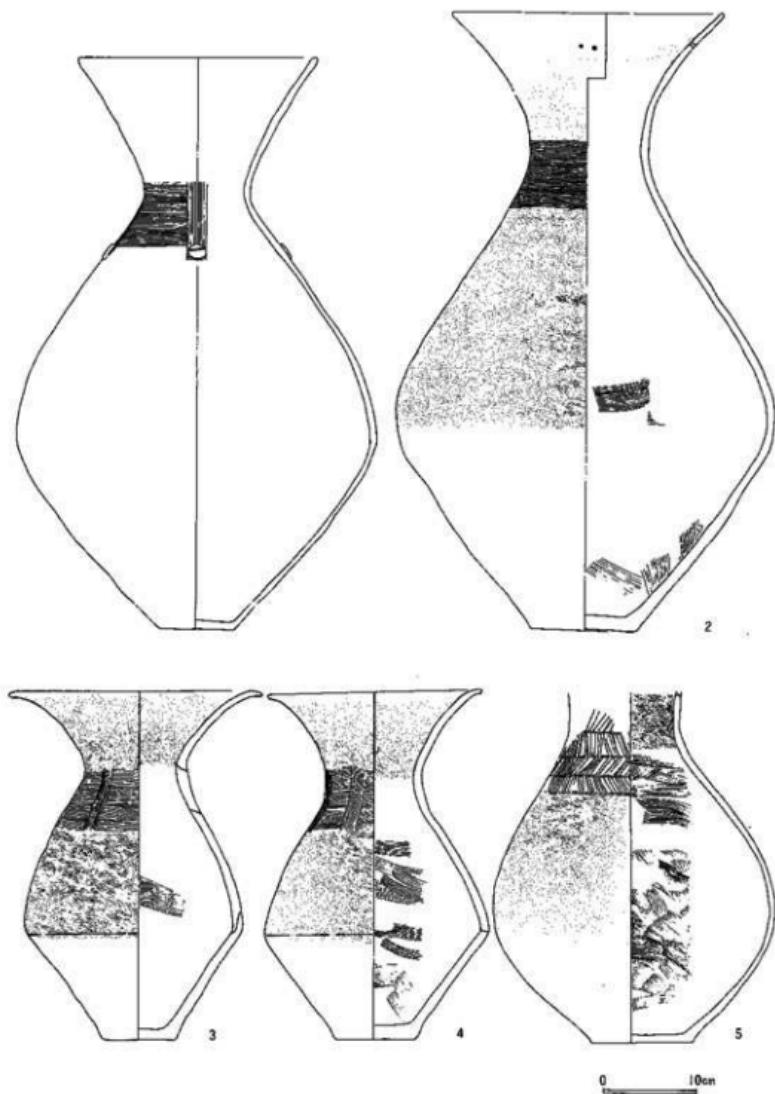
同じく南方から



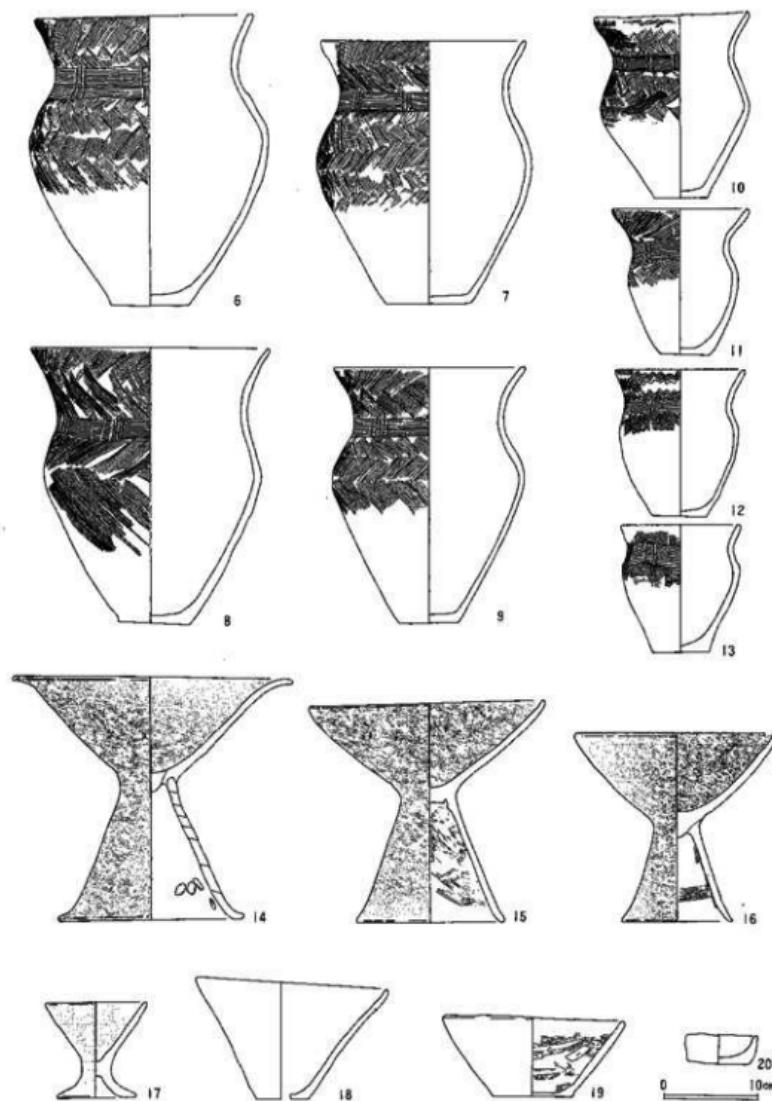
出土した銅釧



第2節 關地域の様相



第36図 上直路遺跡出土土器 後期後半古相 (Y 1号住)



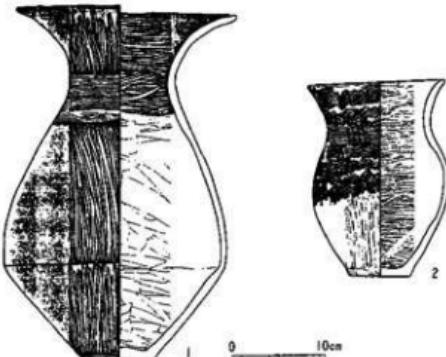
第37図 上直路遺跡出土土器 後期後半古相 (Y1-1号住)

栗毛坂遺跡群 (7A-202)

湯川右岸の第2段丘上にあり西側も蟹沢の田切り地形に削り取られた細長い台地上に立地する。開発の盛んな地域で、長野県埋蔵文化財センターの大規模調査を始め、佐久埋蔵文化財調査センター、佐久市教育委員会でも数箇所の調査が行われているが、標高720m以上

のライン上に立地する遺跡のためか弥生時代の遺構検出は昭和63年に長野県埋蔵文化財センターによって行われた栗毛坂遺跡B地区の竪穴住居址一例しかない。床面に多量の炭化材を残す特異なもので、長軸2.2m強の長方形をなす小型なものであるが、後期末の壺・甕（第38図）などが完形に近いかたちで出土している。

（長野県埋蔵文化財センター年報5より）



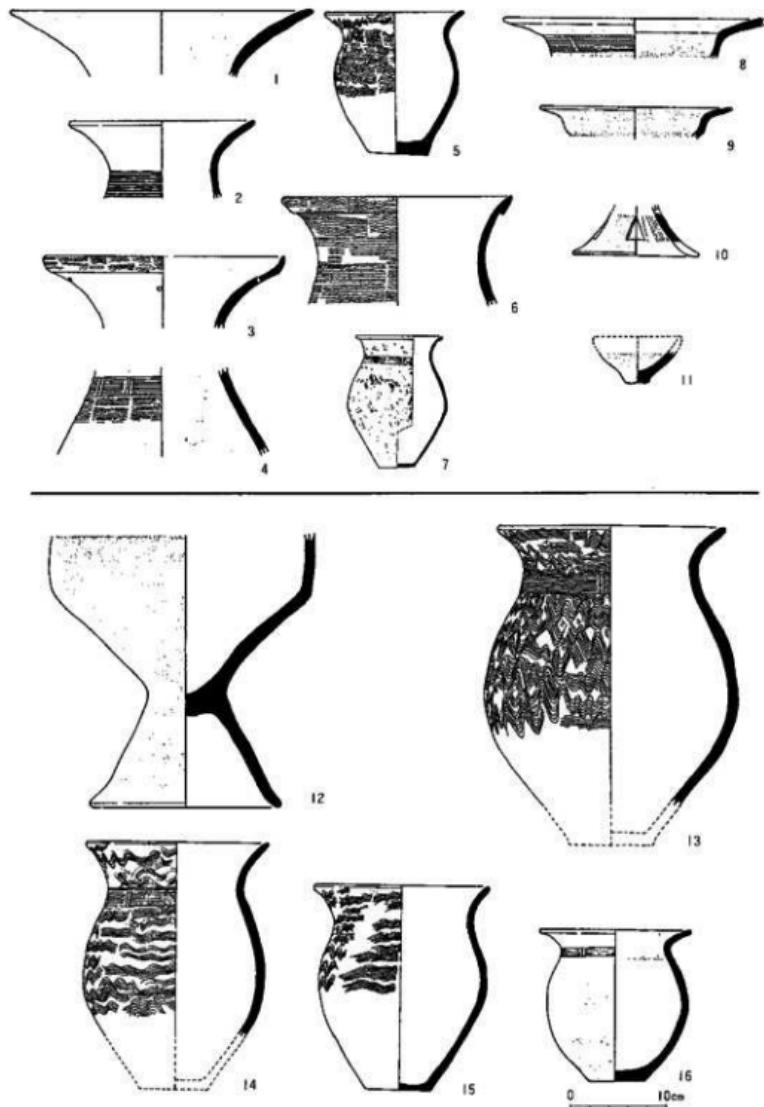
第38図 栗毛坂遺跡B地区 後期後半新居（1・2 159号住）

一本柳遺跡 (7A-157)

湯川右岸の標高695m内外の第2段丘縁辺に展開する。昭和11年（1936）藤森栄一氏が設定した岩村田式の様式資料に含まれ、『北佐久郡の考古学的調査』には当遺跡出土土器の拓影図が掲載されるなど、古くから佐久地方の代表的弥生時代遺跡として知られていた。その後、宅地造成の進行に伴い、昭和43、47年に発掘調査が行われ、古墳・平安時代とともに弥生時代後期の住居址6軒が検出された。長辺7~6m、短辺5m内外の比較的大形住居が多く、主柱穴は4本が基本で、6本のものもみられる。炉は6軒のうち3軒が土器埋設炉である。出土土器は住居址毎に若干の時期偏差が認められるが、後期後半の前葉から末にかけて包括されると思われる。但し、既出資料1はそれよりも前段階に位置付けられよう。

（長野県史 考古資料編 東北信より）

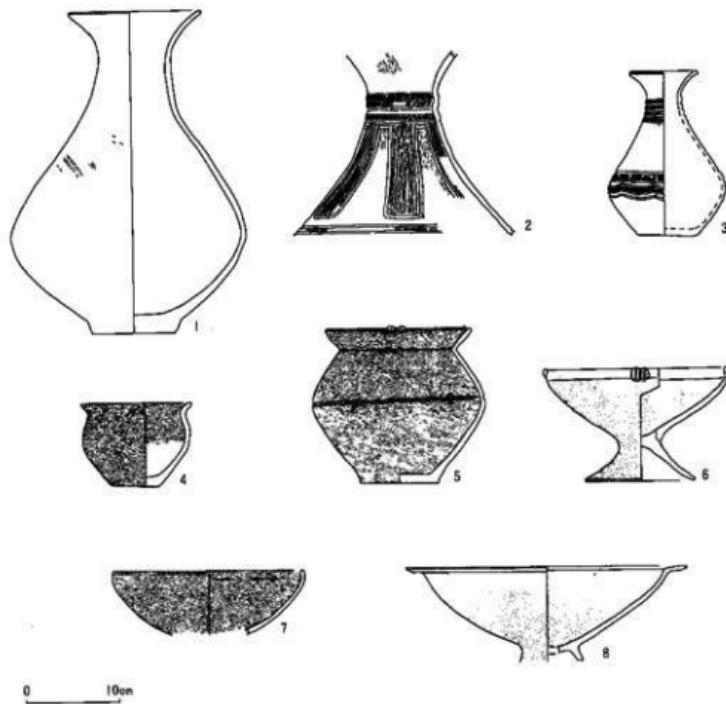
第2章 遺跡の分布



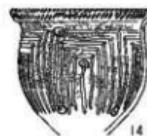
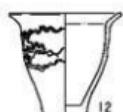
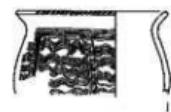
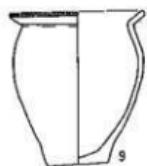
第39図 一本柳遺跡出土土器 後期後半 (1~11Y 1住、12~16Y 3住)

西八日町遺跡 (7A-164)

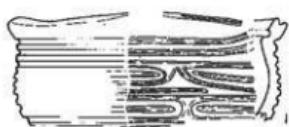
湯川右岸の標高700m内外の第2段丘縁辺に展開する上の城遺跡群内に位置し、一本柳遺跡は西に接する。昭和58年の発掘調査の際、約5,000m²の調査敷地内より、弥生～平安時代の住居址146軒が検出されたことからも推し量れるように、佐久地方古代における集落的一大過密地域である。この際検出された弥生住居址は7軒であるが、後世の住居によって著しい破壊を免れたのは僅か中期後半1軒と後期1軒の計2軒である。中期後半の住居址は焼失したと考えられ、出土土器(第40・41図)は当時の生活具の1セットを具現するに足る器種構成をほぼ網羅している。その様相は中期後半でも古い段階に位置づくとおもわれる。後期の住居址出土土器は後半に位置付けられよう。



第40図 西八日町遺跡出土土器 中期後半中相 (Y7号住)



0 10cm



0 5cm

第41図 西八日町遺跡出土土器 中期後半中相 (Y 7号住)

餅田・西一里塚遺跡 (7A-151・152)

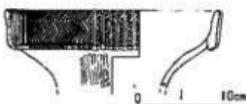
北は湯川、東は常木用水、南は湯川によって画された標高685m内外の第二段丘上にあり、北西の久保遺跡は西方500mに存する。餅田遺跡では昭和9年に土製桔梗車と土製勾玉が出土し、弥生時代後期から平安時代に至る遺跡として周知されていた。佐久平地区園場整備事業に伴い昭和47年に餅田遺跡、昭和48年に西一里塚遺跡が発掘調査された。餅田遺跡からは弥生時代後期以降と考えられる溝3、西一里塚遺跡からは弥生時代後期以降の環濠と考えられる溝とそれに囲まれる後期の住居址群11軒が検出された。餅田遺跡の溝内からは弥生後期の土器群と共にS字甕も出土しており、古墳時代初頭に廃絶されたことも考えられる。また、住居址群は1号住を除き相互に重複しており、前半から後半、更には古墳時代初頭までの相当な時間幅を有していることが想定できる。出土した土器(第43図)の様相もそのことを如実にあらわしていると思われる。また、昭和58年には、南関東系の外来系土器(第42図)も表面採集されている。

腰巻遺跡・高内遺跡 (7A-173)

湯川右岸に点在する標高715m内外の狭隘な第2段丘平坦面に立地する。西側の眼下に展開する比高10m内外の第1段丘面は現在良好な水田面であるが、基盤整備前までは葦等の植物遺体が腐食せずに残っている草泥炭層(俗称やちまぐそ)が厚く、開田にあたっては格別苦労したとの話が残っている。腰巻遺跡は昭和62年発掘調査が行われ、弥生時代終末~古墳時代初頭の住居址1軒、古墳時代後期前半の住居址4軒、平安時代の住居址2軒が検出された。弥生終末~古墳初頭の住居址は焼失しており、出土土器(第44図)は弥生時代から古墳時代の境界線上に位置する問題資料である。高内遺跡は昭和63年に発掘調査が行われ、腰巻遺跡と同様弥生から古墳時代の住居址と土器が1軒検出された。住居址・土器共に栗毛坂遺跡B地区検出例と酷似する。

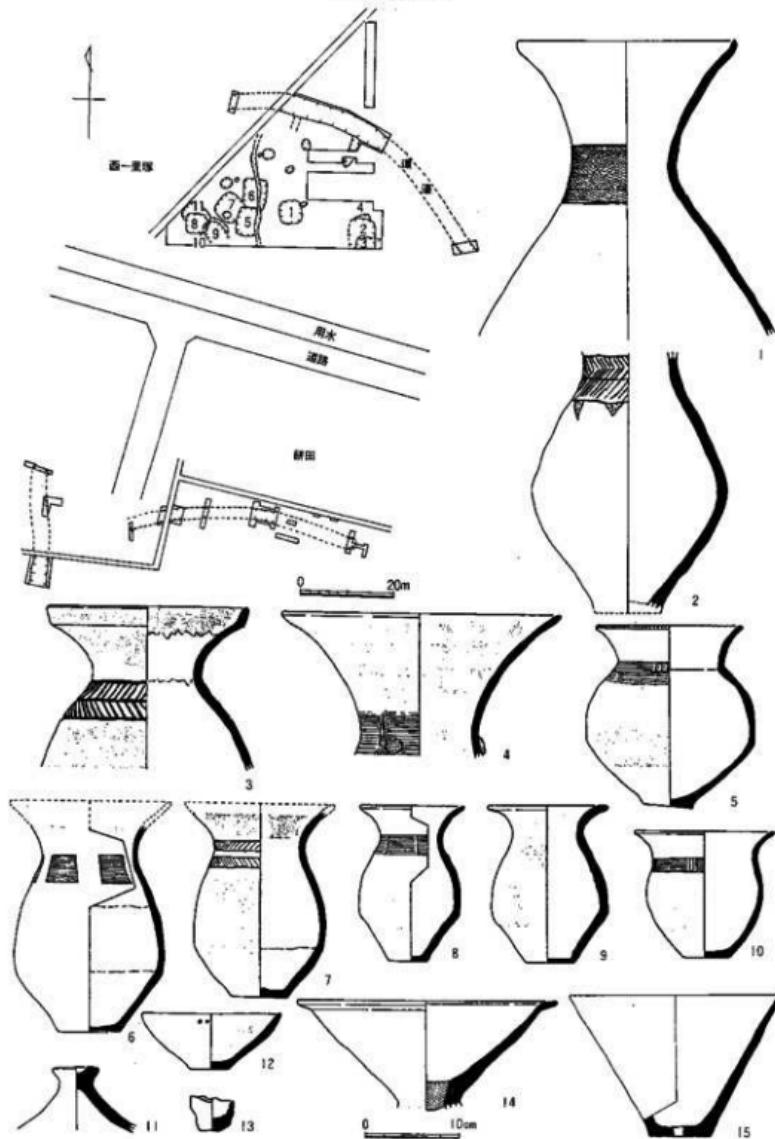
丸山II遺跡 (7B-193)

平尾富士山麓から伸びる尾根の鞍部・標高800~820mの西側斜面の中位に立地する。南北両縁に小起伏がみられ谷地形をなす。弥生時代後期の住居址2軒が検出されたが、ごく限られた個体の土器しか出土しないこと、柱穴・炉を伴わず床も明瞭でないことなど、一般的な住居とは違った使われ方をしていたらしい。かつてない形態の集落である。

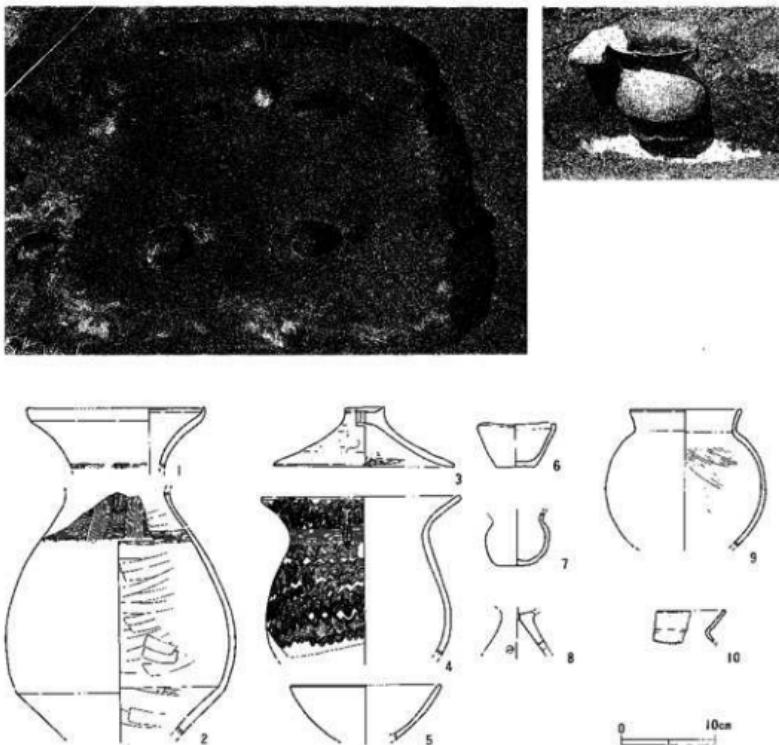


第42図 西一里塚遺跡採集外来系土器

第2章 遺跡の分布



第43図 西一里塚・耕田遺跡造構配置図、出土土器実測図（1～5 西一里塚、6～15耕田）



第44図 屢巻遺跡 6号住居址と出土土器（後期後半新相）

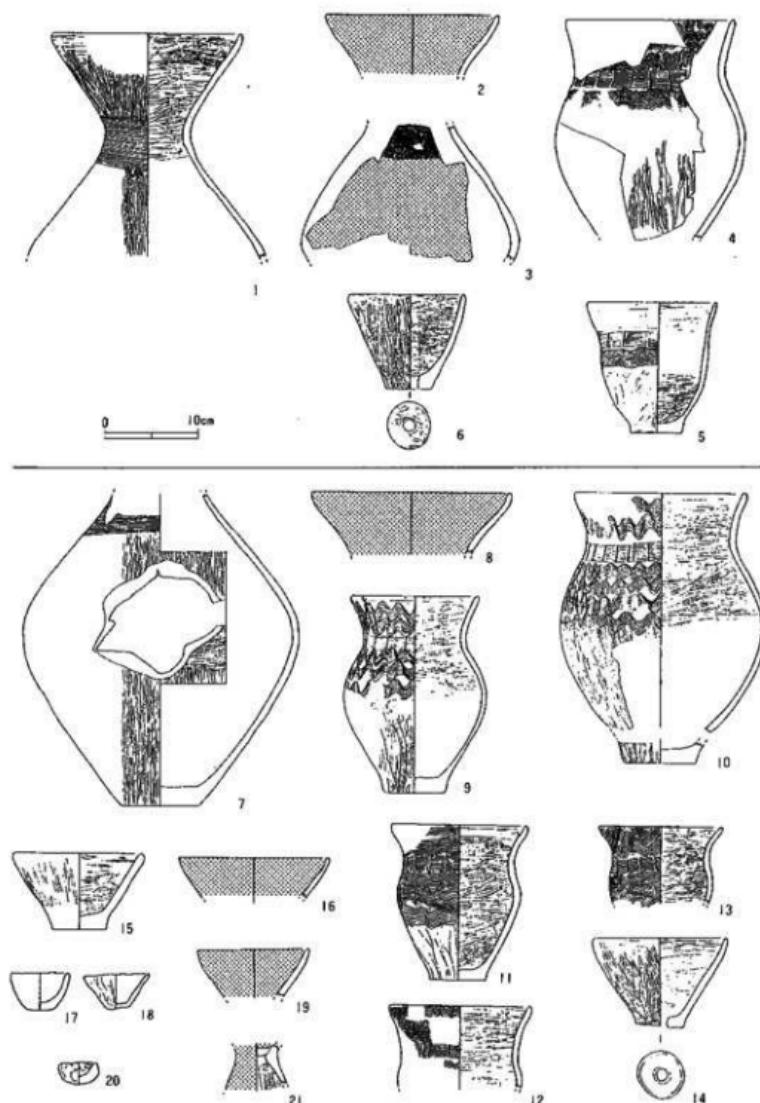
野馬塗遺跡 (7A-113)

湯川左岸の標高695m内外の第2段丘縁辺部にある。周辺は4世紀後半に当たると考えられる良好な古式土師器のセットの検出地もある。

昭和54年の発掘調査により弥生時代後期前半の堅穴住居址2軒が検出された。炉址は2軒ともに石囲い炉である。

出土土器(第45図)は後期前半中相に位置付けられる。

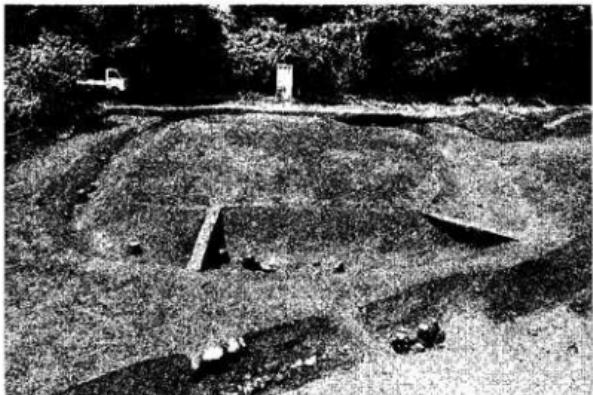
第2章 遺跡の分布



第45図 野馬塚遺跡出土土器 後期前半中相 (1~5 Y1住、7~21 Y2住)

下小平遺跡 (7 A-170)

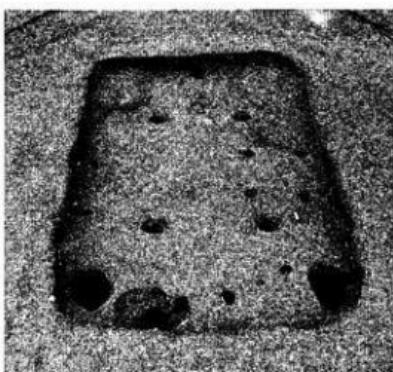
湯川右岸の標高706m内外の台形を呈する狭隘な第2段丘面にあり、東方の腰巻遺跡とは500mの至近距離にある。昭和55年の発掘調査により弥生時代終末の住居址5軒、古墳時代前期の方形周溝墓2基、古墳時代後期の時代1軒が検出された。弥生住居はY2号住居址のようにベッド状造構をもつものもある。出土土器(第46図)は良好な一括資料に恵まれており、箱清水式土器解休期の様相を示すと考えられるが、古墳初頭にまで下がるかもしれない。方形周溝墓の出土土器(第47図)は前期前半に位置付けられると思われる。



下小平遺跡の2号周溝墓

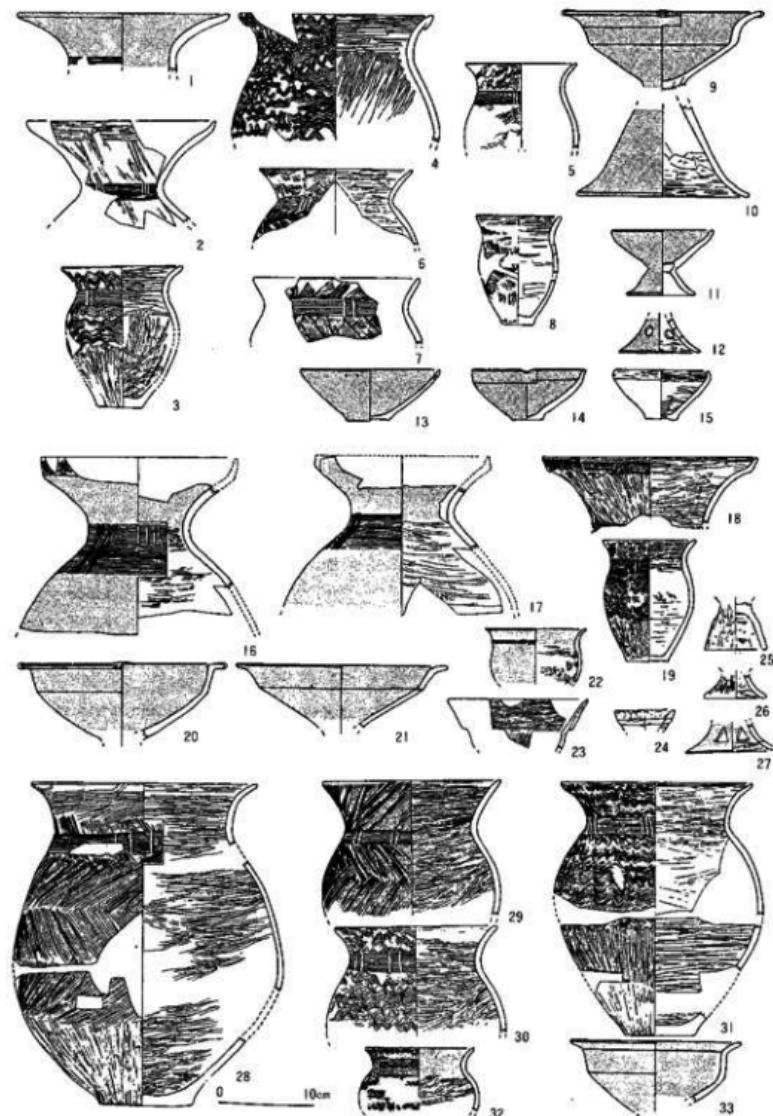


下小平遺跡の1号周溝墓

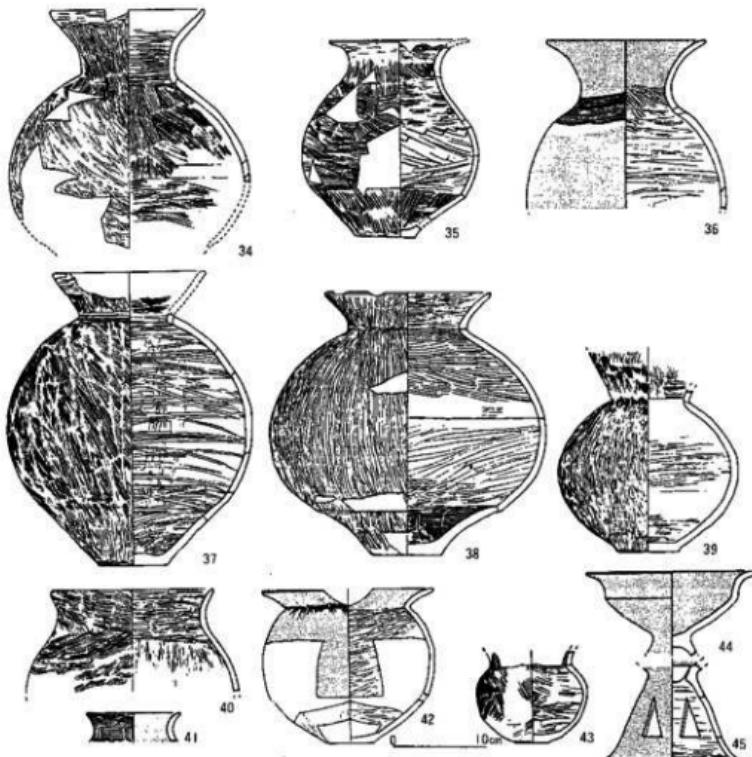


下小平遺跡のベッド状造構をもつ住居址

第2章 遺跡の分布



第46図 下小平遺跡出土土器 後期後半新相 (1~15Y 2住、16~27Y 3住、28~33Y 4住)

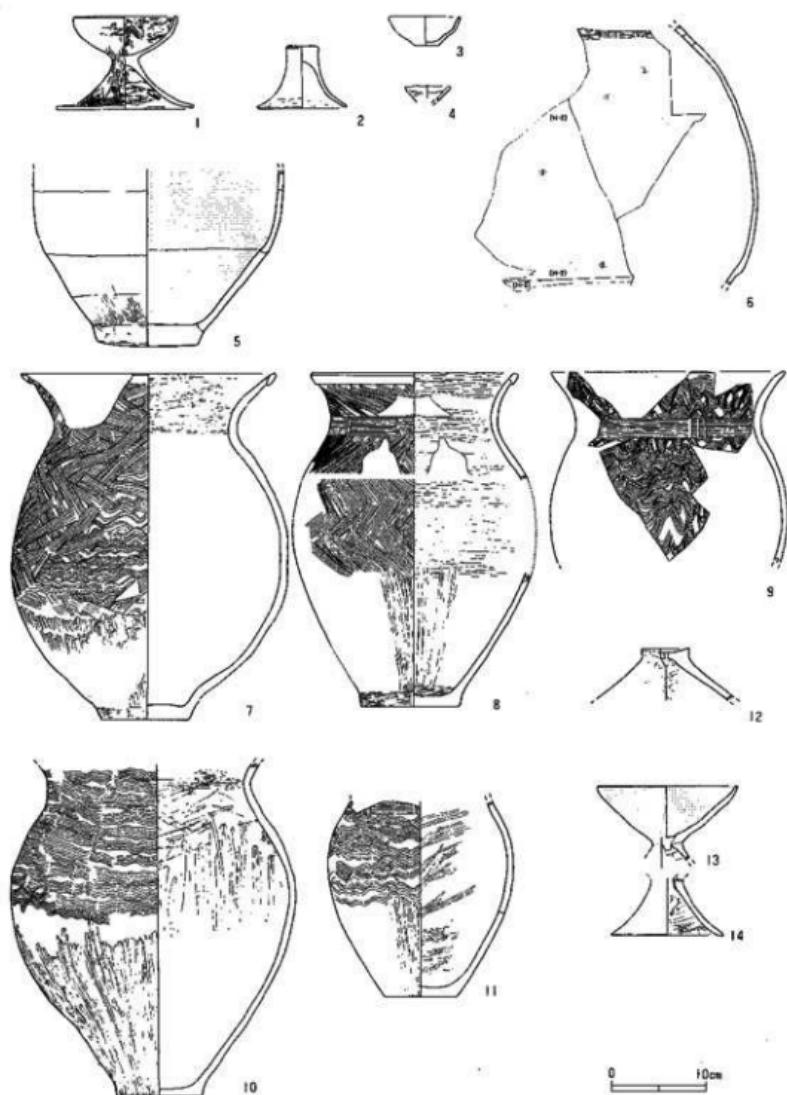


第47図 下小平遺跡出土土器 古墳時代（34～36 1号周溝墓、37～45 2号周溝墓）

池畠遺跡 (7B-192)

湯川右岸の第3段丘面は左岸と同じく浅間山を起点として放射状に発達する幾筋もの田切の谷地形によって細長く刻まれている。筒畠遺跡群もその中の1つの台地上にあり、西側は現在の平尾用水、東側も浅い谷地形が走っている。池畠遺跡は同遺跡群の中央、標高710m内外の平坦地に位置している。昭和60年の発掘調査によって弥生終末～古墳時代初頭の住居址2軒が検出された。出土土器(第48図)は箱清水系の土器と共に当時佐久地方初見の東海系小型高杯が出土し、注目を集めた。

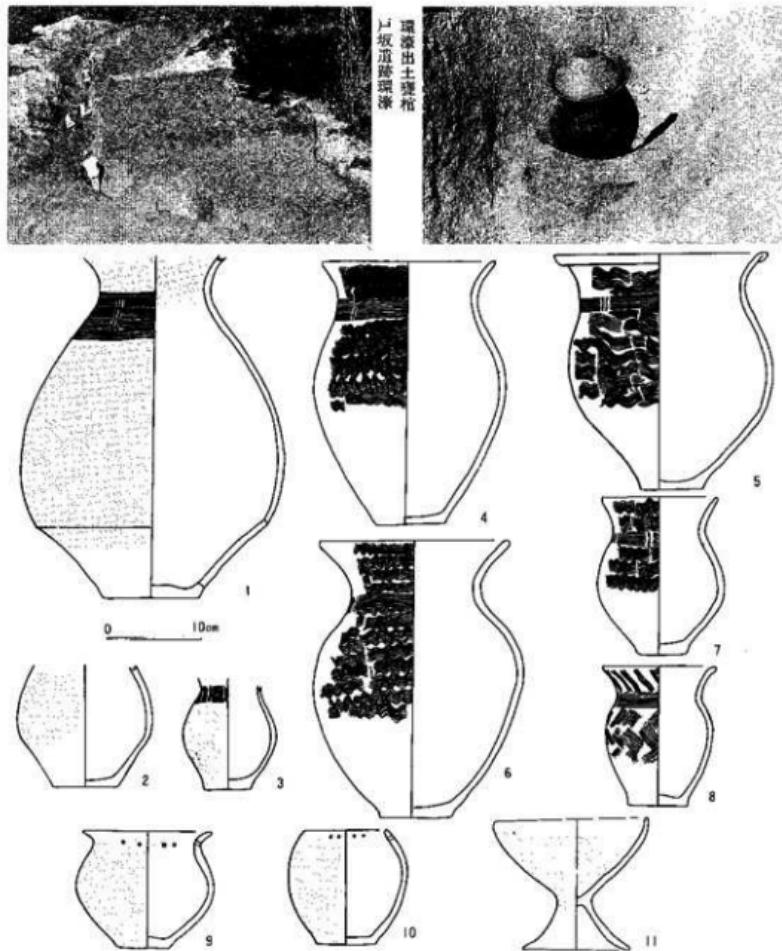
第2章 遺跡の分布



第48図 池畠遺跡出土土器 後期後半新相（1～5 1号住、6～14 2号住）

戸板遺跡 (7B-189)

西側を田切地形（現在の平尾用水）の流水、南側を香坂川によって浸食されて形成された比高19m、標高705m内外の断崖上平坦地に立地する。昭和59年の発掘調査により、弥生時代後期の環濠と考えられる検出長約40m、幅2m内外の弧状を描く溝が検出された。出土遺物（第49図）も豊富で後期後半に位置付けられる。



第49図 戸板遺跡出土土器 後期後半新相（環濠）

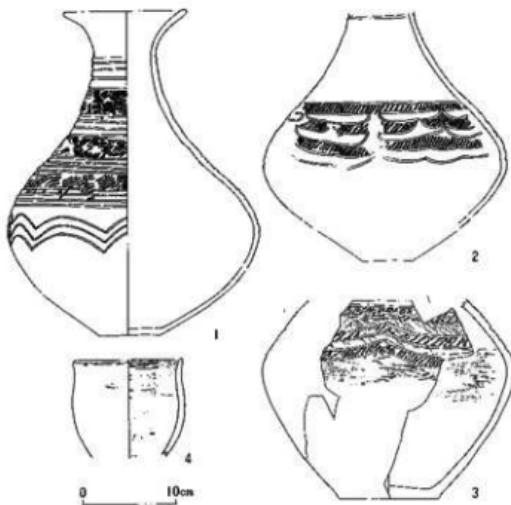
和田上南遺跡 (5A-110)

和田上遺跡群は志賀川右岸の標高698m内外の第2段丘上に立地する。東側に向かって舌状に張り出した台地の中央部には和田上古墳があり、その墳丘上には坪井正五郎の碑文が刻まれた大碑が建立されるなど、古くから縄文・弥生の石器・土器が豊富に採集される遺跡として著名である。

昭和54年遺跡群の南部和田上南遺跡が発掘調査され、弥生時代中期後半の住居址

5軒が検出された。相互の重複関係がないため、同一

時期の集落とも考えられるが判然としない。出土した土器様相（第50図）は中期後半でも古段階に位置付け得ると思われ、円形の住居プランが存在することもこの考えを補強するものと言える。



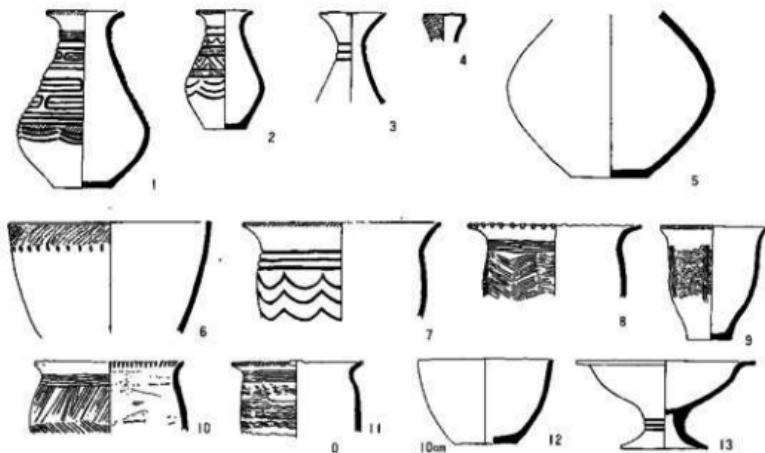
第50図 和田上南遺跡出土土器 中期後半古相 (Y 5号住居址)

深堀遺跡 (5A-No105)

志賀川と滑津川の合流点に近い右岸の第2段丘上・標高670~688mの平坦面にあり、昭和40年の遺跡群の南側先端部の発掘調査により、弥生時代中期後半の住居址2軒が検出された。出土した土器様相（第51図）は佐久地方中期後半で最古段階に位置付けられるものである。

梨の木遺跡 (5A-No107)

深堀遺跡群の西側に接する、中原遺跡群内にあり、標高680m内外を測る。昭和62年の発掘調査により、遺構は不明確であるものの、弥生時代中期後半以前の土器が検出された。



第51図 深堀遺跡出土土器 中期後半古相（住居址）

滑津川流域

志賀川左岸・滑津川・田子川流域は、上記の浅間山追分第一軽石流が被覆する湯川・濁川・志賀川右岸地域とは地質構成が全く異なる。即ち、各流域末端部には氾濫によって形成された扇状地が広がっており、基盤となる土質は強粘土である。この扇状地上を中心として弥生集落が展開する。調査されたのは樋村遺跡・上の台遺跡だけで実態は不明瞭であるが、滑津川対岸の平賀中屋敷遺跡等にも比較的大きな集落が展開された可能性はある。このほかに滑津川をさかのぼって群馬県境に近付くと、下仁田町に近い内山峠沿いの標高950mの初谷遺跡で弥生後期土器が検出されたほか、大河原峠に近い標高1,100mの館ヶ沢B遺跡でS字甕が発見された。

樋村遺跡・上の台遺跡 (5A-No102・103)

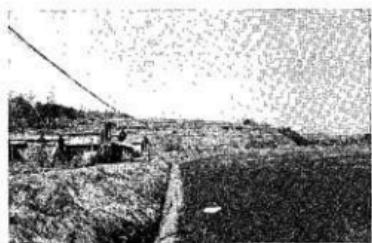
北に志賀川、南に滑津川が西流する合流点に挟まれた標高673～690mの氾濫冲積微高地に立地する。昭和57、58年の発掘調査により、上の台遺跡から弥生時代後期前半の住居址2軒、樋村遺跡から中期後半5軒、後期前半17軒の住居址が検出された。この弥生集落は微高地先端部に占地しており、同じ遺跡からその奥に展開する300軒を越える古墳時代後期の集落とは占地状況が異なる。出土土器は、中期後半は佐久地方最新段階、後期は前半でも古段階の様相を示す。



福村遺跡の弥生集落

佐久市南部＝千曲川左岸地域

地形構成上、浅間火山の影響力が大きい北部地域とは対象的に八ヶ岳・蓼科山地とのかかわりが強い。千曲川左岸沿いに氾濫によって形成された広大に展開される沖積平野は、現在佐久平で最も肥沃な穀倉地帯であるが、弥生時代においては開拓が進行していなかったためか、遺跡の発見例は少ない。濃厚な遺跡分布を示す地域は、沖積平野西部の千曲川にはば平行に流れる片貝川流域から一段上がった八ヶ岳・蓼科山塊末端部の裾野にあたる幾筋もの小河川に細長く仕切られた標高670～690mの丘陵地帯である。西裏・北裏遺跡群、後沢遺跡などの拠点集落のほか、舞台場遺跡などがある。



片貝川より後沢遺跡周辺の丘陵地帯をのぞむ。



後沢遺跡背後より浅間山をのぞむ。

後沢遺跡 (5A-No82)

北上する県道相浜～本町線沿いに、小宮山の家並みが途切れた西側の舌状台地上の一体を占め、標高700m内外、片貝川との比高40mを測る。遺跡は300×60mの台地上全体に広がり、更に南に接する緩斜面に続くものと思われる。付近の同じような台地には縄文～平安時代の遺跡が、更に低位の沖積地には大門下遺跡がある。本遺跡は古くから佐久地方の代表的弥生遺跡として知られ、昭和3年に八幡一郎氏が12個体の壺・甕を紹介し、後沢相として1型式を設定している。また、昭和31年桐原健氏は後期箱清水式土器を出土する標準遺跡としてあげている。昭和51～52年にかけて発掘調査が実施され、弥生時代中期後半の住居址3軒、後期の住居址32軒、後期の方形周溝墓3基とともに縄文時代前期前半6軒、中期後半3軒、平安時代の住居址9軒が検出された。弥生時代の住居址は、台地中央より基部にかけて濃密に分布しており、南側に開く馬蹄形状を呈する集落としてとらえられる。また、方形周溝墓は台地基部に配される。後期のY24号住居址を中心とした住居址から出土した土器（第52図）はほとんどが後期後半に位置付けられる。



後沢遺跡の全景



後沢遺跡の方形周溝墓

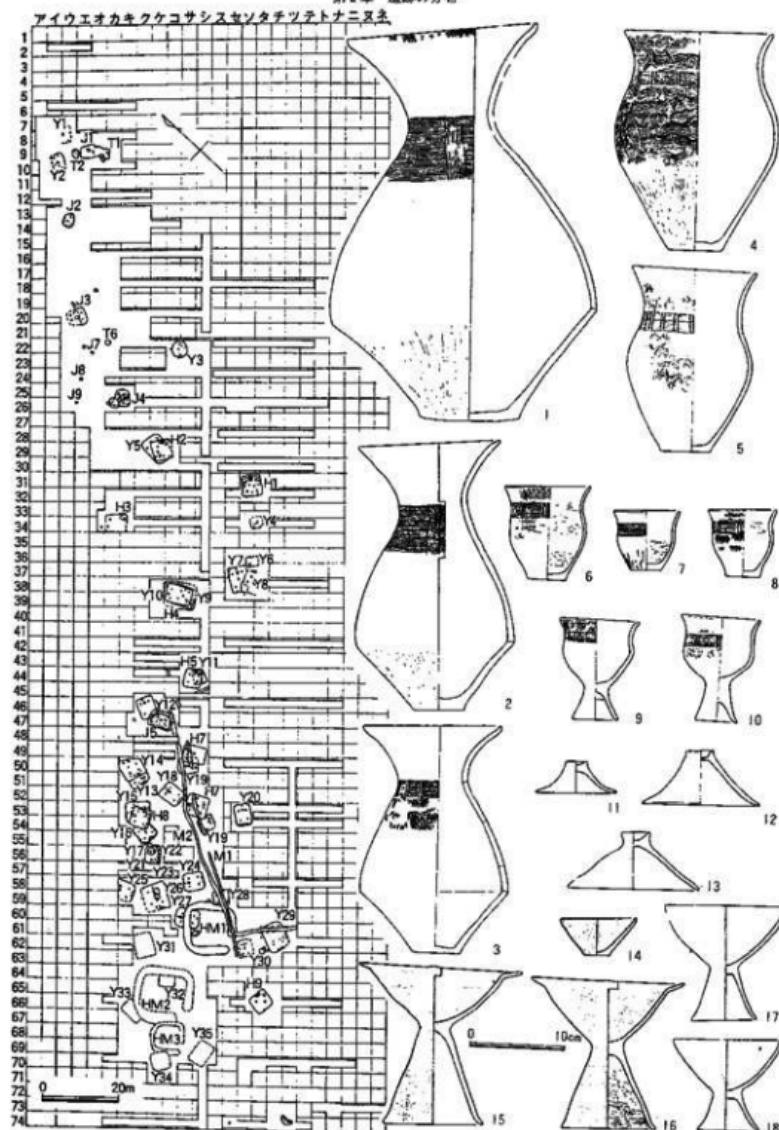


後期弥生土器がたくさん出土したY24号住居址



同左

第2章 遺跡の分布



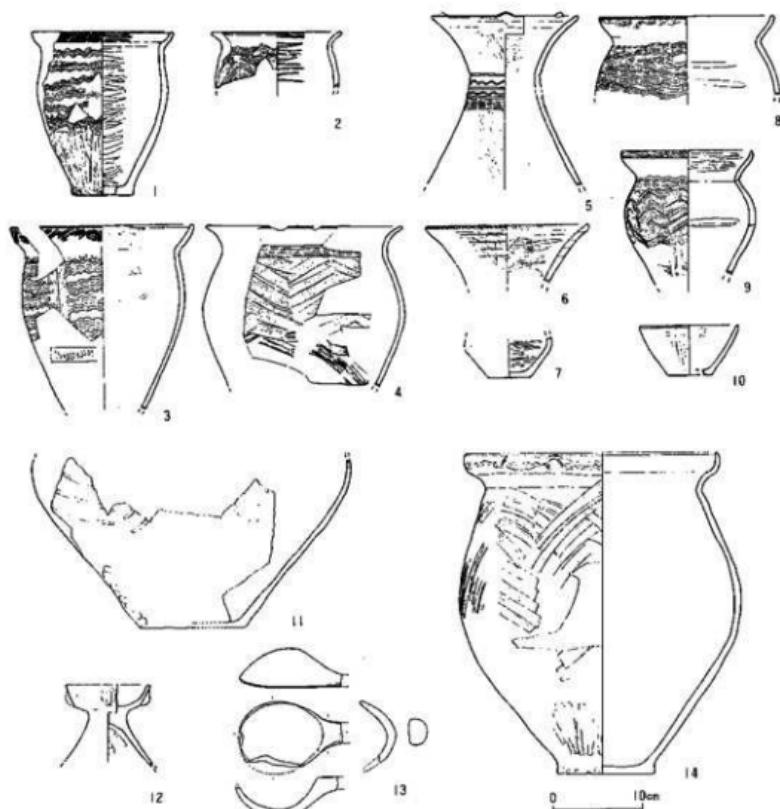
第52図 後沢遺跡の遺構配置 (Jは構文、Yは弥生、IIは平安、HMは方形周溝墓、Tは特殊遺構)
Y24号住居址出土土器

西裏・竹田峯遺跡 (5A-No87)

東側は片貝川、西側は中沢川に浸食された小尾根上の丘陵突端部に展開する西裏遺跡群内にあり、標高660～670m、眼下の水田面との比高15m内外を測る。同様な内容を有する北裏遺跡群は東に接する。昭和60年の調査により弥生時代中期後半の住居址9軒、後期5軒、中期か後期か判然としない住居址7軒、弥生後期末の壺

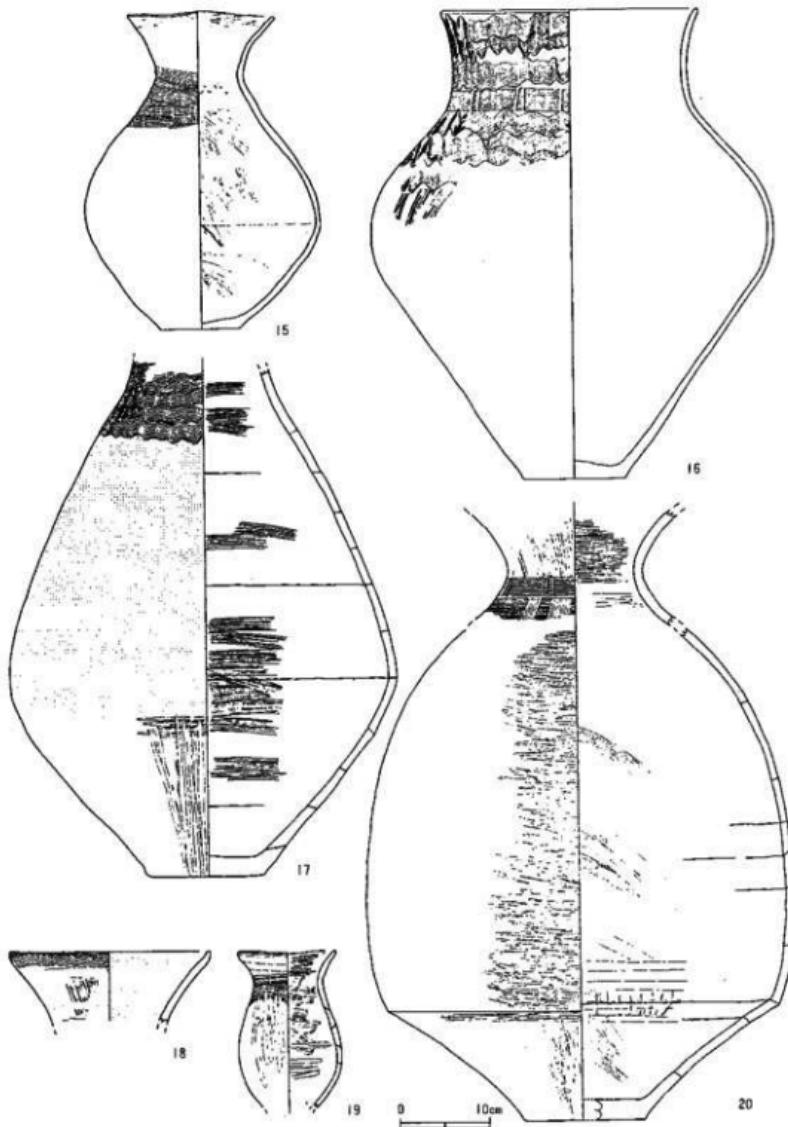


竹田峯遺跡の壺棺 骨が出土した。



第53図 西裏・竹田峯遺跡出土土器 中期後半新相 (1・2西6住、3・4竹3住、5～11西18住、11・12竹2住、13竹4住、14西M3P1-4)

第2章 遺跡の分布



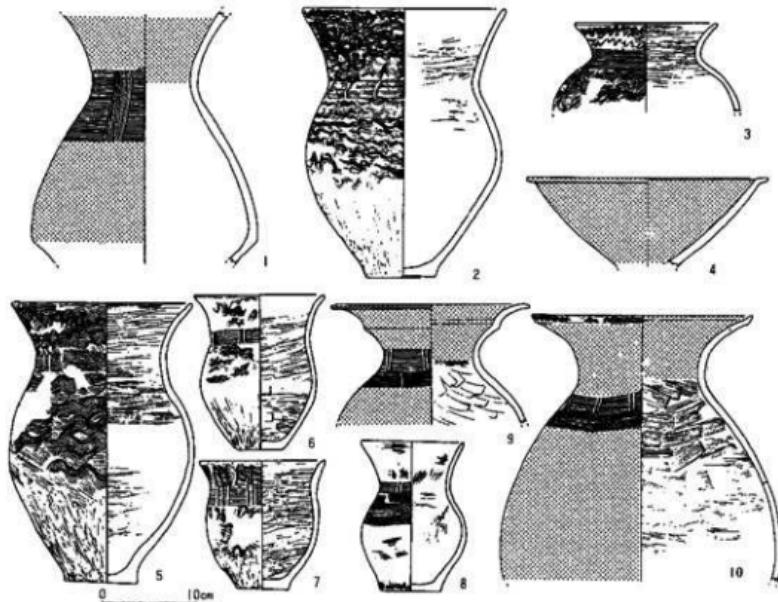
第54図 西表・竹田峯遺跡出土土器 後期 (15・16竹 1住、17~19内 3住、20竹 T 1)

棺墓1基の他、古墳時代前・中期の住居址3軒、奈良・平安時代の住居址2軒が検出された。台地を南北に縦貫する幅僅か6mの調査であったが、調査によって台地の全域にわたって弥生集落及びそれに対応する墓域が展開することが予測できる。住居址出土土器は、中期後半は末期的(第53図)、後期は前半的(第54図)様相がみられるが、住居址以外の遺物には後期後半・終末期的様相(第54図20)がみられるものもある。

このほかに注目される遺構として6カ月の胎児骨が検出された弥生時代後期後半と考えられる壺棺墓がある。

舞台場遺跡 (5A-No93)

東立科付近から流出した千曲川に合流する宮川が形成した標高646m内外の段丘上に立地する。現河床との比高は4m程である。昭和56年に遺跡が立地するところの大部分の発掘調査が行われ、弥生時代後期の住居址13軒が検出された。集落規模としてはやや小さく、周辺的集落と考えられる。出土した土器様相(第55図)は後期後半から終末に位置付けられる。



第55図 舞台場遺跡出土土器 後期後半以降 (1~4 Y 6住、5~8 Y 8住、9 Y 3住、10M 1)

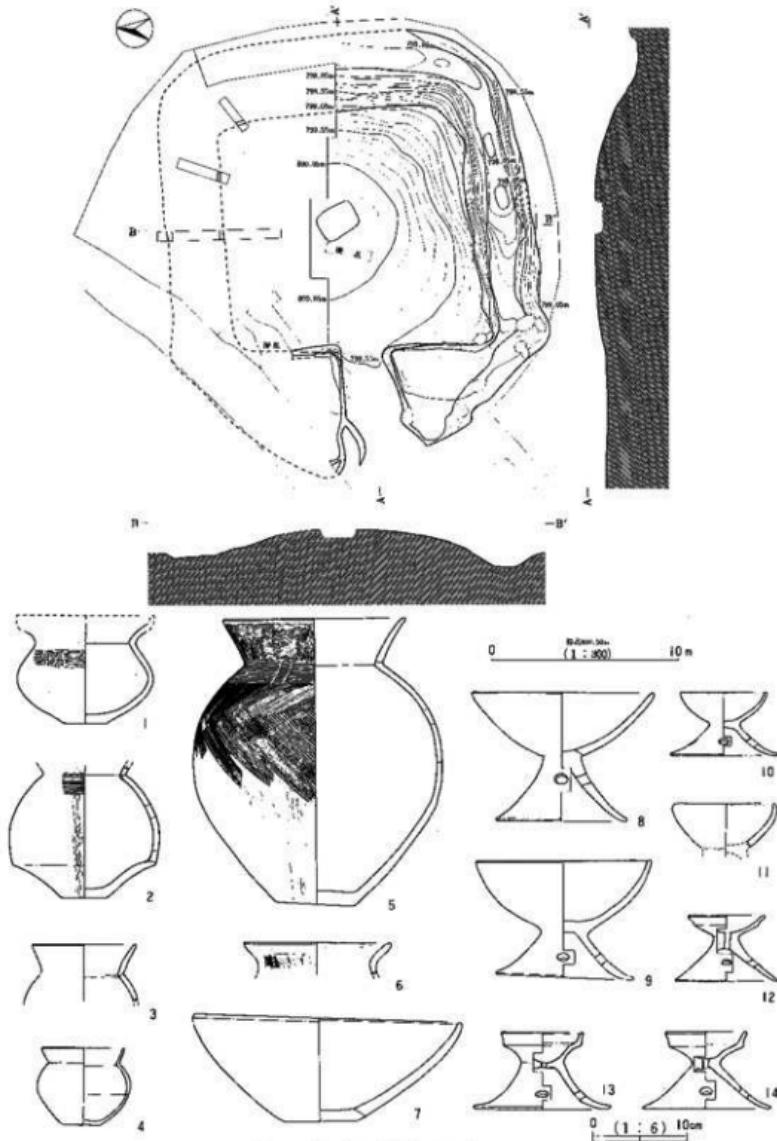
瀧の峯2号墳 (4B-No91)

佐久市根岸地籍に所在し、付近の地形は蓼科山から佐久平にかけて放射状に山麓が伸びており、その一つが平井部落に突出するような尾根地形となっている。瀧の峯1～4号墳は、この尾根が緩やかに傾斜する標高800m内外の平坦部に20～30mの近接した距離に群在しており、眼下を流れる宮川との比高は150mを測る。1～4号墳から北東へ300mの尾根先端部には瀧の峯5号墳が存在しており、標高764m、1～4号墳との比高約36mを測る。現在は雑木林に覆われて見通しは良くないが、墳墓築造時においては眼下の岸野地区、北方に広がる佐久平を一望できる絶好の場所である。瀧の峯1号墳からは昭和49年に炭焼き作業の際に鉄剣とやりがんな状の鉄製品が出土し、佐久地方における初見の前方後円墳ではないかと注目されたことがある。その後、地形測量が行われ、前方後円墳でないことが判明したが、佐久地方最古の古墳の一つであろうと位置付けられた。そこで、昭和61年佐久市志総纂事業の一環として、従来、佐久地方において実体のつかめなかった4・5世紀の古墳を明らかにする目的で、佐久市志刊行会を中心として1・2号墳の地形測量、墳丘形態、及び主体部の確認、5号墳の地形測量調査が実施された。その結果1・2号墳共に前方後方形を呈する墳墓であることがあきらかとなった。墳丘規模は1号墳で長さ13.5m、幅10.5m、高さ1.3m、2号墳で全長18.3m、主丘部の長さ12.6m、幅13.0m、高さ1.3m、括れ部からの高さ0.6mを測る。2号墳には後方部の中央より南北185cm、東西135cmの木棺直葬が想定される長方形墓壙が存在し、内部から成人女性の歯が検出されたため、女王墓であることが確実となった。周溝内からは豊富な土器（第56図）が出土しており、清水式土器的様相は残るもの、古墳時代的要素が濃厚である。



瀧の峯2号墳全景

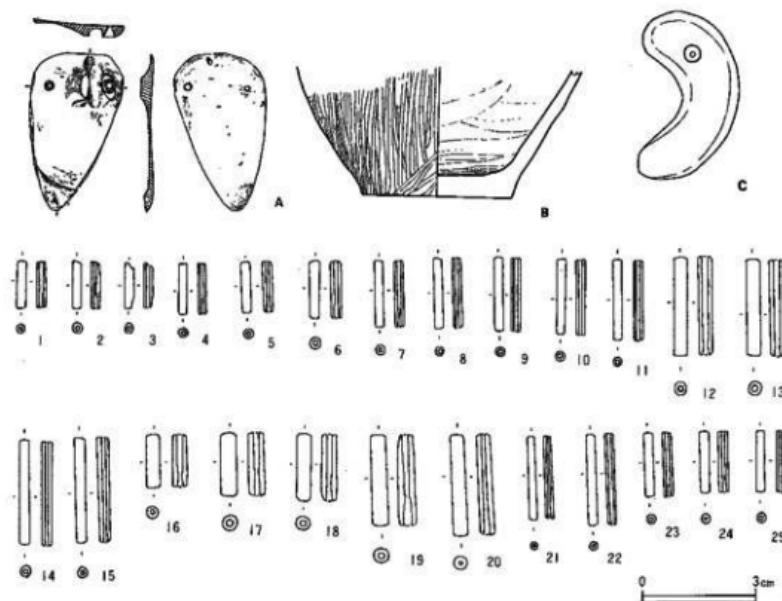
第2章 調査地域の様相



第56図 瀧の峯2号墳尖削図と出土土器

社宮司遺跡 (5A-No71)

千曲川左岸沿いの標高682m内外の沖積微高地に立地する。昭和27年ごぼう掘りの際に弥生土器底部片、硬玉製勾玉1、碧玉製管玉10、鐵石英製管玉15、板状鉄斧1、白銅製ペンダント1が偶然発見された。勾玉は長さ4.6cm、ペンダントは朝鮮製多紐細文鏡へんを再加工したもので長さ4.2cm、幅2.9cmを測る。昭和60年に遺構確認学術調査が実施されたが、関連遺構は発見されなかつた。



第57図 社宮司遺跡出土白銅製ペンダント(A)、土器(B)、硬玉製勾玉(C)、鐵石英製管玉(1~15)、碧玉製管玉(16~25)

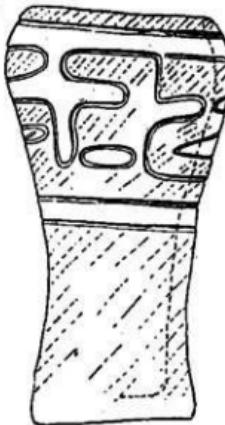
管玉計測値 (単位: cm)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
全長	1.3	1.3	1.2	1.4	1.4	1.54	1.78	1.89	1.98	2.0	2.14	2.62	2.57	2.8	2.8	1.45	1.7	1.8	2.4	2.7	2.25	2.42	1.71	1.65	1.62
長径	2.1	2.5	2.2	2.5	2.5	2.9	2.2	2.1	2.2	2.2	2.0	3.0	3.3	2.8	2.6	3.0	4.0	3.5	4.0	3.5	1.9	2.7	2.3	2.2	2.3
石材	鐵石英													碧玉											

町田遺跡 (? - Na218)

八幡一郎氏『南佐久郡の考古学的調査』によれば「櫻井村町田四十八塚附近の水田中より、明治二十二年頃出土せるが……」とあるが、現在正確な出土地は不明である。ただし、通常弥生遺跡の希薄な千曲川左岸沿いの沖積地に立地していたことは確実である。ここから出土した筒形土器 2 点（第58図）は底に布压痕があり、戦前に八幡氏が弥生時代に布がある証拠として注目された有名な土器である。弥生時代中期中葉かあるいは前半にまでさかのばるかもしれない。

櫻井村町田発見土器(1・2)
1・人類學教室
2・佐藤課太郎



月明沢遺跡（洞原遺跡） (? - Na215)

片貝川西侧、蓼科山麓末端の標高730~750mの丘陵上の岩陰に立地する。昭和59年佐久市遺跡詳細分布調査に際して洞原遺跡と改名された。1965年地元中学生による人骨発見の後、地元有志によって10数体分の人骨、土器、石斧、鹿角等が採集された。その後、西沢寿晃、小松慶氏によって1971年発掘調査が行われ、初期弥生土器と共に成人4体、幼児1体分の人骨、人歯牙を加工した装飾品などが出土した。出土土器は弥生時代前期から中期初頭に位置付けられる。

第58図 町田遺跡出土土器
(『南佐久郡の考古学的調査』より)

(5) 立科町・望月町・浅科村・北御牧村

立科町・望月町・浅科村・北御牧村は、佐久地方でも千曲川の左岸に位置し、また、千曲川の西方に位置するところから川西地方と呼んでいる。しかし、厳密に見れば浅科村と北御牧村は、村内をわけて千曲川が流れおり左岸と右岸に分離されるが、これらの状況を踏まえたうえで千曲川を境に西域を川西地方（川西地区）としている。

千曲川の右岸は、浅間火山の活動による形成層と小河川による浸食作用によって扇状地上の地形や段丘面が形成され、合わせて平坦面や湿地もかなり発達させているのにたいし、左岸は蓼科火山の活動により立科町、望月町、浅科村の北部にまで延びる雄大な裾野が広がり、また、蓼科山から流れる河川によって狭長な深い谷や小規模な段丘を形成している。右岸に比べれば平坦面は少なく、日照時間も少ないなど、自然的条件からみればかなりの相違が見られる。遺跡の在り方をみても、奈良時代から平安時代以降においては分布や規模の相違はあるにしても、佐久地区全般においてほぼ同様の発展段階を見ることができるが、それ以前の、特に縄文時代から古墳時代末葉の遺跡の分布や各期の様子、内容などかなり大きな差異が認められ、中でも弥生時代の遺跡の在り方は極めて顕著である。これらは、地形や気候、水利など自然的条件に大きく左右されていると思われるが、川西地方のそれぞれの様子を記述し、弥生時代遺跡の様相を見ることにする。

立科町の弥生時代の遺跡

立科町は川西地方の中でも最も西方に位置し、南は蓼科山の頂上から白樺湖の一部、女神湖（赤沼池）を含む北斜面の一帯、東側は望月町、北は北御牧村と隣接している。西側は小県郡内を流れる依田川によって形成された谷地形により長門町、武石村、丸子町と接している。地形は全般に蓼科山から続く傾斜地であり、古町付近でやや平坦になるが、虎御前から北方は八重原台地へと連なり、北御牧村へと続く。女神湖や山麓の涌水を集めて流れる芦田川は、下流に至って望月町から流れる鹿曲川と北御牧村畔田で合流している。また、笠取峠方面や平地部の水を集めて流れる番屋川は北御牧村の切久保付近において鹿曲川と合流している。全体に北方に傾斜した地形をなしており、また、水利が必ずしも良いとは言えず、水田耕作を中心とした農業生産力は余り期待出来なかったものと思われる。

江戸時代には、六川長三郎が蓼科山頂近くの樽ヶ沢で、大門川の水を分流し、約50kmの水路を3年掛かりで天保3年（1646）に完成させた。これを塩沢堰と呼び三都和を中心に新田開発を行

ったが、これらの用水が設置されたことにより水田耕作が可能となった。沖積平野が極めて少なく水利が悪かったことを考えれば、弥生時代の生活や生産は、余り盛んでなかったことが理解でき、従って、遺跡数も少ないので当然である。

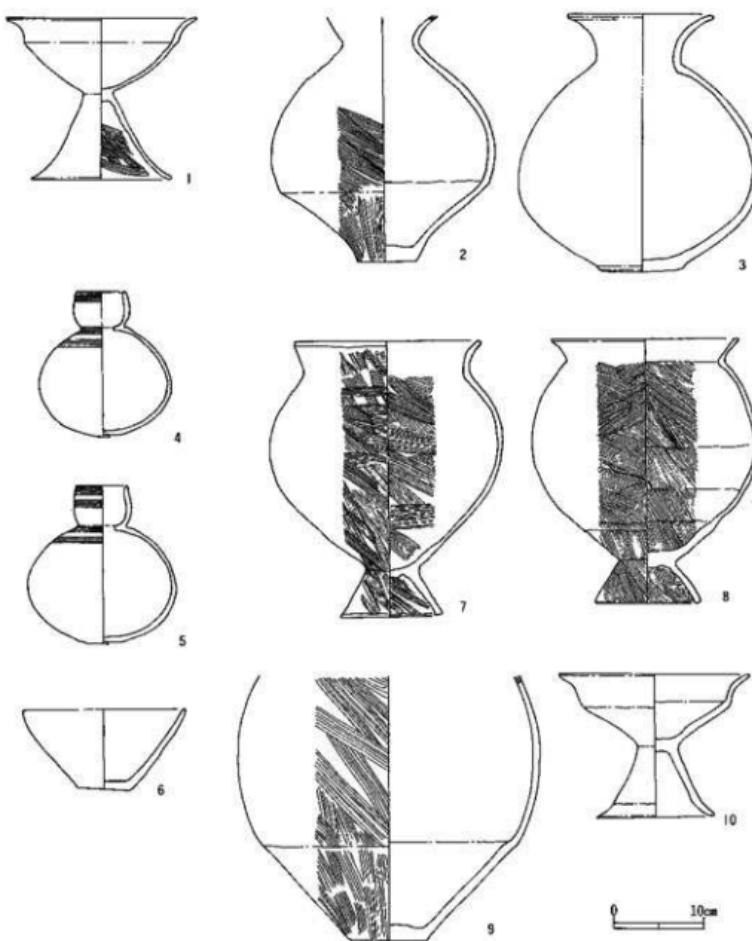
弥生時代の遺跡は分布調査の結果合計18遺跡が確認されており、そのほとんどが後期土器と記載されている。その中の主要な遺跡について記述する。

中原上遺跡（6A-No245）

中原上遺跡は、中山道芦川宿から北へ2km程行った中原地縫のはずれに位置している。遺跡の東側と西側には番屋川の支流が流れ、この支流に挟まれるようにローム層が堆積する小規模な台地状の地形が存在し、この台地の削平に伴って土器が出土した。

出土した土器は、赤色塗彩の高環1、磨きの顕著な広口壺形土器2、瓢形土器2、浅鉢形土器1、台付甕形土器2であり、一部欠損している土器もあるが殆どが完形であり、しかも優品である。高環1は、口縁部径20.4cm、底径15cm、高さ17.5cmを測る。脚部内面を除く、他の内外面は総て赤色塗彩され、極めて丁寧な研磨がなされている。広口壺形土器2は口縁部が欠損しているが、その他の部位は欠けているところがない。頸部からなだらかに胴部に至り、胴部下半より底部までは箱清水式土器の特徴である内寄する形態をなしている。頸部直径は8.2cm、胴部の最大直径24.2cm、底径6.4cmを測る。器面全体にハケによる調整痕が顕著である。3は口縁部直径15.5cm、底径9.3cm、高さ27.5cmで、胴部の最大直径は26cmを測る。器面全体は赤色塗彩され研磨されている。瓢形土器4は、口縁部直径5.2cm、頸部直径は4.2cm、胴部直径14.3cm、器高15.8cmを測る。器面は、口縁部から頸部までが縦方向のヘラ磨き、頸部及び頸部直下が横方向のヘラ磨き、そこから底部までは縦方向のヘラ磨きがなされている。口縁部直下と頸部及び頸部下部に、浅くて細い10条からなる構造平行沈線文が器体を一周させている。全体に明黄褐色を示し、焼成良好の土器である。5は口縁部直径5.5cm、頸部直径5cm、胴部最大径16cm、器高17cmを測る。器面調整は口縁部から頸部に対して内外面とも縦方向のヘラ磨きが施され、頸部は横方向のヘラ磨き、頸部から底部は縦方向のヘラ磨きがなされている。口縁部とその直下、頸部とその直下の4箇所に、浅くて細い8~9条からなる構造平行沈線文が器体を一周させている。器面全体は、明黄褐色を示し、焼成は良好である。浅鉢形土器6は、口縁部直径17.3cm、底径5.8cm、器高8.6cmを測り、器面は丁寧なヘラ削りと研磨がなされている。台付甕形土器7は、口縁部直径19.8cm、頸部直径17.8cm、胴部最大径25.2cm、本体と台部の接合部径5.7cm、底径10.9cm、器高30cmを測る。口縁部はナデ調整が行われ、器面のはば全体には、ハケ調整、内面にはナデ成形のち、ハケ調整が行われている。全体に灰褐色を呈し、焼成は良好である。8は、口縁部直径19.8cm、頸部直径16.9cm、胴部最大径24.2cm、本体と台部の接合部径6.2cm、底径11.3cm、器高28.7cmを測る。口縁

部の一部は欠損しているが、残損する部分はナデ調整が行われ、器面はハケ調整、器内はヘラによるナデののち、ハケ調整が行われている。全体に灰褐色を示し、焼成は良好である。



第59図 立科町中原上遺跡（1～8）、中村遺跡（9～10）出土土器

古町下屋敷遺跡 (6 A-No237)

古町下屋敷遺跡は、中山道芦田宿から南へ約1kmの古町の北側に位置しており、芦田川で形成された氾濫原上にある。昭和48年に発掘調査が実施され、縄文時代前期・中期・後期・晩期の遺跡であることが確認された。検出された中で岩偶は特に注目に値する。弥生時代の遺物は、後期土器との記述があるだけで詳細は不明であるが、発掘調査で出土したことは重要である。

中村遺跡 (6 A-No240)

中村遺跡は、中山道芦田宿から北へ約1.3kmの山部地籍に存在する。芦田から上房、津金寺を経て、丸子・大屋へと向かう県道にしがわの小高い丘陵上にある。山部の西側は夢科山から北方へ続く裾野が延びており、比較的低位な丘陵状の地形と浅い幾つかの沢状地形とによって成り立っている。中山道笠取峰は、これら的一角に位置している。遺跡は、この丘陵状地形の西縁にあり、見晴らしが非常によい。遺跡の西側には、西久保の池（溜池）があり、東側の傾斜部には2基の古墳が存在している。遺跡のある丘陵の西側は、芦田川や、丘陵から流れる小河川によって低位な台地と扇状地状地形が続き、現状は、水田と果樹・菜園になっている。

遺跡は、東西30m、南北50m程の小規模なものであり、耕作中に弥生時代後期の箱清水式土器の高环9と、広口壺形土器10の2点が出土している。高环は口縁部直径20.4cm、底径12.5cm、高さ15.4cmを測り、脚部内面を除く全ての器面は、赤色塗彩され研磨されている。広口壺形土器は、口縁部から頸部まで欠損しているが、頸部直下から底部まで完存している。現存部で胴部最大径35cm、底径8cmで、器面はかなり摩耗しているが、ハケ調整が全面になされている。底部から胴部にかけては、箱清水式土器に特徴的である内湾する形態をなしている。

立科町の弥生時代遺跡の記述は土器においては「後期土器」とのみあり、その内容は不明確であるが、箱清水系土器の諸特徴、これと共存するらしい外來系土器からみて弥生時代解体期あるいは古墳初頭に位置付けられるものが多そうである。また、他の遺物の記述されている遺跡は、古町中屋敷遺跡で磨製石鎌、中宮地遺跡で太形蛤刃石斧、仏沢遺跡で太形蛤刃石斧、また、木宮遺跡では箱清水式土器とあるが、特記した遺跡以外の遺物は、所在不明である。立科町は、以上18遺跡が確認されているが、今後発掘調査により遺構の検出がなされることを期待したい。

望月町の弥生時代遺跡

望月町は、蓼科山の裾野と裾野の間を流れる四河川によって形成された地域であると言つてよい。蓼科火山によって形成された地域は、蓼科山を頂点として立科町の芦田付近まで含まれ、また、望月町の瓜生坂より北方の地域、更に茂田井地域を除く全域、浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達している。蓼科山の裾野は、北方の望月町方面へ延び、極めて雄大である。大河原峠付近にあっては、急傾斜の谷を形成しているが、中腹から山麓に至っては、頂上を中心に放射状に延びる緩やかな裾野を形成している。蓼科火山地域は、特に八丁地川水系において安山岩の分布が広く見られ、熱の珪化作用によって板状節理が発達し、天然記念物のごとき、美しい露頭箇所が何カ所も見ることができる。望月町を流れる河川は鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の四河川で、いずれも蓼科山を源流として、長い谷をねって流下している。細小路川は春日本郷で、八丁地川は望月地区で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川と合流している。布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これらの四河川は、当地方においては人々の生活や動植物の生息にとって必要不可欠な自然的条件で有ると共に、これらの自然的条件を取り入れながら過去から現在に至るまで日々刻々と生活が営まれてきたのであり、基本的な生命泉であると言える。しかし、裾野が長く発達し、谷が狭いために、河川の両岸には良好な沖積地が発達しなかった。従って、弥生文化に必要な生活及び生産基盤を満たす事が出来ず、結果として遺跡数が少なく、しかも単一遺跡の密度も薄く、検出されたものも極めて僅かである。

望月町の弥生時代の遺跡は、現在22遺跡が確認されているが、単独の遺跡ではなく、また、発掘調査においても偶然土器の破片や磨製石器が出土したに過ぎず、恐らく集落的な遺跡は存在しないのではないかと考えている。このような中で、各水系毎にその内容を示してみることにする。

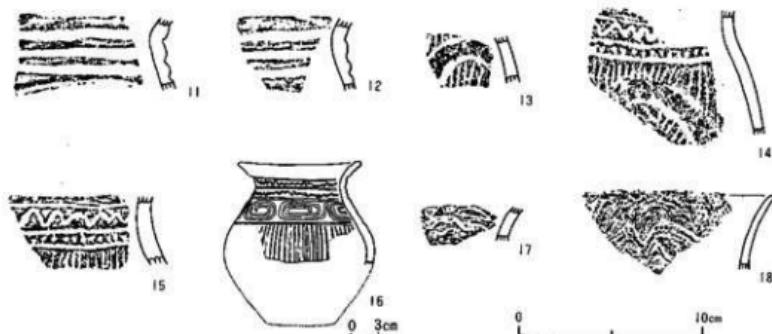
八丁地川水系の遺跡

八丁地川水系は、蓼科山から続く狭く長い裾野の間を僅かに発達した河岸段丘が存在し、場所によっては可なり深い谷状の地形や、比較的広い段丘面の見られる所もある。遺跡の多くは縄文時代が圧倒的であり、統いて古墳時代(墳丘)、平安時代の順となり、弥生時代の遺跡は平石遺跡と山ノ神B遺跡の2遺跡に過ぎない。

平石遺跡 (4A-No267)

平石遺跡は、八丁地川の左岸河岸段丘に位置し、かつては河川が大きく蛇行していたところでもあり、水系の中では比較的広い段丘面にある。遺跡の北側は、低位な裾野を背負っており、かなり環境の良好な地域で、標高775-780mを測る。遺跡の存在は以前より知られており、太形蛤刃石斧と櫛描波状文土器が採集されていたが、昭和62年に第一次発掘調査、平成元年度に第二次の発掘調査が実施され、第一次調査において遠賀川式土器破片、吉田式と思われる櫛描波状文の土器片と天王山式土器（斎藤道ノ助氏教授）と思われる口縁部から頸部に至る土器及び破片が出土した。また石器では磨製石鎌が出土している。

11・12は、同一個体の頸部に当たる部分で、棒状工具による幅広い併行沈線が施文されている。胎土にはほとんど杂质の入らない軽い土で黄褐色を示しており、東海系の遠賀川式に比定されるものと思われる。13-15は、同一個体で、棒定工具で横位に併行沈線を描き、沈線の空間部を波状文と刺突文が施文され、また、その下部に隆帯が円形状に張り付けられている。沈線下部には、更に縦の沈線が施文されている。焼成は良好であるが胎土に砂粒が多いためざらついており崩れ易い。16は胴部下半が欠損している資料で、13-15の土器と同系統である。口縁部は大きく外反しS字底をなす。文様は頸部から描かれており、棒成工具による併行沈線とその空間部に小刻みの波状沈線が施文されている。その下部には刺突文が一周している。胴部には、方形の渦巻沈線が器面を巡っている。その下部は、横方向に沈線を巡らせたあとに、縦位にも併行沈線を全面に施文している。沈線は波状部と刺突部は棒状工具であり、その他の施文部位は半裁竹管であるが、横位併行文と方形渦巻文は半裁部を上にして施文し、縦位の沈線は半裁部を下に向けて施文している。胎土には13-15と同様石英粒や砂粒が多量に混入してザラついており、茶褐色や黒褐色を呈している。16は、遠賀川式の系譜を引くものとも考えられるが、栗林式の文様帶にも共通する



第60図 望月町平石遺跡出土土器 (1~8)

部分もあり、更には縄文晩期の水Ⅱ式に極めて近似する文様帶であることは事実である。更に天王山式系土器ではないかとの指摘も戴いており、本群の土器は現状においては系統が不明と言わざるを得ない。17~18は、後期前半の吉田式に近似するものである。いずれも壺形土器の口縁部と口縁部付近の土器で、櫛齒状工具による波状沈線文が施文されている。

山ノ神B遺跡（4A-Xa266）

山ノ神B遺跡は平石遺跡より700m東方の左岸河岸段丘に位置しており、立地条件から見れば平石遺跡所在地と一連の地形をなしている。信濃史料には櫛描沈状文との記載がみられるが、現状においては採集した遺物は不明であり、詳細を知ることはできない。

鹿曲川水系の弥生時代の遺跡は、望月地区では、梅ノ木、符ヶ屋敷、柿ノ木、中平、岩清水の5遺跡であり、また、春日地区では、下ノ宮、金塚、池田、宮平、新小路、中道、矢那田、神明社、入片倉、本郷の10遺跡で、合計15遺跡が確認されている。これらの中で発掘調査によって確認された遺跡は、岩清水遺跡と金塚遺跡の2遺跡であるが、箱清水式と思われる小片が出土しているにすぎなく、遺構も検出されていない。鹿曲川水系は、蓼科山を源流とし、千曲川に合流するまでの間、幾度となく氾濫したり、流れを変えたりしており、望月町の他の水系に比較すると広い河岸段丘を形成している。遺跡はこのような河岸段丘面と段丘を臨む低位な丘陵に位置している。信濃史料等の文献からみると、下ノ宮遺跡では石鎚、池田遺跡では石包丁と環状石斧、中道遺跡では磨製石斧、矢那田遺跡では太形蛤刀石斧、石槌、入片倉遺跡では磨製石鎚が出土しており、以上の遺跡も含めそのほかの遺跡では箱清水式土器が出土している。これらの遺物の所在は不明である。

布施川水系の遺跡

布施川水系は蓼科山の北麓に延びる裾野の間の狭長な谷合に形成されており、蓼科山を源流とし、北麓の水を集めて流下する布施川によって僅かな段丘面を発達させている。上流に比較して、中・下流になると小規模ながら平坦面が広がり、また、両側の裾野も低位な丘陵となる。布施川は、牧布施・百沢地籍より中山道をまたいで浅科村に至り、やや川幅を広げて千曲川と合流している。

弥生時代の遺跡は、城平・大間々・家下・五里塚の4遺跡が確認されており、城平遺跡では磨く製石鎚・大間々遺跡では箱清水式土器、家下遺跡では偏平片刃石斧、五里塚遺跡では箱清水式土器が出土している。五里塚遺跡を除けば他の3遺跡は布施川の左岸に位置しており、また、弥生時代以外の遺跡も大部分が左岸に位置している。

望月町の弥生時代の遺跡は、平石遺跡や金塚遺跡など近年発掘調査によって確認した遺跡が少なく、しかも当初から弥生時代の遺跡として調査目的の中で実施したものがない。従って、出土した僅かな遺物を除けば、信濃史料等の文献に記載があるだけで、遺物は保管されていない。

浅科村の弥生時代遺跡

浅科村は、立科町、望月町と同様蓼科火山によって形成された地域で、北方に展開する裾野の末端部に当たる。村の北側には、御牧ヶ原台地が広がっているが、蓼科火山の形成層とは異なり地殻の隆起運動によって形成されたと言われ、望月町の瓜生坂付近で境を接している。佐久市や小諸市と境をなす村の東側には、千曲川が流れ場所によっては浸食により断崖状の地形を作り出している。浅科村の水利は、溜池から流れる入の沢野小河川や、望月町春日より取水する五郎兵衛用水路のように、人為的な河川や水路がみられるが涌水など自然山水によって形成された河川は存在していない。従って、河川によって形成された沢地谷地形もみられない。

村の中央部には中山道が通過しており、千曲川を挟んで塩名宿が置かれ、川渡しは有名で今でも舟つなぎ石が河原に残っている。また、八幡宿も置かれ、高麗社のある八幡神社は重要な史跡となっているなど江戸時代には大いに繁栄したところである。また、それ以前古代から中世にかけて存在した望月牧に関連したと考えられている御馬寄・勘寄などの地名も残り、古代からの歴史の展開の中にあっては重要な内容を有しているところである。

弥生時代の遺跡は、合計11遺跡を数えるが、発掘調査による精査はなく信濃史料等の比較的古い文献に記載があるだけで、遺物等は保管されていない。記録には天神平遺跡で箱清水式土器と瓶とあり、そのほかの遺跡には箱清水式土器とだけ記載されており詳細は不明である。

遺跡の分布状況をみると、千曲川の右岸の塩名田地籍と左岸の御馬寄に一群、望月町と境を接する尾根の東側に位置する矢島部落の一角に一群、御牧ヶ原台地の麓であり台地への登り口でもある入の沢地盤に一群、桑山地籍から御牧原台地へ登った須蓋原地籍に一群の計四群に把握することができる。

浅科村における弥生時代の遺跡はそのほかの時代の遺跡も含めて、偶然分布調査によって発見された遺跡の記録のみであり、それらを検証する遺物も残されていない。今後、詳細分布調査や発掘調査などにより究明していく必要性を感じる。

北御牧村の弥生時代の遺跡

北御牧村は、蓼科山から望月町を経て流れる鹿曲川を境に、東側の御牧原台地地域と西側の八重原台地地域とに大きく二分することができる。御牧原台地は地殻の隆起運動によって形成された台地と言われており、その東側には千曲川が流れ断崖絶壁の急傾斜地を作り出している。また、南側は望月町及び浅科村と境を接し、御牧原台地の連続した台地は望月町の瓜生坂から蓼科山の裾野へと連なっている。台地上には生活を賄う水利がなく、現状では用水に頼っている。

一方、八重原台地の南側には立科町と境を接するように番尾川の生活権はどちらかと言えば立科町側の低位な沢状地形に存しており、台地そのものには何ら影響を与えていない。台地の西方には、丸子町と境を接しており、依田側によって浸食された断崖が発達している。また、北側は千曲川によって浸食され、やはり断崖状の急傾斜地が多くみられる。八重原台地は御牧原台地と同様水利には恵まれておらず、現在は用水と溜池に頼っている。

遺跡は、平安時代になって良質の粘土を利用した窯業生産が発達し、信濃国では最も規模の大きな一大窯業生産地となっている。窯業生産以外の遺跡は余り分布していない。

弥生時代の遺跡は、八幡山遺跡と下前田遺跡の2遺跡が確認されているだけであるが、八幡山遺跡は、下前田遺跡は、鹿曲川が北方から北東方向へ大きく転ずる箇所の左岸に位置しており、現在北御牧村福祉センターが建設されており、この建設事業に伴って遺物が出土した。遺物は、箱清水式の高壙と甕が出土している。

尚、御牧原台地においては弥生時代の遺跡がまだ確認されておらず、これらの地域も含めて改めて詳細分布調査を実施し、現状把握と精査を行う必要性を感じる。

(文責 福島邦男)

(6) 小諸市

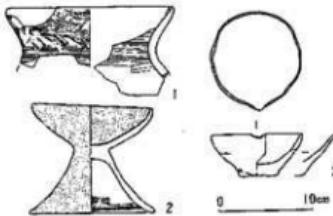
小諸市は佐久地方北部中央に位置し、その多くの面積は千曲川右岸地域にある。右岸地域は佐久市北部と同じく浅間山麓末端部に特有な幾筋もの谷地形「田切り地形」に刻まれた長い台地が発達している。小諸市東部涌玉川周辺は山麓末端部において佐久市から続く比較的広い平坦面が開けており、五ヶ城・和田原遺跡など弥生集落遺跡が集中分布する。一方、西部は勾配の急な斜面に支配されており、弥生遺跡の分布は少ない。

千曲川左岸は御牧ヶ原台地北端部にあたり、直下の千曲川河床との比高60m内外の切り立った断崖上に少數の水・久保田等の小規模弥生遺跡が点在している。

市内の弥生遺跡は、総計13遺跡確認されており、前述したようにそのほとんどは千曲川右岸東部の田切りを控えた台地上にある。標高はおよそ650m内外である。しかし中には、寺ノ浦遺跡のように山麓に位置する例、水・久保川遺跡のように千曲川の段丘上に位置する例などもある。

五ヶ城遺跡 (7A-No220)

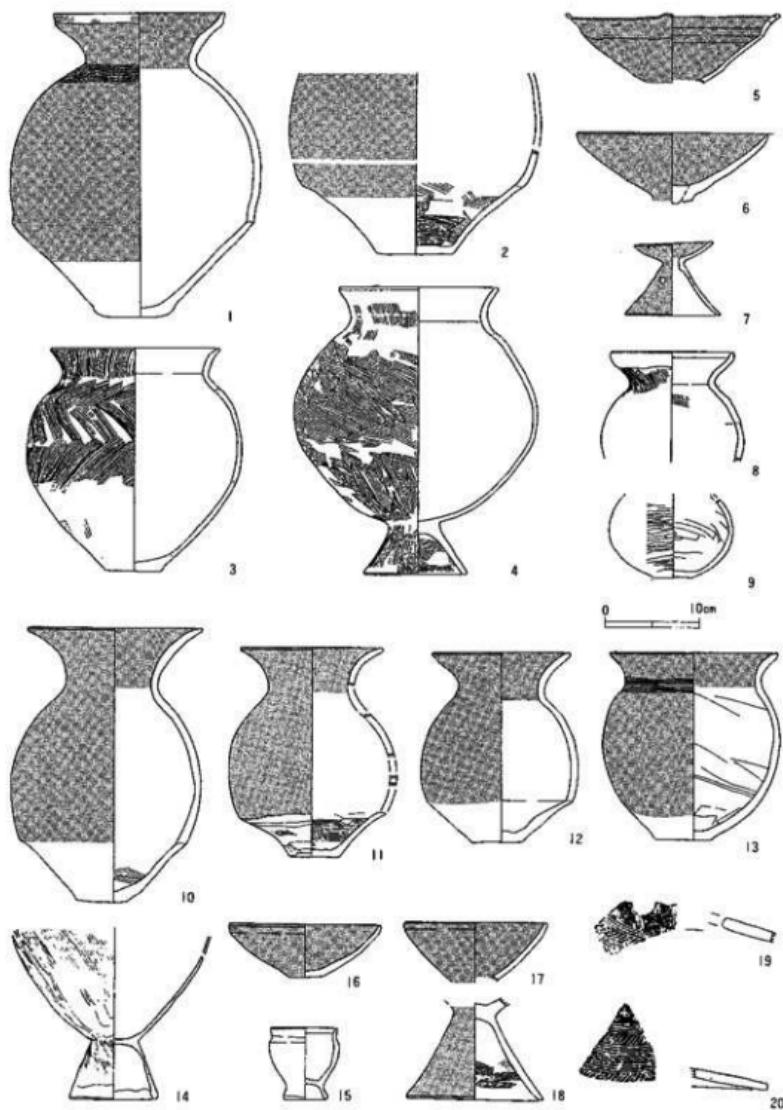
千曲川右岸・涌玉川右岸の標高675mの台地上に立地する。昭和55年に発掘調査が行われ、弥生時代後期の住居址1軒のほか、古墳時代後期の住居址3軒、平安時代の住居址11軒などの遺構が検出された。弥生住居は隅丸長方形で東西6.0m、南北8.0mと大型である。出土した土器様相は後期後半に位置すると思われる。なお、包含層からS字甕B類の小片が2点出土している。



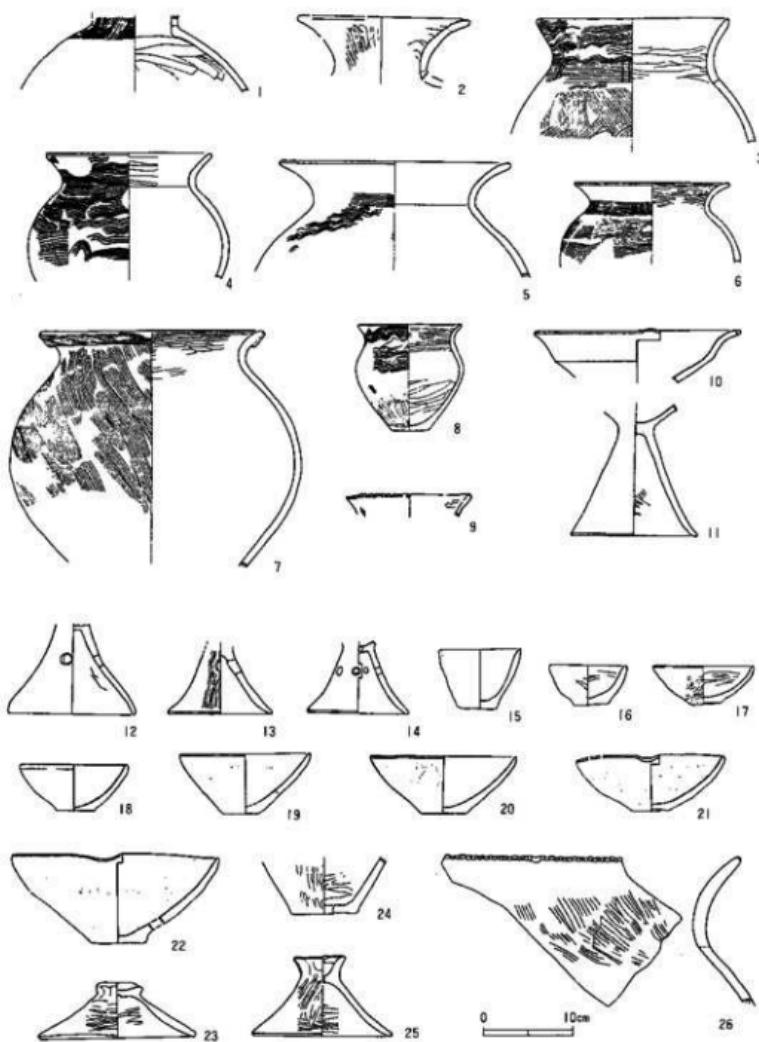
第61図 五ヶ城遺跡出土土器 (Y 1号住)

久保田遺跡 (7A-No223)

千曲川右岸の標高630m内外の段丘上に立地する。昭和58年に発掘調査が行われ、弥生終末から古墳初頭の住居址・周溝墓のほか、繩文・後期の住居址・石棺・古墳中・後期・平安の住居址等が検出された。弥生から古墳初頭の住居址は3軒あり、方形に近い平面プランをもち、一辺3m前後の小形住居と、一辺5~6mの中形住居がある。中形のY 2・3号住居址の出土土器は在地の鞘清水系土器に混じり、東海系S字甕、小型器台がみられ、古墳初頭に位置づく可能性が強



第62図 久保田遺跡出土土器 古墳時代（1～9 Y2・3住、10～20 1・2号周溝墓）



第63図 和田原遺跡出土土器 古墳時代 (3・5・10・11・15・16・19 1号住、7・11・13・20・26 3号住、14 4号住、4・6・8・17・18・21・22 5号住、1・2・7・9・23~25 6号住)

い。周溝墓は3基あり、いずれもやや不整な方形を呈する。1・3号周溝墓は一ヵ所、2号周溝墓は二ヵ所に陸橋を有し、規模は1号が台状部、東西744cm、南北778cm、周溝を含めて1,008cm、1,030cm、2号が台状部、東西920cm、南北791cm、周溝を含めて1,350cm、1,027cm、3号が台状部東西530cm、南北550cm、周溝を含めて721cm、730cmを測る。出土土器は箱清水系土器に混じり、東海系S字甕b類、元屋敷式高坏片等がみられ、古墳初頭に位置付けられる可能性が強い。

和田原遺跡 (7A-No.219)

和田原遺跡は、標高約735mを測り、田切りを控えた台地上に位置する。昭和63年に発掘調査が実施され、古墳時代初頭の住居址5軒の他、古墳時代後期の住居址1軒等が検出された。

住居址5軒は同時期と考えられ、小型器台を伴出する時期と言える。平面プランは隅丸方形で、炉址には、炉縁石があるもの、土器埋設炉、地床炉と多様である。出土土器には在地系土器のか、外来系土器が認められる。外来系土器には、駿河系、尾張系、関東系などがあり、器種には、壺、甕、高环がある。

自然遺物には炭化材、ハシバミと考えられる炭化種子がある。炭化材（1号住14点、4号住3点、5号住11点、6号住54点、計82点）は同定の結果、樹皮と種類不明のもの3点（広葉樹（散孔材））を除く78点が次の3種に比定された。ヒノキ属の一種—2 類似種—1 コナラ属（コナラ亞属コナラ節）の一種—74 ムラサキシキブ属の一種—1

また、イネ科草本とされる3点のうち、2点がヨシ属類似種、もう1点にはマコモ属、ヨシ属、ススキ属類似種が含まれているとされた。

(文責 花岡 弘)

(7) 軽井沢町・御代田町

軽井沢町

浅間火山の東南麓、群馬県とも接する軽井沢町は、標高900m以上をはかる高燥な地帯で占められている。地質構成は模式的な浅間火山性の堆積を示しており、山裾以下の南緩斜面は湯川・熊沢川のほか大小の河川の浸食によって細長く刻まれた田切り地形が発達している。

長野県史遺跡地名表(長野県 1981)および1985年度に実施された町内の遺跡詳細分布調査(軽井沢町教育委員会 1986)において確認されている117遺跡中、弥生時代遺跡は6遺跡のみである。大字長倉字二タ侯の弁天C遺跡・大字長倉字上原の県A・同字下原の県B遺跡・大字発地字杉原遺跡・大字茂沢字赤名木沢赤名木沢遺跡・大字茂沢茂沢遺跡で、いずれも弥生時代後期の遺跡であるが、県遺跡を除き、いずれも散布地として確認されているのみで詳細は明らかでない。このうち、県遺跡は1976年に国道18号線拡幅に伴う発掘調査により良好な資料が得られており、その詳細を以下に記す。

(文責 堤 陸)

県遺跡 (9B-295)

県遺跡は標高930m内外の田切り台地縁辺部に位置する。この地帯は古代より、信濃と関係を結ぶ交通の要所であり、古くは東山道の官道が、長倉駅を経てうすひ峠(入山峠)を越え関東へと入っていった。その入山峠は峠の祭祀遺跡として名高いが、この「県」を通過する南東に位置する。きわめて自然なふみあとをたどるような自然道であることは注意されるべきである。古代の官牧長倉牧もこの地帯を中心として展開されていたのであろう。

1976年の調査により竪穴住居址2軒が検出された。いずれも全掘できていないが、一辺約5mの隅丸方形を呈するものと思われる。また、2軒とも住居壙没過程において火入れ行為が行われたらしく、炭化材が多量に検出された点も共通する。1号住居址は調査部分が少なくわからないが、2号住居址からは明確な炉址が検出されなかった。遺跡内において特殊な位置を占めるのか、高冷地住居特有のものであるのか興味深い。出土した土器(第64図)は当初後期初頭吉田式と報告されたが、やや下膨れ気味の壺、球形化した壺、横帶文と縦状文を組み合わせた壺、刷毛目状の調整がなされる壺、刷毛目台付き壺など、佐久地方では弥生終末～古墳初頭段階の要素が強く認められる。

(文責 渡辺重義)

御代田町

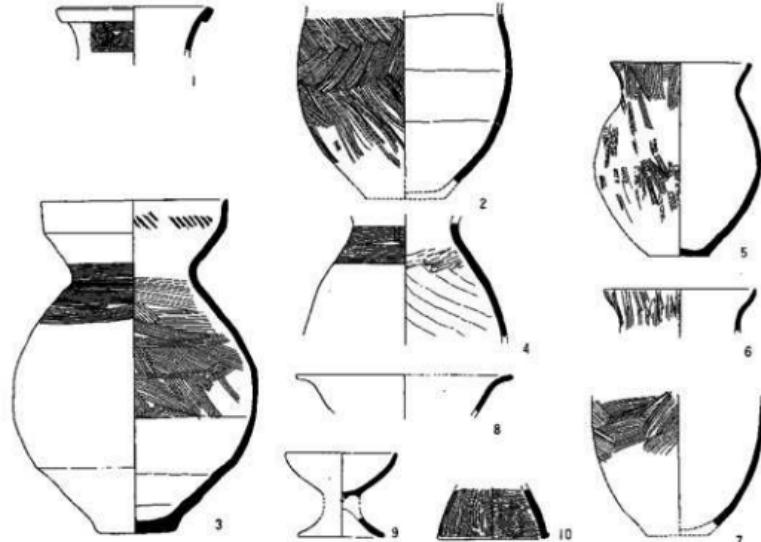
軽井沢町に隣接し、同じく浅間火山の東南麓に位置する御代田町において、現在確認されている弥生時代の遺跡は、全52遺跡中6遺跡ある。

大字塩野字城の腰遺跡・大字塩野山犬穴洞穴・大字塩野西畠遺跡・大字面善下尾敷遺跡・大字豊昇宮平遺跡・大字御代田曾根遺跡である。

このうち山犬穴洞穴は、浅間山中腹の小河川の脇に形成された岩陰遺跡で、昭和49年に発掘調査が実施されているが、その成果は公表されておらず、詳細は不明である。長野県史によれば、土器のほかイノシシ・シカ・サルなどの骨の出土が見られるようである（長野県、1981）。

さて、軽井沢町・御代田町あわせて12の弥生時代遺跡（いずれも後期以降）の存在が窺えたのみであった。この地域は、冷涼な気候を見せる地域であり、現在でも冷害に悩まされることからも初期の水稻耕作には不向きな地域であったといえよう。したがって、その集落形成の要因となつた主たる生業には稻作以外を想定しなければならないだろう。具体的には狩猟等を主体とした生業集団の居住を考慮することとなろうか。ところで軽井沢の碓井峠は、「東山道」等の古代の交通路における峠路として重要な位置を占めていたことが知られるが、関東方面の弥生文化を受容する際にも重要な窓口となつたことであろう。

（文責 堀 隆）



第64図 県遺跡出土土器古墳時代（1・2 1号住、3~10 2号住）

第3節 東部町の様相

(1) 地形

東部町は東信火山群のひとつ烏帽子岳の裾野に展開する。東方に小諸市、千曲川を境界として北御牧村に接するとともに、上記東信火山群の稜線をもって群馬県とも接している。地形的には山体部と押出扇状地、千曲川の河岸段丘ならびにその氾濫原により構成されているが、その大半は南向きの緩傾斜を呈する押出扇状地と山体部により占められている。現在、東部町で確認されている弥生時代遺跡は67遺跡である。⁽¹⁾しかし、調査が実施された遺跡は21遺跡であり、そのうち弥生時代の遺構が確認されたのは7遺跡にすぎない。

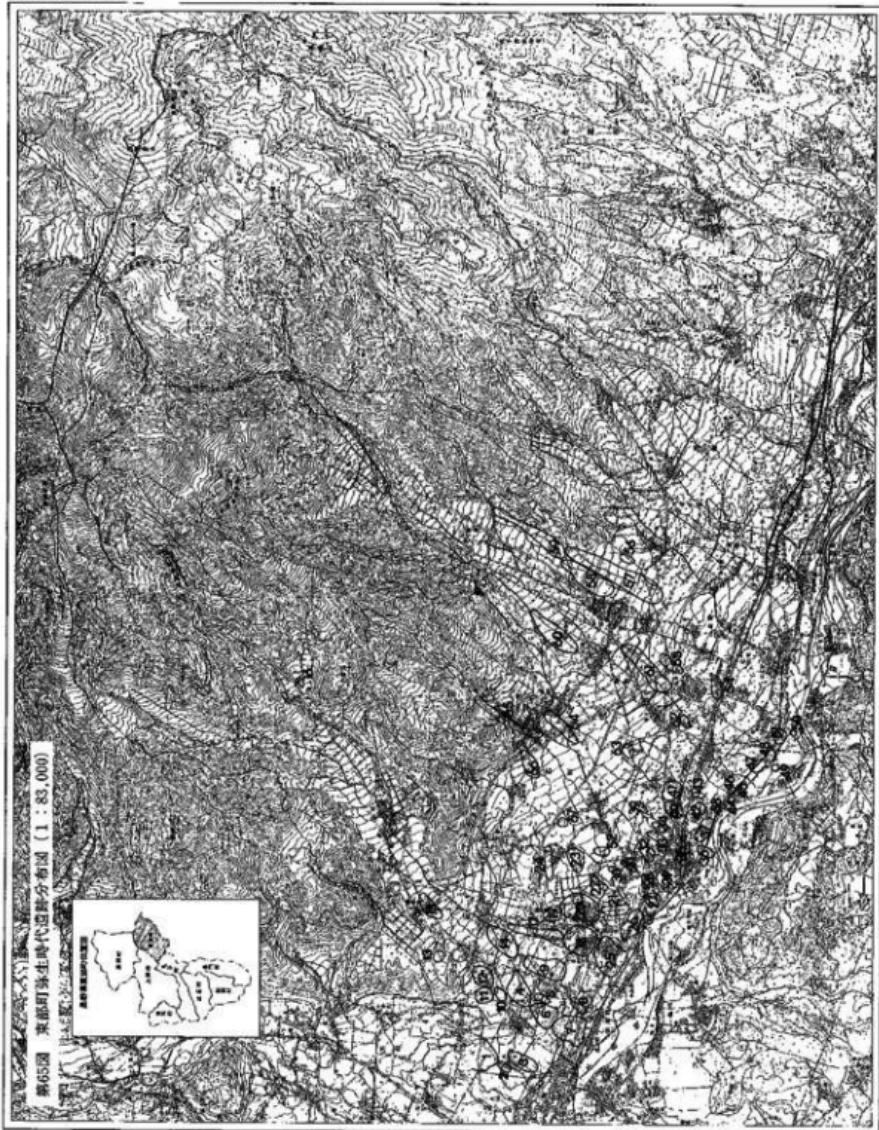
(2) 遺跡の分布

遺跡の大半は和・田中地区の千曲川河岸段丘面と、押出扇状地の先端部分に集中しており、千曲川の沖積氾濫原を対象とした水稻耕作を基盤に成立した集落が想定される。一方、標高700mを越える押出扇状地にも決して少数とは言えない数の遺跡が存在している。これらの遺跡の大部分は集落址とは考えられず、実際に調査が実施された上の原・古屋敷等の遺跡からは該期の土器片が少量出土しているだけで遺構は確認されていない。⁽²⁾⁽³⁾しかし、近年の調査により、不動坂遺跡群・たたら堂遺跡などでは、該期の集落が存在していたことが明らかとなった。前記2遺跡の場合不動坂遺跡群は湿地を、たたら堂遺跡は小河川を各々内包・隣接していることから、水稻耕作を基盤とした集落の成立を否定することはできないが、当時と比較にならぬ程に進歩した現代の耕作技術をもってしても決して良好な耕作条件とは言えない地域に展開した集落の成立基盤・背景には注意が必要であろう。

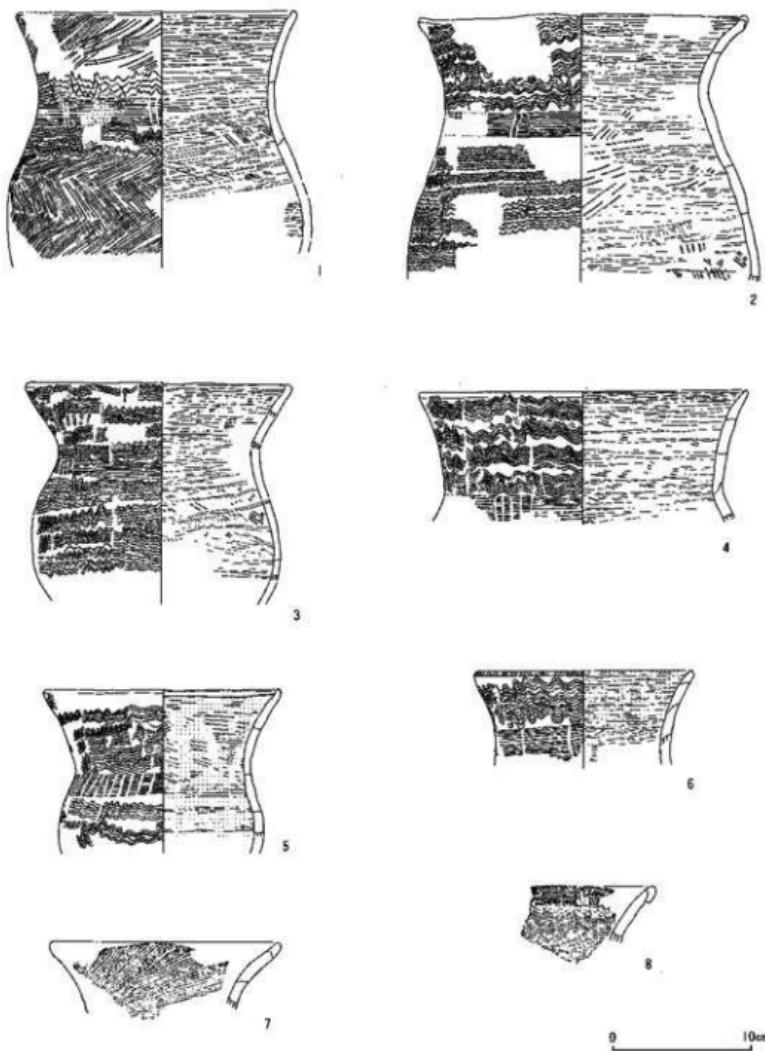
以下、正式報告がなされている上記遺跡のうち比較的良好な資料が出土した、城の前遺跡と高呂添遺跡について概略を記して行く。

城の前遺跡（第66図～第67図）

報告書によれば計32棟の弥生時代後期の住居址が検出されている。遺跡は標高520～540を測る千曲川右岸の段丘面に展開している。東部町の該期遺跡の中では大規模な遺跡である。⁽⁴⁾32棟の住居址数から考えると土器の量はさして多くなく、良好なセットは少ない。その中で最も良好なセットと捉えられるI-Y-3号住居址の土器を図示する。住居址自体は5.2×3.08mの長方形プランを呈し、長軸をN-120°-Eにとる。柱穴は南北の壁に沿って各々3基、計6基を有し、東壁沿いの2基の柱穴間中央やや西よりに地床炉が検出されている。出土土器中注目されるのは第66図-1・7のような横羽状櫛描斜走直線文の施される甕や、第67図-1のような範描矢羽根

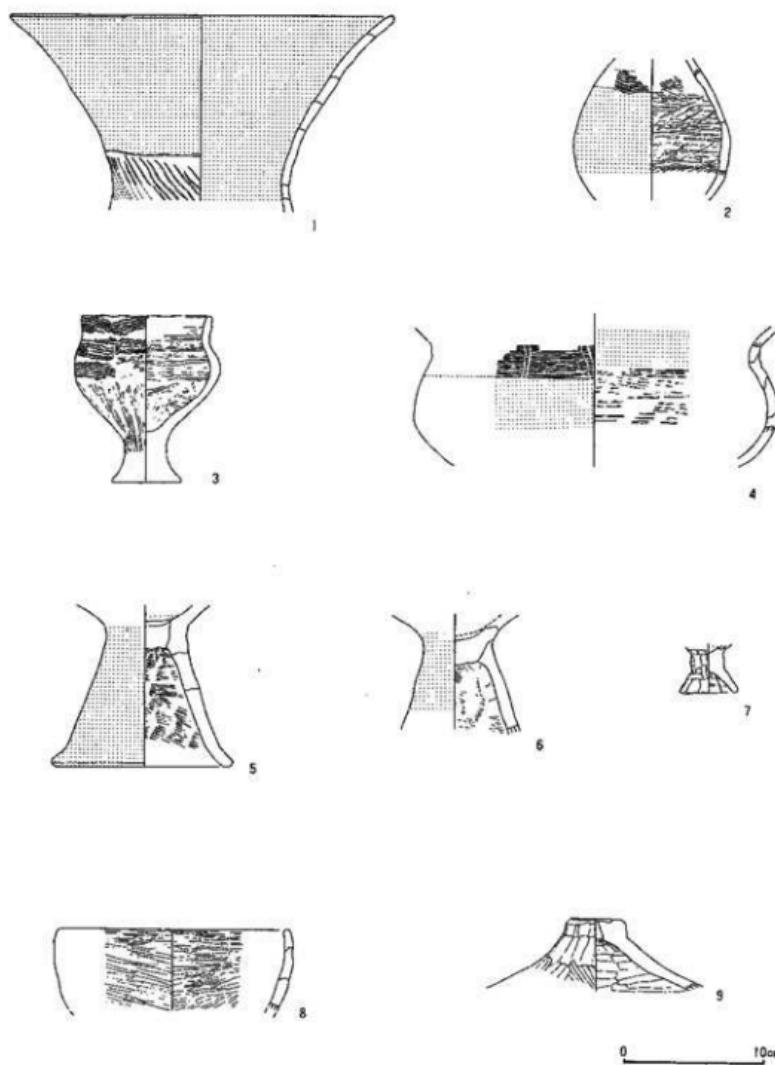


第3節 東部町の様相



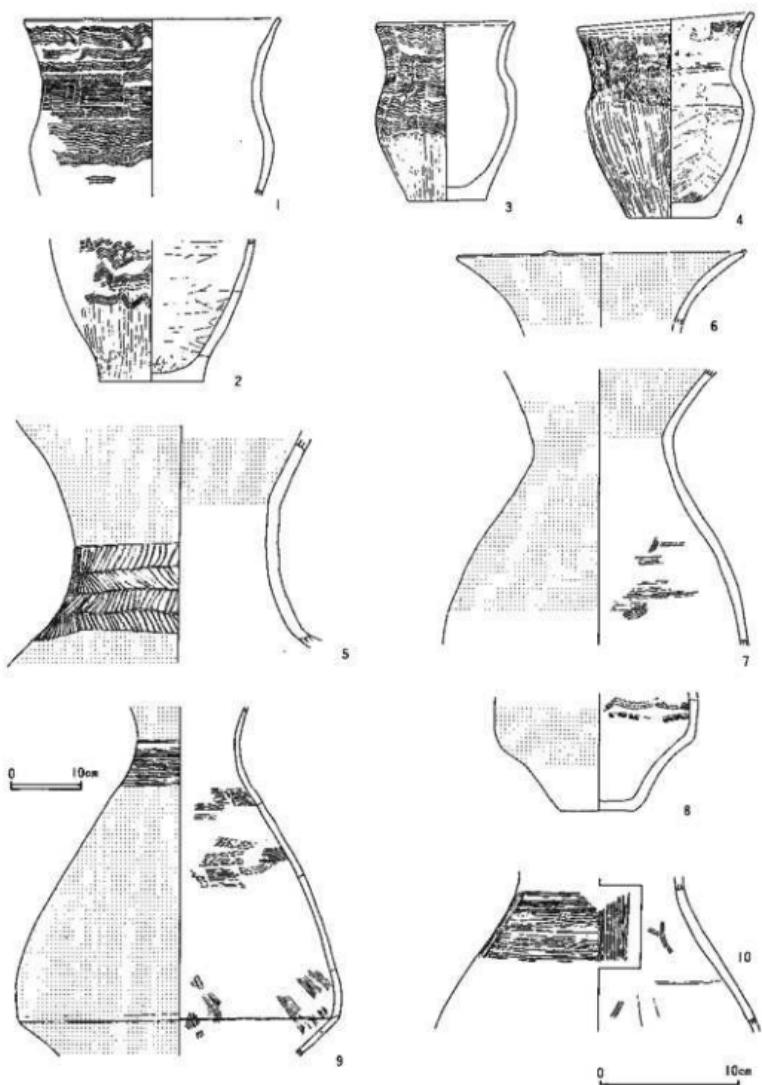
第66図 東部町城ノ前遺跡Y3号住居址出土土器(1)

第2章 遺跡の分布

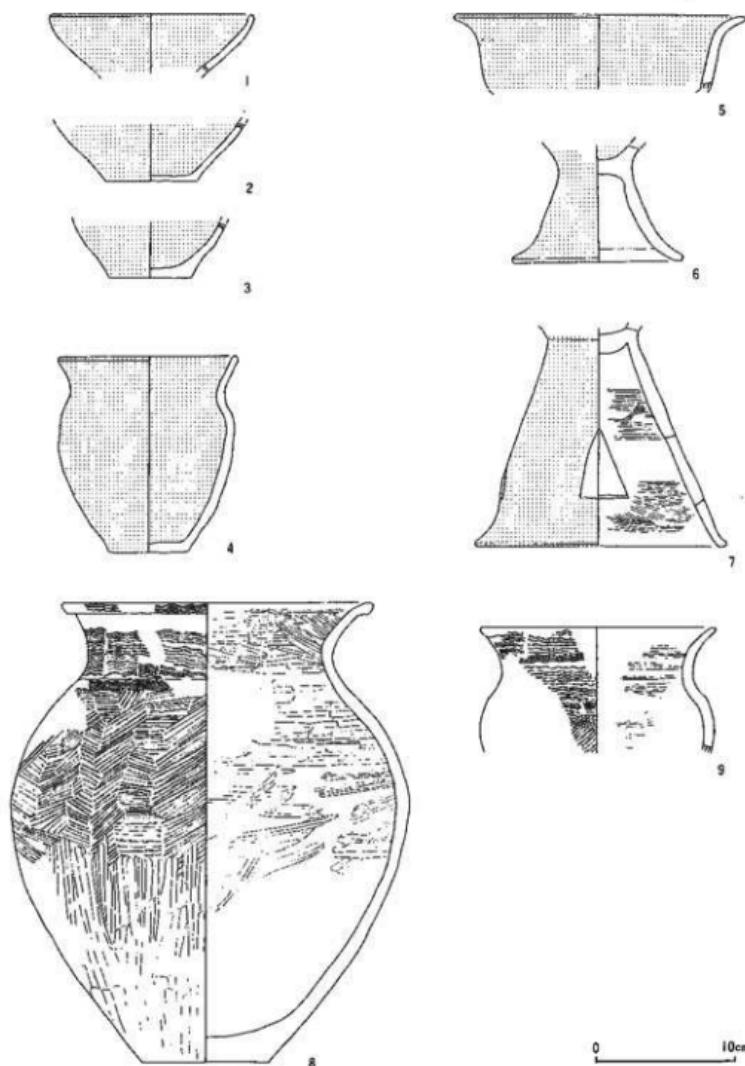


第67図 東部町城ノ前遺跡Y3号住居址出土土器(2)

第3節 東部町の様相



第68図 高呂添遺跡SB-01出土土器 (1~7)、SK-24 (8~9)



第69図 高呂添遺跡SB-01出土土器 (9のみ1/8、他は1/4)

状文の施される壺が存在することであり、佐久地方の千曲川右岸地域の影響が認められる資料と言える。時期的には報告書では尾崎式併行期とされているが、箱清水期前半に位置付けられよう。

高呂添遺跡（第68図～第69図）

計7棟の箱清水式期の住居址が検出されている。報告書において遺物が公表されている遺構の内SB-01住居址とSK-24土坑出土土器を第4図～第5図に図示した。第68図-5の壺に認められる籠描矢羽根状文、第69図-8・9の甕に認められる櫛描斜走直線文などは前記の城の前遺跡I-Y-3号住居址同様に、佐久地方の千曲川右岸地域の影響を認めることができる。また、未報告資料の中にも斜走直線文の施される甕片が少なからず存在する。（第69図-8の甕については、櫛描斜走直線文が縦羽状に施文されているが、実測図の表現方法の誤りなのか、事実なのかについて確認する時間的な余裕がなかったため、問題を残すがここでは省及しない。）

(3) まとめ

前述した城の前遺跡I-Y-3号住居址、高呂添遺跡SB-01・SK-24において認められた佐久地方の千曲川右岸地域の影響は、東部町においてこの2遺跡においてのみ認められるのではなく、未報告資料である「たたら堂遺跡」でも認められる。前述したように東部町において弥生時代の遺構が検出された遺跡は9遺跡であり、このうち3遺跡においてこのような状況が確認されているわけである。この比率から考えれば、東部町の弥生時代後期の土器様相は佐久地方の千曲川右岸地域の影響を受けていると言えよう。しかし、佐久地方千曲川右岸地域の影響として捉えた櫛描斜走直線文が施される甕や、籠描矢羽根状文が施される壺が全く認められない住居址も同遺跡の中に存在しており、また、これらの甕や壺が一住居址内の統ての甕・壺を占める訳ではなく、少数存在する事、櫛描斜走直線文が櫛描波状文と同一土器の器面上で共存する例が多いことを考え合わせると、佐久地方の千曲川右岸地域の影響ばかりではなく、善光寺平の影響も強いと言え、東部町の弥生時代後期後半の土器様相はその地理的な位置同様に、善光寺平と佐久地方の千曲川右岸地域双方の影響を受けた土器様相と促えた方が良いであろう。遺構面特に炉址の形態は圧倒的に地床炉の場合が多いが、土器敷き炉・埋甕炉（埋甕炉は天竜川流域に特徴的であるが、佐久地方の千曲川右岸地域でも検出されており、ここでは東部町との共通性の一例としてあげたまでである）も認められ土器様相同様に佐久地方の千曲川右岸地域と善光寺平の双方の影響がここにも認められる。

以上、東部町における弥生時代の様相について概略を記したが、現時点においては後期前半以前の遺構・遺物は検出されておらず、その存否は不明である。このことは、東部町についてのみ言えることではなく上小地方越えて言える。この地域の弥生文化研究はこの歴史の空白部の追及

が果されて初めてその深部に言及していくのであり、現段階は資料の蓄積段階にあると言える。今後の進展に期待したい。

(文責 小林眞寿)

註

- 1) 一分布調査により弥生時代の遺物が採取された遺跡数。
- 2) 一遺跡の全面調査でなく、部分的な調査であり、調査区域外に該期の遺構・集落が存在する可能性もある。
- 3) 一例えば上の原遺跡群の場合、他の時代についても遺物は検出されるが遺構の存在は確認できない場合が多く、居住地とは性格の異なる人間活動の場としての性格付けが必要と考える。
- 4) 検出された遺構数からではなく、相対的な遺跡の空間的広がりから考えて大規模である。
- 5) 一住居址における一括土器セットの中で、例えば甕の場合その8~9割は頸部簾状文、他は波状文という箱清水式のものが占める。甕の場合も竈描矢羽根状文のものを1とすればそれ以外のものが3~4の比率が多い。しかし、未報告の「たたら堂遺跡」の2棟の住居址では描斜走直線文の甕の比率が高い状況を示す。これが地理的なものによるのかは今後の課題であろう。
- 6) 一例えば、頸部簾状文を境に口縁部文様帯は波状文、胴部文様帯は描斜走直線文が施される。
- 7) 一「たたら堂遺跡」等
- 8) 一「たたら堂遺跡」・「城の前北遺跡」等

引用・参考文献

- 東部町教育委員会 1975 『城の前遺跡緊急発掘調査報告書』 長野県企業局
 東部町教育委員会 1983 『東部町遺跡分布図』
 東部町教育委員会 1989 『高呂添遺跡・井高遺跡緊急発掘調査報告書』
 長野県史刊行会 1981 『長野県史考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表』
 尾見 智志 1988 『東部町城の前遺跡Y-3号住の土器』『佐久考古通信No46』

第3章 土器の移り変わり (編年)

第1節 はじめに

南北佐久で発見された弥生時代の遺構・遺物は実に膨大な量である。特にある時期からこれでもかというくらい真っ赤に彩られた弥生土器群は圧巻である。これらは当時の人々にとってごく当たり前に使用されていたものであった反面、時には信仰の対象にもなり、心の支えであった。現代に生きる私達は、弥生人がこれらの土器にいったいどんな思い入れをもっていたのか知る由もないが、赤く彩られることになったいきさつを調べることによって、想像を掻き立ててみようと思うのである。

第2節 研究史

(1) 栗林式土器

昭和6年(1931)中野市栗林遺跡より出土した弥生土器は、神田五六によって紹介(神田1935)された後、昭和11年(1936)藤森栄一によって信濃の古式弥生土器に位置付けられ、栗林式土器と命名された。坪井清足らの調査(坪井他 1953)によって器種構成が明示された後、昭和38年(1963)桐原健が検討を加え、栗林式土器の諸要素を抽出、百瀬式に先行する型式としての位置付けを与えた。桐原による栗林式の諸要素とは、頸部~胴部下位まで縄文を地とした範描文が加飾される壺(第三類)を中心とするもので、百瀬式とされる頸部にのみ文様をもつ壺(第四類)を対峙させ、時間差としてとらえようとするものであった。資料操作に混乱がみられるものの、現在でも栗林式土器編年の最も有力な根拠となっている壺の文様の集約化、簡略化傾向に着目されている点は、現在の編年研究の基礎をなすものとして評価されよう。以降、桐原氏は県内における弥生中期後半土器の大系化に努める。昭和47年(1967)岡谷市海戸遺跡第一次調査で既存の天王垣外式に後続するものとして、海戸式を設定、諏訪盆地において、天王垣戸・海戸式に分離できたから、松本平の百瀬式も2細分の可能性があると指摘した。これは、翌昭和43年(1968)の海戸遺跡第二次調査報告で更に明確化し、天王垣外式(諏訪)=百瀬I式(松本)=長峯式(北信)、海戸式(諏訪)=百瀬II式(松本)=+(北信)という併行関係を呈示し、百瀬I・II式の細分を提唱、また、栗林式を天王垣外・百瀬I・長峯各型式に先行する型式として位置付けた。昭和43年(1968)、桐原は長野県考古学会の「シンポジウム 弥生文化の東漸とその発展」の席上において一連の研究を発表する。天王垣外=百瀬I=、海戸=百瀬IIを重ねて強調したのち、これら松本・諏訪の縦年に北信の栗林式を対比し、3型式に分類できると主張、栗林II=天王垣外=

百瀬Ⅰ、栗林Ⅲ=海戸=百瀬Ⅱとし、栗林Ⅰ式をこれらに先行する型式とした。桐原の編年大綱は、百瀬遺跡の一堅穴から一括出土した土器群をⅠ・Ⅱ式に分離してしまった…括性の無視をはじめ、栗林式の3型式細分に際し、具体的な資料提示をしなかったことなど、後に笠沢に指摘される大きな問題を内包するものであったが、一連の論文を整理すると次の基準で編年を構築している。

栗林Ⅰ式……繩文を地文とする範描文が頸～胴部まで限なく加飾される細頸壺および、繩文、範描文、横描文を組み合わせた文様が頸部・胴部に加飾される細頸壺等を中心とする土器群

栗林Ⅱ式、天王垣外式、百瀬Ⅰ式……頸部に文様が集中し胴部に文様がみられない。単純口縁の細頸壺および、単純口縁の壺

栗林Ⅲ式、海戸式、百瀬Ⅱ式……翼状口縁（受口）をもつ細頸壺および翼状口縁をもつ甕を約すれば、施文が胴部にまで及ぶ壺から、頸部にのみ集約される壺、単純口縁の壺・甕から翼状（受口）口縁の壺・甕へという変遷過程を思考されていたように思われる。

昭和46年（1971）笠沢浩は桐原編年の資料操作の誤りを指摘して痛烈に批判し、新たな資料を用いて北信の栗林式土器を再検討、新たな分類の基準、編年の修正案を公開した。この内容は、桐原による百瀬Ⅰ・Ⅱ式細分の否定、百瀬Ⅰ・Ⅱ式の細分に対応して立脚する具体的な資料提示のない栗林Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を否定、新たな資料、長野市北部中学校西遺跡、国鉄車両基地遺跡第二類土器と栗林遺跡D地点の資料を栗林Ⅱ式、旭幼稚園・百瀬堅穴の資料を百瀬式、百瀬式併行とするものであった。笠沢編年案が桐原編年と大きく異なるのは、栗林Ⅱ式の主要要素が壺A₂→（繩文を地文として範描文が頸部および胴部に施されるが、胴部上位か下位のいずれかの文様を欠く細頸壺）と壺B→（翼状口縁をもつ壺）、壺C→（内湾する口縁部をもつ壺）としていること、また、主体は占めないが横描文をもつ壺A₄・C₄等の出現・存在を認めていたことなどである。つまり、桐原の栗林Ⅱ・Ⅲ式細分の根拠となつた単純口縁をもつ壺と翼状口縁壺が同時期に存在し、時間差とはならないこと、また、桐原が栗林Ⅰ式と認識した壺A₂を栗林Ⅱ式に、栗林Ⅱ式とした壺A₃を百瀬式、百瀬式併行土器に主体を占める要素と指摘した訳である。また、ここで笠沢は百瀬式、百瀬併行土器における横描文をもつ壺A₄・C₄の存在を後期初頭の吉田式に通じるものとし、百瀬式、百瀬併行土器を中期終末の土器と位置付けた。

昭和51年（1976）笠沢は長野市平柴平遺跡の良好な一括資料を用いて、先述の細分案を補強・強化した。栗林Ⅰ式に平柴平遺跡S KY05、栗林Ⅱ式に平柴平遺跡S BY04、百瀬式併行土器に旭幼稚園遺跡出土資料を当て、壺文様の集約化・簡略化傾向によって、千曲川水系中期後半弥生土器の変遷がたどれることを明らかにした。ここでは今まで破片資料で論じられてきた栗林Ⅰ式

の型式内容を明らかにした点で評価できる。また、中期末の土器とした旭幼稚園遺跡の出土資料に関しては「……定形品は少なく、型式名を設定するには未だ資料不足であるので、百瀬併行土器の仮称型式名として用いる。」として、将来、千曲川水系における栗林II式に後続する中期終末の土器に対して新たな型式名が設定される可能性のあることを示唆した。ここでなお、栗林II式に後続させてIII式と素直に言わなかつたのは、桐原に対する対応心が強かった為であろう。翌昭和52年（1976）笹沢は県内の弥生土器全般の編年大綱を発表する。県内の弥生土器を天竜川流域、千曲川流域に2大別して大づかみにとらえ、中期後半の土器に関しては北信・東信・松本平をほぼ同一の土器分布圏と見なして一つに取り纏め、栗林I式→栗林II式→百瀬という大きな流れのあることを示した。前年提示した編年案に、栗林I式には平柴平遺跡のSKY03、栗林II式には平柴平遺跡SBY16号住、栗林D地点豎穴を加えて補強し、旭幼稚園の資料は百瀬豎穴の資料と一緒にして百瀬式として扱っているが、編年の基準となるものは前年とほぼ同様であった。以降、しばらく笹沢はこれに関する修正、訂正案は提出せず、また、他の研究者からの批判もなく、栗林式土器をめぐる編年研究は1976年笹沢編年によって確立した感があった。

昭和61年（1986）、10年間は認されてきた笹沢編年に対して、県内の大規模発掘の資料をもって疑問を投げ掛ける声が現出した。口火は飯田市恒川遺跡を報告した山下誠一である。報告で山下は下伊那地方の北原式をI・II式に細分、中期後半地域編年を北原I式→北原II式→恒川式と整理した。そして各型式組成中にみられる栗林式土器と共に縦羽状の櫛描文をもつ變の比較から、北原II=海戸=百瀬=栗林II、北原I=天王塙=+=栗林Iという併行関係を想定し、特に百瀬=栗林IIを強調して中信を除く千曲川流域における百瀬式の定立に疑問を提出した。これが呼び水となって、同昭和61年に開催された群馬・埼玉・長野三県シンポジウム（『東日本における中期後半の弥生土器』）の席上で百瀬式の問題が噴出した。総括的に設楽博巳は、笹沢の栗林I・II式細分を評価したうえで、「栗林II式と百瀬式併行土器群の関係がやや不明瞭」、「時間的な流れが追っても区別できるものであろうか」として「松本平の百瀬式と千曲川水系の百瀬併行土器は筆状文の受容少なく、これを百瀬式と一括することにためらいを感じる。」として同一時間帯の中で松本平と千曲川水系の土器に相違があること、千曲川水系で百瀬式を定立させることに無理のあることを示した。千曲川水系上流域北信地区の様相をまとめた千野浩は笹沢による栗林I・II式、百瀬式などの型式名を排除、栗林式土器は漸移的様相変化を示し古～新間に分類できるが、明確な型式変化がないことを指摘した。千曲川下流域東信をまとめた小山岳夫も当地域内には百瀬式に相当する要素が乏しく、中期後半弥生土器は栗林式で一括総称すべきであるとの見解を示した。

昭和62年（1987）小山は北西の久保遺跡報告書において、設楽を中心とした疑問符を発展的に取り締める意見を提出した。その内容は、百瀬式を千曲川水系から除外したうえで、水系の中

期後半弥生土器を栗林式に総称する。当遺跡出土土器を北西の久保Ⅰ・Ⅱ期と仮称分類、従来栗林Ⅱ式と一括総称された土器群に時間的流れのあること、また、北西の久保Ⅱ期とした栗林Ⅱ式の新しい部分が松本平百瀬式に併行することなどを示すものであった。また、水系内、県外、栗林Ⅰ式相当土器群の分析も行い、これらが北信濃・新潟・石川県など北に集中分布することを指摘、栗林式土器の発生が北の地域にあり、漸次南下して分布圏を拡大して行ったことを仮想した。一連の構想は同年佐久考古通信No.41紙上においても繰り返された。

昭和63年（1988）笹沢はこれら一連の批判を受けて百瀬式を松本平固有の型式と認め、松本平の中で百瀬式細分を行った。（私見を差し挟むと、百瀬式は栗林式をベースとして富士川流域の影響力を受けて成立した土器と考える。従って、松本平周辺では栗林式が浸透する時期、これをふまえて他地域の文化も受容し、地域固有の百瀬式が成立する時期もあるのではないか。）

以上が1931年以降、60年に亘った栗林式土器を巡る研究史である。1976年笹沢編年で決着したかに見えた土器研究も、近年良好な一括資料増加に伴い俄かに流動化の様相を呈している。今大切なのは、それぞれの地域相（型式）を明確にすることである。そのうえで類似土器分布図全般を取り纏めた様式（仮称栗林式様式）を確立することが肝要である。

（2）吉田式土器

昭和45年（1970年）長野市吉田高校グランド遺跡出土土器を公表した笹沢浩はこれらの土器群を吉田式土器と型式設定した。設定時における笹沢の吉田式土器の位置付けは、「中期後半弥生土器を一部で止揚し、ある面ではその伝統を継承しながらも、新しい後期後半弥生土器—箱清水式へと展開を始めている土器群」として善光寺平における箱清水Ⅰ式に先行する後期初頭とされている。地域的な広がりについては検討課題とされた。

翌昭和46年（1971）桐原健は同じ資料に対して、壺が栗林Ⅱ式、百瀬式、恒川Ⅰ式に類似するとして中期後半の土器と位置付けた。これに対し、昭和52年（1977）笹沢は石器をもたないこと、箱清水式的要素が強いことなどを挙げ、再度吉田式が後期の土器であることを強調した。その後、発掘調査の増加に伴い、飯山・中野・佐久など千曲川水系の全域にわたって吉田式の要素をもつ土器が分布することが判明した。ただし、これらは昭和55年（1980）太田文雄の指摘にあるように一括性に今一つ問題のある吉田式との比較が出来にくかったこともあるが、プレ箱清水式とか、箱清水でないから吉田式とかいういい加減な理解しか示されていなかった。昭和61年（1986）これら土器群に着目した笹沢は吉田式にも地域相、時間差があることを予測した。また、飯山市田草川尻遺跡1・2号住居址、佐久市周防畠B遺跡周溝墓出土土器などを、「吉田式から箱清水式

土器への過渡的内容をもつものであり、吉田式土器に後続する一型式として存在する可能性がある。」ともした。

これを受け昭和62年（1987）小山岳夫は北西の久保遺跡報告で佐久地方の吉田式と呼ばれてきた土器をまとめ、3段階の時間的流れを予測した。これに対し青木和明はこれらの土器を吉田式とすることに疑問を示した（1988）。同年、千野浩は長野市吉田高校グランド遺跡第2次調査報告を行い、良好な一括資料をもって分類を行い、吉田式の型式内容を初めて明らかにした。これで中期後半栗林式との型式差は確実となった。昭和63年（1988）善沢は吉田式の細分案を発表した。また、小山も佐久の吉田式関連資料の編年予報を行った。

以上、栗林式との型式差が明確となった今、吉田式は後期の土器と位置付けるのが妥当である。また、地域相については更に明確にし、千曲川水系の大系化が望まれる。

（以上（小山岳夫 1987 「第IV章 総括 弥生時代中期後半の土器について 後期前半の土器について」「北西の久保遺跡」）より抜粋、一部加筆・修正）

（3）箱清水式土器

1901年長野市箱清水遺跡において長野高女建築工事の際、出土した土器は渡辺敏によって採集され、坪井正五郎、野津左馬之助が、実見・分類【甲（朱塗）・乙（浮文）種】した後、蒔田鎧次郎が初めて文献に著した。その後、長野市で玉置繁雄（1903）、南佐久で八幡一郎（1934）、北佐久岩村田で神津猛（1936）などの紹介によって千曲川水系各地に同様な土器が分布することが確認された。

1936年藤森栄一は信濃の弥生土器を大系化し、以上に紹介された土器を岩村田・箱清水式土器と型式設定し、信濃における後期弥生土器と位置付けた（岩村田・箱清水式の当時における前後関係は、箱清水式とした土器群に土師器が混入していたことによるらしい）。1956年桐原健は飯山市長峯遺跡出土土器を分析し、並の口縁部形態、赤彩があまり盛行しないことなどを根拠に中期的要素を残すことを指摘、箱清水式に先行する土器群として尾崎式を設定した。その後、1964年全国的に弥生土器の大系化がなされるなか藤森は信濃の弥生土器をI～IV様式に分類、IV様式を後期とし、尾崎式・箱清水式を当てた。1966年神村透は尾崎・岩村田式は、箱清水式と質的に差がないとして型式名の一本化をはかる。尾崎・岩村田式は解消され以後、学史に登場することはなかった。

昭和40年以降、発掘技術の進歩、資料の増加に伴い、良好な一括資料が増え、信濃後期弥生土器編年研究の再検討が活発化する。1967年桐原は中野市安源寺遺跡の出土資料を安源寺II・III類

に分類、II式を箱清水I式（従前の尾崎式）、III類を箱清水II式に型式設定し、尾崎式を解消した（安源寺II類で注意しなければならないのは、中期的土器が混入し、資料に混乱が見られることがある）。1969年笹沢浩は更埴市生仁遺跡の資料を分析し、一型式内における時間と空間の問題を提起したが、ここでは保留、翌1970年生仁および北長野国鉄貨物基地出土資料は安源寺III類よりも後出的であることを指摘、箱清水II式＝安源寺III類への疑問を投げ掛けた。また、安源寺III類と生仁等の資料に見られる壺の口縁部等の若干の形態差が地域差であるかについては結論を持ち越した。1971年桐原はこれを受けて編年を再編成し、箱清水I式に安源寺III類、II式に生仁・北長野国鉄貨物基地資料を当てた。笹沢もいったんはこれを受け入れ、1976年にはI・II式に後続する弥生終末型式として御屋敷式を設定した。

1977年笹沢は長野県における弥生土器編年大綱を発表し、千曲川水系の後期弥生土器は、吉田・箱清水・御屋敷（尚、御屋敷式は1983年土師器との見解を示し、弥生土器から削除した）の三型式の流れがあることを示し、従前の箱清水I・II式については地域差として解消するとの見解を示した。

こうして数名の偉大な研究者によって基本的な大系化がなされ、一応の落ち着きを見せた信濃千曲川水系の箱清水式土器を中心とする後期弥生土器編年も昭和55年（1980）以降、県内全般におよぶ大規模開発による緊急調査の増大、新資料の続出によって更に小地域相の詳細な具体像を明らかにする必要性に迫られてきた。

1980年臼田武正は佐久地方の後期弥生土器を検討、I～IV類の編年案を提示した。I類は吉田式、II類は箱清水I式、III類は箱清水I～II式、IV類は箱清水IIとし、吉田式を導入した点は笹沢、箱清水I・II式を使用した点は桐原の意見を取り入れたものと思われる。同年、太田文雄は飯山市田草川尻遺跡を中心に北信濃の後期編年を考え、田草川尻I式が吉田式により近いとし、田草川尻II式が箱清水式的とした。翌1981年長野・群馬・埼玉第2回三県シンポジウムでは同じ中部高地型獣面文をもつ箱清水・樽・岩鼻式土器をテーマに行われ、各地域の編年案が擦り合わされた。しかし、本家筋の長野の編年試案は1977年笹沢編年を脱しておらず、消化不良であった。また、同年、宮下健司は野津佐馬之助の研究など新事実を盛り込んだ箱清水式土器の研究史を著した。本稿の多くはこれを参考としている。

1984年青木和明は高环形土器の型式変化に着目し、中期から後期の高環を畿内地方の高環の流れに対応させて分類、第1～6段階の流れを仮定した。第1段階は中期後半、第2段階は慎重な態度を取りながらも吉田式（古）、第3段階を吉田式（新）か箱清水式の初源、第4・5段階は箱清水式、第6段階は御屋敷式とした。また、1986年笹沢は箱清水I・II式を再度否定、箱清水式土器の地域差を善光寺・飯山・佐久・上田・松本・塩尻等の具体資料を掲げ強調した。同年、佐久市では池畠遺跡・瀧の峯2号墳など弥生時代解体期にかかる重要な調査・報告が行われた。

特に土器の面では三石宗一の指摘した、從来吉田式の主文様で、後期弥生土器でも古い要素と研究史上言われ続けていた、甕の斜走文が佐久地方では終末～古墳初頭まで残るという事実は地域内後期弥生土器研究に革命をもたらした。これを受け1988年小山岳夫は佐久地方後期後半の弥生編年の予報を行ったが、地域相を明確にする段階にまでは至っていない。

1989年千野浩は1984年青木編年の後を受けて千曲川流域の弥生編年を再検討した。しかし、あくまで善光寺平主導型の編年試案であり、流域内全般が理解できるものではない。

以上、およそ1世紀に渡り研究されてきた箱清水式土器研究はごくおおざっぱには1977年佐沢編年で決着済みであるが、前後の吉田式・御厨敷式との関係をスムースに考えるには更に検討し細分が必要である。また、地域によっては從来の認識では理解仕切れない要素も看取されるようになった。栗林・吉田式と同様に1980年白田・太田が始めた各地域相研究を更に深く掘り進め行く時期にきている。

(以上(小山岳夫 1988 「弥生土器編年の確立に向けて(その2) —箱清水式土器研究の歴史と現状における課題」『佐久考古通信No44』)より抜粋、一部加筆、修正)

佐久地方弥生時代関係文献（本書の引用・参考文献も兼ねる）

- 八幡一郎 1928 「南佐久郡の考古学的調査」
- 八幡一郎 1929 「青銅環」『信濃考古学会誌』第1年第1輯
- 森本六爾 1929 「日本青銅器時代地名表」岡書院
- 八幡一郎 1934 「日本古代農耕聚落移籍の一考察—特に佐久平の研究—」『歴史学研究』3-3
- 神津猛 1936 「岩村田の弥生式遺跡」『信濃』I・5-8
- 藤森栄一 1936 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』第7巻第7号
- 江藤千万樹・塙川清人 1936 「千曲川上流地方紀行」『中部考古学彙報』第1年第5報
- 中部考古学会 1937 「石包丁の発見地〔続き〕II 信濃の部」『中部考古学会彙報』第2年第3報
- 森本六爾・小林行雄 1938 「弥生式土器聚成図録」
- 八幡一郎 1952 「長野県野沢発見の弥生式遺物」『考古学雑誌』第38巻第5・6号
- 磯崎正彦 1955 「南佐久郡海瀬村上原出土の弥生式土器について」『上代文化』25
- 藤森栄一 1955 「各地域の弥生式土器—中部高地・北陸」『日本考古学講座』4
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃考古綜覧 上・下巻」
- 北佐久郡志編纂会編 1956 「北佐久郡志 第2巻 歴史編」

- 桐原 健 1956 「箱清水式土器における赤色塗彩の傾向とその意義」『信濃』III・8-2
- 桐原 健 1957 「信濃における石包丁について」『信濃』III・9-8
- 桐原 健 1959 「石器よりみた信濃弥生文化の一様相」『信濃』III・11-2
- 内堀正國 1961 「長野県御代田町出土の壺形土器」『金鈴』14
- 桐原 健 1963 「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』III・15-4
- 木下正史 1964 「南佐久郡青沼村出土の弥生式土器」『大塚考古』5
- 小林行雄・杉原莊介編 1964 「弥生式土器集成（本編）」
- 日本民俗資料館 1964 「考古学展覧会図録集 弥生編」
- 東京考古学会 1965 「日本青銅器発見地名表」『考古学集刊』2-4
- 関 俊彦 1965 「東日本弥生時代石器の基礎的研究(1)」『立正大学文学部論叢』21
- 永峰光一 1966 「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」『信濃』III・18-4
- 神村 透 1966 「弥生文化の発展と地域性—中部高地」『日本の考古学』III
- 竹内 恒 1967 「佐久市内二遺跡の調査略報」『信濃考古』20
- 長野県考古学会 1968 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』4
- 藤森栄一・桐原 健 1968 「信濃考古学散歩」 学生社
- 神村 透 1969 「弥生文化各説 中部山岳地帯」『新版考古学講座』4
- 竹内 恒 1969 「人骨の特殊な出土状態を示す長野県佐久市蟻畑遺跡」『信濃』III・21
- 桐原 健 1969 「信濃の磨製石器」『信濃』III・21-4
- 山井茂也 1970 「野辺山高原の弥生式遺物について」『長野県考古学会誌』9
- 藤森栄一・児玉司農武外 1971 「座談会 佐久の考古学 東信の考古学研究史」『長野県考古学会誌』12
- 藤沢平治 1971 「南佐久郡青沼月夜平遺跡の弥生式土器」『長野県考古学会誌』12
- 関 俊彦編 1971 「東日本弥生時代遺跡地名表—中部地方」 東出版
- 佐久市教育委員会 1971 「佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報」
- 藤沢平治 1972 「佐久市中込深堀遺跡発掘調査概報」『長野県考古学会誌』13
- 竹内 恒・土屋長久 1972 「佐久市岩村田一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』13
- 佐久市教育委員会 1972 「岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡」
- 竹内 恒・草間富士夫 1973 「佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』16
- 小林幹男・鶴丸俊明外 1973 「立科町芦田古町下屋敷遺跡調査概報」『佐久考古』1
- 桐原 健 1973 「信濃における弥生時代玉のありかたについて」『信濃』III・25-4

- 佐久市教育委員会 1973 「岩村田餅田—佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報」
- 日本民俗資料館 1974 「信濃の弥生文化展」
- 与良 清 1974 「小諸市誌 考古編」
- 杉原莊介・森沢勇一・工奈普通 1975 「アック・オブ・ブックス 日本の美術44弥生式土器」
小学館
- 與水利雄・森嶋 稔 1976 「佐久市長土呂出土の弥生式土器」「長野県考古学会誌」26
- 桐原 健 1975 「赤色塗彩土器の出現」「信濃」III・27-7
- 京都女子大学考古学研究会 1976 「野辺山原遺跡分布調査—昭和49・50年度報告書」
- 京都女子大学考古学研究会 1976 「野辺山原遺跡分布調査—昭和51年度報告書」
- 渡辺重義・森山公一 1976 「軽井沢町長倉・県遺跡緊急発掘調査概報」「信濃考古」No.35
- 長野県教育委員会 1976 「北陸新幹線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
- 笠沢 浩 1977 「弥生土器—中部・中部高地1~3」「考古学ジャーナル」131・133・134
- 花岡 弘 1977 「(研究発表) 長野県における古式土師器の成立」「佐久考古」3
- 菊池清人編 1977 「北相木村誌」
- 佐久市教育委員会 1977 「細田」
- 新津開三他 1977 「佐久地方における埋蔵文化財の分布」「佐久教育会歴史研究委員会」
- 西沢寿光・小松 虔 1978 「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」「長野県考古学会誌」
31
- 京都女子大学考古学研究会 1978 「信濃野辺山原の分布調査」「長野県考古学会誌」31
- 川島雅人・佐藤信之 1978 「1. 岸野様名平遺跡の調査」「佐久考古」No.4
- 笠沢 浩 1978 「中部高地型櫛描文の系譜」「中部高地の考古学」「長野県考古学会」
- 宮坂光昭 1978 「方形周溝墓の研究と現状」「中部高地の考古学」「長野県考古学会」
- 佐久町教育委員会 1979 「宮の本」
- 渡辺重義・森嶋 稔・森山公一 1979 「北佐久郡軽井沢町県遺跡の調査」「長野県考古学会誌」
34
- 花岡 弘 1979 「信濃の古式土師器」「信濃」31-4
- 白田武正 1980 「佐久地方の後期弥生土器について」「信濃」32-4
- 佐久市教育委員会 1980 「北西久保」
- 千曲川水系古代文化研究所編 1980 「編年」
- 佐久教育会歴史委員会 1980 「佐久の歴史年表」
- 島田恵子 1980 「南佐久郡佐久町館遺跡出土の容器形土偶」「信濃考古」No.58
- 群馬・長野・埼玉弥生土器研究グループ 1980 「シンポジウム弥生土器—櫛描文の系譜」

- 佐久町教育委員会 「佐久町遺跡詳細分布調査カード」
- 小諸市教育委員会 1981 「五ヶ城」
- 千曲川水系古代文化研究所 1981 「研究ノート4 箱清水式土器」
- 佐久市教育委員会 1981 「下小平」
- 長野県 1981 「長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表」長野県史刊行会
- 福島邦男 1981 「北佐久郡立科町埋蔵文化財分布調査報告書」 立科町教育委員会
- 望月町教育委員会 1981 「望月町遺跡詳細分布調査報告書」
- 北相木村教育委員会 1981 「遺跡詳細分布調査報告書」
- 長野県考古学会 1982 「遺跡と遺物」 信濃毎日新聞社
- 菊地清人 1982 「佐久の住居の歴史」 様
- 臼田武正 1982 「原始時代」「図説 佐久の歴史 上」 郡土出版社
- 石岡憲雄 1982 「吉ヶ谷式と岩鼻式」土器について」「埼玉県立歴史資料館研究紀要」4
- 長野県 1982 「長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡（北・東信）」長野県史刊行会
- 林 幸彦・花岡 弘 1983 「弥生時代の炉」「信濃」35-4
- 林 幸彦 1983 「北西久保遺跡の調査」「長野県埋蔵文化財ニュース」No.4
- 宮下健司 1983 「縄文土偶の終焉」「信濃」35-8
- 長野市立博物館 1983 「第5回企画展 シナノから科野国へ」
- 星 龍象外 1983 「信濃の弥生式土器から土師器式土器への変遷過程（一）・（二）」「信濃」III-35-5・7
- 佐久市教育委員会 1984 「上の台遺跡」
- 佐久市教育委員会 1984 「舞台場」
- 小諸市教育委員会 1984 「久保田」
- 北武藏古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所 1984 「第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性」
- 青木和明 1984 「箱清水式土器の編年の予察」「長野県考古学会誌」48
- 佐久市教育委員会 1984 「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」
- 川上村教育委員会 1984 「川上村遺跡詳細分布調査報告書」
- 佐久市教育委員会 1985 「権村遺跡」
- 林 幸彦 1986 「長野県北西久保遺跡」「弥生文化の研究」 雄山閣
- 林 幸彦 1986 「15点の銅鏡が出土した上直路遺跡」「長野県埋蔵文化財ニュース」15
- 神村 透 1986 「長野県の弥生時代住居址にみる地域性と時代性」「長野県考古学会誌」50
- 笹沢 浩 1986 「千曲川水系—先土器の里と箱清水文化圏—」「歴史手帖」14-1

- 笠沢 浩 1986 「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帖』14-2
- 笠沢 浩 1986 「中部高地の櫛描紋」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- 花岡 弘 1986 「土師器の成立と古墳時代」『歴史手帖』14-2
- 小山岳夫 1986 「佐久地方における弥生時代中期後半の土器」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』千曲川水系古代文化研究所外
- 設楽博巳 1986 「奄見町式土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『池畠・西御堂』
- 佐久市教育委員会 1986 『琵琶坂遺跡』
- 軽井沢町教育委員会 1986 『軽井沢町遺跡詳細分布調査報告書』
- 小山岳夫 1987 「西一里塚遺跡の外来系土器」『長野県考古学会誌』53
- 小山岳夫 1987 「佐久地方における弥生中期後半の土器」『佐久考古通信』41
- 小山岳夫 1987 「弥生土器編年の確立に向けて（その1）—佐久地方の吉田式土器の認識—」『佐久考古通信』42・43合併号
- 白田武正 1987 「弥生時代の金属器」『佐久考古通信』42・43合併号
- 高村博文 1987 「弥生時代の墓制」『佐久考古通信』42・43合併号
- 三石宗一 1987 「瀧の峯古墳群について」『佐久考古通信』42・43合併号
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1987 『北西の久保—南部台地上の調査—』
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1987 『瀧の峯古墳群』
- 佐久市教育委員会 1987 『大井城跡（黒岩城跡）』
- 臼田町教育委員会 1987 『勝間原遺跡』
- 岸野村誌刊行会 1987 『岸野村誌』
- 林 幸彦 1987 「佐久市瀧の峯2号墳の調査速報」『長野県埋蔵文化財ニュース』20
- 小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』
- 小海町教育委員会 1987 『小海町遺跡詳細分布調査報告書』
- 宮下健司 1988 「長野県佐久地方の土偶」『佐久考古通信』44
- 小山岳夫 1988 「弥生土器編年の確立に向けて」『佐久考古通信』44
- 石川日出志 1988 「千曲川流域の縄文から弥生へ」『佐久考古通信』45
- 羽毛田伸博 1988 「佐久地方における弥生時代の石器について」『佐久考古通信』45
- 篠原浩江 1988 「弥生時代以降の所謂「ベッド状遺構について」」『佐久考古通信』45
- 尾見智志 1988 「東部町城の前遺跡Y3号住居址の土器」『佐久考古通信』46

- 小山岳夫 1988 「佐久地方の弥生墓制」『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制』 千曲川水系古代文化研究所外
- 青木和明・飯島克巳・若狭徹 1988 「箱清水式土器と樽式土器」「弥生文化の研究」4
- 筆沢 浩 1988 「中部高地型の櫛描紋土器」「弥生文化の研究」4 雄山閣
- 青木和明・飯島克巳・若狭 徹 「箱清水式土器と樽式土器」「弥生文化の研究」4 雄山閣
- 神村 透 1988 「中部の弥生石器」「考古学ジャーナル」290
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1988 『蔚沢・葛石』
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1988 『腰巻・曲尾II』
- 長野県 1988 『長野県史考古資料編 全1巻(4) (遺構・遺物)』長野県史刊行会
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2-塙尻市内その1』
- 橋本裕行 1988 「東日本弥生土器絵画・記号論述」「櫻原考古学研究所論集」8
- 相京建史 1988 「清里庚申塚遺跡のその後」「群馬の考古学」
- 白田町教育委員会 1988 『白田町遺跡詳細分布調査報告書』
- 小諸市教育委員会 1989 『和田原・兼田原』
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1989 『森下』
- 千野 浩 1989 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」「信濃」III・41-4
- 小山岳夫 1990 「地域編年の再検討—佐久地方の様相と変化—」「信濃」III・42-7

第3節 今までの編年の問題点

(1) 笹沢編年 (1977)

【栗林Ⅰ式→栗林Ⅱ式→百瀬式→吉田式→箱清水式→御屋敷式】

笹沢氏が、1977年発表した千曲川流域の中期後半～古墳時代初頭の弥生土器の流れは現在、大方に指示されている。ただし、百瀬式は先述したように現状では千曲川流域では定立させるべきではなく、中期後半は千野氏が指摘したように栗林式土器で一括し、その様相変化を追うべきである。他については大きな問題はなく、時間的前後関係が逆転することはない。ただし、吉田→箱清水は型式差が大きく、間隙を埋める資料の検討が必要である。

(2) 白田編年 (1980)

【佐久Ⅰ類→佐久Ⅱ類→佐久Ⅲ類→佐久Ⅳ類】

佐久地方で唯一大系化された後期編年案である。1類は吉田式的、2類は箱清水Ⅰ式、3類は箱清水Ⅰ～Ⅱ式、4類は箱清水Ⅱ式とした。1977年笹沢氏の指摘以来、箱清水Ⅰ・Ⅱ式は善光寺平と佐久・飯山に見られる若干の形態差を地域差とみなす意見が多く、2～3類の変遷は見直す必要がある。また、3類とした土器群も不明瞭な要素が多く位置付けを再考すべきである。總じて白田氏によって始めて提示された佐久地方の後期編年は、新たな視点で見直さなければならぬ。

第4節 佐久地方中期後半 ～後期の弥生土器編年

(1) 大枠の時期区分

以下に掲げる、土器様相の基本的差異に基づいて、佐久地方から出土した弥生土器を中期後半、後期前半、後期後半に大区分する。

中期後半 壺 形態—細口長頸壺主体。文様—繩文、箆描文主体。頸・胴部に文様をもつ。

甕 形態—口縁部が基本的に短い。単純と受口あり。

文様—口縁部に繩文・箆描文、胴部に櫛描文（波状文・斜走文）主体。

高环・鉢・瓶等 いずれも組成中における量的比率が低く、小型品が多い。

赤彩品が多い。鉢・瓶は以後大きな変化なし。

後期前半 壺 形態—胴部無花果形太頸壺主体、栗林細口長頸壺消滅

文様—箆描文・櫛描文組み合わせ、繩文基本的消滅。鋸齒文出現、T字文B・

矢羽根状文・波状文・簾状文・T字文C・横帶文など多彩。頸部のみ施文。赤彩傾向増加。

甕 形態—口縁部伸長化。中期的要楽継承甕、恒川的甕、後期型甕の3種。

文様—胴部と共に口縁部へ施文顯著。口縁部の繩文基本的消滅。櫛描文のみ。

高环 形態一大型化、赤彩化傾向定着。環部椀状と口縁部鉗状を呈するもの2種。

後期後半 壺 形態—胴下位に外稜もち縁れる太頸壺に統一化方向。

文様—頸部のみ施文。櫛描文への一本化、T字文Cへの一本化方向。赤彩盛行。

甕 形態—口～頸部弓状外反する形一つに統合。

文様—櫛描文のみ、波状文・斜走文の2種

高环 形態—前半の器形を繼承+環部下位が屈曲するもの出現。

中期後半=栗林式 後期前半=吉田式色彩濃厚 後期後半=箱清水式色彩濃厚

(2) 各期の年代決定

前項で3時期に大区分された佐久地方の弥生土器は日本史の中ではいつ頃に相当するのであるか。他地域、特に様式編年が確立されている当時の文化的中心地畿内地方と相互比較（クロス・チェック）して年代を推定することにしよう。

中期後半＝栗林式土器＝畿内Ⅲ～Ⅳ様式

新潟県下谷地遺跡で古い要素をもつ栗林式土器と畿内Ⅲ様式新段階併行の北陸・小松式が共存したことによる。紀元一世紀前後という意見が多い。

後期前半・後半＝畿内Ⅴ様式

直接相互比較出来る資料はないが、後期後半の直後と考えられる佐久の瀧の峯2号墳や小諸の久保田遺跡の古墳時代初期の土器群中に弥生時代末・古墳時代初期と呼ばれる畿内の庄内式土器、東海地方元屋敷式に近い関係をもつ土器が見いだせる。従ってこれらは併行関係をもつ蓋然性が強い。その前の段階の弥生時代後期前半・後半の土器群は畿内Ⅴ様式に併行すると思われる。紀元2～3世紀日本史上初の文献に登場するヒロイン卑弥呼が活躍する激動の時代である。

(3) 大区分の細分

3時期に大区分された各時期の土器群を今度は更に詳細に分析し、漸移的変化を追って見ることにしよう。

中期後半（栗林式土器）の流れ

中期後半の土器は、先述したように漸移的変化を示し、俊別できないため、古・中・新相と表現する。その時間的推移を推定するに当たっては、次のような基準を設定することにする。

- 1 細口長頸壺文様の消長・多寡
- 2 受口壺の増加および受口部の形骸化
- 3 器種構成の変化・多様化

その根拠、1について

栗林式土器の基本器種細口長頸壺は文様多～文様少への変遷を基本としている。但し、その変遷パターンは一系統のものではなく、同一セット内の文様多と文様少の壺の量的比率の差が時間差として反映される事が予想できる。

その根拠、2について

後期吉田式の受口口縁の壺と栗林式の受口口縁の壺は同じ系列上にあるものと考えられる。栗林式においては段部外縫が明瞭なものが目立つが、吉田式では縫が不明瞭で形骸化したものが多い。この型式変化は漸移的なことが予想され、栗林式の中でも採用できると考えられる。

その根拠、3について

栗林式の器種・器形は時期が新しくなるに従い、増加・多様化する傾向にあると考える。新しい器種・器形の幾つかは後期的土器様式の萌芽的要素をもつと考えられる。例えば後期に基本器種となる、太頸の壺の器種構成に占める割合の増加傾向などはその典型例である。

中期後半古相（從前の栗林I式）

該当資料 深堀（住居址）・北西の久保（Y71・107・115・128号住居址）・和田上南遺跡（Y5号住居址）出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・深鉢・鉢・瓶・高壺

各器種の特徴

壺 器形—細口長頸壺主体、他の太頸壺、袋状口縁の壺は少ない。細口長頸壺は単純口縁と受口縁の2種あり。

文様—細口長頸壺はいずれも頸部～胴部まで装飾すること（文様多）を好む。頸部のみ施文するもの（文様少）は少ない。縄文を地文とする。籠描文・櫛描文を組み合わせるが籠描文が多い。構成は横線文・連弧文・懸垂文・連続山形文など多彩で以後栗林式土器解体まで続く。

甕 器形—単純口縁で短頸のものが主体。

文様—口唇部縦文、口縁部無文、胴部に櫛描文が主体。櫛描文は中位に波状文（+懸垂文）、斜走文（縱位・横位・単斜あり）の2種を基本とする。上位に横線文を施すことあり。稀に籠描文あり。

台付甕 器形—小形で受口口縁を基本とする。ある意味で栗林式の特徴器種

文様—縦文地文で籠描文施文。口縁部は連続山形文、胴部は「コ」の字重ね文。

深鉢 器形—胴部から直立する口縁部。完存品なく、不明瞭。

文様一口縁部に縄文。

高 坯 器形一坯部楕状で口縁部が筒状に開く。安定器種でないためか類例少ない。無彩。

鉢 器形一楕状で概して小形。無彩品と赤彩品あり。

瓶 器形一逆「ハ」の字状に開き、底部に一孔。無彩品。

中期後半中相（従前の栗林II式）

該当資料 北西の久保（Y 1・13・65・75・79・91・121号住居址他）西八日町（Y 7号住居址）

遺跡出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・注口土器・鉢・瓶・高坏、（深鉢消滅）

各器種の特徴

壺 器形一細口長頸壺主体。他は袋状口縁壺・太頸壺は少ない。単純口縁と受口口縁あり。前代と基本的なプロポーション変化無し。

文様一頸部から胴部まで装飾される壺は減少著しく、変わって頸部のみ施文される壺が増加する。

甕 器形一単純口縁で短頸のもの主体で、古相と大きな変化無し。

文様一古相と大きな変化ないが、範描文は基本的に消滅する。

台付甕 器形・文様一不明瞭だが古相と大きな変化なし。

高 坯 器形一完存品少なく不明瞭。概して坯部楕状の小形品多く、脚部未発達。赤彩品多。

鉢 器形一楕状で概して小形。赤彩品が多い。

瓶 器形一古相と大差無し。

中期後半新相（従前の栗林II式）

該当資料 北西の久保（Y 68・69・78・85・86・98・122・126号住居址）西裏・竹田峯（18号

住居址を除く弥生中期住居址）遺跡出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・鉢・瓶・注口土器・高坏

各器種の特徴

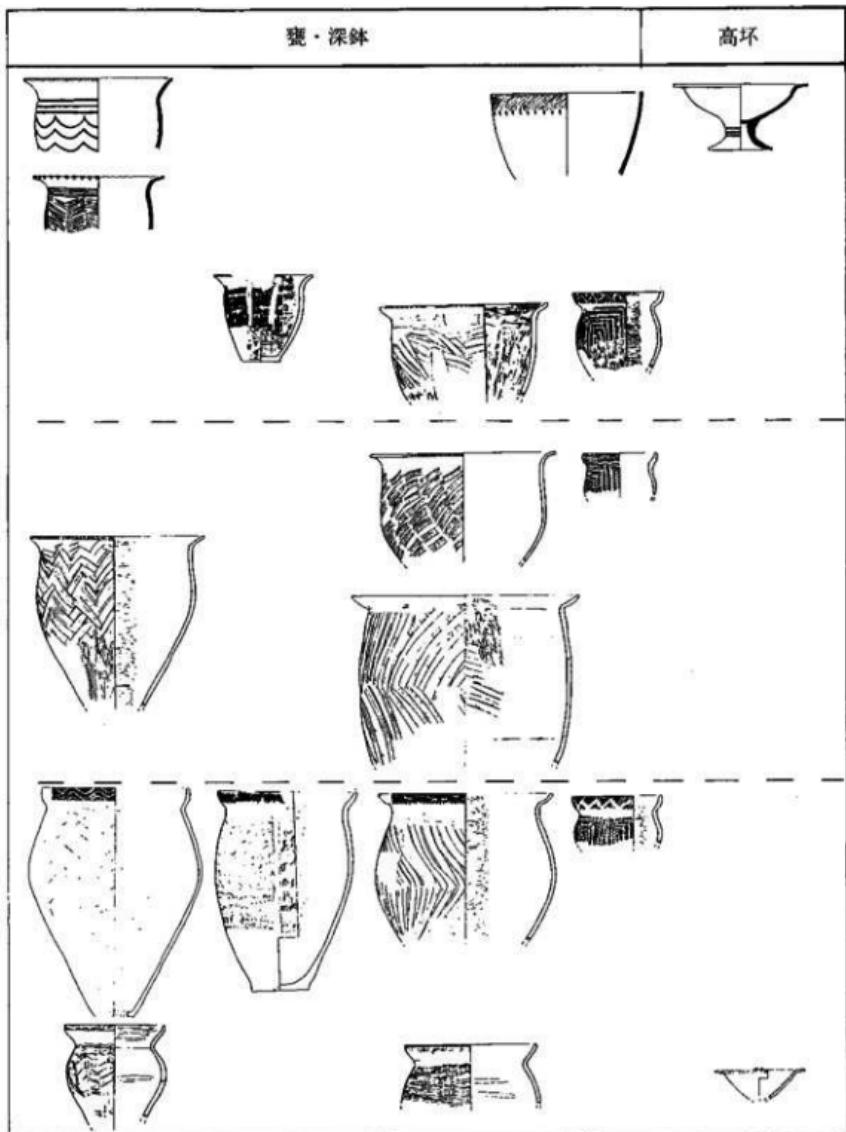
壺 器形一細口長頸壺主体だが、太頸壺の比率高まる。細口長頸壺は単純口縁と受口の2種、プロポーションは古・中相と大差なし。太頸壺は受口口縁を基本とする。受口口縁の段部外縁は丸みを帯びるものが多くなる。

文様一頸部への集中化傾向より頸著だが、頸～胴部に施文されるものも少量残る。範描文主体だが、櫛描文も増える。

甕 器形一単純口縁で短頸のものと共に、受口口縁が急増し単純口口縁を凌駕する。受

器種 時期	壺	鉢・瓶・その他
中期後半古相		
中期後半中相		
中期後半新相		

第70図 佐久地方弥生土器縄年(凍1)



口段部外縁は明瞭でなく丸み帯びる。胴部形態は古・中相を基本的に踏襲するが、全般的に張りが弱まり、球脛化したものも現れる。

文様ー口唇部櫛文、口縁部単純の場合無文・受口の場合縄文地文で竪描山形文・波状文などで装飾。胴部は古・中相と同じ櫛描文主体だが、稀に縄文もある。

台付甕 器形ー「コ」の字重ね文をもつものの古相からの変化は不明瞭だが大きな変化はないと思う。櫛描文施文品は超小形。

高 坏 器形ー环部椀状のものと口縁部水平に屈曲し、鉢状部分をもつもの2種があるが、基本的に小形で器種構成の中に占める割合少。赤彩を基本とする。

鉢 器形ー小形で椀状のものが主体。口縁部屈曲し、鉢状部をもつもの発現か。いずれも赤彩品多い。

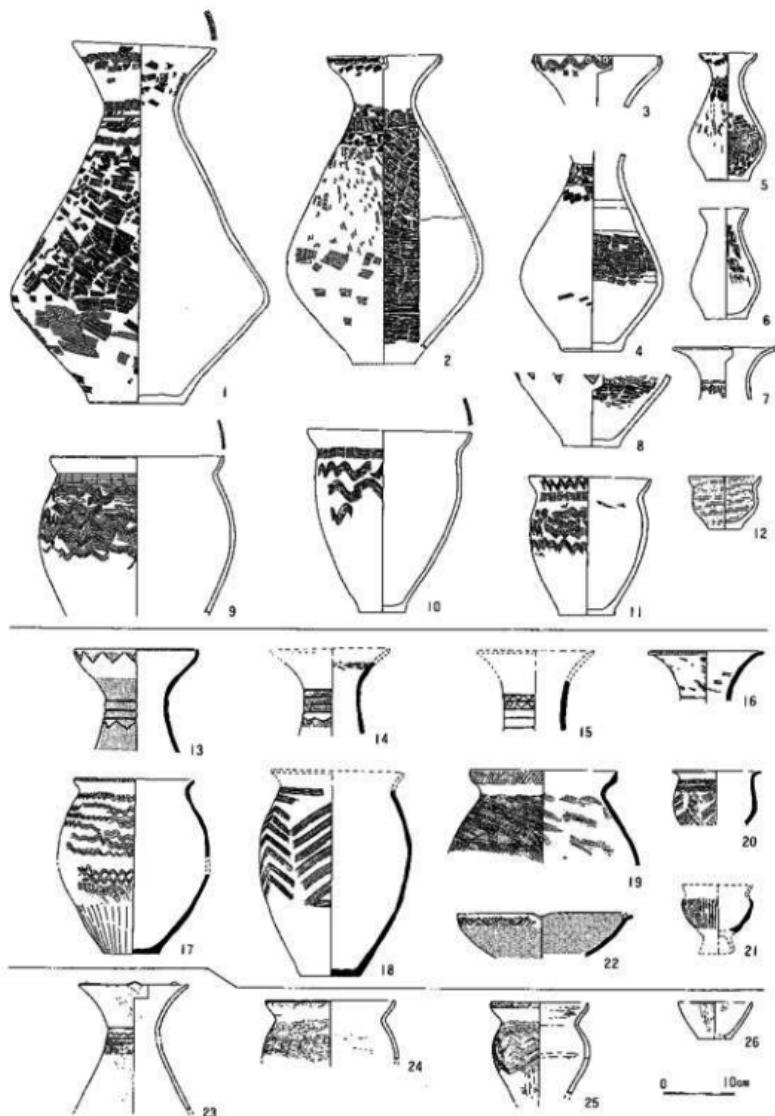
瓶 器形ー古・中相と大差なし。

中期後半最新相（従前の栗林直後型式、予測）

該当資料 西裏（18号住居址）・北西の久保（Y88号住居址）遺跡

佐久地方では西裏遺跡18号住居址出土資料などが相当すると思われるが、欠落器種多く内容が不明瞭。同時期と思われる松本市県遺跡8号住居址、長野市旭幼稚園遺跡、群馬県清里庚申塚遺跡住居址出土資料などを参考にすると細口長頸壺の施文簡略化、太頸壺増加、壺・甕の縄文消失化、受口口縁壺の口縁部形態化が新相よりも一層顕在化した土器群の存在が予想できる。中期後半様式の終焉、後期弥生土器へのスムースな以降を考えるうえで重要である。

以上、当地域の中期後半弥生土器は基本器種細口長頸壺における文様多要素と文様少要素の量的比率の推移、壺・器種内における太頸壺の増加傾向、受口甕の増加傾向、受口壺・甕の受口段部形態化傾向などの諸要素を集合させて検討し、始めてその変遷が理解できるものであり、極めて漸移的な連続性の強い土器様式であったことが伺える。



第71図 中期後半 最も新しい様相を示すと考えられる土器群

後期の流れ

佐久地方後期弥生土器は、研究史を順守するならば、従来どおり、吉田・箱清水式として型式内の変遷を想定すべきなのであろうが、最近、両型式の既成概念では理解仕切れない要素が佐久地方後期弥生土器の中に多く見られるようになってきた。それゆえに佐久地方の後期弥生土器は先学者が千曲川流域の後期縦年を組み立てているにもかかわらず取り扱われることが少ない。おそらく、後期のある段階にい栗林式土器文化成立以来、育まれた地域稻作文化が成熟し、自生的に発展した段階があり、その中で作り出された土器も千曲川流域他地域とは若干異なる姿となつて行ったのであろう。従って、佐久地方では千曲川中・下流域を中心に設定された吉田・箱清水式の型式名をストレートに用いるべきでないと考える。当地域後期弥生土器を検討した結果（後述されている）では、およそ5小期に細別されることが判明した。そのうち、前3段階までは吉田式的要素が、後2段階は箱清水式的要素が濃厚である。但し、これらは先に述べたように千曲川中・下流域とは若干趣が異なっていることを尊重して便宜的に前3段階を後期前半、後2段階を後半とくくってその変遷をおってみることにする。

後期前半古相

該当資料 佐久地方では良好な該当資料が乏しく周防畠B遺跡（Y2号住居址）のみ。1987年報告書が刊行された長野市吉田高校グランド遺跡出土土器を参考としてこの段階を想定する。

器種構成 壺・甕・台付甕・深鉢・鉢・高环・甑・蓋

各器種の特徴

壺 器形—栗林式基本器種細口長頸壺消滅、変わって太頸壺のみとなる。単純口縁と受口口縁あり。受口口縁は栗林式的形態残る。胴部形態はいわゆる「いちじく形」文様—範描文・櫛描文2種を採用。繩文は基本的に消滅。施文は頸部に集約、胴部施文は消滅。範描鋸歯文は象徵的、その他矢羽根状文・横縞文・簾状文・T字文B C・波状文など多形。赤彩化の傾向強まるがまだ、定着仕切ったとは言い難く無彩品多い。ミガキ少なく、ハケメ残す特徴あり。

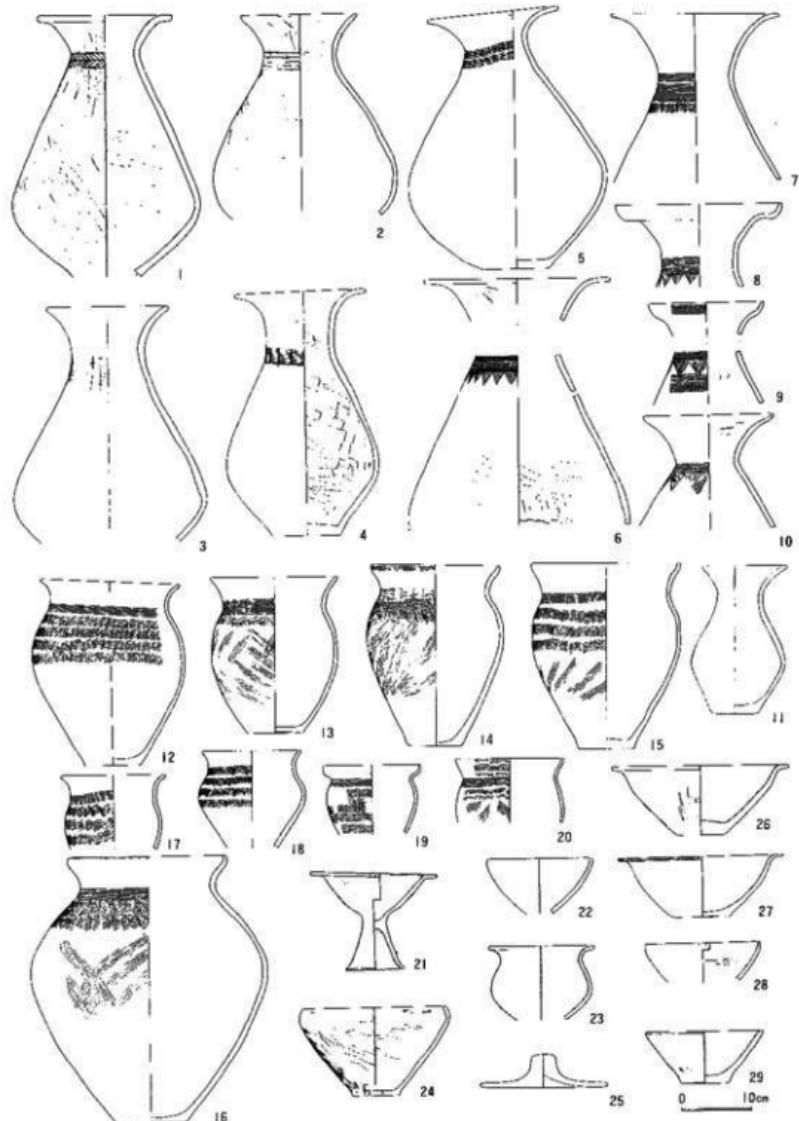
甕 器形—A形骸化した受口口縁のもの、B口縁部直立気味に開き、胴上位が強く張るもの、C口縁部弓状に外反するもの、3種あり。Aは栗林式からの継承要素、B Cは後期に入つて発展。3種統て口縁部伸長化指向する。

文様—櫛描文に一本化。口縁部無文、頸部櫛描文（簾状文）、胴部櫛描文（波状文・

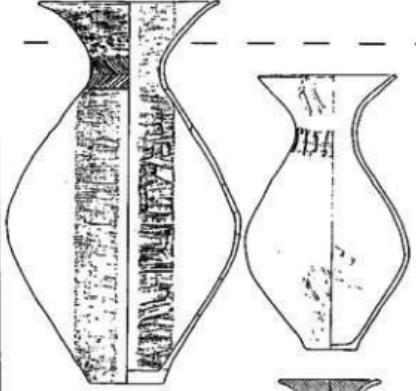
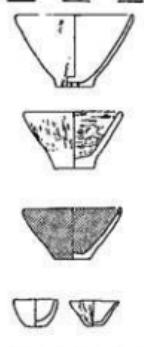
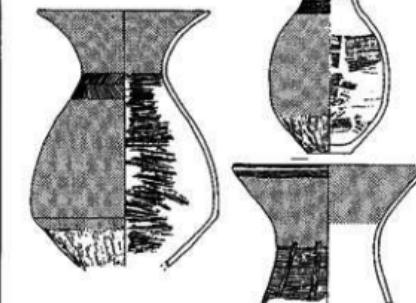
斜走文 斜走文は横羽状主体だが縦羽状も少量残る）が基本。

台付甕 器形・文様—基本的に小形。櫛描文施文。

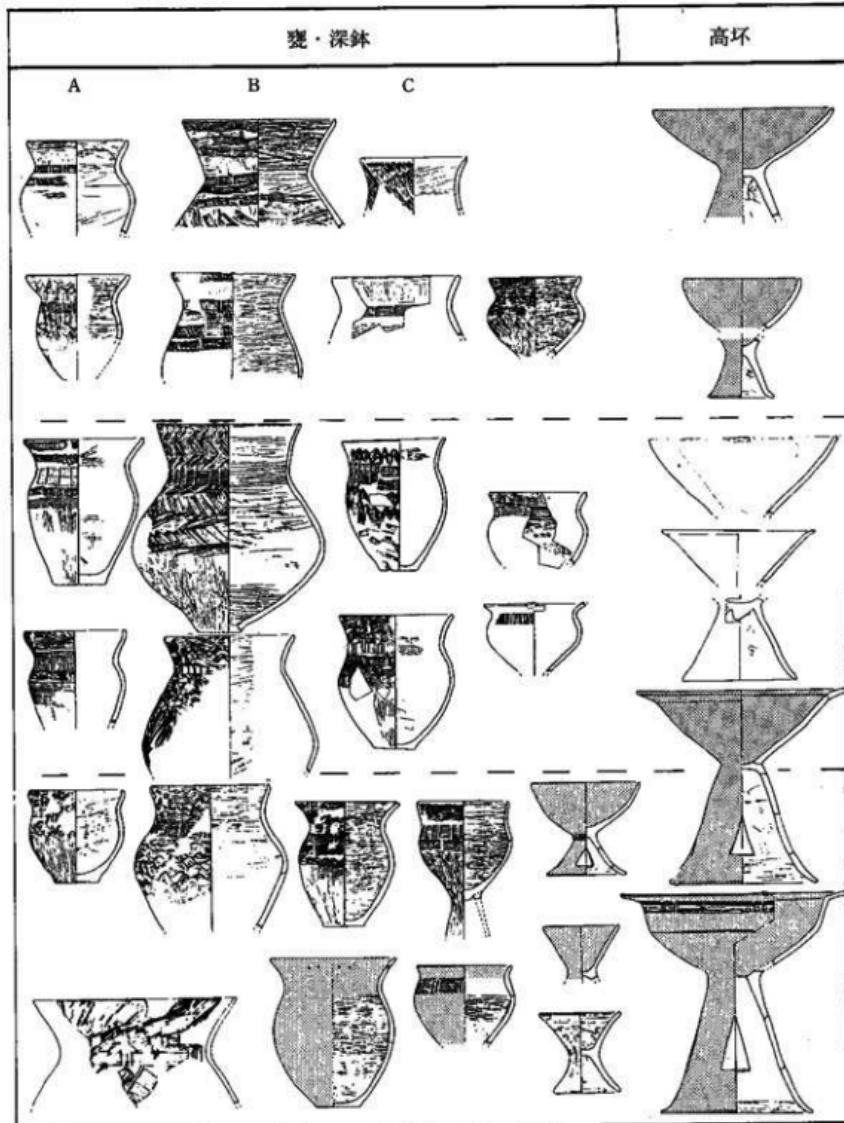
第4節 佐久地方中期後半～後期の弥生土器編年



第72図 後期前半占相 参考資料 長野市吉田高校グランド遺跡出土土器 (Y 2住・3・4・11・14・15・20、Y 3住6・13・16、Y 4住5、Y 5住23・24・27、Y 6住1・26、Y 7住2・7・12・18、Y 8住21)

器種 時期	壺	鉢・瓶・その他
後期前半古相		
後期前半中相		
後期前半新相		

第73図 佐久地方弥生土器編年図(2)



高 环 器形—环部椀状のものと口縁部屈曲して鉢状に開くもの2種。栗林式よりも大型化、脚部伸長化指向。赤彩を基本とする。

鉢 器形—小形で椀状を基本で、栗林式と大差ない。

深 鉢 器形—甕のCに似るが、赤彩品である。

瓶 器形—栗林式と基本的变化無し。

蓋 器形—天井部に突出したつまみもつもの出現？

後期前半中相

該当資料 北西の久保（Y64・66・77・123号住居址他）、周防畠B遺跡（Y5・7・14・16・20・D26等）野馬塚（Y1・2号住居址）、西裏（Y3号住居址）、竹田峯（Y1号住居址）、西一里塚（住居址）、上の台（Y1号住居址）、琵琶坂（Y1・2号住居址）遺跡出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・高环・鉢・深鉢（？）・瓶・蓋（？）

各器種の特徴

壺 器形—「いちじく形」胴部の太頸壺鉢古相と基本的形態変化無し。但し、栗林式的受口壺は消滅。

文様—頸部に範描文、構描文採用。構描文が増加。鑿齒文他文様構成は古相と基本的変化無し。赤彩の定着、量的に無彩品を凌駕する。

甕 器形—ABC3種構成は古相を踏襲。いずれも口縁部伸長化が達成され、後期的土器様式確立。

文様—構描文のみ。口縁部施文開始。頭部構描文（簾状文）、口・胴部構描文（波状文・斜走文 斜走文は横羽状主で縱羽状はごく稀となる）を基本とする。

台付甕 器形・文様一量的に少なく不明瞭、基本的に小形。構描文施文。

高 环 器形—古相からの大型化指向達成され、定着、安定器種となる。环部椀状のものと、口縁部屈曲し、鉢状に開くものの2種。赤彩傾向も顕著。

鉢・深鉢（？） 古相と大差ないと思われるが、深鉢・蓋は良好な資料なく、基本器種とし
瓶・蓋（？） てまだ定着していないことを伺わせる。また脚付鉢の出現はこの段階か。

後期前半新相

該当資料 周防畠B遺跡（1・2号周溝墓・Y13・15号住居址・27号土坑）出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・高环・深鉢・鉢・瓶・蓋（？）

各器種の特徴

- 壺** 器形—太頸壺は箱清水式的な胴下位にくびれを有するものが出現する。また、古・中相からの「いちじく形」胴部のものも残る。口縁部単純口縁のみ。
- 文様—頸部籠描文・構描文採用。籠描は矢羽根状文多、構描は横線文多。赤彩盛行。無彩品も残る。
- 甕** 器形—古中相に見られたABC3種が残るが弓盛外反の甕の量的比率高まる。
- 文様—構描文のみ。口・胴部は波状文・斜走文、頸部は簾状文を基本とし、斜走文は縦羽状消滅し、横羽状のみとなる。また、赤井土・吉ヶ谷式系の幾文施文土器客的に存在する。
- 台付甕** 器形—良好な資料少なく不明瞭。基本的に小形。
- 高 坯** 器形—中相の2種に加え、坯部中位に屈曲もつものが少量ながら加わる。赤彩化傾向顕著。
- 深 鉢** 弓状外反する甕の器形で全外面・口縁部内面に赤彩。
- 鉢** 梶状を呈する赤彩の小形品が主。
- 瓶・蓋（？）** 瓶は中相を踏襲する。蓋は良好な資料なく不明瞭。
- * 壺・甕は器形統一化の方向に向かっており、高坯は新器形が出現するなど、前半から後半への過渡的様相を示す段階。

後期後半古相

該当資料 右岸 上直路（Y1号住居址）、清水田（Y1・2・4～10号住居址）、北西の久保（Y93・100・120号住居址等）遺跡
 左岸 後沢（14・24号住居址）、勝間原（Y1・2号住居址）、舞台場（2・6・7・8・12号住居址）、宮の本遺跡出土土器

器種構成 壺・甕・台付甕・高坯・深鉢・鉢・瓶・蓋

各器種の特徴

- 壺** 器形—右岸 箱清水式的胴下位にくびれを有するもの主体となるが、前半に主体を占めた「いちじく形」胴部の壺も残る。口縁部単純口縁のみ。赤彩盛行。
- 左岸 箱清水式的壺で統一される。赤彩盛行。
- 文様—右岸 構描文主体だが籠描文も併用する。構成はT字文Cを基本とするが、籠描矢羽根状文、構描斜走文なども残る。
- 左岸 構描T字文Cでは統一される。
- 甕** 器形—右岸・左岸共に口縁部が弓状外反するものCで統一される。

文様一右岸 檜描波状文とともに斜走文を好む。

左岸 檜描波状文のみ。

台付甕 器形・文様一小形基本、櫛描文施文

高 坯 器形一右左岸共に、坏部楕状のものと口縁部水平に屈曲し鉗状部分をもつものが主体で、坏部中位に屈曲をもつものはない。赤彩盛行。

深 鉢 器形一甕のC形態だが赤彩。2孔一対の緊縛孔有するもの多い。この段階で定着か。脚のつくものも多い。

鉢 器形一椀状で小形が基本。殆どが赤彩される。

瓶 器形一おおぶりで逆台形で底部に一孔を有する。栗林式から殆ど変化無し。

蓋 器形一右左岸に地域差なし。天井部中央が山形に盛り上がるつまみを持ち、つまみ中央に一孔を有する。甕とセットになる。この段階で量が増え、安定器種として定着、古墳時代まで継承される。

* 壺・甕に右岸・左岸の地域相が明確化する。壺・甕の器形統一化が達成される。

後期後半新相

該当資料 右岸 下小平（Y1～5号住居址）、池畠（Y1・2号住居址）、清水田（Y10号住居址）、腰巻（6号住居址）、戸坂（環濠）、西近津（住居址）、栗毛坂遺跡B地区（住居址）出土土器

左岸 竹田峯（壺棺）？

器種構成 壺・甕・台付甕（？）・高坏・深鉢（？）・鉢・瓶・蓋 外来系土器

各器種の特徴

壺 器形一胴下位のくびれは継承するが、前代に比し頸部の屈曲が強まり、頸部が張って球転化するものが目立つ。また、前まで影を潜めていた受口口縁が顕在化する。おそらく、中期後半のものとは質的に異なるものであろう。

文様一櫛描文のみとなり、篦描文消滅。T字文Cは簾状文と組み合せたものが多くなる。赤彩品とともに無彩品も多くなる。

甕 器形一古相の完成された形態Cとともに胴下位が強る下彫れの形態が増加する。折り返し口縁も散見される。

文様一櫛描文のみ。波状文と斜走文の2種あり。一つの土器に波・斜両方施文する混沌としたものもある。

高 坯 器形一口縁部水平に屈曲し、鉗状に開くものが消滅、変わって坏部中位に屈曲をもつものが、主体を占めるようになる。坏部楕状のものは残る。赤彩傾向は顕

著。

台付甕 器形一良好な資料なく不明瞭だが、小形、横描文施文基本。

深 鉢 器形一良好な資料なく不明瞭。

鉢 器形一椀状で赤彩、小形基本。後期前半に基本器種として定着し全期を通じて大きな変化無し。

甑 器形一逆台形状で底部に一孔。中期後半から基本的変化無し。

蓋 器形一天井部中央が山形に盛り上がるつまみを持ち、つまみ部中央に一孔(蒸気孔)をもつ新相からの形態継承。

外来系土器一少數ながら東海系元屋敷式小型高坏などがみられる。

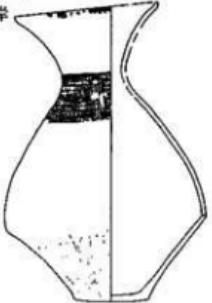
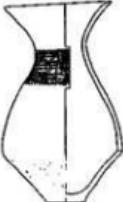
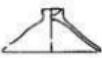
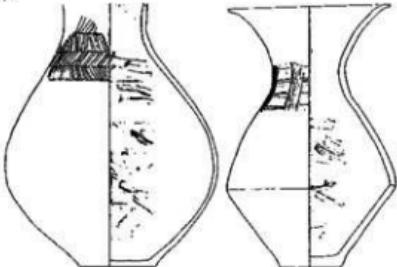
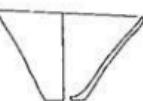
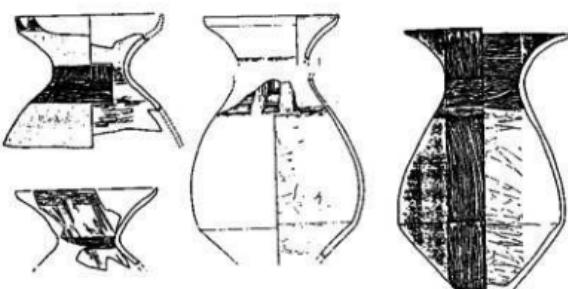
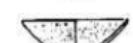
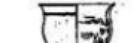
* 佐久地方弥生土器の各器種・器形の解体が始まること。在地の系統では円滑に発達し得ない器種・器形が出現する。

(4) まとめ

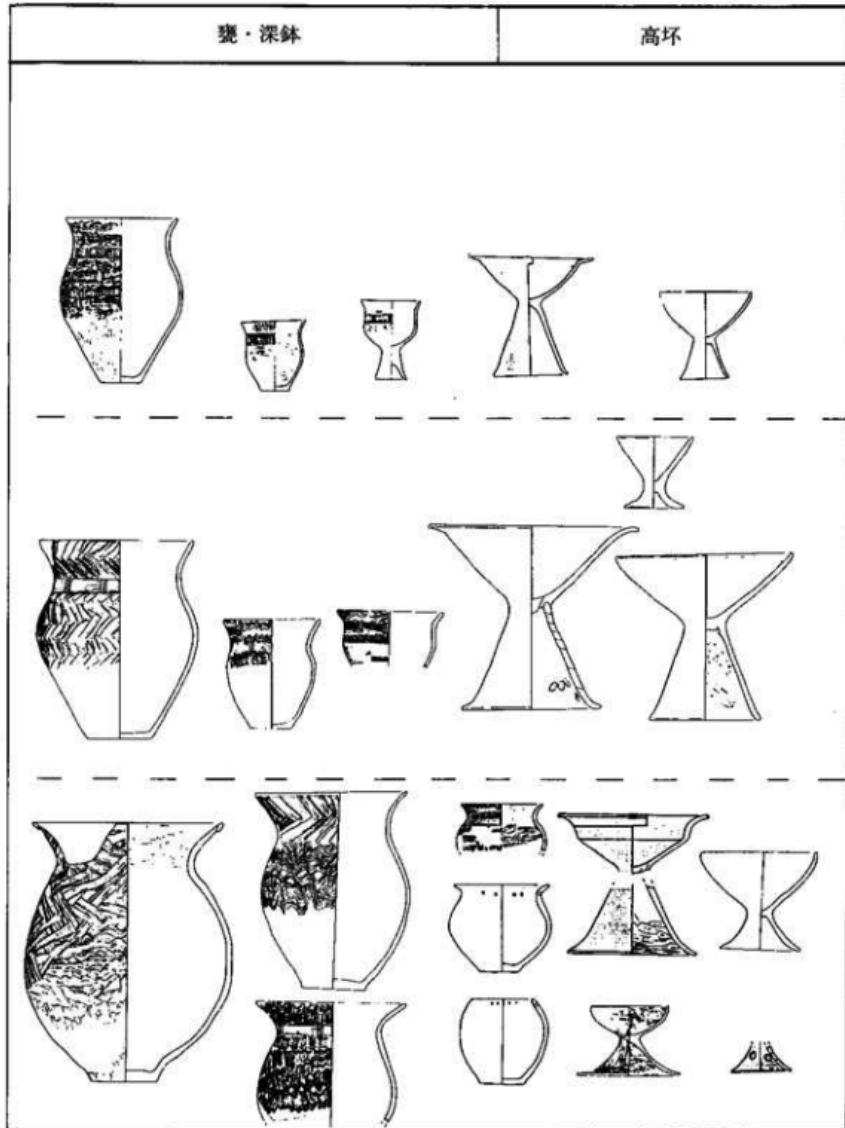
以上、後期の土器は後期前半古相において栗林様式からの脱却が果され、前半中相に至って後期的土器様式が定着して以降は、前半新相遇渡期を介在して漸移的な変化を遂げ、後半古相において完成された姿(左岸ではいわゆる箱清水式土器の典型)を創出する。おそらく、佐久地域の弥生社会が最も成熟した時期でもあったのだろう。しかし、これも長くは続かず、古墳発生の余波に押されて後半新相では解体が始まるのである。この一連の流れの中で注目すべきは、後半古相において顕在化する千曲川右岸と左岸の地域差である。左岸の様相はいわゆる千曲川中・下流域の箱清水式と共に通するのに対し、右岸の様相は若干ニュアンスを異にする。即ち、並における「いちじく形」及び竪描矢羽根状文、甕における斜走文などの明らかに吉田式土器の主要要素と考えられる形態・文様の残像現象である。このような旧態を保持する土器群に対してストレートに箱清水式と呼ぶことに私はためらいを感じざるを得ない。同一様式内に取り込まれても、小地域内に地域相が明確な場合、地域型式を新たに独立させるべきではないだろうか。例えば、研究史上抹殺された岩村田式というように……(千曲川を隔てて異なる後期弥生土器の差が意味することについては第4章 考察編で再考することにする。)

また、土器を赤く装飾する傾向は、中期後半古相から始まる。赤い装飾は、当初は盛り付け用の器・鉢、少し遅れて小形の高坏を中心として行われたが、弥生社会の発展・成熟に伴い徐々に甕・深鉢など貯蔵用の器も飾られるようになり、後期前半新相・後期後半古相で赤い装飾の最盛期を迎える。日常の器を赤く塗ることにどんな意図を込めていたのか分からぬが、これらの土器が千曲川流域の弥生社会のまとまりを誇示する象徴的な存在であったことは確かであろう。

本書の研究は10年前、「佐久の弥生時代は赤い土器のクニ」という素朴な考え方から出発したが、

器種 時期	壺	鉢・瓶・蓋・その他
後期後半古相 千曲川左岸		 
後期後半新相 千曲川右岸		  
後期後半新相		  

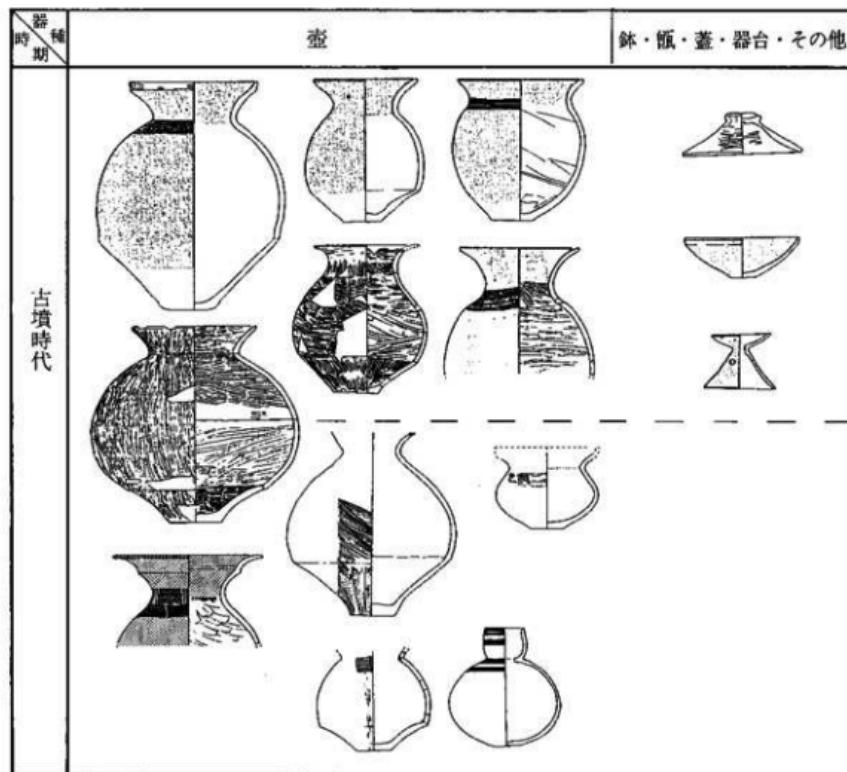
第74図 佐久地方弥生土器縦年図(3)



この創造もあながち間違ってはいないと私は思う。

(5) 蛇足 古墳時代初頭の土器

最近、小型器台・高坏が伴出する、古墳時代と言われる土器群の中にも弥生土器の伝統要素が濃厚に残っていることが分かって来た。時代は古墳社会に移行していく中、地域に根差して発展した弥生文化・生活様式の伝統はたやすく捨て去ることは出来なかつたのであろう。大型前方後円墳築造未対象地・即ちヤマト政権の中枢から外された佐久地方では、尚更顕著であったと思われる。そこでもう少し、弥生土器が完全に終焉する時期まで追及してみようと思うのである。



第75図 蛇足古墳時代の弥生系土器

第4節 佐久地方中期後半～後期の弥生土器編年

該当資料 右岸 小諸市久保田（Y 2・3号住居址・周溝墓）、和田原（Y 1～5号住居址）、

軽井沢町県（1・2号住居址）、佐久市下小平（1・2号周溝墓）遺跡出土土器

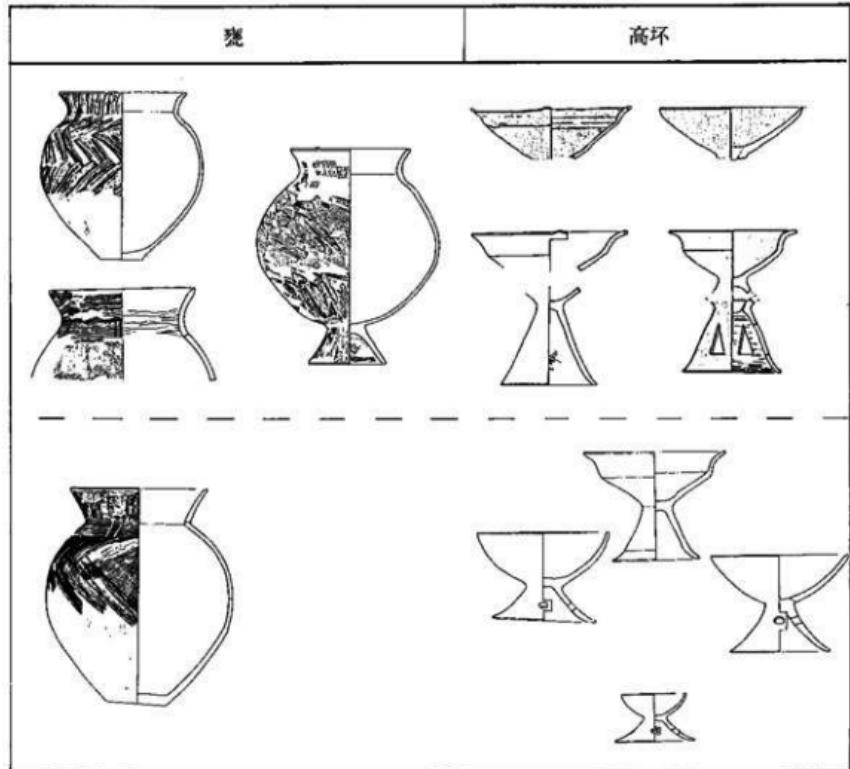
左岸 佐久市瀧の峯2号墳、立科町中原遺跡出土土器

弥生系土器の器種 壺・甕・高环・鉢

各器種の特徴

壺 頸部～胴部は弥生終末期よりも更に屈曲が強まり、球胸化が顕著となる。赤彩は丁寧に施されるものもあるが、無彩品、更にはミガキさえなされない粗末なものもある。胴下位のくびれは顕著に残る。これにはこだわりがあったのか、5世紀末の土器セット中（御代田町前田遺跡H63号住居址）にもみることが出来る。

T字文Cは崩壊、単なる横線文が多くなる。



- 壺 弥生後期後半の形態を踏襲するものと共に、頸部～胴部屈曲強まり、球脛化するものがみられる。横描波状文・斜走文あり。波状文はおざなりな施文となる。斜走文は右岸・左岸佐久地方全域に広がる。
- 高 坯 环部椀状のものと、环部中位に屈曲をもつものが残る。赤彩顯著。
- 鉢 椋状で赤彩品。小形品多い。

古墳時代前期後半

弥生時代系統の土器は殆ど無くなる。特に壺・甕はほぼ消滅する。しかし、鉢類は不明瞭ではあるが残っていたようで、古墳時代前期後半の竪穴住居址を調査していると、赤い土器の破片がしばしば見掛けられる。佐久地方ではこの時代まで弥生社会の土器様式が細々とではあるが生きていたようである。

（文責 小山 岳夫）

第4章 考察編

第1節 信州佐久平弥生文化の特質

小山岳夫

(1) 日本最高標高地点の弥生文化（別図参照）

第2章で詳述されているので、かい摘まんでその特徴を述べる。

繩文終末・弥生前期末～中期前半の初期弥生文化導入時においては、旧南佐久地方の南牧村・川上村・佐久町・白田町・佐久市岸野や、旧北佐久地方の望月町などごく一部の例外を除いて高冷の山間部に分布する。これらの地域は現在でも稻作農耕の不適作地であり、当時に稻作を基盤として集落形成されたとはとても思えない。佐久市内平坦部における大規模調査の状況からみて、今後この状況が大きく変わるのは思えず、初期農耕社会の主要舞台として何故、むしろ狩猟・漁撈に有利な彼の地が選択されたか、熟考を要するが、今少し正式調査が増えるまで結論を持ち越したい。

中期後半～後期の稻作農耕社会定着・発展期には、中心部は盆地平坦面が開ける佐久市域の低湿地・沖積地を背後に控えた千曲川の支流沿いの比較的気候が温暖な標高670～720mの地域（地図で言うと編みかけ部分の三地域ブロック）にしばられることが明らかになって来た。一つは千曲川右岸の湯川・濁川流域を中心とする浅間山麓末端部の「田切り台地」が発達する地域、一つは千曲川右岸の志賀・滑津川流域を中心とする沖積低地の地域、一つは千曲川左岸の片貝川流域を中心とする蓼科東麓末端部の低丘陵地帯である。同じ土器様式の弥生文化が繁栄した長野善光寺平は標高350m内外、上田塙田平は標高500m内外、松本盆地は標高500m内外であり、長野県内では標高760m内外の諏訪・岡谷と並び、最も高冷地に展開した稻作農耕を基盤とした弥生文化である。おそらく、日本列島の中でも最高冷地の部類に属するものと思われる。劣悪な自然条件を克服して開拓を行った我々の名も知らぬ祖先に大いなる感動を覚えずにはいられない。

(2) 千曲川右岸・左岸の地域相

この小さな佐久地域の中で発達した弥生文化にも、後期のある時期から千曲川を隔てた西と東では異なる顔付きをもつことが本書 第3章 土器の移り変わり（編年）の分析や、他の研究で明らかになって来た。

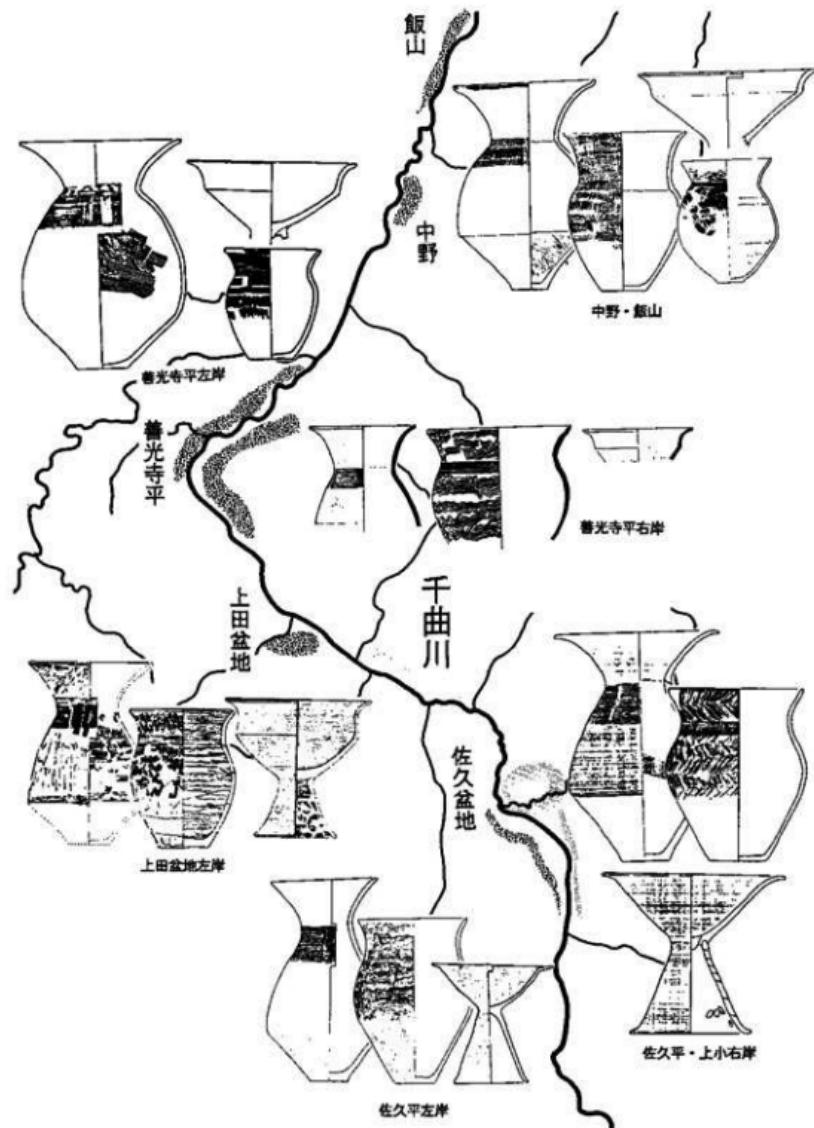
千曲川の東、右岸地域は北西の久保遺跡、周防畑B遺跡を代表とする浅間山麓南の末端部、田切り地形が発達する地域で、後期後半古相の土器の顔付きは第76図のように壺の籠描矢羽根状文、壺の構造斜走文を好むことに象徴される。この文様はこれより前の段階の吉田式土器の主体的文様でその伝統が色濃く継承されたものと考えられる。このような古奥い要素が古墳が形成される

段階までいつまでも残る地域は、同じ千曲川右岸浅間山麓末端部の東部町で見られる程度で、県内・県外共にほかでは余り見られないと聞く（最近、飯山市宮反遺跡で古墳初頭段階の土器群中に斜走文をもつ甕が含まれていることを知った。これをどのように理解するか新たな課題が浮かび上がった。また、群馬県でも後期後半以降にも甕に斜走文が残ると箕郷町教育委員会田口一郎氏より教示された。）。即ち、千曲川右岸浅間山麓末端部において独自性の強い、外にあまり影響を及ぼさない封鎖的な文化圏が形成されていたことが予想されるのである。

一方、千曲川の西、左岸地域は後沢遺跡を代表とする千曲川の沖積地を背後に控えた八ヶ岳・蓼科山麓末端部の低丘陵地帯に弥生遺跡の主舞台がある。後期後半古相の土器の顔付きは第76図のように壺のT字文、甕の波状文ではほぼ統一され、右岸のように吉田式の旧態前とした要素がいつまでも残っていることはない。このような壺・甕の在り方は善光寺平、上田の塩田平などと共に通るもので、間接的には群馬県・埼玉県にも共通しており、右岸とは対称的な開放的で外に対しても影響力の強い文化圏が善光寺平を核とする千曲川左岸沿いに展開されていたと考えられる訳である。従って、あくまで推測の段階であるが、千曲川流域の弥生社会において圧倒的に広大な後背湿地＝水田可耕地をもち、絶大な生産力を背景に優位性を誇った善光寺平を核とする弥生文化が千曲川左岸沿いにネットワークを張って流域内を監視していたのではないかとも考えられる。これに関連して長野市の千野浩氏はおもしろい発言をした。「後沢遺跡は善光寺平の植民地ではないか」と……。このネットワークは、更に拡大解釈すれば急峻な峠を越えて同じ櫛描文化圏の群馬県（櫛式）や埼玉県（岩鼻式）に通じる長大なものであったのかもしれない。その意味からも、最近東国初の高地性集落として脚光を集めている、群馬県富岡市中高瀬観音山遺跡の発見は注目されるところである。

土器ばかりに注目してきたが、文化内容に差があったことが、遺構にも反映されている。既に林・花岡氏によって指摘されているように炉が違うのである。左岸は地床炉主体であるのに対し、右岸は地床炉のほか、佐久に主体を占める地域性豊かな石匂い炉、土器敷き炉、諏訪も含め天竜川流域特有の埋甕炉など多様である。左岸はやはり善光寺的、右岸は地域の独自性に加え、天竜川流域との交流が読み取れる。両者の文化的内容の差異はこれから益々明らかになると思われる。

このように小さな佐久地方の中において展開された二つの弥生文化も畿内・東海地方から怒濤のごとく押し寄せる古墳文化・古代国家形成の波には抗しきれず、解体を余儀なくされる。特に善光寺を核とする弥生社会のネットワークの存在は新しい社会体制において全く無意味なものになってしまったのであろう。善光寺軍はここに佐久から退却してゆく。一方、佐久の風土の中で育まれた右岸の弥生文化の伝統は、大形前方後円墳築造から見放された、つまり、古墳社会の中核となり得なかった佐久平においては善光寺の文化撤退後、地域内全域に広がり、少なからず



第76図 千曲川流域の後期弥生土器の分布（網部分は弥生集落密集地）

継承されていった。このことは瀧の峯2号墳から出土した甕に右岸的な描画斜走文が波及していることから読み取れる。瀧の峯2号墳成立に当たっては全国的な古墳建築という大きな時代のうねりの中にあったことは事実であるが、同時に佐久地域の中には地域生え抜きの弥生文化の伝統も深く関与していたことも見逃すことが出来ないのである。現に瀧の峯古墳群は「同時期・同規模の埋葬構造の群在」「前方部の溝の掘り残し」「副葬品が少ない（圧倒的優位性がない）」など岩崎教授が列挙された弥生時代の遺制とも考えられる要素を数多く内包しているのである。

(3) 集落

現在、佐久平で全容がほぼ判明している弥生集落は北西の久保遺跡以外になく、他は規模がつかみ切れない状況にあるので、あくまで想像段階の話にならざるを得ない。

佐久平における弥生集落の密集分布地域は先述したように、標高670～710mの湯川・濁川を中心とするブロックと滑津川を中心とするブロック、片貝川を中心とするブロックにある。この中で佐久地域固有の文化を開拓させ、盟主的な地位を保ち得たのは、遺跡分布密度、集落規模、水田可耕地から見ても湯川・濁川ブロックであったと考えられる。

湯川・濁川ブロックにおける拠点集落は常時同じ場所に占地する事なく、絶えず移動を繰り返していたことが、北西の久保遺跡、周防畠B遺跡など拠点集落と考えられる幾つかの大規模調査の成果によって推定できる。つまり、これらの集落は調査分析の結果、中期後半～後期終末まで連続して営まれることなく、必ず、どこかの段階で一旦断続しているし、北西の久保遺跡、周防畠B遺跡、清水田遺跡など拠点集落遺跡の出土土器を相互比較すると同時併存した蓋然性は薄く、若干の時期偏差が必ず認められるのである。この拠点集落の移動現象は、傑出した盟主の不在を表すとともに、湯川・濁川ブロック内における生産基盤の不安定さを示すものであろう。現実に当ブロックの水田可耕地は灌漑用水設備が整う中世以前は良水田地帯とは言えなかつたようだ。弥生時代において畔・水路が完備された完成された姿の水田があったとは考え難く、直説き、溼田方式の生産効率の悪い水田經營が行われていた蓋然性が高い。その生産性の悪さゆえに拠点移動の必要に迫られたのではなかろうか。

拠点集落と考えられる調査された遺跡を時期別に記すと中期後半中・新相では北西の久保遺跡、一時期おいた後期前半中相でも北西の久保遺跡、前半新相では周防畠B遺跡、後期後半古相では清水田遺跡となる。このうち、集落の全容が判明しているのは北西の久保遺跡だけであるが、この遺跡内の集落構成は、中期後半段階では一時期、竪穴住居址40軒前後であったのに対し、後期前半では一時期、20軒前後と縮小化の傾向をたどる。詳細分布調査の成果によって、中期後半に比べ後期の遺跡分布数が遙かに凌駕している状況を鑑みると、弥生社会の成熟に伴い、湯川・濁

川ブロックの農業共同体が分化・拡散して領域内の開拓を進めて行った活発な社会情勢が読み取れるのである。ただし、当方の弥生集落が、九州一吉野ノ里、畿内一池上・唐古、東海一朝日など全城10~25haを測る大集落を控えた弥生文化先進地域に比べるといかに閑村であったかを感じざるを得ない。当方の最大級と考えられている北西の久保遺跡でもたった1.5haなのである。それでは県内ではどの程度に位置付けられるのであろうかという事になるが、やはり長野市・松本市には劣るようだ。長野市では広大な後背湿地を控えた一連の横出・塩崎・簾ノ井遺跡群などの集落規模は想像を絶するものがあり、松本市では宮淵本村遺跡などが北西の久保遺跡の規模を遙かに凌駕するようだ。また、上田市の状況は不明瞭だが、塩田平の琵琶塚遺跡などは相当規模のものであるいは北西の久保遺跡を超えるかもしれない。

次に集落構造について触れておきたい。佐久地方の拠点集落内において盟主的な位置を占めていたのはやはり床面積40m²を超える大型の竪穴住居であったようだ。その有力な証拠に、弥生社会のステータス・シンボル15点の銅鏡が出土した上直路遺跡の住居址は長軸10m佐久地方最大のものであった。また、多くの集落遺跡では2軒前後の大型竪穴住居を中心として10軒前後の床面積20m²前後の中・小形の竪穴住居が一単位となり、その単位の複合体が集落を築いている傾向が見られるのである。集落の全容が判明している北西の久保遺跡では、特にその傾向が顕著である。

ところで、研究を進めていると、佐久地方では、弥生集落を構成する要素が竪穴住居以外にならぬかという素朴な疑問に突き当たる。現在のところ、竪穴住居以外の弥生時代の確実な建物址、例えば、高床建物・掘立柱建物などは未発見である。今後発見される可能性も捨て難いが、現状では当方弥生時代の一般的な建物とは言い難い。西日本に比しての文化の後進性がこの点にも現れているのかもしれない。

環濠集落・高地性集落について

現在、佐賀県吉野ノ里遺跡や群馬県中高瀬觀音山遺跡等の発掘調査が契機となって弥生時代の環濠集落・高地性集落が一般の考古学ファンの間でも耳慣れた言葉となって来た。佐久地方はもとより長野県では、未だに確実なムラの周囲を濠と土堤で囲った環濠集落は発見されていない。ただし、佐久市西一里塚・戸坂遺跡、塩尻市上木戸遺跡等ではその可能性が指摘出来る溝が発見されている。これらの溝はいずれも後期後半以降のものと考えられ、今後の調査ではこの時期の環濠集落が発見される蓋然性が極めて高いと言える。ただし、中期後半に関しては佐久地方に限っては、最大規模と言われる北西の久保遺跡にも環濠がないことから、未発達であったと考えざるを得ない。これは反面、平和な社会情勢であったということにもなるのであろう。

高地性集落については群馬県中高瀬觀音山遺跡の発見によって佐久を基点とする千曲川流域にも登るにしんどいような高所に位置する同種の遺跡が存在する可能性が強まった。先述したよ

うに千曲川左岸沿いの遺跡から出土した後期後半古相の弥生土器は普光寺平を核として佐久・上田と非常に似通っている。この共通性から千曲川流域の弥生時代ネットワークの構想を前述したのであるが、更に拡大解釈すればこれらの背後に通信機能をもった集落が、流域各地の見晴らしの良い高台に点々と配備されていたと考えても決して不自然でない。この通信網は急峻な峠を越えて中高瀬親音山遺跡など群馬県へも通じる長大なものであったのかも知れない。いずれにしても佐久はもとより、千曲川流域の弥生社会を意味付けるためには、高地性集落の探索が急務となつて来た。

(4) 生産遺跡

40年前、静岡県登呂遺跡で始めて調査されて以来、現在、全国各地で弥生時代水田が発見されている。長野県でも長野市石川条里・川田条里遺跡等で完成された姿の水田遺構が発見された。しかし、佐久地方では水田遺構が未発見である。ただし、湯川・濁川ブロックに包括される円正坊遺跡群葛石遺跡では「田切り台地」末端部から低湿地にかけての調査が行われ、シルト質層上面の黒墨層が弥生時代の単独文化層であることが確認された。この土壤はプラントオバール分析の結果、稻科の植物が少量含まれており、近隣で水田経営が行われていた可能性有りとの結論が得られた。従って、弥生時代において湯川・濁川密集地帯（別図参照）の馬蹄状に連なる集落に取り囲まれる広大な低湿地は水田経営が行われていた蓋然性が高い。

また、片貝川密集地帯（別図参照）の蓼科山麓末端部の低丘陵地帯に点在する弥生集落の眼下に広がる千曲川左岸の沖積地帯からは、大門下遺跡や舞台場遺跡下から「田下駄」等の木製品が発見されたとのことであり、やはり、この地で水田経営が行われていたと考えられる。

今まで低地の調査が積極的に行われていなかったが、今後、これらの地域のどこかで水田址の発見が期待される。しかし、これらが、どのような姿をしているのか想像の域を出ないが、前項で述べたように集落の展開から見れば、湿地・沖積地帯全域を開拓し得たとはとても思えず、また、さほど管理された水田が造営されていたとも思えない。この辺に佐久地方が県内・千曲川流域の弥生社会においてイニシアチブを取れなかつた有力な要因のひとつではないだろうか。

(5) 墓制

佐久地方では、弥生墓址の発見例は10遺跡・43例を数える。

前期末から中期前半の墓址の発掘例は、全くないが、佐久町上の原遺跡の既出資料(磯崎 1955)は偶然の発見時、土器の中に骨が入っていたと言われ、再葬墓であった可能性が強い。また、佐久市月明沢遺跡からは、中期初頭と考えられる成人4体、幼児1体分の人骨が出土している(西沢・小松 1978)。当該期の土器資料は、千曲川上流域の山間部に偏在する傾向があり、今後、この地域で好例の発見が期待されるが、前期末～中期初頭はいずれにしても東日本の再葬墓の繁榮地であったことが予想できる。

栗林式土器成立直になると長野市周辺では塩崎遺跡群松筋遺跡に見られるような畿内的な小口孔付き組み合わせ式木棺墓が東日本の中でも、いち早く成立するようであるが、佐久地方ではどのような状況を呈していたのか資料自体が全くないため、検討がつかない。

中期後半の墓制は更に不明確で、佐久市北西の久保遺跡の壺棺墓(小山 1986)が知られるのみであるが、これは当該期の普遍的墓制とは言い難い。最近、長野県埋蔵文化財センターによる長野市松代町松原遺跡の調査において確実に栗林式土器が伴出する、疊敷きの側板孔付き組み合わせ式木棺墓が検出され、当期の墓制が明らかになりつつある。このように他地域の状況と北西の久保遺跡の後期集落に対応すると考えられる木棺墓の存在とを考え合わせると佐久地方にも中期後半段階に木棺墓が存在した蓋然性が極めて高い。また、方形周溝墓については、県内、隣接する群馬県において確実な例がない。この状態は今後も大きく変わらないものと考えられ、栗林式・竜見町式土器文化圏内においては、方形周溝墓が未発達であったと考えられる。

後期になると好例が増加する。前半期の拠点的集落に対応すると考えられる墓域は、周防畠B遺跡(林 1980)、北西の久保遺跡に見られる。周防畠B遺跡は、台状部に木棺墓と壺棺が副葬される小形円形周溝墓一基と17基の土坑墓群、北西の久保遺跡は四隅の切れる小形方形周溝墓と8～9基の木棺墓によって墓域構成される。周防畠B遺跡の周溝墓・土坑墓は土器供獻が盛んである。一から数基の周溝墓と群在する土坑墓か木棺墓によって構成される墓域は、当該期佐久地方のみならず、千曲川流域の拠点的集落に対応する一般的な在り方を示していると思われる。方形・円形周溝墓が、群在する群馬県とは異なる状況を呈しているのである。このほか、葛石遺跡の壺棺墓(小山 1988)も前半期の墓制である。

後半期から古墳時代初頭では、後沢(林 1981)・下小平(林・工藤 1981)・久保田(花岡 1984)等の各遺跡で方形周溝墓、上直路遺跡(林 1985)で屋内埋葬の土坑墓、戸坂(小山 1984)・竹田峯遺跡(三石・高村 1986)で壺棺墓、また、山頂上的大形墳墓・滝の峯2号墳(林 1987)などがみられる。

方形周溝墓は前半期が6m内外であったのに比べ漸次10m内外と大型化する傾向が見られる。墓域構成は前半代のように土坑墓とセットになることは少なく、周溝墓のみ三・四基前後で構成されるのが一般的のようであるが、関東のように十数基あるいは数十基と群在することはない。形態も前半代の不整円形を継承するもの（久保田遺跡例）とともにしっかりした方形プランをもつもの（後沢・下小平遺跡例）も定着する。

上直路遺跡の屋内埋葬の土坑墓は、後半期でも古相に位置付けられ、全国的にも特異な墓址である。南北10m、東西7mの佐久地方最大級の豊穴住居址内東壁中程のベッド状遺構に隣接する南北推定1.6m、東西1.3mの長方形土壙内から右腕に5点、左腕に10点の銅釧が装着された成人骨が検出された。人骨は南頭位で葬られていたようであるが、頭部は後世の攪乱のため遺存していない。遺存している人骨はいずれもそれほど強くない火を受けていて小さなひびが生じているため、遺骸を埋めたあと火をかけて儀式がおこなわれたと推定される。土壙底面・遺骸直下には木炭が散かれ、遺骸上には甕3点・高环1点が置かれていた。また、住居南壁ぎわにも甕・甕・高环・鉢・瓶・手づくねなど完形土器が30個体以上が密集して出土している。

釧は鋳造品で、径6cm、幅0.6~0.8cm、厚さ1.6mmを測り、円形を呈する。子供のころから當時身につけていなければ装着できるサイズでなく、葬られた人は幼年時より司祭的性格をもった選ばれた人物が想定される。

壺棺墓は蓋付きであることが多い。性格については不明確であるが、竹田峯遺跡の壺棺墓より生後六ヶ月の胎児骨が検出されたことにより、後期の壺棺には、胎児および乳幼児が被葬の対象となっていた可能性が強まっている。また、壺棺内には千曲川流域全般に数個の管玉、ガラス小玉が副葬される例が比較的多く、子供の死亡に対する当時の特別な思い入れが浮かばれる。

瀧の峯2号墳は当地域の農業共同体の完熟した姿を示す好例である。弥生時代の墓址の集落に隣接する一般的な立地とは根本的に異なる山頂部にあり、規模も当地域では最大級の墳墓である。これと同質前方後方型の墓址が善光寺平など前方後円墳受容地では聖川堤防など低地に立地する点に、古墳社会の地域的上下関係が見いだせる。

以上、佐久地方の弥生墓制は【再葬墓→木棺墓→小型周溝墓+木棺・土坑墓→中・大型周溝墓】という基本的な変遷の図式が考えられる。この流れは千曲川流域全般にも相応すると考えられるが、未だ良好な調査事例に少なく想像の域を脱し得ない。当然、現段階では流域における地域特性の抽出も困難である。しかし、少なくとも北西の久保田遺跡の四隅の切れる周溝墓の存在から群馬県との関係を長野県の諸地域では一番強く持ちながらも、基本は千曲川流域の一員であったということは出来るのである。

(6) 食文化

動物にとって食べることは、生命を維持するための、必要欠くべからざる最も重要な営みである。佐久の弥生人が、最も執着した食料は他の地域と同様に安定した供給の得られるコメであった事は間違いない。しかし、コメばかり食べていた訳ではなく、縄文時代と同様、あるいはそれ以上に、自然の恵みから得られる木の実や根莖類などの採集活動や鳥獣類の狩猟活動、また、魚介類などの漁撈活動も活発に行っていたであろう。また、水田経営が不適な山間地丘陵上等住まわざを得なくなったりた人々は、ヒエ・ムギ・アワ・キビ・ソバ・ダイズ・アズキ・エンバク等の畑作農耕も行っていたと考えられる。これらを傍証する資料は佐久地方には乏しい（動物・植物遺体の発見例が極めて少ないのである）が、他地域の多くの調査事例がこのことを肯定してくれる。

(7) 衣文化

気候の冷涼な佐久地方で生活を送った弥生人は、もちろん裸で暮らしていた訳ではないだろう。防寒対策として何らかの衣服を纏っていたはずである。「『魏志』倭人伝を見ると「種禾稻紺麻、蚕桑績、出細紺綿」という記述があり、3世紀の日本で麻や綿が織られていた事が知られる。今までの調査では衣服らしい遺物は発見されていないが、幾つかの弥生住居から土製・石製の糸を紡ぐ道具「紡錘車」が出土している。蘿繊維の出土は現在、九州でしか発見されていないので、佐久の弥生人はおそらくこれらの道具を使って草皮繊維のタイマ・カラムシから糸を紡ぎ、布を織っていたと考えられる。タイマの栽培は、春に種蒔きし、夏に刈り取り、以後、蒸す・水に漬ける・煮るという工程を経て繊維にし、それが糸になるのは稻の刈り入れが済む秋口から初冬の頃である。（橋本裕行 1988『弥生人の四季』より）こうして出来上がった糸を、中部高地にあっては寒波の世界に閉ざされる嚴冬の期間に加工し、衣服を作っていたのではないだろうか。それがどんな形のものであったのか、今のところ知る術がない。

第2節 弥生時代交通路の想定

井出正義

信濃の弥生時代は、稲作農耕を基本とする西からの文化を、縄文時代末期の人々が受け入れたことからはじまる。そしてそれは南の天竜川水系の段丘上の小湿地やその周辺の微高地や生産、居住の場とするものと、北の千曲川水系の沖積地の自然堤防やその後背湿地を居住、生産の場とするものとの、二つの地域性をもった生活文化圏を成立させた。そしてそれぞれがムラからクニへと成長して行った。従って、信濃の弥生文化は、それ以前にこの地域に根差していた縄文人の生活文化を基底としているもので、弥生時代の交通路も又、縄文時代の交通路をふまえて成立したものであることは言うまでもない。

B.C300年頃、大陸から伝来した弥生文化はまず北九州に上陸し、遠賀川式土器と総称される弥生前期の文化をもって、瞬く間に東進して伊勢湾地方に達し、一時停滞して、亀ヶ岡式土器文化圏と総称される縄文晩期の生活文化と接触・融合して、地域性をもった弥生文化を成立させた。尾張地方で遠賀川式土器の東限としての西志賀式土器と、縄文式要素の強い条痕文の水神平式土器が共存し、さらにその発展としての諸形式を生み出し、寒地に適したイネの品種改良もして、弥生中期に再び東進をはじめて、信州に到達することになった。

天竜川をさかのぼった弥生文化は伊那谷に定着したものと、さらに千曲川水系に至って独自の弥生文化を発展させたものがある。千曲川水系では善光寺平で新諏訪町式土器などと呼ばれる土器型式が成立し、千曲川上流の佐久平では、佐久町中原・館、臼田町入沢の月夜平等に新諏訪町式に共通要素を多くもった土器型式を成立させた。これらの土器は東海地方の水神平式土器のもう一つ条痕文を基調として、亀ヶ岡文化圏の縄文土器を融合して成立したものと考えられている。この「新諏訪町II式土器」などといわれる土器文化は佐久平からさらに北関東を経て福島県にまで達している。

中期初頭の土器型式の後をうけて中期中葉の千曲川流域には、条痕文から発達した籠描文と構描文を多様し、縄文要素と弥生文化的要素を融合させた栗林式土器が成立する。栗林式の文様構成は信州独自のもので、畿内・東海・北陸からの影響を受けながら千曲川流域独自の弥生文化を発展させ、群馬・埼玉県等周辺地域にも影響を及ぼした。後期に至ると箱清水式に代表される赤い装飾が象徴的な土器文化圏が確立され、周辺諸地域にさらにその影響力が強化された。

このようにみると佐久地方における弥生文化の成立は、千曲川水系の南北の流通を基本として、東西にその交通の通路をもっていたことが明らかである。弥生中期初頭の土器分布は前述のとおりであるが、中葉の栗林式土器、後期の吉田式や箱清水式土器も佐久平に分布し、千曲川水系が佐久一小県一善光寺一水内・高井と巨視的には同一文化圏を形成していることは明らかで、それを結ぶ交通路として千曲川に沿って東西に二条の道が幹線道路として存在したものと考えら

れる。その交通路が「赤い土器のクニ」の成立を可能にしたのである。

次に佐久平を中心に周辺地域との交通路を想定してみよう。

南佐久の中原・館・月夜平等の弥生初頭の土器の出土地域は、佐久平の南辺に位置するが、これから千曲川の上流をさかのぼって野辺山原、大門峠（小倉峠）を越えて甲州巨摩郡を結ぶ弥生時代の道を、当時の遺跡・遺物の存在によってたどることができる。小海町の千曲川左岸の段丘上から野辺山原の板橋・二つ山・三沢を経て、大門峠を越えて甲州に至る道筋には、磨製石斧、環状石斧、箱清水式土器、偏平片刃石斧、銅鏃等を出土する遺跡が点々と続いている。大門峠手前の三沢遺跡からは弥生前末期の条痕文の甕（完形）があたかも峠の上り口を指し示す彼のように出土している。山梨県側の北巨摩郡では条痕文土器は大泉村の寺所・金生・柳坪の諸遺跡で出土し、これらの土器は東海地方西部の櫻玉式に比定される（『東日本における黎明期の弥生土器』）というから、伊那一諏訪一甲州の道筋が考えられる。また、竜王町の金の尾遺跡や都留市四日市場の生出山（おいでやま）山頂遺跡でも条痕文土器が出土し、生出山の土器は静岡県富士宮市渋沢遺跡出土の丸子式土器と類似しているというから、富士宮市一富士山西麓一甲府盆地という水神平式土器文化の流入路も考えられる。南佐久地方への水神平式土器文化の流入路としてはこの二つの道があることになる。一方、弥生後期には赤い土器の影響が逆に佐久からこの道を通って北巨摩地方に伝えられたのである。

佐久平からは東西に伸びる道は東は関東山脈、西は八ヶ岳、蓼科の険しい山脈を越えなければならない。旧石器時代、縄文時代には和田峠、冷山、大石峠等の黒曜石の産地からこれらの山脈の間の諸峠を越えて関東地方へ、たくさんの黒曜石が古代人の背によって運ばれて行った。当時は黒曜石ほど切れ味の鋭い刃物の材料はなかった。関東地方の人々にとって信州から峠を越えて運ばれてくる黒曜石がどんなに貴重なものであったかは計り知れない。峠は最も重要な資源輸送のルートであり、土器やその他の生活文化もこの峠によって交流した。弥生時代になってもこの縄文時代の道が交通路の基本として受け継がれて行ったものと考えられる。佐久平から西方茅野、諏訪方面に通じる峠道は雨境峠、大河原峠、大石峠等がある。山浦地方と呼ばれる茅野市域には御社宮司・永明中学校校庭・構井・阿弥陀堂・棚畠などの弥生時代遺跡があるが、それらは上川下流域の諏訪盆地と接する付近、つまり山浦地方の入り口部に集中している。御社宮司遺跡で出土する弥生中期後半の天王垣外式土器（岡谷市中央）に比定され、千曲川水系を中心に発達した栗林式土器と密接な親縁関係にあるものと言われる。また、構井・阿弥陀堂遺跡の弥生後期の土器は内外面塗彩された箱清水式土器の特徴が認められる。茅野市域の後期弥生文化は天竜川流域の中島式と千曲川水系の箱清水式の二大文化の影響が相対した様相をもつが、どちらかといえば千曲川水系の箱清水式土器の影響がより強くあらわれているという。（『茅野市史』）

茅野市山浦地方を上川から支流音無川をさかのぼれば池の平（白樺湖）を経て雨境峠を越えて

佐久郡北部に達する。これは古東山道の道筋で、弥生・繩文時代にさかのばる道であることは言うまでもない。上川からその支流の流湯川に沿ってさかのばれば大河原峠に達する。大河原峠からは春日（望月町）、前山（佐久市）、切原（白田町）鶴の口（うそのくち 八千穂村）等佐久平中心部のどこにでも下ることができる。大河原峠を茅野側へ約4km下った流湯川右岸標高1850m地点で昭和11年発見された弥生式土器は箱清水式の特徴をもつていて、佐久平の赤い土器文化圏の人々がこの峠を越えて行き來した当時の姿を想像させるものである。上川から波川沿いに冷山の北方を東にさかのばれば大石峠である。大石峠から池の平（八千穂高原）を大石川沿いに下る道は黒曜石の原産地で、池の平一帯は旧石器の遺跡である。八千穂高原の横道原等では弥生時代の磨製石鎌が採集されている。また、平安時代に下るが大石部落の蓬間遺跡では内面黒色土師器碗、灰釉陶器壺等とともに漁網用土錐70個を出土している。これは佐久地方唯一の土錐の大量出土地で、海戸（岡谷市）遺跡等諏訪湖畔の遺跡との関係が深い。また、八千穂村の勝見沢遺跡では八稜鏡を出土している。これは茅野市阿弥陀堂遺跡から出土した3面の八稜鏡と同型式のもので大石峠を通して茅野・諏訪方面との交流の深さを物語っている。兩境峠、大河原峠とともに大石峠も諏訪地方と佐久地方を結ぶ弥生時代の重要な交通路であったことは間違いない。

佐久平の東方に連なる関東山脈の中にも幾つかの峠道があって、佐久平と関東地方を結ぶ交流の道となっている。これを群馬県側に視点を当ててみると次のようである。碓氷川は碓氷峠、入山峠、和美峠を分水嶺とする幾筋かの支流が横川付近で合流して関東平野に向かって流下している。碓氷川右岸には段丘が発達して遺跡が多い。入山川上流の千駄木岩陰遺跡から繩文晩期水式土器が出土している。松井田町上人見遺跡と安中市三本松遺跡は弥生中期の遺跡で、安中市中後開芝原からも弥生中期後半の土器が発見されている。碓氷川上流域の弥生時代遺跡は8カ所を数えるという。これらの遺跡を通じて碓氷、入山、和美的各峠を越えて佐久平北部と関東を結ぶ弥生人の交流の路があった。これは東山道の原初の道であったのである。

和美峠から南方の矢川峠、香坂峠、志賀越内山峠等を分水嶺として東に流下する水は矢川川、市の萱川となって本宿付近で合流して西牧川となって東流する。荒船山の南方星尾峠、田口峠、余地峠等から東に流下する水は南牧川となって下仁田付近で西牧川と合流して鍋川となり、上州甘楽郡富岡・吉井を経て関東平野に出て烏川と合流する。この鍋川上流の下仁田町本宿は和美峠、矢川峠越の道と内山峠道の分岐点で、近世には佐久米の市場が開設され、西牧関所が置かれていた。この関所裏にある岩陰から昭和43年道路工事の際に弥生初期の筒形土器が発見され、岩陰埋葬墓と考えられている（群馬県立博物館報12）。同様な土器が鍋川中流右岸段丘上の甘楽町白倉遺跡からも出土している。更に東方3km吉井町上神保遺跡では関越自動車道上越線の建設に伴う発掘調査で弥生中期の土坑墓群が検出され、条痕文をもつ壺形土器が出土している。弥生後期の樽式土器や赤井式土器をもった集落が富岡市南蛇井の井出遺跡等で調査されている。富岡市周辺

の鏑川沿いの平野を眼下に一望する比高約60mの丘陵上に位置する中高瀬觀音山遺跡では、周囲に木柵を立て回し、柵台を設けた100軒以上の弥生後期の竪穴住居址群が検出され、東国の弥生時代高地性集落の在り方として重要な問題を提起している。この遺跡に続く丘陵上には北山茶臼山西古墳という4世紀後半と5世紀初頭の前期古墳があって、この地方の弥生時代から古墳時代への歴史的変遷過程を解く鍵を握っているものと考えられる。ここから西方に荒船山を見ると、信濃と関東を結ぶ古代の峠路が蘇ってくるようで、弥生時代の道が佐久平から関東へ、これらの峠路を通していたことが身近に感じられる。白田町入沢の谷川をさかのぼった標高900mの国有林の奥に一つ石岩陰、滝日陰等という箱清水式土器を出土する遺跡があるが、これは川口峠を越える弥生人たちのキャンプ地の一つであったのだろうと考えられている。

佐久町中原遺跡や館遺跡から抜井川に沿ってさかのぼった十石峠は、神流川に沿って上州藤岡や秩父方面を経て関東に通じる道である。柳田国男は「東國古道記」の中で「加賀様の隠し路」といって、前田侯が何か万々の一の場合に（江戸から）領内へ逃げて変える途が用意せられていた」という話があるが、「私ももしこの計画に参加したとすれば、何の躊躇もなしに提案するのは十石峠である」「十石峠は昔から御岳行者の路であり、秩父・関東への近道である」と書いている。この十石峠道に沿って神流川上流の群馬県多野郡万場町大字青梨に岩津保洞窟遺跡がある。昭和55年の第一次調査では弥生時代の土坑墓3基が検出され、弥生土器完形品と弥生人骨3体分が出土した。その後の調査で弥生人骨は9体にのぼり、1ピットで3体の合葬墓があつて、20個のオオツタノハ製の貝輪を埋葬していたという、出土した土器は底部に布疋痕のある筒形土器のほか、櫛状範による条痕文土器が出土している（『東日本における黎明期の弥生土器』）というから、佐久町の中原遺跡や館遺跡出土の土器との共通性が考えられる。十石峠道もまた注目すべき弥生時代の道であったと言える。

- 参考文献
- 1 編年 千曲川水系古代文化研究所編
 - 2 白田町遺跡詳細分布調査報告書 白田町教育委員会
 - 3 埋文群馬No.1～6 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 - 4 東日本における黎明期の弥生土器 千曲川水系古代文化研究所外
 - 5 群馬県の地名 平凡社
 - 6 茅野市史上巻
 - 7 山梨の古代 山梨日日新聞社
 - 8 山梨の考古学 山梨日日新聞社
 - 9 八ヶ岳の三万年 小泉製塙勝 法政大学出版局
 - 10 柳田国雄集 第二巻 筑摩書房

第3節 弥生時代の炉再考

—佐久地方を中心として—

助川朋広

はじめに

千曲川流域における弥生時代の炉のあり方については林・花岡両氏の研究に詳しいが、新出資料を加味しながら、千曲川流域といった大きな地域ではなく、佐久地方という地域内に対象を絞り、佐久地方内での時期的な様相・炉の形態、佐久地方内における地域性について見ていくことにしたい。

(1) 時期的様相

1 中期後半の様相

佐久地方における最古の弥生住居は現在、中期後半に求められ、住居内施設の中心的存在である炉の初源も同期から存在している。住居プランは隅丸方形・隅丸長方形・方形・長方形・円形の住居形態があり、隅丸長方形の形態が多いと言える。この傾向は千曲川流域においても一般的に認められる。^{註3}

中期後半の遺跡としては、北西の久保遺跡・後沢遺跡・竹田峯遺跡があり、北西の久保遺跡は90軒を越える大集落遺跡である。炉については、住居内に1個の炉を有するものが主体で、複数炉を有する住居は存在しない。炉の位置を見ると、北西の久保遺跡Y78号住においてのみ柱穴間に位置しているが、他は中央あるいは中央付近に位置している。炉の形態についてみると地床炉・地床炉+炉縁石・埋甕炉・埋甕炉+炉縁石・土器敷炉という6形態が存在する。第77図のとおり、中期後半の炉の形態は圧倒的に地床炉・地床炉+炉縁石という2つの形態が主体を占めているのがわかる。埋甕炉・埋甕炉+炉縁石は存在はするが、中心的存在とはなり得ない。

2 後期後半の様相

佐久地方の後期前半の遺跡は、北西の久保遺跡・周防畠B遺跡・樋村遺跡といった大集落遺跡が主体となり、森下遺跡・西八日町遺跡等がある。遺跡毎に炉を見ていくことにしたい。

北西の久保遺跡は、複数炉をもつ住居が出現していく。柱穴間に位置するものが主体であるのに対し、Y64号住は中央付近に位置している。またY66号住のみ複数炉を有し、2個とも柱穴間に位置している。形態は、地床炉1例、石圓炉4例、地床炉+炉縁石1例である。

周防畠B遺跡は、複数炉を有する例が、7軒と多い。炉の位置は柱穴間に位置するものが主体で、Y1・19・20号住においては中央あるいは中央付近に位置している。複数炉を有する例は、

Y 2・3・4・15・17・18・22号住と7軒あり、2個有するものは、Y 2・3・4・22号住で他は3個有する。これら複数炉の位置的なあり方は、2個有するものは、柱穴間と中央あるいは中央付近に位置している例が多く主体を占め、3個有するものは、柱穴間と中央付近に2個の炉が位置しているものが主体を占めるといえる。炉の形態は、地床炉7例、埋甕炉6例、土器敷炉11例、土器敷炉+炉縁石2例、埋甕炉+炉縁石1例であり、土器を埋設するという形態が多い。

穂村遺跡は、複数炉を有する例が1軒と少ない。炉の位置は、北西の久保遺跡・周防畠B遺跡で柱穴間に位置しているのが一般的であるのに対し、Y 1・2・3・4・7・9・11・12・14・15・17・19号住は中央あるいは中央付近に位置し、Y 8・16・21・22号住は柱穴間に位置する。従って、中央あるいは中央付近に位置している例が多いと言える。複数炉を有する例はY 11号住で中央に位置している。炉の形態は地床炉7例、地床炉+炉縁石2例、石囲炉3例、土器敷炉1例、土器敷炉+炉縁石1例とバラエティーに富んでいるが、地床炉が主体を占めている。

森下遺跡は土器敷炉で中央に位置している。

後期前半は、複数炉が出現すること、石囲炉、土器敷炉+炉縁石の2形態が加わること、炉の位置が中期後半において、中央あるいは中央付近に位置していたのに対し、柱穴間に移動するという一つの転換期になっている。

3 後期後半の様相

佐久地方の後期後半の遺跡は、後沢遺跡・下小平遺跡・一本柳遺跡・清水田遺跡・舞台場遺跡・北西の久保遺跡・西一里塚遺跡・腰巻遺跡・下聖端遺跡・白田町勝間原遺跡があげられる。

後沢遺跡は、後期前半同様複数炉を有するものが多い。炉の位置は柱穴間に位置する例が多い。複数炉を有するものは、Y 7・18・25・26・27・29・30号住で2個有するものだけである。位置は柱穴間と中央あるいは中央付近といったものが主体を占める。形態は地床炉30例、地床炉+炉縁石1例、土器敷炉+炉縁石1例であり、地床炉が主体を占め、一般的なあり方といえる。

下小平遺跡は、柱穴間に位置するものが一般的で複数炉を有するものは、Y 1・2号住で、柱穴間とコーナーに位置している。形態は地床炉+炉縁石3例、埋甕炉2例、土器敷炉1例である。

一本柳遺跡は柱穴間に位置するものが一般的で、複数炉を有するものは、Y 5号住のみである。Y 5号住は、柱穴間と中央に位置する。炉の形態は、埋甕炉5例、土器敷炉1例であり、土器埋設するものしか存在しない。

清水田遺跡は柱穴間に位置するものが一般で、中央に位置するものは存在しない。複数炉を有するものはY 3号住のみで、3個有する。位置としては、柱穴間と中央付近とコーナーである。炉の形態は、地床炉2例、埋甕炉1例、埋甕炉+炉縁石6例という形態で、土器埋設するものが多いと言える。

舞台場遺跡は、柱穴間に位置するものが3例、中央あるいは中央付近に位置するものが3例と両者が混在している。また、複数炉は存在しない。形態は、地床炉5例、地床炉+炉縁石1例、埋甕炉1例があり、地床炉が主体と言える。

北西の久保遺跡の炉の位置は、柱穴間に位置する例が最も多く、これが主体を占める。しかし、Y94号住のみ中央付近に位置している。複数炉をもつものはY93・104・125号住と3軒あり、Y125号住は3個の炉を有している。これらの炉のあり方は、柱穴間と中央あるいは中央付近に位置するものであり、このあり方が主体を占めるといえる。

炉の形態は、地床炉12例、地床炉+炉縁石3例、土器敷炉1例、土器敷炉+炉の縁石1例とバラエティーに富んで入るが、地床炉が一般的と言える。

西一里塚遺跡は、柱穴間に位置するものが主体で、Y1号住だけ中央付近に位置している。複数炉を有する例は存在しない。炉の形態は、地床炉1例、土器敷炉3例、埋甕炉2例、土器敷炉+炉縁石1例というもので、土器埋設するものが多いといえる。

腰巻遺跡は、柱穴間に位置し、埋甕炉+炉縁石という形態である。

下聖端遺跡は、柱穴間に位置し、地床炉1例、地床炉+炉縁石1例、土器敷炉?+炉縁石1例という形態である。

白田町勝間原遺跡は、柱穴間に位置し、地床炉1例、地床炉+炉縁石1例である。

後期後半は以上のような様相で、炉の位置は後期前半と同様に柱穴間に位置するものが多いのであるが、中央付近に位置するものも存在している。^{註6}また、形態では地床炉が多く存在しているが、この傾向は特に千曲川左岸の後沢遺跡・舞台場遺跡に強く、佐久地方の地域性にかかわる問題を内包すると考えられるので、後で詳しく触れることにする。土器埋設する炉の形態が多く存在している点では後期前半

と同様であるが、形態的には若干の変容を遂げつつある。^{註6}

(2) 考 察

佐久地方における中期後

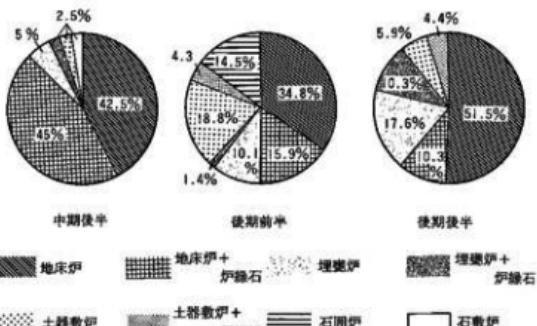
半から後期後半にいたる時

期的様相は既に触れたので、

以上の基礎データをもとに

若干の要約と考察を行って

行くこととする。



第77図 形態

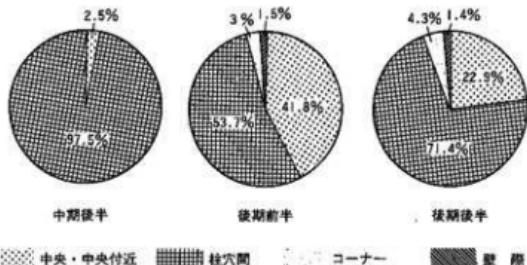
I 炉の位置と変遷

第78図のとおり、炉の位置は中期後半において中央あるいは中央付近に位置していたものが、後期前半になると中央あるいは中央付近に位置するものが残ってはいるが、柱穴間に位置が移動していくことがわかる。これは林・花岡氏の指摘²⁷のとおり、室内利用方法の変化によるものであるといえる。偶然の一致かもしれないが、柱穴間の炉の前方部にいわゆる棟持柱が一般的に設置されるようになるのは中期最終末から後期初頭であり、栗林式土器=中期的土器様式解体に伴って住居構造にも変容が起きている。換言すれば後期的土器様式成立に伴い新たな建築方式が採用され、炉の位置も移動の必要に迫られたのである。その背景には鉄器普及の大幅な伸びに伴う建築学の進歩を感じられる。

後期後半においては、後期前半と同様に柱穴間に位置するものが多く存在しているが、1個の炉のみを有する住居において中央に位置する例も数例存在する。これらの多くは後半でも終末期に属しており、炉が中央に付設される古墳時代前期住居へ一系的なつながりをもつものと考えられる。

複数炉については後期前半から出現し、2個有するものと3個有するものがあり、前者が多い。後期前半に10例、

後半に11例あり、2個有するものは柱穴間と中央あるいは中央付近に位置するものが多く、3個有するものは柱穴間と中央あるいは中央付近とコーナーに位置するというものが多く存在している。



第78図 位 置

2 炉の形態

佐久地方における炉は地床炉・地床炉+炉縁石・堆甕炉・埋甕炉+炉縁石・土器敷炉・土器敷炉+炉縁石・石圓炉・石敷炉という7形態がある。第77図に形態を示した。

地床炉は中期後半より弥生終末から古墳時代前・中期まで存在し、他の時期に主体的な位置を占める炉の代名詞的な存在である。地床炉+炉縁石も地床炉と同様な傾向にあるが、炉縁石のあり方について見ておきたいと思う。炉縁石は、扁平あるいは長方形の石を1から3個配するものが多いと言える。

天竜川流域の弥生時代住居に象徴的な壺甕炉は、中期後半より後期後半まで存在する。佐久地方ではあくまで客体的な在り方を示すが、盛行期は後期に絞りこめる。後期前半では周防畠B遺跡のみにしかない点は留意されるが、利用される土器の器種は壺が多く、1例のみ甕が利用されている。部位は胴部以下を正位に埋設するものが多いが、甕の頸部を逆位に埋設するものも1例認められる。^{註8} 後期後半では一本柳遺跡5例、下小平遺跡2例、西一里塚遺跡3例と一遺跡内にも比較的多く存在するようになる。器種別では壺が主体を占めるが甕4例、高杯1例も利用されている。部位は胴部から底部が多く、中期後半同様頸部を利用するものは逆位に埋設される。高杯に関しては環部を利用している。埋甕炉+炉縁石は埋甕炉と同様な傾向があり、利用される器種は壺が主体で、大型甕と高杯も併せて埋設されるものもある。部位では底部が多く利用されている。

佐久地方固有の土器敷炉は中期後半より後期後半に存在し、後期前半に盛行期が求められる。特に周防畠B遺跡では11例も認められ注意される。利用される器種は壺、甕、高杯で壺が多いと言える。部位では口縁部・頸部・胴部とバラエティーに富む。後期後半では下小平遺跡Y1号住、西一里塚遺跡Y6・9号住、森下遺跡10号住に存在し、後期前半と同様な傾向にある。土器敷炉+炉縁石は後期前半から後期後半に存在し、土器敷炉と同様な傾向にある。

やはり、佐久地方固有の石圓炉は、後期前半にのみ存在する。石圓炉の形態は、石が完周しないで一边が空いている「コ」字状または、「L」字状のものが多く、「ハ」字状や炉辺を完周する「ロ」字状のものも存在する。「コ」字状のものは灰のかきだしを考慮してのことと思われる。^{註9}

石敷炉は中期後半北西の久保遺跡Y114号住にのみ存在し、15個の石を敷き詰めたもので至極特異な形態である。

3 複数炉

複数炉は後期から採用され、後期後半までは確実に継承される。複数炉については2個有するものと3個有するものがあり、前者が一般的である。このような複数炉は信州に限らず北関東(群馬)・南関東(埼玉・神奈川)にも認められ、中部高地型櫛描文土器分布域において共通する。^{註10}

複数炉については、炊飯・採暖・採光等の機能分化による結果等により出現して来たとも考えられる。

他に考えられるのは住居の規模による複数化である。確かに床面積30m²を超える大形住居に多く見られる傾向はあるが、大形住居に必ず複数設置される訳ではなく、小形住居にも稀に複数炉が多く存在することもある。従って、必ずしも住居規模によって炉の数が決定されるとは言い得ない。

また住居構成員の居住様式によって炉の複数化を捉えたものもある。この指摘は弥生社会の婚

婚姻形態の解明に迫るものとして高く評価しておきたいが、何故中部高地・関東の日本列島では点的な地域に、しかも後期というごく限られた時間の中で一大多妻制が採用された結果として複数炉が出現したのか解決されなければならない問題が多い。同じ弥生社会の中には中期の婚姻形態は違っていたのか、あるいは婚姻形態は同じでも住居施設には反映されなかつたのか。また、古墳時代前・中期に至ると複数炉をもつ住居は殆ど無くなる。大きな社会的な変革に伴つて婚姻形態も変わったのか等など……

複数炉の存在をその稀少性から祭祀に結び付けることもできる。弥生社会における大形住居は一種の権力象徴と背中合わせの関係にあることが予測される。その時の権力者は魏志倭人伝中の卑弥呼のように司祭者としての能力をも兼ね備えていたとするのは考え過ぎだろうか？

4 佐久地方における地域性

佐久地方においては土器だけでなく、炉の面からも地域性が認められ、この点を最後に強調しておきたい。

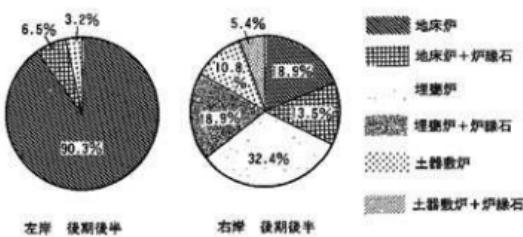
佐久地方は千曲川で右岸と左岸に隔てられ、左岸の遺跡は西裏・竹田峯遺跡、後沢遺跡、舞台場遺跡、臼田町勝間原遺跡などがあり、右岸の遺跡は下小平遺跡、一本柳遺跡、清水田遺跡、北西の久保遺跡、西一里塚遺跡、腰巻遺跡、下聖端遺跡などがある。これらの時期は弥生後期後半であり、川を隔てた地域性が明確である。

第79図に右岸と左岸の形態を示した。左岸地域は、炉の形態は地床炉が30例、地床炉+炉縁石が7例と圧倒的に多く、他の形態は土器敷炉が1例認められるに過ぎない。一方、右岸地域は地床炉5例、埋甕炉12例、埋甕炉+炉縁石7例、土器敷炉+炉縁石2例、石匂炉4例とバラエティに富み、埋甕炉、埋甕炉+炉縁石、土器敷炉等土器を利用した炉が地床炉を凌駕する状況にある。概ね左岸は地床炉、右岸は土器を利用した炉に象徴されると言つて良い。この色分けされた現象の意味について考えてみたい。

県内の弥生社会は天竜川流域と千曲川流域に大きく別れていたことが土器様相から判断できる。

天竜川流域の弥生後期後半は後期前半の傾向を継続し、下伊那・上伊那・

諏訪各地方で埋甕炉が



第79図 右岸と左岸の形態

^{註13}多い。この点で佐久地方千曲川右岸地域は土器敷炉など地域固有の形態が加わるもの、天竜川流域と良く似た様相を示す。同じ千曲川流域内においてこのような傾向を示す地域は他になく、古墳社会発生直前の弥生社会の完熟期に至って佐久地方右岸地域が天竜川流域諸地域との社会・文化交流を活発に行っていった情勢が読み取れる。そしてこの両地域は、主従の関係ではなく対等なものであった。このことは佐久地方右岸地域の土器が何ら天竜川流域の土器に影響されて変容した痕跡がないことなどからも首肯できる。右岸地域の弥生人は天竜川流域の埋甕炉に対してのみ門戸を開いたのである。何故、埋甕炉が採用されたのか、機能的な優位性からか、婚姻等による人の移動によるものか、今のところ謎である。

一方、千曲川流域では上田・善光寺平・飯山・中野諸地方において弥生時代の炉は地床炉が主体である。佐久地方千曲川左岸地域の炉の形態はこれらの地域と同様である。このことは左岸地域が前述の地域と密接つながりをもっていたことを示す。

以上、佐久地方の後期弥生時代は千曲川を隔てて土器ばかりでなく、遺構＝炉も異なることが明らかになってきた。小さな佐久地方の中でこのような現象が生じた背景、また社会的な意味付けを行うには本論ではまだまだ不十分であるが、箱清水式土器に象徴される千曲川流域の弥生社会構造を解明するうえの一助となれば幸甚である。また、炉自体の機能についても今後検討し、古代生活を復元してみる必要があろう。

本稿を草するにあたり、林幸彦・高村博文、三石宗一、小山岳夫、小林眞寿、羽田卓也、翠川泰弘、和田信行の諸氏にご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

(1) 林 幸彦・花岡 弘「弥生時代の炉」「信濃」35-4

(2) 収集し得た資料は次の文献による。

佐久市教育委員会 1971『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』

佐久市教育委員会 1972『佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報』

佐久市教育委員会 1974『佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報』

佐久市教育委員会 1980『周防畠B』

佐久市教育委員会 1981『下小平』

佐久市教育委員会 1983『舞台場』

佐久市教育委員会 1985『樋村遺跡』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986『西裏・竹田峯』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986『池畑・西御堂』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987『北西の久保』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1988『腰巻・西大久保II』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1989『森下』

白田町教育委員会 1987『勝間原遺跡』

- (3) 神村 透 1988「弥生時代の住居と集落」『長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』長野県史刊行会
- (4) 平成元年度発掘調査を実施、現在整理中
- (5) 古墳時代に入ると中央に位置するものが多いので、後期後半より中央を意識していたといえる。
- (6) 後期前半には土器敷炉が多いのに対し、後期後半には埋甕炉が多くなる。
- (7) 前掲註(1)の文献による。
- (8) 註1の文献によると壺の器形から来る制約によるとされている。また埋設される土器の塗彩は意識されず、塗彩のあるもの、ないもの2者が利用されている。
- (9) 石部正志 1974『考古学からみた火』『日本古代文化の探求 火』社会思想社
- (10) 井上尚明 1983『関東における後期弥生集落の一様相』『研究紀要1983』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- (11) 前掲註9の文献による。
- (12) 前掲註1の文献による。
- (13) 前掲註3の文献による。

引用・参考文献

- 石部正志 1974『考古学からみた火』『日本古代文化の探求 火』社会思想社
石野博信 1975『考古学からみた古代日本の住居』『日本古代文化の探究家』社会思想社
仲野紀巳子 1980「弥生時代の遺構と遺物について」『中里前原遺跡』
林 幸彦・花岡 弘 1983「弥生時代の炉」『信濃』35-4
井上尚明 1983『関東における後期弥生集落の一様相』『研究紀要1983』
合田芳正 1988「炉址小考」『青山考古』6
神村 透 1988「弥生時代の住居と集落」『長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』

第4節 弥生時代の特殊住居址

—特にベッド状遺構を中心として—

篠原浩江

はじめに

大規模開発に伴う大掛かりな発掘調査が日本各地で行われ、吉野ノ里遺跡に代表されるように、当時の集落を解明しようとする傾向がより強く見受けられ始めた。しかし、集落という共同体の構造を解明するということは精神構造を解明するに等しく、ややもすると宗教精神にまで踏み込まなければならない部分も出てくるため、非常に困難な分野である。この状況下において、現在の研究方法としては、『義志』『倭人の条』の記述を元にするものが多く、時には誇張なども取り混ぜて弥生時代の集落の考察がなされている。また、大型住居址や墳墓などを分析して集落構造の復元に追ろうとするものなどもある。

ここではベッド状遺構の分析を通じて、集落構造の一端が覗けるのではないかと考え、論考を進めて行きたい。

(1) 研究小史

本論に入る前に主な研究史も踏まえながら、ベッド状遺構について概念規定をしておきたい。ベッド状遺構が初めて検出されたのは昭和29年東京都荒川区で調査された道灌山遺跡においてであったが、この時点では一段高まった床面の検出状況を記すのみで、遺構自体に対する考察は行われておらず、「ベッド状遺構」なる呼び方も未だ付されていない。この呼称は昭和37年「千葉県我孫子町中学校校庭遺跡の調査」『考古学雑誌7-1』で吉田章一郎・田村晃一両氏により、命名されると同時に寝所としての用途も示唆されている。昭和41年には和島誠一・田中義昭両氏が「住居と集落」『日本の考古学III』の中で、木下忠氏が「弥生時代における農業生産集落の構造」『歴史教育14-3』の中でそれぞれベッド状遺構を寝所と見なし、1棟の住居内における居住人員の算出を試みている。一方、和島誠一・金井繁良一両氏は「集落と共同体」『日本の考古学V』のなかで初めてベッド状遺構と階級性を結び付けており、昭和42年には沢田大多郎氏が「古墳発生前における社会」『考古学研究14-1』でベッド状遺構を持つ住居址の居住者が死後方形周溝墓に埋葬されるような階級ではないかと述べており、後に熊野正也氏も賛同している。しかし、最初にベッド状遺構に注目した一人である田村晃一氏は「我孫子中学校校庭遺跡」「我孫子古墳群」の中で、階級性との結び付きに対して、集落内の階級性と安易に結び付けるべきではないと述べており、ベッド状遺構をむしろ普遍的な現象であり、住居内部構造の変化という点に留意すべきであるとしている。その後、ベッド状遺構の集成作業も行われ、昭和49年には熊野正也氏が「弥生時代集落構造の一考察」『史館2』の中で17遺跡を扱い6形態に分類している。また、集落内

におけるベッド状遺構施設住居址が集落の中心的存在であると指摘し、階級の差であると述べ、出土遺物にも注目し司祭者で尚且つ集落の意志を代表し得るような性格を有するものの住居であることを想定し、祭壇としての性格を持つと考えている。熊野氏の研究は集落内の位置・出土遺物・埋葬形態変化との対応など多方面から検討しており、ベッド状遺構研究史上高く評価されよう。昭和50年に石野博信氏は「考古学から見た古代日本の住居」『家』の中で遺構部分の踏み締まりが少ないと、土器がおかれたり、特殊遺物がおかれるとあることから、寝所あるいは物置場を想定して新たに「屋内高床部」との名称を与えていた。また、河野真知朗氏は「初期農耕集落の解明—ベッド状遺構の検討—」『CIRCUL—PACIFIC I』の中で時期別・地域別の分布傾向をまとめた結果、ベッド状遺構は稻作定着期に出現し、弥生時代の要素の消滅と共に姿を消すものとしている。集落内の単位で見た場合は、関西地方ではかなり普遍的な存在で階級性でいわれる権力表象とは異なるとしており、関東地方ではベッド状遺構施設住居址が得意な位置を占め権力表象の位置部を構成しているのではないかと述べている。出土遺物については祭祀遺物が多く見られることに注目し、司祭者とそれ以外の者との「聖別」として床を一段高くしたのではないかと述べている。また、豊富な資料集成を行ったうえで22形態に分類を行っている。この河野氏の論文が現在のところベッド状遺構に関する最近の資料となっている。

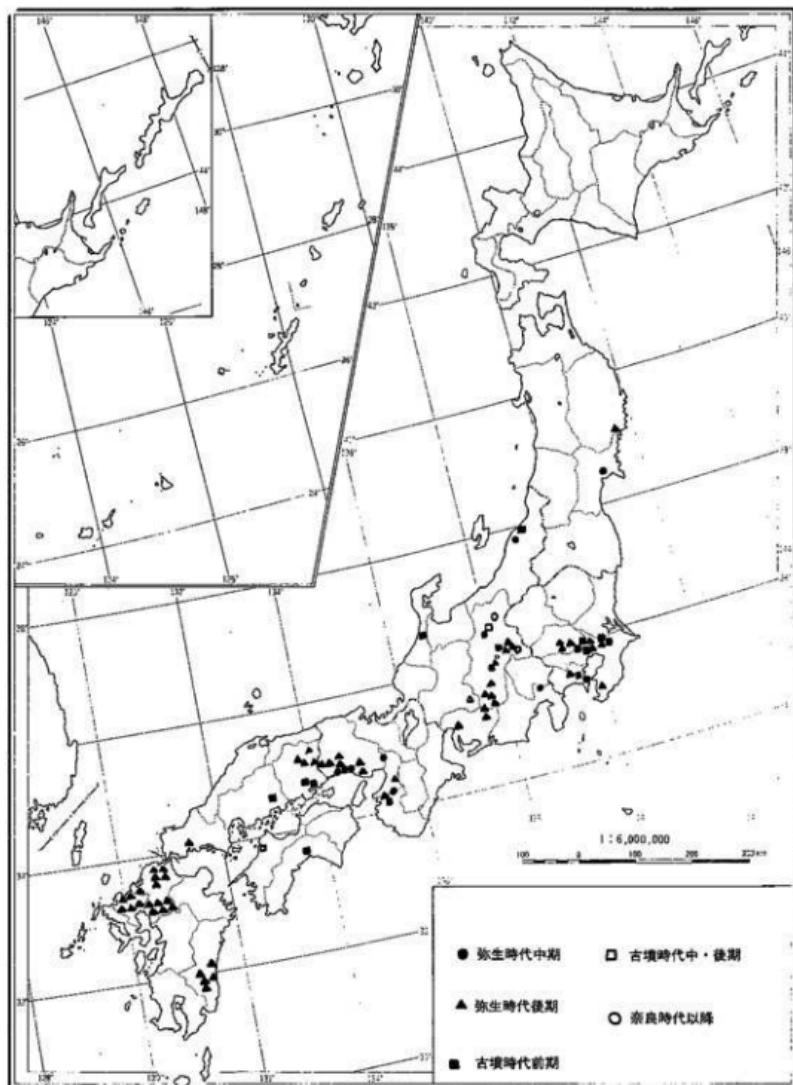
以上のようにベッド状遺構とは竪穴住居並床面において一段高まった部分を呼び、その性格は「寝所」「物置場」「祭壇」の3通りの考え方がなされており、今までのところ集落内の特異性を指摘する向きが強い遺構である。

ベッド状遺構の規模的概念については岡村眞文氏が『我孫子中学校校庭遺跡』の中で「これらのベッド状遺構は明瞭な段差を持つものと、床面と同一レベルで踏み固められていない面を持つことでそれと判別できるものの2種ある」とし、河野氏は「初期農耕集落の解明—ベッド状遺構の再検討—」で「他の部分の床面より高まった平坦面に作られているものを指す。その名のとおり、人が横たわるほどの大きさを持つものを指しており、小規模なものは含めない。」としている。しかし、ここでは意識的に一段高めることに意義があると解釈して、河野説に従い資料操作を進めることにする。

(2) 分布の所見

ベッド状遺構は北は新潟県、南は宮崎県に至るまで分布しており、その中でも特に集中するのは南関東と北九州の地方で、北海道と南西諸島には現在のところ一例も確認されていない。

一方、これらを時間軸に置いて観ると弥生時代中期から平安時代にまで確認されるが、弥生時代後期に爆発的に急増した後は古墳時代後期に向けて急減し、奈良時代以降は非常に希な存在となってしまう。



第80図 ベッド状構造分布図

これらを地域別にみると、弥生時代中期には近畿地方を中心として分布していたものが、後期になると各地で急増し、特に九州地方では中期に1例も確認されないものが後期になると爆発的に急増し、あたかも何かに抑圧されていたものが解除されたかのような感さえ受けるのである。

その後、古墳時代になると関東・中部地方では穢やかな減少傾向を示すが、近畿地方・九州地方では激減してしまう。一方、中国・四国地方では弥生時代後期よりもやや多い傾向が認められる。

このような時期別分布をみると、ベッド状遺構の初現は近畿地方に求められ、やがて関東地方・中部地方に拡散し、後期になると九州地方に渡り、急速に広がった様子が読み取れる。ただし、九州地方の後期のなにからかの抑圧を解かれた様な激増の様子をみると、中期に九州地方に流入していたものが取り入れられず、後期になって急激に取り入れられた感を強く受けるのである。従って、ここにベッド状遺構の裏に隠れる大きな文化の影が垣間見られるのであり、その文化とは、古墳時代になり全体的に減少傾向を持つことから、弥生時代的な様相を抱いたものであろうことは想像に難くないのである。つまり、ベッド状遺構は弥生時代的な文化の一端を象徴する遺構であり、当時の集落形態の在り方とも大きく関係すべきものであると考えられ、尚且つそれは弥生時代も中期に現れるような性格のものであると言えよう。

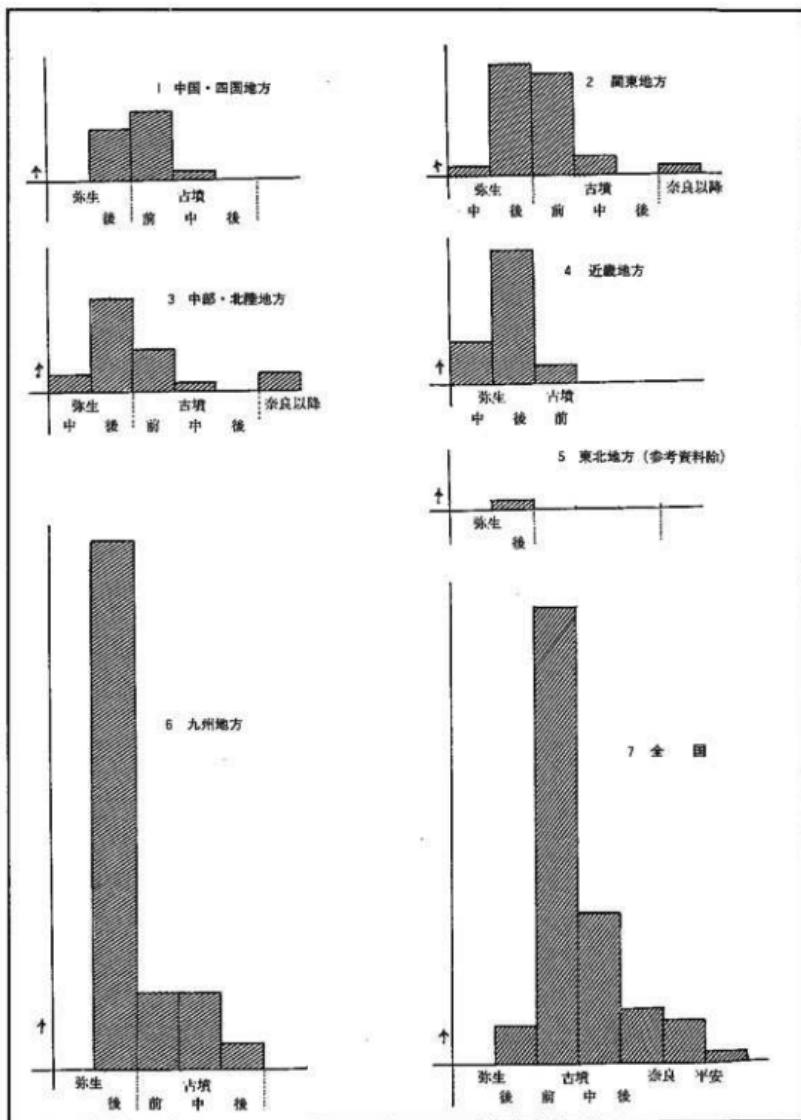
(3) 出土遺物の特徴

研究小史にもあるように、ベッド状遺構を持つ住居址からの出土遺物には祭祀的な特徴があると熊野・石野・河野各氏が指摘しているが、その祭祀遺物の出土頻度を確認してみたい。ここでは「祭祀遺物」として扱ったものは大場磐雄氏が『祭祀遺跡—神道考古学の基礎研究』の中でもまとめられた項目に準ずると同時に、古墳時代前期における瓶が集落祭祀に使われたことも柿沼幹夫氏により「瓶に関する覚書」『埼玉県立博物館記要11』の中で指摘されているため、該期の瓶も祭祀遺物として扱った。

その結果、祭祀遺物の出土率は全体の77%と非常に高い数字を得ることができた。中でも兵庫県大中7号A住居址・福岡県弥永原2号住居址の内行花文鏡、長野県佐久市上直路遺跡の銅鏡を両腕に装着した人骨の出土など、非常に祭祀的な色彩の濃い出土遺物もみられる。やはり、熊野・石野・河野各氏が以前、指摘したようにベッド状遺構と祭祀との関連性は肯定すべきであろうが、居住者を短絡的に限定してしまうには些か危険があり、もっと慎重な検討が必要であると思われる。

(4) 集落内におけるベッド状遺構施設住居址

いずれにせよ、弥生時代・古墳時代の集落においてベッド状遺構を持つ住居址は祭祀的な色調を持つものとして考えられそうである。そこで、次には集落の様子を伺えそうな資料を使って、



第81図 ベッド状遺構検出数類向グラフ

集落内におけるベッド状遺構設住居址の位置を検討してみると、集落の周辺に位置するもの、中心に位置するもの、集落の主体を占めるものに大別される。

集落の周辺に位置するものは岩板大台・月夜平・屋田・宇津木・鶴居上ノ台の各遺跡で、中心に位置するものは成増一丁目遺跡、集落の主体を占めるものは西中ノ沢・大中遺跡である。これらをみると集落の周辺あるいは隔離された位置にあるものが多く、一般住居址との区別がなされるようである。集落の主体を占める遺跡は極めて特殊で、九州と中国地方に所在しここにベッド状遺構の発生問題を解く手掛かりとして考えられる。中央に位置するものに関しては他の住居址よりも規模が大きく、やはり特異な存在として捉えられる。

それぞれに異なるパターンにベッド状遺構の発生・伝播・意義を解く手掛かりとして捉えられようが、資料增加に伴い更に細かな分析が必要であると考えられる。いずれにせよ、今日唱えられるような「普遍的な住居址」や「住居址の掘方」ではなく集落中における特異な存在であると言えよう。

(5)まとめに代えて

以上のようにベッド状遺構を統計的に分析すると集落において特異な存在であり、従って集落構造を考察するに極めて有効な資料でないかと考えられる。集落中でどのような役割を担った住居址であったのかをここで解くには資料数・分析角度の不足等に不安が残る。しかし、予察として集落中で祭祀色を濃厚に持ち、集落の中で特異な位置にあった住居址として考えられる。強いては弥生時代後期を中心に、共同体維持において祭祀を何らかの形で取り入れた集落の存在が「遺構」という直視的なものに看取できるということである。

世界各国でどのように自国を統制し、国民が豊かに生きてゆけば良いのか、あるいはどのような社会形態が適しているのかが問われつつある今日であるが、その根底には生活基盤の変化があると言えよう。同様に「稲作」という「狩猟」に比して食物確保の確実な生活基盤が固まるとともに、國・村の統制形態も自然と変化せねば対応しきれなくなるのである。そこには当然前後階の統制形態を引きずろうとする場面もあり、様々な部分での葛藤も十分予想されるのである。それはちょうど九州地方におけるベッド状遺構の在り方とオーバーラップしていくようであり、たとえ前代に行われていた祭祀があったにせよ、また別の祭祀を以て村をまとめていったのではないかとの推測ができる。つまり、弥生時代中期に各地に点在した集落形態に転換していくとするならば、稲作が確実に伝播していた九州地方・近畿地方の弥生前期にベッド状遺構が確認されないことや、古墳時代安定期になるに連れ、検出数が減少する傾向も納得がいくのである。引いてはベッド状遺構の消失傾向は各地における古墳文化への転換の速度と相俟って行くものではないかと考えられる。

第4章 考察編

ペッド状遺構検査遺跡一覧表

地方	県	遺跡名	所在地	時期	施号	遺物	文献
東北	福島	朝日長者	いわき市泉町	弥生 中期	1号	漆器遺物出土	(参考資料)
		八幡台	いわき市横田町	弥生 後期	1号住居址	祭祀遺物出土	いわき市教育文化部史川「八幡台遺跡」1980
	宮城	鶴居上ノ台	鹽竈市鶴居町	古墳 消期	1号住居址		上ノ台遺跡調査団「鶴居上ノ台遺跡」1981
		林天神	鹽竈市林天神	古墳 前期	H-2号住		小原考古学研究会「西松原における古式土器群の研究」1984
		蛭吉	上尾市蛭吉	古墳 消期	3号住居址	祭祀遺物出土	埼玉県立浦和第一女子高等学校歴史研究部「蛭吉古跡発掘概要」1965
		尾山台	上尾市尾山	弥生-古墳	11號	祭祀遺物出土	「埼玉県史」2、「尾山台遺跡」1982
		篠田	東松山市上野本	弥生 後期	7号住居址	鉄器出土	埼玉縣政府文化財調査委員会「篠田・船岡」1982
		上組	東松山市志輔	古墳 消期	13号住居址		埼玉県教育委員会「南大坂・中組・上組・鶴ヶ丘・花部」1974
		椎子山	東松山市石橋	弥生 後期	1号住居址		東松山市「椎子山」「東松山市史綱さん調査報告 第8集」1977
		下加南	大宮市下加南	古墳 消期	4-7号住		大宮市「下加南」「大宮市史 第1巻 古考編」1988
	栃木	白壁本宿	浦和市白壁町	古墳 前期	4号住居址	祭祀遺物出土	埼玉県教育委員会「白壁本宿遺跡」1980
		附川	東松山市志水	古墳 消期	4号住居址		東松山市「附川」「東松山市史綱さん調査報告 第1巻」1981
		尾山田	北足利郡尾山田村	弥生 後期	5-15号住	祭祀遺物出土	埼玉県総合文化財調査事務局「尾山田・寺ノ山」1984
		吉野原	大宮市吉野原	弥生 後期	7-14・15		大宮市「古野原」「大宮市史 第1巻 古考編」1988
		上栗	市川市田谷	弥生 後期	1号住居址	祭祀遺物出土	川越市教育委員会「砂之谷丘」1、「栗跡・栗上山城跡」1977
	千葉	我孫子中学校校庭	東葛飾郡我孫子町	古墳 消期	2-5号住	祭祀遺物出土	吉田草一郎・田村晃一「千葉縣我孫子中學校校庭遺跡の調査」『考古学論誌』11 我孫子市教育委員会「我孫子中学校校庭遺跡」1985年再録
		大塚城	佐倉市大塚城	古墳 中期	45号住居址	祭祀遺物出土	千葉縣文化センター「塔ノ大古」1983
		小宿	都城市小宿町	古墳 中期	D-203号住		松戸市教育委員会「源助原遺跡」1974
		岩板大古	富士市岩板	弥生 後期	7-12号住	祭祀遺物出土	千葉県文化センター「塔ノ大古」1983
		御前原	松戸市御前原	古墳 消期	22号住居址	祭祀遺物出土	川崎市教育委員会「御前原遺跡」1976
		殿谷	市川市野町	弥生 後期	8号住居址	祭祀遺物出土	川崎市教育委員会「殿谷遺跡」1976
	東京	宇津木	八王子市宇津木	弥生-後期	1-8号住	祭祀遺物出土	中央高速道路江戸子地区危機調査団「宇津木遺跡とその周辺」1973
		堂ヶ谷	新座市堂ヶ谷町	古墳 消期	43-35号住	鉄器出土	世田谷区教育委員会「堂ヶ谷遺跡」1982
		道峰山	東京都道峰山	弥生 中期	1号住居址		東京都荒川区教育委員会「道峰山遺跡」1955
		成増一丁目	板橋区成増	弥生 後期	14-20号住	祭祀遺物出土	成増一丁目遺跡調査会「成増一丁目遺跡調査報告書」1981
	新潟	鼠崎	三木市鼠崎	古墳 消期	2号住居址		三条市「三条市史 実科編 第1巻」1981
		石川崎	糸魚川市石川崎	古墳 消期	12号住居址		石川県教育委員会「金沢市石川崎遺跡第2・3次」1971
	岐阜	大日向	中津川市大日向	古墳 中期	1号		大日向遺跡発掘委員会「大日向遺跡発掘報告書」1967
		中ノ瀬	東濃市高須須賀町	弥生 後期	2号住居址		東濃市教育委員会「中ノ瀬遺跡発掘報告書」1982
		新旭	津市新旭	古墳 前期	S B-7号住		新潟県辨調査団「新潟県遺跡調査報告書」1973
		上庄路	佐久市上庄町	弥生 後期	1號	銅鏡出土	第一次調査会
		北西久保	佐久市北久保町	弥生 後期	1號		高崎町教育委員会「北系遺跡」1972
		北原	下伊那郡高森町	弥生 中期	2号住居址	祭祀遺物出土	長野県教育委員会「高森市北原地内その2」「長野県中央道跡文化財伝承地見面調査報告書 47年度」1973
		酒巣前	飯田市伊賀良	弥生 後期	1号住居址		今村善典「飯田市酒巣前遺跡」『長野県考古学史』4号 1967
		櫛光寺原	飯田市座光寺原	弥生 後期	6号住居址		北野原四谷遺跡発掘委員会「櫛光寺原遺跡」『長野県考古学史』4号 1967
		下平	佐久市下平	弥生 後期	Y-2号住	祭祀遺物出土	北野原佐久遺跡委員会「下平遺跡」1981
		社草神	小高郡草神町	古墳 前期	13号住居址	玉造り工房	丸子町教育委員会「三井・三角遺跡辨認急急報調査報告書」1980
		月夜半	下伊那郡高森町	弥生 後期	4・9・10		高森町教育委員会「月夜半」1970
		草堀外	伊那市美馬等原	古墳 前期	1号住居址	祭祀遺物出土	御恩恵・御子義泰「長野県伊那谷炎坂塚原宝庫外遺跡調査報告書」『信濃記』4-1 1969
		堀原	黄木村堀原	弥生 後期	62号住居址	祭祀遺物・共器出土	長野県四国谷教育委員会「堀原遺跡」1981 長野市堀原遺跡の「天手扶」を中心とした「信濃記」4-1
		平型平	長野市安茂里	弥生 中期	4号住居址		長野市教育委員会「平型平遺跡」1971
		乾原野裏塙	佐久市新子田	奈良	1號		
		的場	下伊那郡松川町	弥生 後期	1號		長根川町教育委員会「的場」1973
		三輪	長野市三輪	古墳 後期	2号住居址		長野市教育委員会「三輪遺跡」1980

第4節 弥生時代の特殊住居址

地方	県	遺跡名	所在地	時期	備考	遺物	文献
近 畿 原 根 和 歌 山	天 神 山	高麗市天神山	弥生・中期	1棟			高麗市教育委員会「高麗の弥生文化」1969
	東 山	南河内郡河内町	弥生・後期	呂風10a号			
	大 中	加古郡吉野町	弥生・後期	12棟		祭祀遺物・船模型	福岡市教育委員会「播磨人山遺跡」1965
	東 濃	加古川東濃	弥生中～後期	1・2・9		祭祀遺物出土	兵庫県教育委員会「播磨東濃古跡」1969
	立 岡	福井郡太了町	弥生・中期	1棟			太子町教育委員会「立烏・立岡遺跡」1971
	名 古 山	福井郡山形舞	弥生・中期	1棟			上田哲也・河原理彦編「播磨の弥生文化」1966
中 國 山	吉 賀	橋本市市島	弥生・中期	1号住居址			和歌山県教育委員会「橋本市吉賀跡発掘調査報告書」1974
	北 田 井	和歌山市北田井	弥生・後期	4号住居址			和歌山県教育委員会「和歌山市北田井遺跡発掘調査報告」1971
	西庄地区	和歌山市西庄	古墳	前期	3・4号住		和歌山県教育委員会文化財課第4研究会「西庄地区遺跡発掘調査報告」1・2 1978・1979
	赤 野	高麗郡落合町	古墳	二期	1号住居址		岡山県文化財保護課会「中國複合式車道遺跡に伴う発掘調査」1973
四 國	碁 野	岡山市碁野町	古墳	二期	5棟		岡山県文化財保護課会「碁野文化財調査報告」1972
	羅 立 山	英部郡美作町	弥生・後期	1棟			
	小 字 中	勝田郡勝中央町	弥生・後期	1棟			
	天 神 原	津市天神原	弥生・後期	8・15・19			岡山県文化財保護課会「中国宮室式車道遺跡に伴う発掘調査」1975
	二 宮 大 成	津市二宮大成	弥生・後期	1区1号住	鉄器出土		岡山県文化財保護課会「小瀬莊宮室車道遺跡に伴う発掘調査」1973
九 福	大 久 保	府中市上用町	古墳	二期	1号	祭祀遺物出土	福岡市教育委員会「砂ヶ谷丘」且達塚・土塙塚・土塙塚II・土塙塚III・土塙塚IV・土塙塚V」1977
	北 道	宇城市川上御坂	弥生・後期	2区2号住			宇都宮市教育委員会・宇都宮の遺跡調査委員会「宇都宮の遺跡」1968
	熊 立	松山市早ヶ野町	古墳	中期	1棟		毎日新聞朝刊 1974.03.07
	ヒ ノ キ	寄安郡佐山町	古墳	二期	1棟		『歴史基本』1975.7月号
四 國	比 月	下益城郡南町	古墳	中期	5・7・9・11 17号住居址		前原市文化財保護協会「比月」1974 比原市教育委員会「熊本文化財調査報告16号」1975
	有 田	福岡市西区	古墳	一期	6棟		福岡県教育委員会「有田・脚野郡・加茂西区右田・脚野郡における通路跡の発掘調査報告」2・3集 1982
	雲 山	筑後市麻高町	弥生・後期	1棟			筑後市教育委員会「麻高遺跡」1966
	大 迫 端	山門郡大迫町	古墳	後期	C区35号住	祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「九所郡白鳥町通路跡周辺文化財調査報告XIV」1977
	上 峰 子	久留米市前原町	弥生・後期	1号住居址			福岡県教育委員会「今宿ハイバス通路跡周辺文化財調査報告X」1977
	上 柳 白	福岡市小柳町	古墳	後期	1号住居址	祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「九所郡白鳥通路跡周辺文化財調査報告V」1974
	私 塚	筑後市相馬町	弥生・後期	2・10・11			筑後市教育委員会「私塚遺跡」1970
	小 原	鞍手郡若木町	弥生・後期	7棟		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「八洲原白鳥通路跡周辺文化財調査報告XII」1977
	竹 ヶ 本	筑紫郡都日町	古墳	前期	3号住居址		福岡県教育委員会「筑紫郡都日町竹ヶ本遺跡調査報告」1963
	茶 臼 山	鞍手郡若木町	弥生・後期	1号住居址		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「八洲原白鳥通路跡周辺文化財調査報告X」1977
	中川川越	小糸島郡前原町	弥生・後期	1・5号住			
	西 中 ノ 沢	八女市安岡町	弥生・後期	7棟		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「八洲原白鳥通路跡周辺文化財調査報告XIV」1977
	野 口	八女市竜岡	弥生・後期	1・9・10		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「八洲原白鳥通路跡周辺文化財調査報告XIII」1977
	財 黒 岩	太宰府市太宰府	弥生・後期	35号住居址			福岡県教育委員会「福岡市ハイバ・関係施設文化財調査報告1号」1970
	久留邊ヶ下	宗像市久留邊	古墳	中期	7号住居址		
	地 野	八女市京開	弥生・後期	2号住居址		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「久留邊白鳥通路跡周辺文化財調査報告XIV」1977
	遠 瀬	八女市笠岡	弥生・古墳	7棟		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「久留邊白鳥通路跡周辺文化財調査報告XV」1977
四 國	宮 ノ 森	福岡市十六町	弥生・後期	2棟			福岡県教育委員会「宮ノ森遺跡」1971 福岡県教育委員会「宮ノ森遺跡A～H地点」1971 福岡県教育委員会「宮ノ森遺跡終点」1971 「今宿ハイバス通路跡」1970
	内 山	鞍手郡宇野町	弥生・後期	1・2・4・6住			福岡県教育委員会「九所郡白鳥通路跡周辺文化財調査報告XIII」1977
	門 田	春日市上白木	弥生・後期	5・8・9			福岡県教育委員会「山陽新幹線周辺施設文化財調査報告38～50」1975・76
	八 幡	糸島郡前原町	弥生・後期	1・3号住			
	務 水 原	筑紫郡春日町	弥生・後期	2・5・6	鏡出土		福岡県教育委員会「福岡県苏木原遺跡調査報告」1965・1967
	柳 ヶ 谷	鞍手郡船岡町	弥生・古墳	1・2・3・4・5			福岡県教育委員会「九所郡白鳥通路跡周辺文化財調査報告X」1977
	湯 村	福岡市十六町	古墳	1号住居址		祭祀遺物出土	福岡県教育委員会「福岡市ハイバ・関係施設文化財調査報告1号」1970
	院 寺	福岡市役所町	弥生・古墳	6棟			宮崎県教育委員会「松原遺跡」1982
	上 市 野 原	北九州市若宮町	弥生・後期	11号住居址			宮崎県教育委員会「上市野原遺跡発掘調査」1989
	新 田 原	北九州市折原町	弥生・後期	4・6号住			
四 國	生 地 東	宮崎市朝日町	弥生・後期	7棟			宮崎県教育委員会「宮崎市朝日町遺跡調査報告書2号」1985
	九 谷 第	都城市九谷町	弥生・後期	1号住居址			宮崎県教育委員会「九所郡白鳥通路跡周辺文化財調査報告」1979

第5節 千曲川流域における 弥生後期土器棺について

青木一男

はじめに

千曲川流域の弥生後期の調査では、最近、墓域の調査とともに「合せ口」にされた土器の埋設例が散見される。当地域の弥生時代後期に盛行する吉田式・箱清水式土器の壺、甕、高坏等を合せ口にするもので、土坑ないし、土器を埋納する程度の掘り方に合せ口の土器1個体分を斜位ないし横位に埋設する例が多い。土器を合せ口にする点、副葬と考えられる玉類、骨片・歯が出土する例があることから墓として認識されているが、弥生時代後期の合せ口棺ということもあり、棺の形態をもって、広義の「甕棺」・「壺棺」という用語で呼ばれて来ている。

弥生時代後期の千曲川流域は中期の繩文・篦描文・構描文に変わって「中部高地型構描文」と呼ばれる施文技法をもつ土器様式が盛行する。高坏も盛行し、西的な匂いのする土器様式であるが、施文技法等細部に地域色を示す。墓制の上でも円形を基調とする小型の周溝墓の調査例が増えて来ており、安定化した方形周溝墓をスマースに受け入れない感すらある。

千曲川流域の弥生後期社会は、土器様式の面でも、墓制の上においても、西的ななるものを受け入れながらも地域色を強めたきらいがあり、合せ口に埋納された後期の棺についても検討する必要があろう。資料数が限られているという限界はあるものの、出土例の現象面を整理することにより埋葬内容に儘かでも追っていきたい。なお、本レポートでは後期の合せ口棺を「土器棺」と呼ぶことにする。

(1) 研究抄史と整理の方向

千曲川流域の弥生後期墓制は調査例との関係もあるもののいまだ明らかでない点が多い。⁽¹⁾ 土器棺についても同様であるがその検出は、1976年、長野市・星地遺跡で2基検出されたのが初見である。⁽²⁾ 埋葬骨・副葬品は確認されなかったが、埋葬状況から中部高地型構描文を施文する甕を棺身とする「甕棺」と認識され、仮説的に墓としての位置付けが行われた。以後、同タイプの甕を棺身とする土器棺が注意され、検出されるようになる。

土器棺が墓として認識出来る根拠をより強くしたのは、1980年代に入って弥生時代後期の墓域が面的に調査されるようになってからである。佐久市・周防畠B遺跡、⁽³⁾ 長野市・篠ノ井遺跡群—聖川堤防地点—(以下、篠ノ井遺跡と呼ぶ)の調査では円形を基調とする周溝墓にともなって土器棺が検出され、いずれも数点のガラス玉を副葬していた。

以後、千曲川上流域を中心とし、1987年小山岳夫氏は千曲川流域の中期後半から後期の土器棺を集成・考察し、「壺・甕棺葬は千曲川水系において後期に特徴的な墓制の一つであった。」

第5章 千曲川流域における弥生後期土器棺について

としている（小山 1988）。さらに、被葬者には、佐久市・竹田峯遺跡の土器棺から胎児骨が出土していることから、胎児・幼児なども多く被葬の対象となっている可能性を示しながらも「成人を対象とする洗骨葬の有無については今の所明確でない」とした。

近年、弥生時代後期の焼骨例が明らかになって来ており、遺体が土器棺に埋葬される段階は重要な視点である。永峯光一氏は、「長野市屋地遺跡で発掘された後期の二基の壇棺も、同様の意味で、もし成人的墓であるとしたら、再葬が考えられなければならない。」（永峯 1988年）とした。弥生時代後期の事例として、山腹岩場の焼骨例・佐久市鐵畠遺跡⁽⁶⁾、土坑墓内で骨焼をしている佐久市上直路遺跡⁽⁷⁾が存在することからも、伝統的な墓制と後期の土器棺との関係を位置付けて行かなければならないだろう。

本レポートでは前述の埋葬段階の問題と、千曲川流域の後期弥生墓制との関係については著者の勉強不足で触れることができない。墓域の中における土器棺の位置付けを中心に、土器に中部高地型飾文を施す人々の社会にあって、土器棺に埋葬された人々の立場、土器棺を取り込む墓域について考えてみたい。本項では後期土器棺の被葬者の問題と墓域内の位置付けのための整理が中心となる。

No	遺跡・遺構	所在地	立地	時期	棺の形態	副葬品・人骨
1	安源寺	中野市	丘陵上	後期後半	A II	コブシ大石1
2	町川田	長野市	自然堤防	#	A I	
3	星地1号	#	扇状地端部	後期前半	A I	
	星地2号	#	#	#	A I	
4	羽場堀ノ内	上山田町	扇状地端崖上	後期後半	A I	
5	篠ノ井	長野市	自然堤防	#	B I	ガラス小玉数点
6	塙崎	#	#	#	B I	ガラス小玉9、鐵石美管玉1、人骨3
7	萬石	佐久市	台地尖端微低地	後期前半	B I	
8	竹田峯	#	台地	後期後半	B II	ガラス小玉2、管玉2、胎児骨
9	周防畠B・2号西溝墓	#	微低地	後期前半	B II	ガラス小玉1
	周防畠B・26号土坑	#	#	#	A I	ガラス小玉4
	周防畠B・27号土坑	#	#	#	A I	(ガラス小玉)
10	戸坂	#	台地	後期後半	A I	骨粉

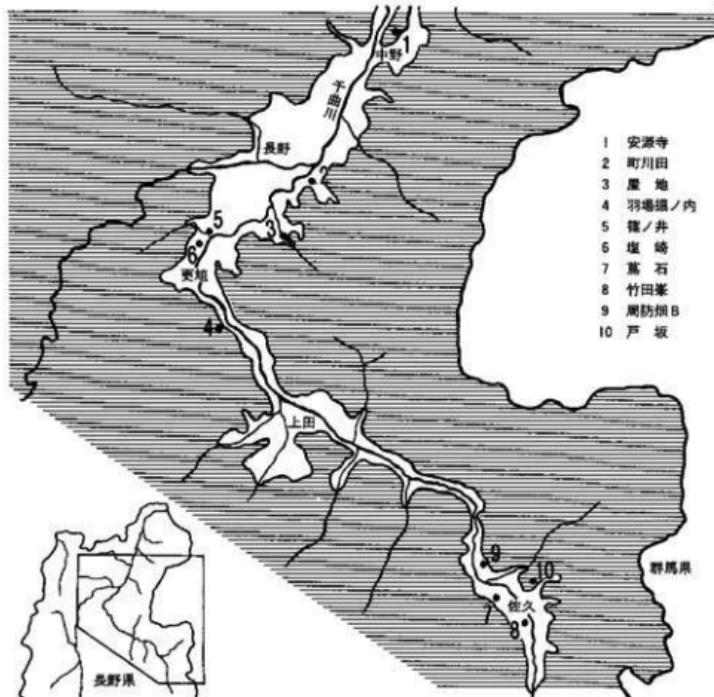
第1表 千曲川流域の弥生後期土器棺（Noは図版1に対応）

(2) 棺に使われる土器

千曲川流域の弥生後期土器棺は、現状で9遺跡・13基が確認されている（第1表）。その検出は千曲川上・中・下流域の全域に及ぶが、現段階では上・中流域が中心となる。合せ口の土器棺では、骨ならびに遺体を納める棺身と蓋に分かれるが、中には蓋にあたるものがみられず棺身のみの出土状況を示すもの、合せ口の状況から棺身と蓋の区別に躊躇するものもみられる。いずれにせよ、後期前半・後半を通して、棺身ならび蓋には甕・壺・高杯が用いられるが、今のところ鉢の使用例はない。

<後期前半の土器棺>

千曲川中流域の長野・更地地方では屋地遺跡（図版82-3）1号・2号土器棺（図版83-1・2）のみである。棺身となる甕は胴上半に最大径をもつ倒卵形の平底で、口縁部が“くの字”状に短く外反する。文様構成は、口縁部に施文が見られず、頸部から胴部上半にかけて等間隔止め



第82図 千曲川流域弥生後期土器棺出土遺物

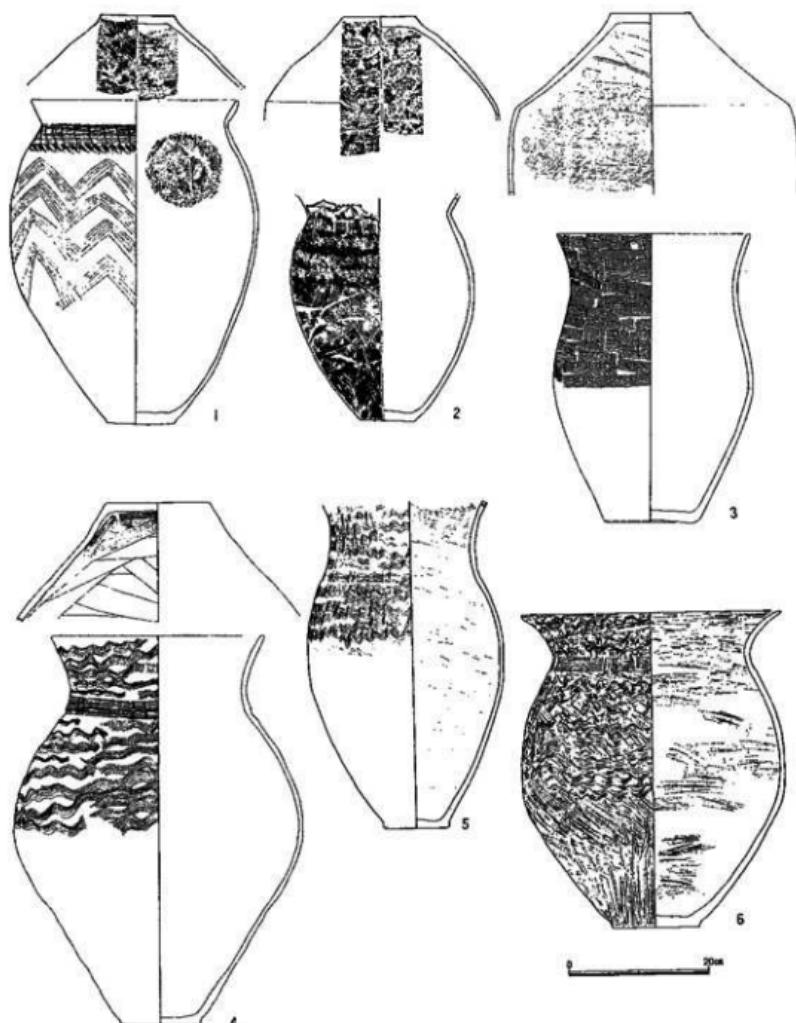
簾状文・波状文・羽状文を施す。長野市・吉田高校グランド遺跡出土の土器を分類した千野浩によれば、同遺跡において主体を占める文様構成であるという。口縁部の形態、羽状文の施文に中期的伝統を残すものの、波状文の施文に新しい様相が伺える。¹⁹ 容量としては1号が中型の、2号が大型に相当する。蓋として使われる壺は打ち欠かれた胴下半のみで、全容を知ることができない。後期後葉の箱清水式土器に特徴的な最大径部分以下のくびれが見られず、吉田高校グランド遺跡と同様な壺であろう。

千曲川上流域の佐久地方では、葛石遺跡(84-9)、周防畠B遺跡(84-7・8)例が相当する。周防畠26号土坑例は甕と壺の合せ口棺で、この時期の土器の組み合わせが理解できる例でもある。蓋は胴中位に最大径をもつ平底甕で、口縁部が“弓状”に外反する。文様構成は口縁部から胴部上半にかけて横描斜走直線文が横位羽状に施される。屋地遺跡土器棺例と比べ口縁形態が箱清水式土器に近い。壺は胴部中位下方で張り、無花果形を呈し、外面はヘラミガキが丁寧に施される。頸部には矢羽根文が施される。

千曲川上流域・中流域の後期前半の土器棺に使用された土器を概観した。いずれも集落・住居址等から出土するものと同型式であり、周防畠B遺跡26号土坑出土例(84-7)では、甕と壺のうち、壺のみにススが付着していることからも、日常使われていたものが転用されていることがわかる。上流域と中流域の甕では、口縁形態、胴部最大径の位置等に差がみられる。時間差も考慮されるものの、むしろ地域差を重視したい。甕を注意することによって小地域を越えた人の移動が明らかになるかもしれない。現段階ではそれぞれの地域の甕を棺として使っているものと解釈する。²⁰

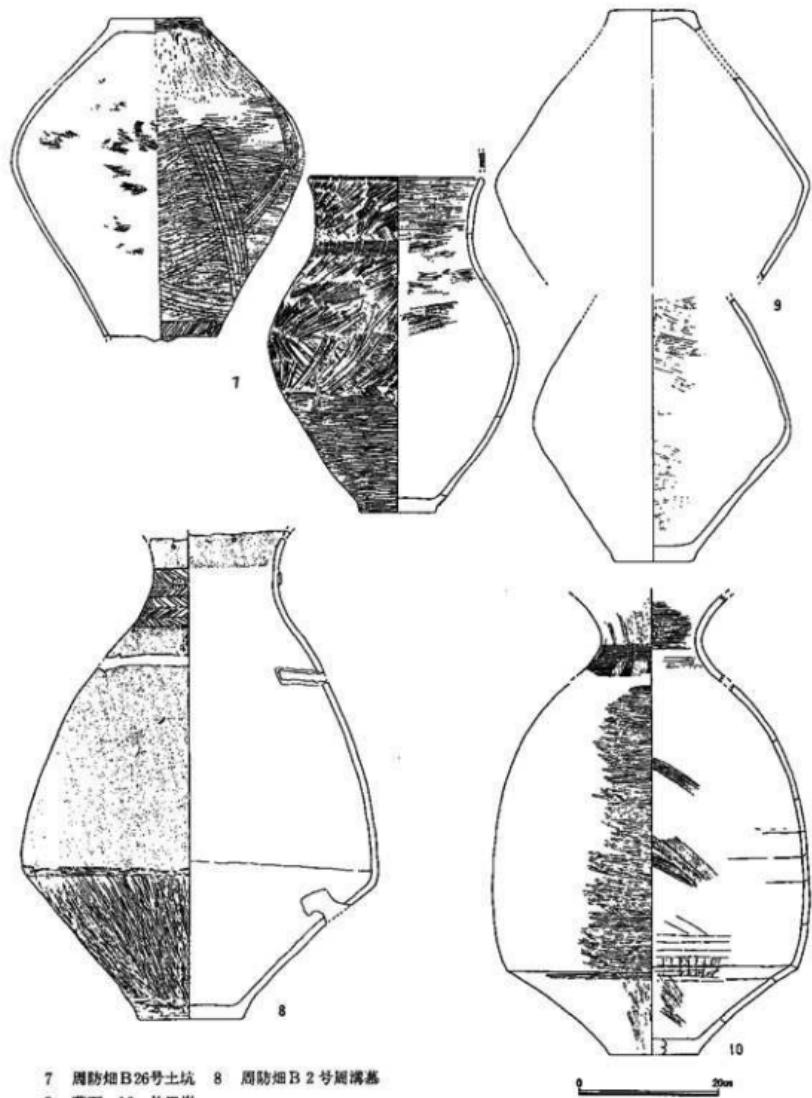
〈後期後半の土器棺〉

後期前半に比べ大型の壺が使われる。長野市簾ノ井遺跡(85-11)、塙崎遺跡群(12)(以下塙崎遺跡と呼ぶ)、佐久市・竹田峯遺跡(84-10)等である。いずれも頸部付近で打ち欠いているため本来の器高は明らかでないが、頸部までの器高は55~75cmを計り、本來の器高は70cm以上あったものと考えられる。器形は底部からやや外反気味に立ち上がり、胴下半の最大径部分でくびれ部に至る。鋭いくびれをもって立ち上がる胴部は箱清水式土器の特徴を示し、後期前半の壺と異なる。文様構成は頸部に横描T字文を施すほかは丁寧なヘラミガキを施し、赤彩するものとしないものがある。また、甕を棺身とするもの多くは同タイプの大型壺の胴下半を打ち欠いて蓋とする。甕は安源寺遺跡(83-5)、町川田遺跡(3)、羽場堀ノ内遺跡(4)が棺身として使われる。いずれも胴中位に最大径をもつ平底甕で、口縁部が“弓”状に外反する。文様構成は口縁部から胴中位にかけて横描波状文・簾状文を施すものであるが、横描文の施文順位・方向にはバラエティーがみられる。集落出土の甕よりも若干大きめであるがススの付着等から集落で使用したものと解釈される。



1 屋地1号 2 屋地2号 3 町川田 4 羽場掘ノ内
5 安源寺 6 周防畠B27号土坑

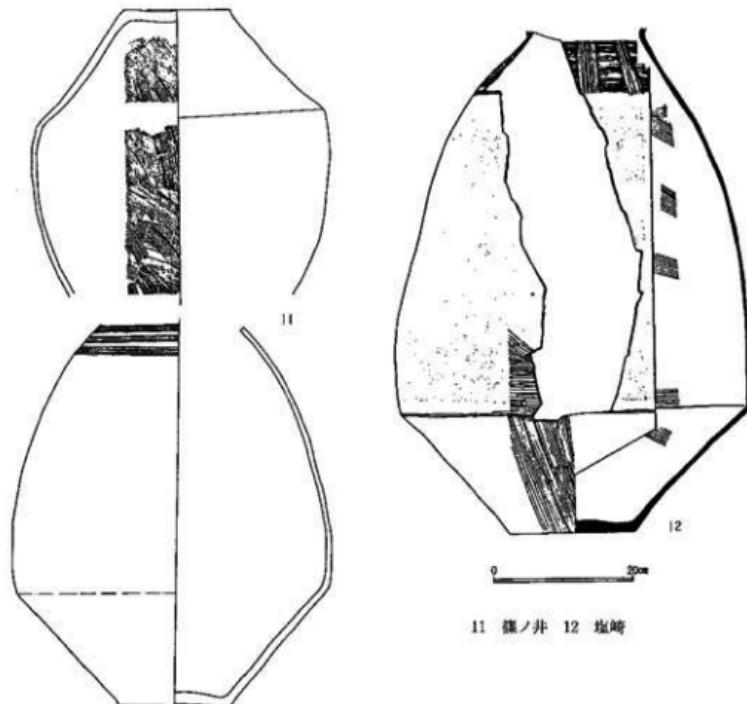
第83図 千曲川流域後期土器棺 (I)



7 周防畠B26号土坑 8 周防畠B2号脛溝墓
9 萩石 10 竹田峯

9 20cm

第84図 千曲川流域後期土器棺 (II)



第85図 千曲川流域後期土器棺

千曲川流域において弥生時代後期の棺に使われる土器を概観した。壺、甕、高坏が使われるが、壺、甕が殆どである。鉢が使われていないことは、千曲川流域の後期土器セットに見られる鉢が小型品であり、合せ口に適さなかったのかもしれない。土器棺に見られる土器様相は千曲川流域の土器群であり、他地域、あるいは他様式の土器が用いられた形跡は見当たらない。いずれも集落出土の土器と変わりないが、壺・甕、いずれも大型品が多く用いられているところが異なる。

(3) 土器棺の諸形式

I 棺の分類

棺に使われる器種の選択には用途としての使い易さとともに、集団内の精神的・伝統的な選択があるものと考えられる。機能の中心的位置を占める棺身に前述の条件が具象されるであろうという観点から、棺身にどんな器種が選択されるかをもって、甕が使われるものをA式、壺が使わ

れるものをB式とする。また、出土状況から合せ口と判断されるものを単体と考えられるものとしてA式、B式に組み合わせ4類に分類した(図版86)。

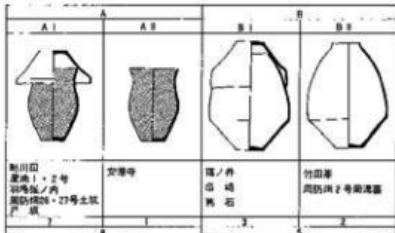
A I式は、屋地1・2号(図版83-1・2)、町川田(3)、羽場堀ノ内(4)、周防畠27号(6)、戸坂があたる。屋地、町川田、羽場堀ノ内、周防畠B27号例ではB式で用いられる大型壺の胴下半で蓋をする。壺胴下半の最大径・くびれ部付近で打ち欠いている点も共通しよう。戸坂例では高坏の坏部を逆位にして蓋としていた。A II式は安澤寺例(5)1例のみであり、A式の主体はB式で用いられる大型壺の胴下半で蓋をするタイプが主流と言えよう。

B式はB I、B II式双方とも頸部付近を打ち欠いており、朝顔状に開く口縁部を残すものはない。用途として頸部以上の空間が必要でなかったことを示している。B II式は周防畠B2号周溝墓例(図84-8)、竹田峯例(10)があたる。いずれも頸部は残存するものの、頸部文様帯の下部で横に欠いている。これは遺体あるいは骨の収納と関係する行為のようであり、最も口径の縮まる頸部以上に一定の口径が用途として必要であったのだろう。B I式は葛石(9)、篠ノ井4号周溝墓(図版85-1)、塩崎(12)があたる。葛石、篠ノ井では頸部以上を欠く壺を合せ口にする。塩崎ではやはり頸部以上を欠き、しかも体部を打ち欠いて、別個体の小型壺・大型壺の胴部破片でそれぞれの部分を覆い、合せ口状にしていた。

棺身に壺を使うA式と、壺を使うB式は量的には半々であるが、A式の大半に一部分ではあるが壺が使われており、いずれの形式も壺を使おうとする意図が強く働いていたと考えられる。壺を合せ口の棺として使おうとする意図は東日本の後期土器棺と共通するものである。しかしながら、棺の機能の中心である棺身に壺を使ってはいないA式は壺を使うB式とは異なった精神的伝統的行為の中で選択されているものと考えたい。

2 棺の埋納

土器棺は合せ口に埋設された土器の出土状況をもって認識されることが多く、墓坑ないし、掘り込みに、棺一個体分を横位、あるいは横位に近い状況の斜位に埋設することを基本とする。正位の状態で埋設されているのは戸坂のみである。墓坑中に斜位に固定するために下方を石で押える例が屋地、葛石にみられる。



第86図 千曲川流域後期土器棺の形式

(4) 墓域・遺跡内における土器棺の位置

墓域の調査が面的に行われ、土器棺が検出されたのは佐久市周防畠B遺跡、長野市・篠ノ井遺跡群—聖川堤防地点一の二遺跡である。

<佐久市周防畠B遺跡> (図版87)

墓域は、微高地の等高線張り出し部に2号周溝墓が1基あり、等高線ラインに沿って17基の土坑群が分布する。26・27号土坑内からは土器棺が出土した。土坑群の中心的位置に円形を基調とする墓坑が存在する点は、中野市・安源寺遺跡においても認められるが、主体部には安源寺例には土坑が、周防畠例には組み合わせ式の木棺が想定されている。

土器棺は3基検出され、A式、B式の双方が認められる。2号周溝墓の墓坑内からはB I式1基が、周辺の土坑内からはA II式が検出された。

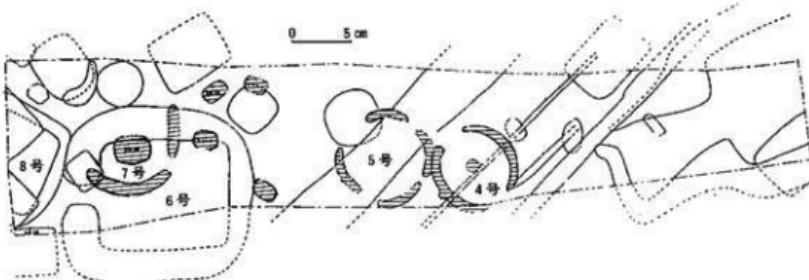
千曲川流域内においてA式とB式が同一墓域から出土した唯一の例であるが、周溝をもつ墓坑内にB式が埋納され、周辺の土坑群にA式が埋納されている現象に注意したい。

<長野市篠ノ井遺跡群—聖川堤防地点一> (図版88)

トレンチ調査のため墓域の範囲は明らかでないが弥生後期の周溝墓が5基検出されている。対面する塹構を有する円形周溝墓が3基あり、その周辺に4基の土坑墓が認められる。土坑中3基



第87図 周防畠B遺跡の墓域 (林 1982年 一部改変)



第88図 篠ノ井遺跡群—聖川堤防地点一の墓域 (青木 1984年 一部改変)

から鉄鋼等が検出されている土坑と円形を基調とした周溝墓が存在するタイプとして、周防畠例、安源寺例と共に通るものがある。周溝墓の主体部に周防畠例のように組み合わせ式の木棺が使われていたか否かについては正式報告を待ちたい。土器棺は4号周溝墓の周溝中よりBII式1基が出土したほかは認められない。

周防畠B遺跡、篠ノ井遺跡においては墓域中に周溝墓、土坑墓、土器棺墓が認められ、土器棺墓は周溝墓ないしは土坑墓に付随する形で存在しており、主体とはなっていないらしい。また、周溝墓にはB式が、他にA式が用いられた形跡が周防畠遺跡で認められる。遺跡中におけるA式棺の位置をみてみたい。

〈長野市・屋地遺跡〉

宅地造成のため、扇状地端部を便宜的にA・B地区に分け調査が行われている。土地景観は同様でA・B間を区画する地形的な条件、制約はない。B地区では弥生時代後期の住居址11軒が調査され、後期前半が4軒、後半が7軒であったという。前半、後半を通して単位集団の住居址群と考えられる。B地区から100m程離れたA地区では、報告書で平安時代とされる土坑群とともに後期前半のA I式土器棺2基が検出されている。A地区では弥生後期の住居址が検出されておらず、集落の縁辺部、あるいは墓域の一部が予想される。

屋地例のように地形的な制約の少ない住居址群周辺から出土する土器棺の中にA II式が散見できる。トレンチ調査、小規模調査という難点はあるものの、長野市、町川田遺跡では後期の住居址群より若干離れた地点で数基の土坑群中にA II式土器棺が検出され、上山田町・羽場塚ノ内遺跡でも後期の竪穴状遺構とともにA II式土器棺の出土をみた。集落周辺に埋納された土器棺ないしは、周辺の土坑を墓坑と考えれば、集落に近接した墓域中の土器棺とも考えられるが、後者の立場を取りたいと思う。これらのA II式土器棺は集落に近接した土坑墓群に不隨するものと考えたらどうだろうか。現状では溝をもつ周溝墓は検出されていないが、未調査部に存在する可能性もある。

(5) A式とB式の土器棺に葬られた人

現段階において、土器棺は周防畠B遺跡例や篠ノ井遺跡群例のごとく墓域に付随する形で埋納されていることが言えようである。また集落周辺から出土する例は墓域内であったか否かについては今後の検討課題であるものの屋地例を代表に資料が散見できる。これらの墓域と考えられる空間から出土する土器群についてA式は土坑群との関係が、B式は周溝墓との関係が予想されないこともない。A式とB式について若干の整理をしてみたい。

副葬品であるが、棺内から副葬品を出土した例はA式には見られない。B式棺には数点の玉類を副葬するものが多い。篠ノ井遺跡群4号周溝墓例よりガラス小玉数点、竹田峯遺跡例よりガラス小玉2点、管玉2点、塩崎遺跡よりガラス小玉9点、鉄石英管玉1点、周防畠2号周溝墓例よ

りガラス小玉1点があげられる。いずれもB式の土器棺でガラス玉数点が埋納される。管玉は細型の小型のもので篠ノ井、竹田峯で埋納される。千曲川流域の土器棺を集成・分析した小山岳夫氏は土器棺に埋納される玉類を「これらの玉類は首飾り、腕輪の装飾具として用いられたのではなく、何らかの祭祀的意味合いをもって供養されたものと理解される。」とみる。もし、そうであるとすれば、玉類を副葬にもつことが多いB式と、もたないものが多いA式では葬られる立場において何らかの違いが予想できる。

A式、B式棺に葬られた人物、葬送過程を知る手段として人骨、歯等の出土状況をあげておきたい。A式棺からは今のところ人骨の出土は認められず、葬られた人物については明らかではない。B式においては長野市塩崎例のBⅡ式より歯數点が、佐久市竹田峯例のBⅠ式棺内より胎児骨が出土している。塩崎例では調査者の矢口忠良氏によれば子供の歯の可能性が高いという。竹田峯例では総重量15gの人骨細片が出土している。頭蓋片、椎骨片、肋骨片、四肢片などが確認できるようであり、鑑定者の医学博士森本岩太郎氏によって、月齢約5カ月の人の胎児骨1個体分であることが明らかになっている。尚、人骨に外傷、病変は認められないという。

胎児骨を出土した竹田峯の土器棺は現行で器高66cmを計るが頸部付近に横に割った形跡があり、遺体あるいは骨はこの部分から納められたものと考えられる。同部の口径は約23cmを計るが、同部を欠かなければ最小径12cmの頸部では遺体が収納できなかつたことが考えられる。今日、6カ月胎児の大横径は約5cm、前後径は約7.5cm、頭径は15cmとい⁹う。胎児の頭部は打ち欠かなくともすっぽりと入ってしまいそうであるが、胎児骨が何かにくるまれて埋葬されたと考えればやはり20cm前後の挿入口が必要であったのではなかろうか。そう考えれば竹田峯の大型壺も胎児骨を納めるのに多き過ぎると言えないだろう。竹田峯より大形の塩崎例は歯の出土から乳児あるいは幼児が埋葬されていると考えられるが、壺の体部を長さ60cm程、幅15cmほど打ち欠いて同部を蓋にしている。

竹田峯、周防畠例から考えるとB式の土器棺に埋葬されたのは周溝墓の主体部に葬られた人と近い関係の子供が考えられる。一方、A式棺からの骨・歯等の出土はない。A式に葬られた人物、葬送過程を知ることはできないながらも、A式の壺の内部最小径と、B式の壺の頸部欠損部の最小径が20~25cm前後で双方ともある幅を意識していることに気付く。容量はB式の竹田峯で約57ℓ、A式の町川田で約18ℓと差はあるものの最小径は前者で23cm、後者で22cmである。A式の壺には体部を打ち欠いた痕跡は認められないことから、遺体あるいは骨は口縁から納められることが予想され、その埋葬方法はB式と同じであったと考えたい。ただし、玉類などが副葬されない点からしてB式に葬られた子供と立場が異なっていたのかもしれない。

(6) 中部高地型櫛描文文化圏の後期土器棺

千曲川流域の土器棺を概観し、整理してきた。弥生時代後期、千曲川流域と同様に中部高地型櫛

描文を使う群馬県の樽式土器の地域はどうだろうか。近年、墓制の調査・研究が進んでおり、榛名山麓の渋川地域を中心に特徴ある疊床墓の検出例が増加している。円形・方形の周溝をもつものがあり、複数の疊床墓が主体部として検出され追葬が行われているという。有馬遺跡では疊床墓をもつ周溝墓が群構成をなし、壺棺墓にも一つのまとまりがあるらしい。弥生後期の周溝墓40基、壺棺墓31基、住居址50軒が検出され、墓域・居住域の面的な調査がなされた。

一方、千曲川流域の墓域の調査では墓域の一部分を垣間見ることが現状ではあるものの、土坑墓群中に小型の円形を基調とする周溝墓が現れることが明らかになって来ており、土器棺が付隨することは指摘してきた。平野進一氏によれば、群馬県域において、円形周溝墓は後期前半に出現し、後半に盛行するタイプ⁴⁰といふ。同タイプの周溝墓が同じ中部高地型櫛描文を使った人々の地域性が墓制の上で現れているようにとれる。

群馬県の新保遺跡では、円形を基調とする周溝墓の台状部に、複数の土坑とともに壺を合せ口にした土器棺が検出されている。7号周溝墓では土坑1基と土器棺1基が台状部から検出され、前者から壮年期の入骨が、後者から胎児骨が検出された。11号周溝墓からは切り合いの認められる3基の土坑と1基の土器棺が台状部から検出され、出土人骨・歯によって前者が壮年期の胎児ないし乳児および幼児の埋葬施設と考えられる土器棺が周溝内に成人の埋葬施設と考えられる土坑とともに共存していた。

且千曲川流域に転じてみたい。周防畠B遺跡の周溝墓の主体部は木棺が想定されるがその脇からB式の壺棺が出土している。まさに新保遺跡のごとくであり、土器棺に葬られた人物は子供であった可能性が高い。周溝墓には伴っていないものの、竹田峯のB式土器棺からは6カ月の胎児骨が、塩崎遺跡のB式土器棺からは幼児のものと考えられる歯が出土した。また、千曲川流域の壺による土器棺に数点の玉類が副葬されているが、新保遺跡では、其の土器棺のうち胎児骨を出土した11号周溝墓土器棺1基のみガラス小玉2個を出土している。

数少ない資料での判断は危険であるが、土坑あるいは木棺を、円形を基調とする溝で区画しようとする意識が中部高地型櫛描文を使うある集団の中にモデルとして共有されており、玉類を副葬されるような立場の人物が若くして亡くなった場合、成人骨と同じ場所に土器棺で葬られたのではないかという可能性を示しておきたい。この場合、壺による土器棺と甕による土器棺はその使用にあたって器種の選択があり、葬られる人間の立場、あるいは葬ろうとする集団の立場によって使い分けがあったのではなかろうか。

おわりに

資料に限りがあり、しかも整理不十分のままで憶測を述べてきた。ご批判、検討していただくことにより、千曲川水系の土器棺内容が明らかになってくるようであれば幸いと思う。

今回、容量の問題について三上徹也氏、黒岩隆氏からアドバイスをいただいたが生かすことができなかった。今後棺の容量、形態等から被葬者および埋葬段階に迫って行かなくてはならないだろう。末筆ながら資料収集、整理にあたって多くの方々にお世話をになった。お名前は記さないながらもお礼申し上げます。

註・引用参考文献

- (1) 千曲川は長野県東南端の甲武信岳に発し、上流から佐久、上田、長野、飯山盆地に流域をとり、新潟県に入って信濃川となる。水系流域面積は長野県東北信地方の大部分を占める。
 - (2) 1965 飯山市領田ヶ峯遺跡で県下最初の周溝墓が確認され(高橋桂 1966「北信候領田ヶ峯弥生式墓調査報告」『考古学雑誌』51-3)、中野市安原寺遺跡で23基の土坑群中1基に円形の周溝をもつ土坑が確認された。(中野市教育委員会 1967『安原寺』)周溝墓を中心とする論考に宮坂光昭 1978「方形周溝墓の研究と現状」『中部高地の考古学』I、小林康雄 1983『長野県における方形、円形周溝墓』『丘中学校』塩尻市教育委員会、青木和明 1984『長野県の周溝墓の変遷』『第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所能等がある。
 - (3) 日本窓業史研究所 1976『歴史地図』
 - (4) 林幸彦 1982『周防細B遺跡』『長野県史 考古資料編・主要遺跡(東北信)』
 - (5) 青木和明 1984『孫ノ井遺跡群駿賀川堤防地図』『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
 - (6) 高村博文、三石宗一他 1986『西裏・竹田峯』佐久県産文化財調査センター
 - (7) 竹内恒 1969『人骨の特徴な出土状態を示す長野県佐久市鐵炮遺跡』『信濃』21-4
 - (8) 『15歳の鋼鏡が出土した上原遺跡』『長野県埋蔵文化財ニュース』15
 - (9) 高环が用いられるのは戸坂遺跡において蓋として用いられる1例のみである。(小山岳夫 1984『戸坂遺跡』『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』)
 - (10) 千野浩 1987「3、遺物出土部-長野吉田高校グランド遺跡出土土器について」『長野吉田高校グランド遺跡』長野市遺跡調査会
 - (11) 佐久市考古資料展示会「佐久の古代を知ろう」の会場にて実見した。
 - (12) 桜清水式土器の小地域については佐沢浩氏によって指摘論考されてきている。佐沢浩 1986『桜清水式土器の文化圏と小地域-地域文化圏の動態を語る』『歴史手帳』14-2 名著出版
 - (13) 矢口忠良 1986『塙崎遺跡群IV-古道遺跡-小田井神社地点遺跡-』長野市教育委員会
 - (14) 金井汲二郎 1976『安原守山』中野市教育委員会
 - (15) 千野浩、青木和明他 1988『町川山遺跡』長野市教育委員会
 - (16) 霧島裕、棚田雄二郎 1987『羽場堀ノ内遺跡』上山町教育委員会
 - (17) 森本太郎 1986『竹田峯遺跡出土の塙棺内人骨所見』『西裏・竹田峯』佐久県産文化財調査センター
 - (18)
 - (19) 大庭昌彦他 1984『淡川市域における古墳出現期の地域相』『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
 - (20) 1985 「群馬県有馬遺跡」「日本考古学年報35」
 - (21) 平野進一 1985「群馬県における弥生周溝墓の類相」『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制-再葬墓と方形周溝墓』北武藏古代文化研究会能
 - (22) 群馬県教育委員会・鶴群馬県埋蔵文化財調査委員会 1982『新保遺跡II』
- 参考・引用文献
- 青木和明 1984『長野県の周溝墓の変遷』『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所・北文
獻古代文化研究会・群馬県考古民族学会
- 山口 明 1987『第16回企画展 猿を伝えた人々-その生活と墓制-』長野市立博物館
- 石川日出志 1987『再葬墓』『弥生人の祭りと墓の表い』弥生文化の研究8 雄山閣
- 馬目順一 1987『幼児用の寝・寝棺墓』『弥生人の祭りと墓の表い』弥生文化の研究8 雄山閣
- 石川日出志 1988『織文・弥生時代の焼人骨』『霞台史学』
- 高村博文 1987『弥生時代の墓制-昭和61年度例会研究発表より-』『佐久考古通報』No.42・43合併号 佐久考古学
- 小山岳夫 1988『森沢・葛石』佐久県産文化財調査センター
- 水峯光一 1988『信仰と墓制』『長野県史 考古資料編 遺跡・遺物』
- 北武藏古代文化研究会編 1988『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制-再葬墓と方形周溝墓』千曲川水系古代文化研究所・北文獻古代文化研究会・群馬県考古民族学会
- 小山岳夫 1988『佐久地方の弥生墓制』『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制-再葬墓と方形周溝墓』

第6節 南佐久郡における 弥生時代黎明期の土器群について

島田恵子

はじめに

南佐久地方には、南牧村・佐久町・白田町において、弥生時代黎明期の土器が出土している。いずれも再葬墓からの出土であり、ほぼ完形に近いものが多く、遺残はかなり良好である。残念なことに発掘調査による出土ではない。

一方、佐久平においては、この時期の出土遺物は稀に発見されているだけであり、やはりこうした時期の土器発見例が多いのは、南佐久の特色でもあろう。ここでは、これらの土器がどのような経路で伝播してきたか、土器の器形・文様構成・再葬墓への使用過程を分析しながら考察してみたい。

(1) 地理的環境と土器伝播ルート

南佐久郡は、埼玉県・山梨県に県境をなす、川上村・南牧村の2村があり、群馬県と東側に境を接する町村は、南相木村・北相木村・佐久町・白田町等である。また、西側に諏訪郡と境をなすのは、南牧村・小海町・八千穂村・佐久町であり、白田町は北側全体が佐久市へ連なっている。このように3県・1郡・1市に境を接する南佐久郡は、東・西・南側の三方が高い山々に閉ざされており、こうした状況から第1図に示したように数多くの峠が存在し、古くから山越えの交通路として使用されていた。考古学的方面からもこの峠は、土器伝播ルートを考えるうえから軽視出来ない交通路である。

次にこれらの峠からどのようなルートをたどって人々が移動し、土器伝播がなされたのかを見てみたい。

まず、南牧村矢出川遺跡群、矢出川南遺跡から出土した南佐久郡最古の弥生土器を遺した人々は、地理的環境や距離的方面から、信州峠・旧大門峠・平沢峠を越えて南牧村に入った公算が強い。いずれも山梨県と境を接する峠である。信州峠は頂上から2キロ下ると、須玉町黒森に至る。また、信州峠の西側に当たる旧大門峠と平沢峠は高根町に通じている。

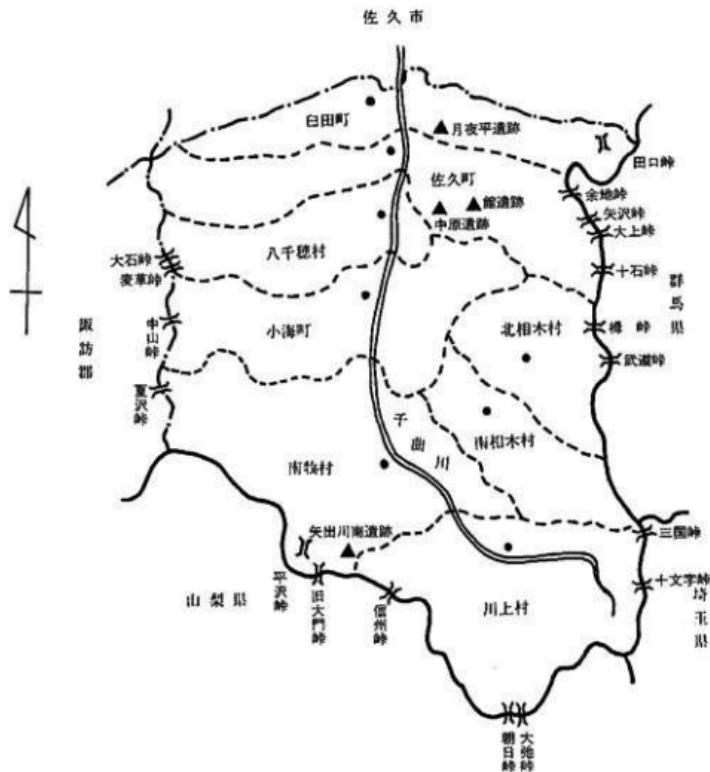
新天地を求めて佐久に入った弥生人は、東海地方の土器製作技法を用いていることから、この文化の伝播ルートは富士川を経て山梨県に入り、さらに佐久への遠い道程をこれらの峠道を利用して越えてきたのであろう。

佐久町第遺跡・中原遺跡・白田町月夜平遺跡へ住み着いた人々が越えてきた峠は、群馬県と境を接する東方に所在している。まず、北側から田口峠・余地峠・矢沢峠・火上峠・十石峠等5つの峠が並んでいる。このうち、十石峠は群馬県上野村横原に通じているが、他は群馬県南牧村から下仁田へ達する。

これらの峠で一番近距離で比較的難所の少ない道筋は余地峠である。筆者も踏査を試みたが、各遺跡からは余裕をもって一日で越えられる行程であった。

また、矢沢峠・大上峠も余地峠と同一の地点、熊倉に到達するがほぼ同じ距離にあると言える。

白田町側の田口峠は、広川原・馬坂を通って勘能に達するが、余地峠・矢沢峠・大上峠とほぼ同じような行程をたどる。



第89図 南佐久郡境を越える峠と黎明期の弥生土器出土遺跡

さらに、群馬県上野村に到達する十石峠は前述した峠に比較するとかなり遠距離となる。これらの峠の中で、田口峠・余地峠・十石峠は、中世から江戸時代まで重要な交通路として利用されていたことが資料から知られている。

峠道は、現在の私達が考えている以上に容易に交通は可能である。尾根筋を通って進めば位置の確認や難所もかなり避けられるし、近距離となり得る。縄文・弥生時代の人々はこうした交通路を熟知しており、案外簡単に自己の領有権から国外までも広範囲に駆け巡っていたのかもしれない。

館・中原・月夜平遺跡へ住居を構えた弥生人は、ここにあげたいずれかの峠を越えて佐久地方へ入ったと考えられる。黎明期の遺跡は峠から下った裾野の台地上に立地していることも峠による交通路からの移入を伺うことができよう。さらに、峠が多く所在する付近に遺跡があり、それらの峠も里が近く比較的簡単に越えられるという地理的条件が一致していることも原始の峠越えの一つの特徴であると考えられはしないだろうか。

(2) 出土土器の特徴

既出資料は、すでに紹介されているものが多いので、一般的記述は省略して土器の特徴をあげてみたい。尚、これらの土器については、該期の研究者である明治大学の石川日出志先生に土器を実見しながら直接ご教示を得た。従ってここでの記述はそれらの要約である。土器は遺跡別に取り上げた。

南牧村矢出川南遺跡出土土器

南佐久郡下から出土した黎明期の土器群の中で最も最古のものは第3図に示した本遺跡出土の壺形土器である。発見のいきさつについては第2章で記述してある。

口径19cm、器高25cm、底径6.2cm、胴部最大幅18.5cmを測り、口縁部に最大径を有する。胴部から口縁部にかけての屈曲は緩く、胴部最大径部分は若干膨らむ程度である。文様は口縁部から底部にかけてやや右下がりの7本以上を1単位とした撚状工具による斜走条痕文が縱区画を基本として右回りで限なく施される。施文の回転方向は東海地方の条痕文土器と一致するが、貝殻工具を使用しない点が異なり、在地で製作された蓋然性が高い。時期は松本市針塚遺跡出土土器群と同じ類型と考えられ、信州に遠賀川系土器が流入する前期末に位置付けられる。

佐久町中原遺跡出土土器

2点の大形・中形の壺形土器は同一地点に正位の状態で埋設されており、取り上げると崩れて割れてしまい、中から骨が出てきたことを当時(昭和29年)、土器を掘り出した人達が確認している。

公民館に届けられ片隅に置いてあった土器は、信濃史料編纂のため、資料を探しに見えられた故米山一政氏、小平正樹氏(現信濃美術館学芸課長)の目にとまり、笹沢浩氏の復原と研究によ

って世に出た土器である。先学諸氏の功績に敬意を表したい。

第9・10図の土器は、基本的には東海地方の水神平式系の手法を取り入れているが、かなり、在地的要素も多い。また、第9・10図共に関東の須和田式系に類似する点も幾つかみられる。これらを詳細にみると、第9図は文様を段にして施文していることと、石英・長石の混入を多くして器肌をザラつき気味に調整している。これらは水神平式系の特徴をよくとらえている。さらに、第9・10図共に文様を底部ぎりぎりまで施文しているが、これは須和田式系にみられる特徴である。水神平系では胴下部付近までの施文が一般的である。

第9図は、口縁部直下に一条の太い突帯を貼付していて前期的要素が残っている。また、底面には網代痕が圧痕されていて在地的要素が伺える。同じように2の土器は木葉痕が押圧されている。第10図は、須和田式系の影響が強いとされているが、須和田式系との違いをみてみると、須和田系は頸部に区画線を入れるが、ここでは無文である。また、区画内に網文・条痕を施文するが、この部分もやはり無文で在地的要素がみられる。類似点は、文様を描く線の太さ、短い単線を一本の籠状工具で入れていることと、前述したが文様を底部まで施文している点が一致している。

第9・10図共に文様の施文は、板の一端か棒をクシのように束ねた工具を使用している。

館遺跡出土土器

本土器の紹介は初見である。口径28cm、現存器高38cm、底径は10cm前後を測ると推定される。緩傾斜する台地の端部付近に正位の状態で埋設されていた。長芋を掘り出すときに発見された土器で底部を欠落する。

器形は、なで肩を呈し、頸部のくびれが弱い。口縁端部には刻み目が施されており、口縁部で最大径を測るが、胴部とはわずかの差である。器形は肩が張り口縁の反り返りが見られないことから在地的である。また、器面上には指の痕跡が残る調整をおこない、条痕文が平行に施文されている。指痕を残す調整は、水神平系の特徴であるが、しかし、条痕文は底部付近まで施文されてることと、施文具はやはり在地の工具を用いておりかなり地元の要素が強い。

さらに、胴部に設けられた1cm大の円形の孔は、孔の周囲に敲打痕がみられることから意図的にあけられたもので、再葬墓に使用する際に死者に対する信仰的儀礼から設けられたものであろう。

本遺跡からは、このほかにも容器形土偶、工字文が施文された壺形土器、東海地方から搬入されたとおもわれる貝殻条痕文系の土器片等が出土している。

月夜平遺跡出土土器

本遺跡からは、壺形土器一個体とミニチュア土器三点が出土している。

壺形土器第12図は口縁部を欠落する。胴中央部が大きく張り出して最大径をとり、肩部はナデ形で在地的要素を含んでいる。

胎土に長石・石英を多量混入するのは、水神平系の特徴であるが、ここでは細い長石を混入していてこの点も在地的である。また、文様は帶状に分けて施文し、段を設けていること、器厚が薄く脆い感じの呈する点は、水神平系の特徴をそのまま受け継いでいる。

底部は内側から突いて穿孔しようとしたために、貼付した底部の一部分が剥落している。やはり、死者の魂が外に出られることを願った信仰的な儀礼から穿孔が行われていたのであろう。

ミニチュア土器（第13図）は、副葬品としたようである。長野市塩崎遺跡群21号木棺墓には、小形土器8点が副葬されていた。

以上が出土土器の特徴である。これらを総合的にまとめると次の点が挙げられる。

①各地の系統はそれぞれの中にみられるが、全体的には地元の要素で作られている。

②千曲川水系の土器ということになる。そして今後の研究では、これらの土器が標準となつて、これから得られる資料の時期区分がなされるようになると考えられる。

③群馬県ではかなり資料が揃っているが、これらの土器と類似したものは見られない。

④東海系の土器文化をもつた人々が南佐久郡下に移入してきたが、在地に住んでいた人々ともうまく溶け合って千曲川水系の土器文化をつくりだした。

こうした過程を経て佐久の弥生時代は開始されたのである。稲作文化の萌芽は、このような土器文化と共に千曲川源流地から適地を求めて佐久平へと下り、やがて赤い土器を作り出した一大文化圏が形成されていったのである。

第7節 南佐久郡下弥生後期の 遺跡分布について

島田恵子

南佐久郡における弥生後期の遺跡は、臼田町33遺跡、佐久町・八千穂村・小海町・川上村が各々4遺跡、北相木村3遺跡・南相木村2遺跡・南牧村5遺跡で計59遺跡を数える。この内56%にあたる半数以上の遺跡は臼田町に所在しており、佐久町から南の町村は急激に減少している。

稻作文化と共に発展を遂げた弥生後期の集落跡は、こうした事実を物語るかのように、水田耕作が可能であった臼田町が南限であったことを示していると言える。大集落は千曲川右岸では臼田駅東方の田中遺跡付近まで、左岸は勝間原遺跡が南限であって、それから南の入沢地区は小さな集落であったことが地形および出土土器の散布状態から推察される。大集落跡南限の標高は720mを測り、別稿で小山岳夫氏が指摘しているように、全国で最も標高の高い位置に所在して稻作を営んだ集落であるといえる。

郡下の弥生後期中で、特に注目される遺物が出土している遺跡は、千曲川右岸佐久市との境界に接する独立丘陵離山遺跡から昭和2年道路改修工事の際、銅鏡4点、赤色塗彩土器底部、骨片等が出土した。佐久市の枇杷板遺跡群上直路遺跡からは骨片と共に15点の銅鏡が出土しているが、佐久平における出土例は2例のみであり、注意しなければならない遺跡である。

また、昭和63年に調査した千曲川右岸の原遺跡は、箱清水式土器文化圏に包含されるが、佐久市とは様相を異にした土器片が含まれていて、特に近いことから群馬県の影響を受けていることも考えられる。資料が少ないので詳細は資料の増加を待って検討したい。

小海町の五箇遺跡からは、環状石斧が磨製石錐と共に採集されている。環状石斧は県内でも出土例が稀で注目される遺跡であるが、土器片の出土がみられない。

佐久町以南の後期遺跡分布については、次にあげた磨製石錐の出土遺跡をみながら検討を加えたい。

(1) 磨製石錐出土遺跡

南佐久郡下で磨製石錐出土地点を第1図に示し、町村別出土遺跡一覧を第1表にまとめた。

磨製石錐の出土は計14遺跡を数える。そのうち磨製石錐のみの単独出土は5遺跡を数え、土器の出土ではなく、偏平片刃石斧・環状石斧等を伴出した遺跡は2遺跡である。更に、箱清水式土器と共に出土している遺跡は6遺跡を数え、単独出土が多いことが注目される。

一方、南佐久郡七ヶ町村の後期における遺跡は26遺跡を数え、臼田町の全遺跡数にも満たないほど少數である。水田耕作可能地帯から外れた七ヶ町村の遺跡は、どのような立地条件の場所に

小集落を営んでいたのであろうか。

まず、川上村・南牧村では広大な原野に9遺跡が比較的まとまった状態で分布している。

このうち、磨製石器が単独出土している遺跡は馬場平・切草・久保遺跡があげられる。また、野辺山原の矢出川遺跡群からは16点発見されている。小海町では、五箇・塙平遺跡の2遺跡があり、八千穂村では、横道原・板沢遺跡から磨製石器のみが単独出土している。白田町入沢の月夜平遺跡からも1点出土している。

これらの遺跡は、山麓台地や原野に所在し、縄文時代の遺跡立地とあまり変化していない。むしろ縄文からの複合遺跡であり、水田耕作には全く適さない場所である。南牧村・川上村は先土器時代の遺跡と重複しており、高原野菜畑の深耕により多数の石器（黒曜石・チャート）および弥生時代の磨製石器、箱清水式土器片が採集されている。土器片の散布は薄く住居の存在する可能性は少ないとされているが、土地の人々は比較的石器に

興味があり、採集しているのは縄文・弥生共に石器が主であることから、一概に住居の存在の有無は解決されないのであろう。反面、住居の存在が薄いとするならば、峰近辺に所在する遺跡であることから推定して、磨製石器は原始の交通路に添って散布していることと、孔を有していることからみて、祭祀的な意味が込められていると考えられはしないだろうか？

八千穂村八郎に所在する横道原・板沢遺跡のように山間部からの単独出土は、狩猟具および骨をはるかに越えてきた祭祀の場の祭具とも考えられる。同じことが小海町における五箇・塙の平遺跡からも伺える。

入沢の奥地に所在する一つ石岩陰・澁日陰遺跡は、岩陰から赤色塗彩土器が発見されており注目される遺跡群である。別稿で三石延雄氏が化粧粘土の採集や狩猟を兼ねた基地的な遺跡である



第90図 磨製石器出土遺跡

遺跡名	町村名	所在地	表記・出土遺物
矢出川遺跡群	南牧村	野辺山	箱清水式土器・磨石器
二ツ山	#	#	#
ザッコノ沢	#	板 沢	#
板 桜	#	#	偶平片刃石斧・#
馬 場 平	川上村	御所平	#
切 草	#	#	#
久 保	#	樋 沢	#
五 箇	小海町	五 箇	環状石斧・#
塙 平	#	塙 平	#
横 道 原	八千穂村	八 郎	#
板 沢	#	#	#
横 山	白田町	白 田	箱清水式土器・#
月 夜 平	#	入 沢	#
田 中	#	三 分	#・石臼・蛤貝石斧・#

磨製石器出土遺跡一覧表

と述べているが、付近には余地跡があり群馬県へ通じる道筋であることから、越えの基地としたことも考えられよう。また、佐久町余地に所在する中谷遺跡も余地跡の道筋に位置する遺跡である。この場所は日当たりの良い西斜面にあり、縄文後期・弥生・平安時代、そして現在までも集落が営まれている。

以上のように白田町以南に所在する遺跡は稻作文化とは一味違った側面を持った遺跡であることが理解されよう。そして、縄文時代と変わりない狩猟・採集・栽培を中心とした生業を営んでいたことが、立地条件から推し量れる。これは山間高地である南佐久郡南部の弥生時代後期遺跡の特徴であり、さらに磨製石器の単独出土は、どのような目的、意図があってのことか、これらの解明は今後の課題としたい。

第8節 赤い土器に関する一つの実験

三石延雄

弥生時代後期の赤く塗装された美しい土器を土の中から掘り出した瞬間の感動は、誰もが忘れ得ぬ発掘調査の想い出として残っているであろう。

十年位前に佐久考古学会では「赤い土器を追う」をテーマに例会を行い、この塗装は、焼成前に塗られたのか、あるいは焼成後に塗られたのかについて検討会を行った。様々な意見が提出されたが、大方の会員は焼成前に塗ったのではないかという意見であった。しかし、筆者は焼成前に塗装したならば、焼いたことによって変色するのではないかという疑念を持っていた。あの艶のある赤い色は、焼成後に微粒子粘土を化粧土とし、ペニガラで着色してさらに糊のようなものを加えて塗り、磨いたのではないかと考えるようになった。

これについては、白田町入沢の山の中に一つ石岩陰遺跡・滝日陰遺跡という遺跡があり、縄文前期・中期・弥生時代後期清水式土器、土師器、中世に至るまで岩陰を利用しており、この付近に白い岩が風化し真白いお化粧の時使う白い粉のような土があることと、山にはタモの木（学名ノリウツギ）があり、この木の表皮と木質部の間に糊があり、この糊は和紙の原料に使用されていた。

こうした材料を採取するために、一時的に使用した岩陰遺跡ではないかと考えられ、また、一つ石岩陰遺跡付近には動物のタマゴとおもわれる浅い低湿地があり、対岸の滝日陰遺跡との間に

は赤谷川の清く澄んだ水が流れている。こうした自然条件の中で狩猟も行われたと考えられる。あるいは狩猟を第一の目的としたキャンプ的な遺跡であったかもしれない。標高は1,000mを測り、付近には群馬県熊倉へ通じる余地峠が存在する。

筆者はこの遺跡の存在からヒントを得て付近の白土を使用し、二つの板状の粘土板を作った。二つの粘土板の内、一つは焼成前に赤色塗彩をしてから焼成を行った。すると、化学反応のためか赤色はすっかり消えてしまったのである。

もう一方の粘土板には、白い微粒子に赤色を溶き、さらにノリウツギの繊維を加えて塗り、磨くと滑らかな艶のある赤い土器と同じような状態に仕上がった。

簡単な実験であり、ベニガラが手に入らなかったため、顔料は水彩絵の具を使用したので、そのために焼けば消えてしまったのかもしれない。いずれにしても化学反応によって色はかなり変化することは事実である。発掘調査後の土器洗浄の時、注意して見ていると水に浸けた瞬間、赤色が消えてしまったり、薄い色になってしまったことを筆者は実見している。これは焼成後に塗彩しているからである。

その後、ベニガラを入手したので今後は本物の顔料で実験してみた。小形のミニチュア土器を2個作り、焼成前に塗彩したものと焼成後に塗彩したものとに分けた。

先ず土器の器面を丁寧に磨いた後、よく練ったベニガラを塗り焼成した。この時に塗彩しない土器も同時に焼成した。焼成による化学反応は鉄分が補ってくれたためか、今度は赤色は消えなかったが、色はかなり薄くなり変色してしまった。しかし、器面をよく磨いたことにより、いくらくらい艶が出た。

焼成後に塗彩したものは、この艶が全く見られないことと、水にぬらすと消えるという弱点がある。焼成した後土器が熱を持っている間に塗彩するとこの弱点はいくらかよくなる。縄文時代の赤色塗彩土器がほとんどはげてところどころまだらに残っている状態は、焼成後に塗彩しており、また、弥生土器のように艶がみられないことがあげられる。

これ等の実験により、弥生土器の塗彩は、その大部分が焼成前に塗彩しているが、時には、焼成後に塗彩している土器もみられる。関東の久毛原式土器の中にも明らかに焼成後塗彩しているものの混入が見受けられる。また、赤色の変色は、ベニガラのはかになにかを混入し、変色をおさえていることも想定される。今後、じっくりもう一度この問題に取り組みたいと考えている。

(78才の春記)

第9節 赤い土器の製作技術

竹原 学

はじめに

1985年夏、筆者は松本市宮渕本村遺跡の発掘調査に参加する機会を得た。宮渕本村遺跡は松本平有数の弥生大集落として知られ、3次にわたる調査の結果弥生時代中期後半～後期前半の住居址88棟・土坑・墓址等が検出された。特に土器製作址と推定される遺構（第5号住居址）より未完成の土器が出土し、弥生土器製作技術を研究する上で重要な資料となった。

土器製作技術についての研究はこれまで、佐原真氏が世界の先史・民族例から一般的概念を示し、弥生土器についても観察を行っている。また個別的な分野では横山浩一氏の刷毛目論や都出比呂志氏の叩き技法の研究、高島忠平氏の粘土帶積み上げ技法の研究等が知られる。

一方中部高地の弥生土器の研究は、専ら形態や文様に中心がおかれ、製作技法については1、2を数えるにすぎない。

本稿はこのような現状を踏まえ、千曲川水系における弥生土器の製作技法のうち、成形（積み上げの技法）と赤色塗彩の技法について、宮渕本村遺跡第5号住居址の調査手記と弥生土器の製作実験を基に確認を行ったものである。

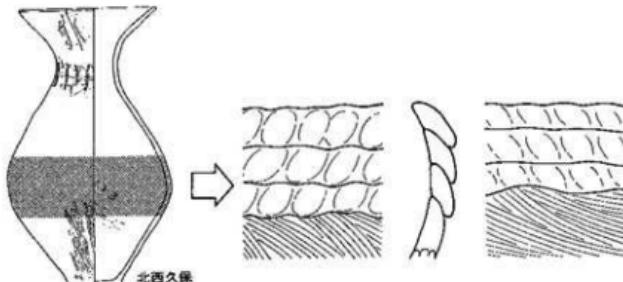
(1) 宮渕本村遺跡第5号住居址出土土器と積み上げ技法

土器の基本的な骨格を作る方法は、世界の民族例をみると紐状、あるいは帯状にのばした素地（「粘土紐」・「粘土帶」）を積み上げる「粘土紐積み上げ」が最も一般的である。日本においても繩文土器、弥生土器、土師器に確実に認められ、また須恵器にも存在が指摘されている。

粘土紐の積み上げ方法には「完結した粘土帶を積み上げる（輪積み）」・「粘土紐（帶）を1周毎に切って完結させ上の段に移る」・「長い粘土紐を螺旋状に巻き上げる（巻き上げ）」・「そう長くない粘土紐を巻き上げ、足りなくなったら次の粘土紐で作業を続ける」の4種があり、積み上げの行程には「連續積み上げ」・「断続積み上げ」の2者が存在する。

宮渕遺跡第5号住居址は冒頭で触れたように弥生時代後期前半の土器製作遺構と考えられるものである。出土土器はおびただしい量で、多くは使用痕や摩滅が全くなく、素地がまだ湿っていたためか各部に亀裂が生じ、著しく歪んでいる。おそらく乾燥段階で火災に遭い焼けてしまったものである。そのうち1点、注目すべき資料がある。現在遺物の整理・報告がなされていないので調査当時のメモから模式図を示した。

問題の土器は図のような形態の中形壺体部下半と考えられ、最大径部分まで積み上げ、瓶で



第91図 宮瀬本村第5住出土土器模様図

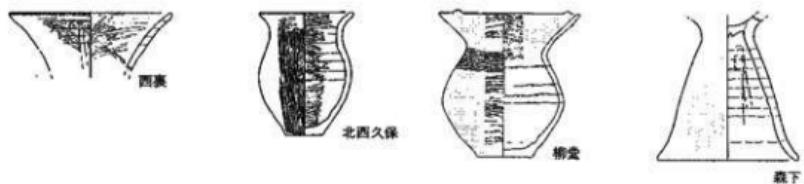
刷毛調整を終了、上半部に移り粘土紐を3段積み上げ指押さえを行ったところで止まっている。すでに調整の終わっている部分は器厚7mm、内外面左上がりの刷毛調整を行い、上端は外傾する面を有する（擬口縁）。上端までの調整は連続的であり、連続的に積み上げた後調整を行っているものと推察される。粘土紐は指押さえによりやや偏平になり、幅1.5cm前後・厚さ7mm前後を測る。接合面は外傾している。1本の粘土紐の長さは不明だが、18cmまでは確認できた。3帯のうち中間の1帯は粘土紐の端部が残存する。端部は下段の粘土紐に押しつけてあり、指押さえが全て右に傾斜することからみて始点と考えられる。つまり上からみて逆時計回りに積んでいるらしい。3段積み上げは全体に内湾しており、最大径部の曲線を意図しているものと考えられる。

以上の所見から本土器の製作の工程を復元すると、「断続積み上げ」により体部最大径まで成形・調整する。やや乾燥させた後体部上半の積み上げを開始する。粘土紐は直径1cm前後で、逆時計回りに螺旋状あるいは一周毎完結して積まれる（後者の可能性が高い）。

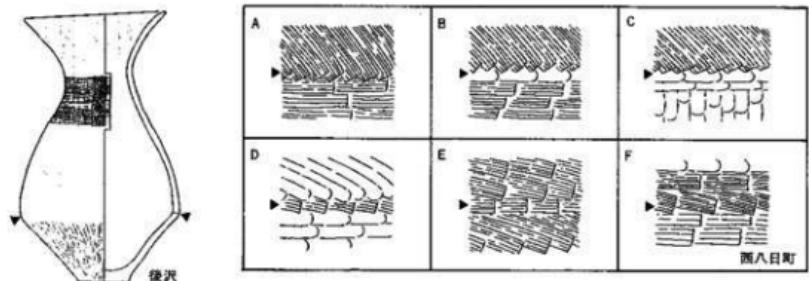
この製作途中の土器の発見は弥生土器研究上に大きな意義をもたらそう。特に從来完成した土器に残された痕跡・民族例・製作実験から推定されていた土器の製作工程が直接証明された点である。今回取り上げた土器の他にも製作時の生々しい痕跡を遺物が存在し、報告が待たれるところである。

次に宮瀬遺跡の観察所見を基に、他遺跡の中後期後半・後期の土器について「粘土紐」・「粘土帶」・「断続積み上げ」の観察を行った。

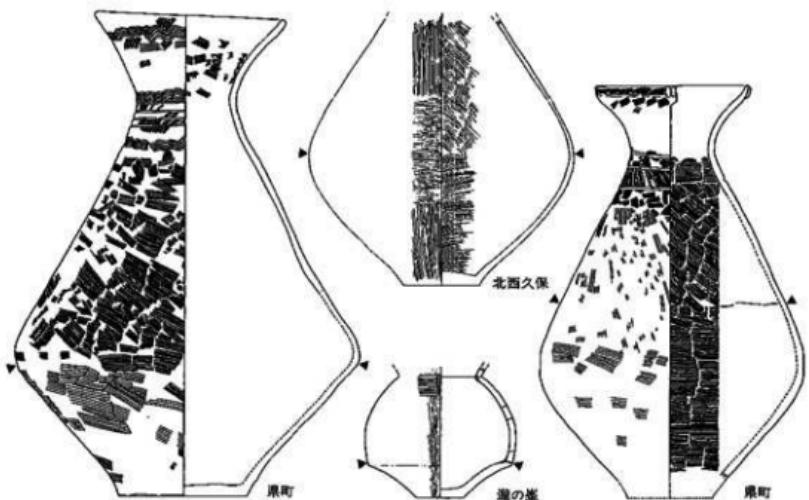
まず「粘土紐」について。佐久市西裏遺跡出土壺（中期後半）・同市森下遺跡出土高環（後期）・同市柳堂遺跡出土壺（後期）・同市北西久保遺跡出土壺（後期）等、器壁に明瞭な粘土紐の接合痕を残すものについて観察を行った結果、1本の粘土紐の太さは0.8cm～1.5cmを測り宮瀬遺跡例と一致する。法量の大小により多少の差はあるが、直径1cm程度の粘土紐を用いるのが一般的かと考えられる。粘土紐の接合の方法は不明瞭なものが多いが、器壁を外傾あるいは外反させるとときは接合面を内傾（内側に積み重ねる）させ、逆に器壁を内傾・内湾させる場合、外傾する面を



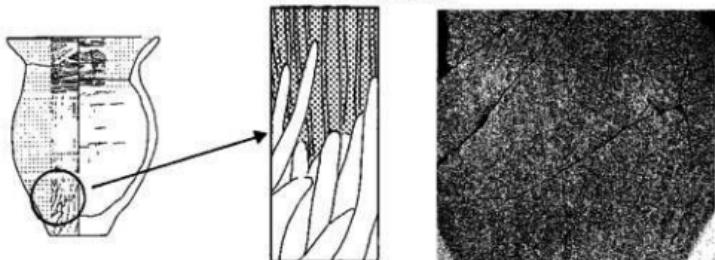
粘土詰積み上げ痕を残す土器 (1 : 6)



弥生後期の壺と扁曲部内面の調整 (Fのみ中期後半)



第92図 断続詰積み上げを行ったと考えられる土器 (1 : 6)



第93図 柳堂遺跡出土土器の赤色塗彩と窓磨き

作り出す（外側に積み重ねる）傾向があるようである。⁽⁴⁾ 積み上げの方法については不明瞭なものが多いが、佐久市柳堂遺跡例は1帯毎完結している。

この他、中・後期の土器、特に大形品において、3～4cm毎に接合痕が見いだされるものも存在する。これらについては粘土帶の使用も考えられるが、佐原真氏の指摘するように「結果としての粘土帶」も含まれていよう。

次に「断続積み上げ」について。後期でも中葉以降の壺は体部下位に屈曲を形成することが形態上の大きな特徴となる。かつて笠沢浩氏は長野市北長野貨物基地遺跡の資料を用い、内外面の調整痕、擬口縁の観察から壺の「断続的積み上げ」を論じている。⁽⁵⁾ それによると底部～屈曲部で1段階・屈曲部～径部で1～2段階・口縁部の計3～4段階の過程が考えられるという。

筆者は今回、壺体部の屈曲部の成形・調整痕について佐久市周防畠B遺跡出土資料（後期中葉）の観察を行った。外面については窓磨きにより調整・接合痕が消されるので、内面調整が明瞭に観察されたものについて図示した。いずれも＜下半部の調整→屈曲部の横方向調整→上半部の調整＞と屈曲部を境に上下の調整が不連続であり、笠沢氏の所見と一致した。また屈曲部に明瞭な擬口縁を残すものや、この部分で欠損する個体が多い。さらに、在地の後期土器の系譜を引く佐久市瀧の峯2号墳出土の壺（古墳時代前期）は、内面下半部に施される刷毛調整が接合面まで及んでおり、屈曲部での「断続積み上げ」を証明している。

では中期後半の土器についてはどうであろうか。例えば松本市県町遺跡、佐久市北西久保遺跡、同市西八日町遺跡出土資料等にやはり体部最大径付近で上下の調整痕が不連続となるものが見いだされ、「断続積み上げ」の可能性を示している。

このように「断続積み上げ」技法は宮渕遺跡出土土器が示すように千曲川水系の弥生土器に確実に存在し、土器調整痕の観察から中・後期を通して存在する可能性を示し得た。特に壺の体部最大径付近には顕著に認められ、中期から後期へ器形が大きく変化しつつも受け継がれていった。逆にこうした成形技術の発達が後期特有の壺形態の成立を可能にしたとも考えられる。

(2) 赤色塗彩の方法

「赤い土器」の名に象徴されるように、千曲川水系の後期土器の特色として赤色塗彩が挙げられる。塗彩は壺・高杯・鉢等煮沸形態以外の器種に施されることが知られ、その原料はベンガラ（酸化第2鉄）であるとされている。工楽善通氏によれば、ベンガラによる赤色塗彩・赤彩文には、遠賀川式土器とともに成立、西日本を中心に見られる焼成後施文のものと、九州中部の丹塗磨研土器・東～北日本の赤色塗彩等、縄文時代からの系譜を引く焼成前に施されるものが存在すると¹⁹いづ。

中部高地の弥生土器にみられる赤色塗彩については後者の、焼成前に箠磨きと並行して行われるものと考えられてきた。しかし箠磨きと塗彩の前後関係といった工程については研究者間で意見の相違がみられ、また焼成と塗彩の関係等具体的な検討は意外にもなされていないようである。

従ってここでは塗彩の方法について遺物の観察から考究してみたい。

一般に千曲川水系の弥生後期土器は、仕上げの調整として箠磨きが多用されている。壺の場合、体部上半は横方向、下半では縦方向に行われる。その前後関係は器面に残された箠磨きの切り合いでから、体部上半の磨きが先行すると判断される。赤色塗彩は全面に及ぶものも存在するが、大抵下半部には施されないようである。

図に示した佐久市柳堂遺跡出土の壺は、あまり一般的な形態とはいえないが、体部の箠磨きの工程は壺の場合と同様＜上半部→下半部（下→上）＞となっている。赤色塗彩は上半部にのみ行われる。次に上下の箠磨きの切り合う部分に注目すると、下半部の箠磨きにより上半部に施された赤色塗彩が消されている部分が観察される。同様な例は、佐久市周防畠B遺跡出土資料においても確認できた。これは赤色塗彩が焼成前に、＜体部上半の箠磨き・赤色塗彩→下半の箠磨き＞の行程で行われたことを示している。しかしお半部の箠磨きと赤色塗彩の前後関係については、直接証明できる資料に恵まれなかった。

この点については、第1に柳堂遺跡例については器面調整の流れから考えて、＜赤色塗彩→体部上半の箠磨き→下半の箠磨き＞とみるのが合理的かつ自然である。第2に、箠磨きの目的は器面をきめ細かく平滑にするためにある。従って箠磨き後に塗彩を行った場合、顔料ののりが悪くなり、しかもせっかく磨きにより得られた光沢が失われてしまうのではないかと考えられる。実際に磨きむらのある遺物を観察すると、むしろ磨かれた部分の方が顔料が濃く沈着している様に見られる。また磨きによる光沢はそのままであり、表面に顔料を塗った痕跡は看取されない。

このように遺物の状況からみる限り、磨き後の塗彩についての積極的根拠は見いだせない。おそらく素地がまだ湿っている段階に顔料の塗彩を行い、箠磨きによって定着、光沢を与えるものと理解されよう。

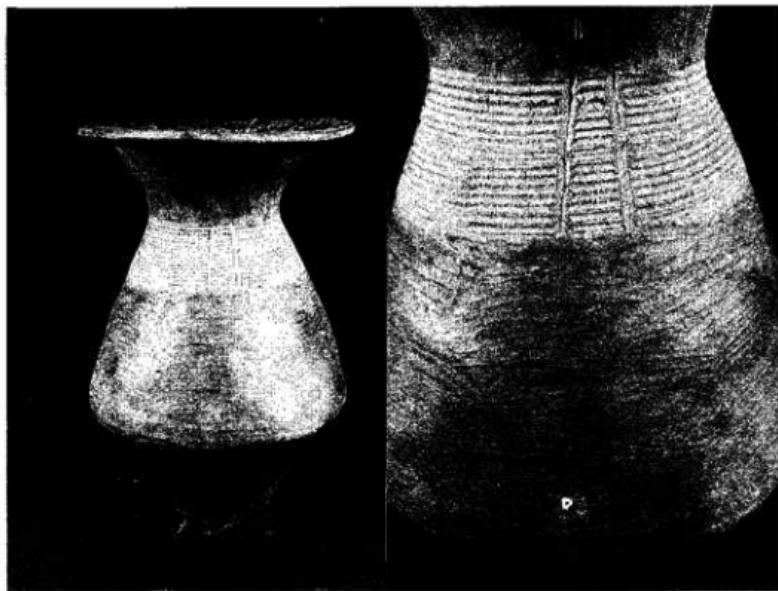
(3) 赤い土器製作実験

これまで触れてきた弥生土器の成形および赤色塗彩の技術について、筆者はかつて土器製作実験を行ったことがあり、ここに報告しておきたい。

製作した土器は口径13.5cm・底径6.3cm・器高21cmを測り、形態は後期の壺を模している。素地は市販の陶土を用い、砂などの混入は行っていない。成形は先に触れた笹沢浩氏の推察に従い、「断続積み上げ」を実施した。すなわち、第1段階＝底部～体部下半（屈曲部）・第2段階＝体部上半～頸部・第3段階＝口縁部の3段階成形である。調整（刷毛目）は各段階毎に行い、半日程度の間隔をおいて次段階の作業に移る。この時接合面には濡れた布をかけておいたため乾燥せず、また次段階の積み上げの際は泥状の粘土を接着剤として塗布した。口縁部は布を用いて横撫でを行うがうまくいかない。器厚は5～6mmである。

施文は口縁部の成形終了後、頸部に櫛描文を施した。工具は植物の枝茎を束ねたものを想定し、代用としてつまようじ6本を簾状に束ね用いた。文様構成は櫛描横線文（右回り）と篦描沈線文によるT字文である。

施文後1日程やや湿った布をかぶせておき、赤色塗彩・範磨きを行う。顔料はベンガラが入手



できず、サビの粉末を水溶きし、頸部文様帯を除く全面に刷毛で塗った。範磨きは体部に関して塗彩後直ちに行う。工具は竹べらを用いるが素地を引きするため光沢が得られない。円礎の使用を想定してビー玉やスプーンの腹を用いた結果実物に近い効果が得られ、塗彩は器面に定着する。底面は磨きを省き、塗彩のみ行う。口頸部については塗彩の2日後に磨く。しかし既に乾燥が進み素地は白く硬化している。結果は非常に強い光沢が得られたものの、器面の凹凸や調整痕を消すことができない。

焼成は約1週間室内で乾燥の後、野焼きにて行う。途中口縁部に欠損が生じたが、粘土紐接合部での亀裂・破損はみられない。赤色塗彩は焼成前と比べやや赤味を強めたが、大きな変化はない。また一部に黒斑状のシミがみられる。

土器が十分冷えたところで水洗を行う。塗彩は十分定着しているが、磨きを行わなかった底面については固着していないため顔料が流れ出し、うすい色調となる。

最後に本稿で課題とした成形の技法と赤色塗彩について、この製作実験から学んだ点を付記しておく。まず成形について、当初は「連続積み上げ」により一気に口縁部まで製作しようと試みたのだが、素地が柔軟で重いため体部下半がつぶれてしまう。たとえ小形品であったも、彎曲の著しい器形や薄手の土器を作成する場合、「断続積み上げ」が必要不可欠であろう。

赤色塗彩については、焼成前に塗彩、磨き込んで定着させる方法が最良であることが判明した。先述の遺物の観察から導いた推定の裏付けとなろう。また筆者は以前、赤色塗彩の艶やかな発色は焼成による効果が大きいものと考えていた。今回確かにそうした効果はわずかながら認められたものの、むしろ色合いを左右する要因はベンガラの質にあるのではないかと考えるに至った。これについては、今後各地域、各時期の資料を比較・検討してゆく必要があろう。その際顔料の成分分析等科学的方法が必要なことは言うまでもない。

おわりに

中部高地の弥生土器研究は近年飛躍的に進歩し、特に縦年研究においては小地域単位での型式細分や、地域を超えた様式について論ずることが可能となってきた。こうした中で土器の成形技術や赤色塗彩の手法については既に決まったことのように見過ごされてきた気がしてならない。昨今の爆発的な資料の増加が、遺物の地道な観察を妨げていることも一因と考えられよう。本稿を草するに至ったきっかけは、こうした現状への疑問とともに、宮潮遺跡第5号住居址の調査に参加、未製土器を発見できたことにある。しかし筆者の力量不足故、製作技術全般を検討するには至らず、認識不足も多々あろうかと思われる。今後この種の論議が活発に行われることを期待して締めくくりとしたい。

- (1) 松本市教育委員会 1986・87・89 「松本市宮渕本村遺跡（造構編）」 I～III
- (2) 佐原 真 1986 「粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究』3 雄山閣 他多数
- (3) 横山浩一 1978 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号
1979 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第24号
- (4) 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団關係」『考古学研究』20巻4号 考古学研究会
1986 「タタキ技法」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- (5) 高島忠平 1975 「土器の製作と技術」『古代史発掘』第4巻 講談社
- (6) 製作技術について多く触れたものとして以下の文献がある。
千曲川水系古代文化研究所 1981 『箱清水式土器』
- (7) 「」でくくった用語とその概念は注2文献に従った。
- (8) 宮渕遺跡出土の未完成品においても、体部下半の粘土紐接合面は内傾している。
- (9) 笹沢 浩 1970 「箱清水式土器の再検討」『信濃』22巻4号 信濃史学会
- (10) 工楽普通 1986 「赤彩文」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- (11) 注9文献において笹沢浩氏は「赤色塗彩する以前に窓磨きを行うのが一般である」と述べているが、青木和明氏は明言していないものの窓磨きは赤色塗彩と並行して行うとし、また「赤色塗彩の際に用いたヘラミガキの工具」という表現（注6文献）がみられることから窓磨き後と理解されているようである。

第10節 赤い土器の赤色顔料分析

林 幸彦

佐久の地で遺跡の調査に携わったものにとって、あの鮮やかな「赤」との出会いはまことに強烈な印象であろう。ことさらに、弥生時代の住居址や溝址の黒い土から出土した赤い土器は、一種異様な興奮を掘り手に与えるものである。まっかに塗彩された土器は、生命をささえる・生きる証の赤い血を想起させる。

「赤色に関して考古学上表現される語には、朱、丹塗り、赤色塗彩、朱塗り等があるが、人類と「赤」との関わりは後期旧石器時代にまでさかのばるといわれる。縄文時代になると土器、蓑身具、土偶、さらには、木製品にまでおよぶ多くの遺物や埋葬施設にも「赤」が認められる。埴輪や古墳の石室に彩色されている「赤」は古墳時代を代表するものである。奈良・平安時代では、寺院・官衛などの建物や漆器に塗布されている「赤」が際立っている。

このような「赤」色の顔料としては、水銀朱、ベンガラ、鉛丹、アンチモン赤、カドミウム赤が知られている。古代においては、水銀朱、ベンガラ、鉛丹に限られるという。

水銀朱 (HgS) は、天然に辰砂として産する（水銀鉱床として）とともに水銀と硫黄とを化合することによって得られる。

ベンガラ (Fe_2O_3) は、酸化鉄で天然に産する（日本全土にある）。赤鉄鉱（無水酸化鉄）、黄鉄鉱（水酸化鉄）。また、辰砂とともに産し、水銀を含有しているものもある。」（市毛勲「朱の考古学」1975年より）

佐久地方の遺跡から出土する遺物の中で、この「赤」の代表は弥生時代の土器群であって、特に後期前半・後半の赤色塗彩された一群は圧巻である。塗彩される器種は、煮沸形態の壺・台付甕をのぞく壺・台付甕・深鉢・坪・高环・器台・無頸壺・蓋などであり、範囲は文様帶をさけた外面全体、内面の全体におよぶものもある。これらの赤色には、くすんだ赤、黒っぽい赤、鮮やかな赤といった明度と彩度が違ったものがあり一様ではない。弥生時代の土器に塗彩された赤色顔料は一般的にはベンガラといわれているが、佐久の赤い土器の顔料については化学分析がなされてはいなかった。この度、東京国立文化財研究所川野邊涉氏の御理解と御協力を得、弥生時代後期壺形土器断部片2点の赤色塗彩顔料の化学分析を行なうことができた。佐久市岩村田に所在する上直路遺跡Y1号住居址と西八日町遺跡Y5号住居址出土の資料である。

土器に関しては、各遺跡1試料を蛍光X線分析により表面分析を行ないました。その結果、チャートにもありますように鉄を主成分とし、水銀、鉛などを検出致しましたので、本試料の赤色顔料は、弁柄であると考えられます。

なお、付随的に、鉄の含有量、ストロンチウム、バリウムの含有量から2遺跡で用いられた赤

色顔料及び胎土は異なるもののように見受けられます。双方の含有量ともに、西八日町遺跡の試料が高く、弁柄の質もしくは厚みの違いと思われます。

前述のように、この佐久地方の弥生土器赤色塗彩の顔料もベンガラという分析結果が得られた。2資料は肉眼によっても赤色に若干相違がみられたが、成分比にも差が認められている（ただし、土器の胎土の成分が異なる可能性もあるためいちがいに断定はできないが）。今後、胎土の分析もふまえた上で、赤色塗彩の顔料分析が数多くなされたならば、くすんだ赤、黒っぽい赤、錆やかな赤の差異が明確なものとなるであろうし、更にその延長線上には、時期差（例えば中期後半と後期）や遺跡差（千曲川右岸と左岸であるとか、さらに小地域内での遺跡間の相違）、個体差（器種別……壺と高坏・坏など、あるいは同一器種内における差）が如実に浮かび上がってくることが期待されるのである。

日頃、「赤い土器」と騒ぎながら、つい看過されがちな赤色顔料の分析であるが、これを契機にこの研究が佐久地方に限らず、県内全域、日本列島全般の各時代にわたってなされていくことを希望して止まない。

第11節 核現象と周辺現象

—赤い土器追跡の方法—

森嶋 稔

(1)

赤い土器の象徴である弥生・後期箱清水式土器について今更警言を、繰り返す必要もない。しかし、若干の時間的な差はあっても、箱清水式土器は煮沸形態の土器である壺形土器以外の、貯蔵形態である壺形土器、供獻形態の高环形土器、什器形態である浅鉢形土器は、赤色塗彩の行なわれたものとするのが基本的である。かつて箱清水式土器を一構造文と鉄丹の文化一と千曲川水系古代文化研究所の研究ノート4『箱清水式土器』(1981)でサブタイトルとして使ったことがある。構造文は赤色塗彩の行なわれない壺形土器に普遍的に多用されるばかりか、壺形土器の頸部文様帶の施文として普遍的に行なわれているものである。鉄丹については、ほぼ赤色塗彩の顔料が酸化鉄の粉末(鉄丹・丹・ベニガラ)であることによるものを象徴化したものである。

この顔料としての鉄丹が、土器の器面にどのようにして塗布固定されるものか、実は諸説があるて一定していない。いわば塗料は何であったかという間に現段階では一定の(あるいは複数の)答えを出していない。漆説、波柿説、臘脂説、又は塗料を用いない焼成前塗布説などもあって、理科学的根拠と共に古代技術として、充分に肯定できるものとなっていないと言うことなのである。それは、この夥しい土器量に対応する顔料と塗料の確保と、その技術論的な系譜の伝播と展開が、実は極めて重要な過大であるはずなのだから。それはおそらく鉄器の伝播と展開ともクロスしている課題でもあろうからである。あえて「鉄丹」と言ったのはそうした含みもあってからでもあった。課題はまだ充分に成熟しているとは言えない。

その赤色塗彩という行為が示す文化論的課題は、ここで一つのテーマとした「核現象と周辺現象」をかなりの部分で明らかにする可能性は高い。あるいは技術論的には多様性の理解をも可能にするかとも思える。理科学的分析に期待は大きいものであるが、ここでは考古学的な方法によって、模式論的に、そのテーマに触れてみたい。模式論的に言うならば、核的現象を呈するのはどの地域であり、周辺現象を呈しているのはどの地域であるのか。そしてその現象は文化論的にはどんなものとして理解できるのかをみるとする。

(2)

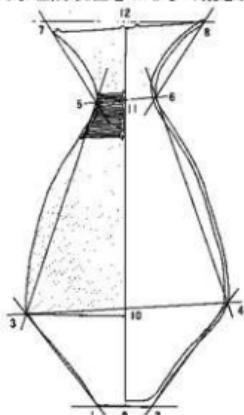
一つの土器文化の有り様を把握するには、当然その組成としての理解が必要である。先に触れたように、丹彩の行なわれた土器も一樣ではない。しかし、とりわけ保守的機能を受け持つ貯蔵形態の土器「壺」は、おそらく生産基盤の大きな変革でもない限り、その保守性を維持していくものと思われる。事実、こうした社会的・文化的・政治的変革を三世紀末か、四世紀初頭に経験するのであるが、その中で「壺」の変容は本当に著しいものがある。カルチュアーショックとして

の動機だけとは言いがたい、その変容は、構造的変化の好例であるかと思うのである。いわば、最も変わらない要素と、変わるべき要素を「壺」はもっていることになる。

いわゆる箱清水式土器における壺形土器の基本形態はどんなものであるかを明らかにしておくこととする。

- ①口縁部は弓状に強く外反する。頸部は太頸である。
- ②胴部上半は、なで肩で、ゆるくふくらみ胴部下半の最大径に至る。
- ③胴部下半は、最大径から急角度をなして屈曲し、内反状にくびれながら底部に至る。
- ④文様は頸部から胴部肩に連続して行われており、描绘线条によるT字文が施されている。
- ⑤丹彩は胴部最大径位以上の外面と頸部最小径以上の内面に限定されている。

なお最も大形で典型例としての四ツ屋遺跡の壺をもって、器体の計測比を求めたものが次の表である。底部直径を1として概念化し、その比を許容範囲も考慮加味すると概念化して求めら



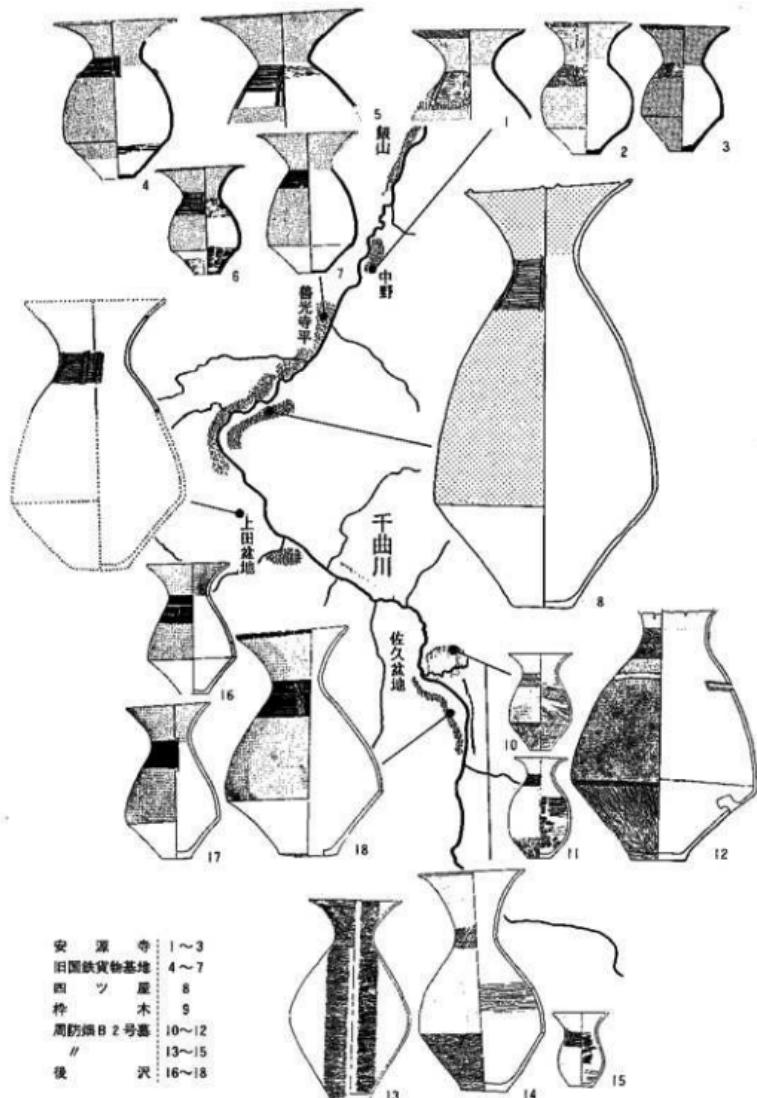
れるものと言えよう。底部直径を1としてすると胴部最大巾は4、頸部径は1、広口口唇部径は3、底部より胴部最大径までの高さが2、頸部径までの高さが6、口唇部までの高さが7である。

(3)

箱清水式土器の編年的位置を細分化してⅠ期とⅡ期にあるいはⅢ期への考え方もある。しかし、やはり基本形態は存在し、その変容の中で把握されるべきであろうが、大別と細別の中で、とりわけ巨視的な視点を失ってはならないと思うのである。その中には当然地域差も存在し、地域差をタイムスケールと混同しても間違いであろう。こうした意味で、まず共通認識としての許容範囲の中で概念化が求められるべきであるし、それをもって典型的概念を抽出すべきである。こうした意味で四ツ屋例は箱清水期の壺形土器としての一典型としてほぼ同意できるものであろう。後沢例も勿論、その典型を意識したものであることは、言うをまたない。器巾の比は典型に近く、器高比は約半分である。後沢例がすんぐり型で、四ツ屋例がのっぽ型であることを教えてくれる。頸部径比は変わらないが、頸部高比が半分であるためであることを示しているが、

部位	四ツ屋			後沢		
	実測cm	比	概念比	比	概念比	
1.2	12.1	1	1	1	1	
3.4	46.3	3.8	4	2.7	3	
5.6	14.2	1.2	1	0.9	1	
7.8	34.2	2.8	3	2	2	
9.10	22.1	1.8	2	1	1	
9.11	70.0	5.8	6	3	3	
9.12	87.6	7.2	7	3.9	4	

第94図 壺の計測比



第95図 千曲川水系の縦清水期壺形土器

器体のフォルムは四ツ屋例に近付こうとする意図は存在している。後沢例は典型としての四ツ屋例を範型としているものと見てよい。口縁部の広さも四ツ屋例は華麗形に対して後沢例は質実形であろうか。

善光寺平北部から奥信濃にかけて、その壺の在り方を見ると、すんぐり型が目立つ。しかし、口縁部は華麗形であるのが特徴的である。頸部高比が不足しているためであることを物語っている。小県平の資料は豊富でない。その数少ないということが小県平の弥生時代を特徴付けているが、その少ない例を見るとかなり善光寺平南部型（四ツ屋型）に近いフォルムをしている。しかし、後でもう一度ふれるが丹彩が行われていないものがある。佐久平後沢例は図中17に至ってはほぼ善光寺南部型と見てよい。しかし、佐久平千曲川右岸の周防畠B第1・2号周溝墓址出土の壺は種々の問題点を含んでいる。この壺の時間的位置を吉田期にまで上げるむきもあるけれど、ここでは箱清水期の最盛期に近い時期のものと把握する立場を取っておきたい。そのことには後項でもふれるが、佐久平の地域差の中で理解しておきたい。12のフォルムはずんぐり型であるが、強く範型を善光寺南部型に求めているものと見られる。しかし、11に至っては全く独自の壺であることを認めないわけにはいかない。その点13・14・15に示したものもそうであって、善光寺平南部型に近い14を除けば独自なフォルムと言わざるを得ない。佐久平は左岸と右岸地帯で様相を異にしている可能性が高いことを識らされる。

文様構成についてみると、頸部施文帶は奥信濃については貼付文の多様以外はT字文の展開の中にあると言ってよい。しかし、口唇部が受口縁となりその外側に描波状文の行われるものが多いことに気付く。それは佐久平の後沢例でも言え、18はその好例である。その中で佐久平右岸例を見ると、矢羽根状文、斜線文、簾状文、T字文、貼付文などが混在している。

丹彩についてみると、奥信濃、善光寺平北部は範型の中にあり、小県では丹彩の行われないものが現れ、佐久平後沢では18例のように口縁内側のみ行われないものが出てくる。右岸地帯では、14、15のように口縁内側の行われていないものと、13例のようにまったく丹彩の行われていないものが出現する状況である。

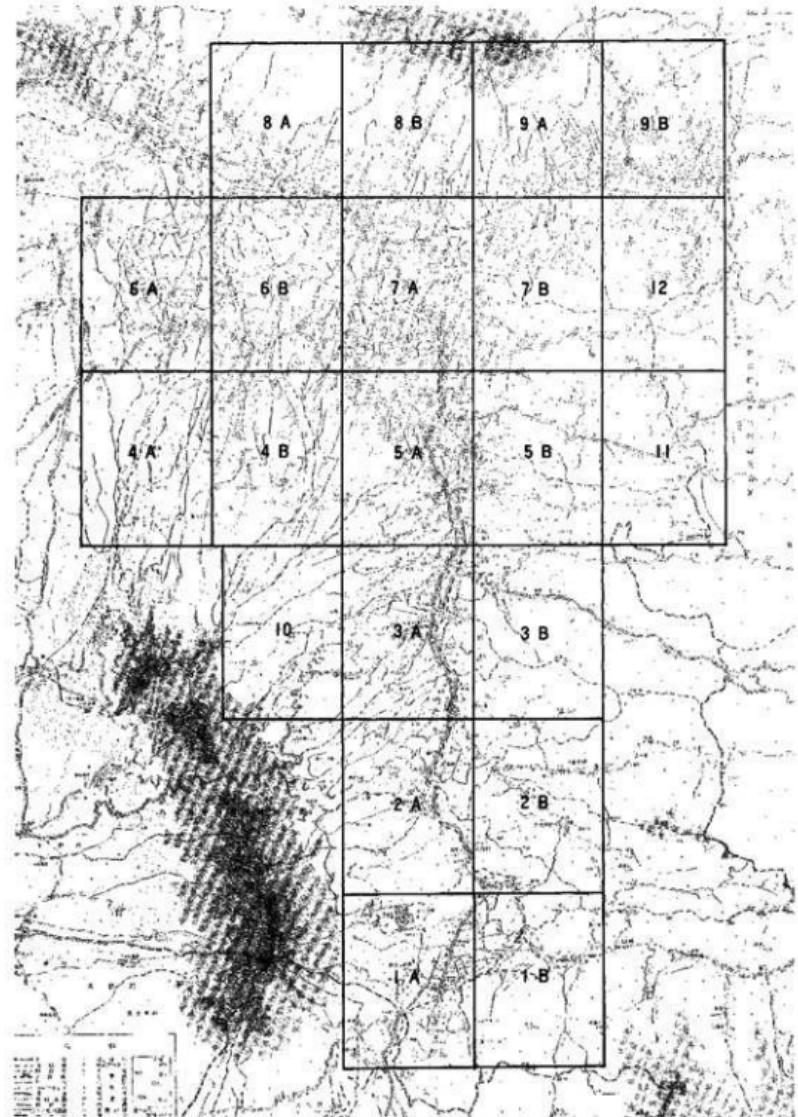
(4)

保守的であるとした「壺形土器」も巨視的には同一範囲の中にはあっても、微視的には同一視できないものが存在する。それは善光寺平南部型を範型としながらあたかも地域性の表現とみることができる。範型のトレースが本格である少數の基本型に対して、本格を逸脱した多數の地域型の存在を認めることができる。そのうえ、奥信濃と佐久平との間には共通点の多く存在することも留意されねばならない。それは関東の櫛式土器との関連の中でも考慮されるべきものであり、地域型一型式の存在も当然ながら研究史的にも表現されるべきものと思う。

核現象と周辺現象を箱清水期の「壺」を見て来た。赤い土器追跡の一方向である。

付 編

佐久地方弥生時代 遺跡分布調査報告



佐久地方分割図（1990年：佐久教育会作成佐久地図）

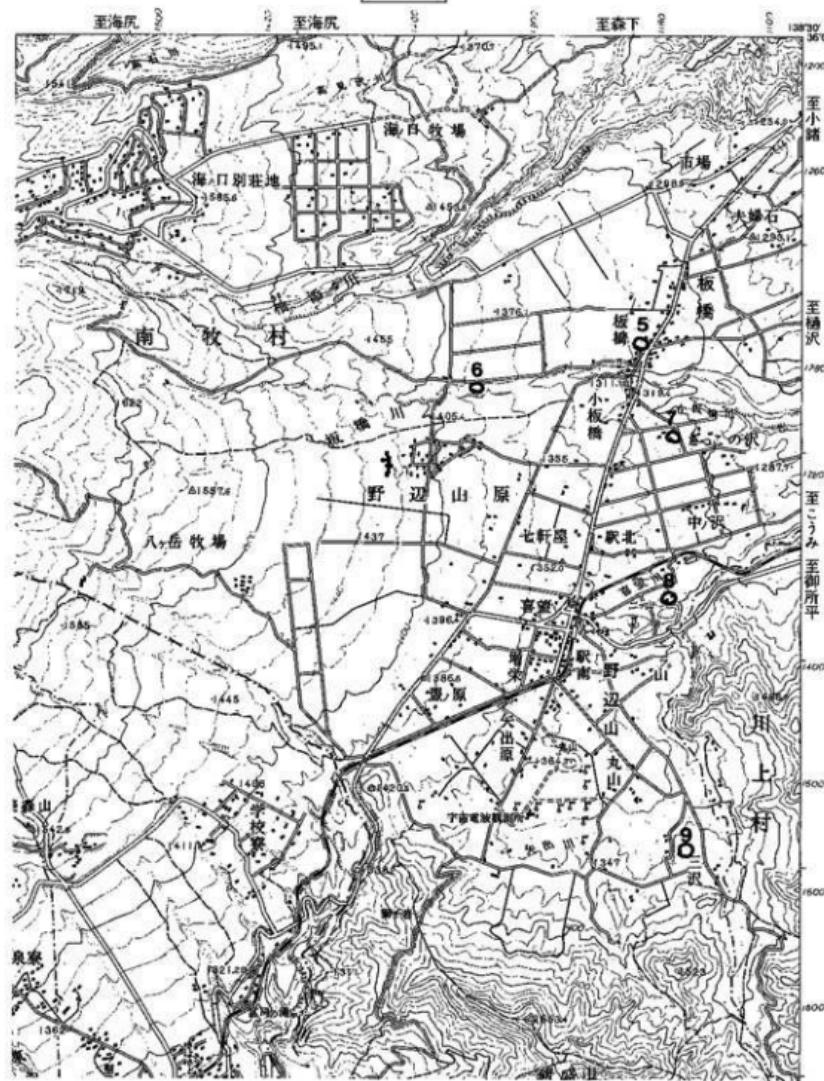
佐久地方弥生時代遺跡分布図一覧表凡例

- 1 佐久地方 2 市 7 町 7 村別に弥生時代の遺跡を抽出し、計296遺跡を分布図に表示した。分布図は国土地理院発行の1/50,000の地図を使用した。
- 2 遺跡の確認は、詳細分布図調査報告書が刊行されている市町村については、それらを基本とし、刊行されていない町村は、長野県史を基本として行った。また、遺跡一覧表を作成した後、各市町村の下記の担当会員による監修を行った。

(1) 川上村・南牧村・北相木村・南相木村・小海町・八千穂村・佐久町・白田町…	島田恵子
(2) 佐久市……………	小山岳夫
(3) 小諸市……………	花岡 弘
(4) 立科町・望月町・浅科村・北御牧村……………	福島邦男
(5) 軽井沢町・御代田町……………	堤 隆
- 3 遺跡分布図・一覧表作成は、高村・竹原・三石宗一会員が担当した。

1 A

2 A



1 B

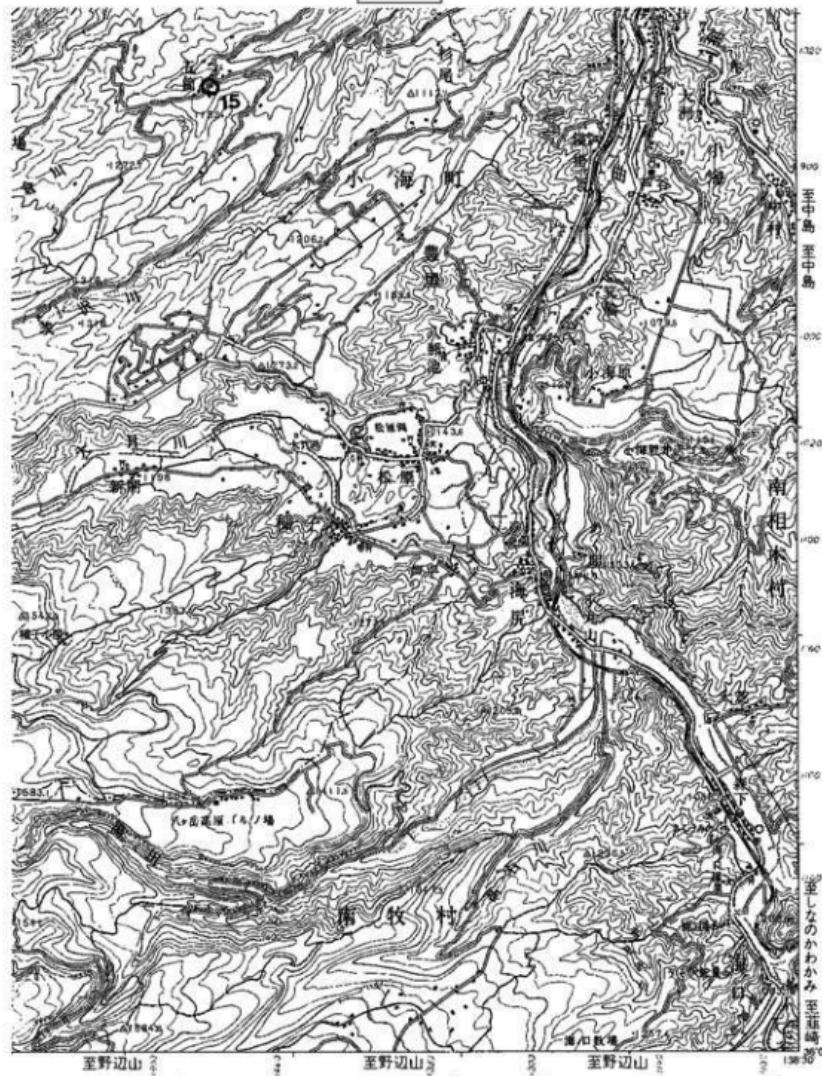
2 B



2 A

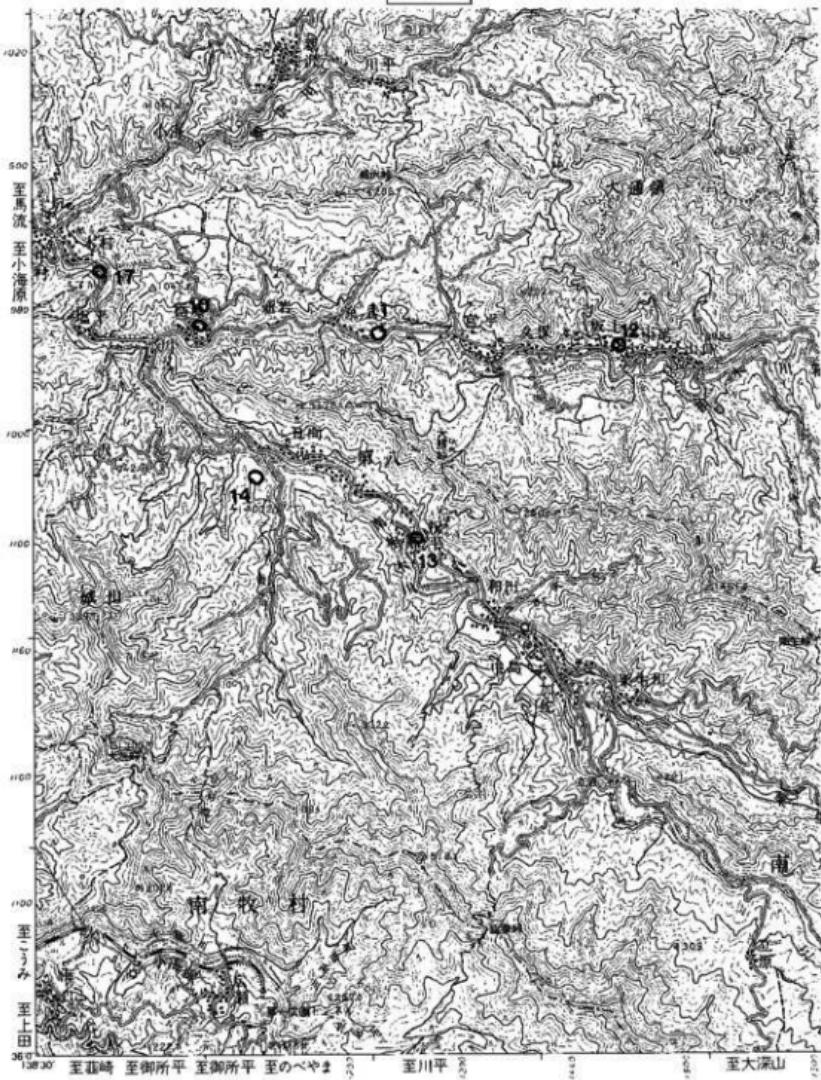
3 A

1 A



2 B

3 B



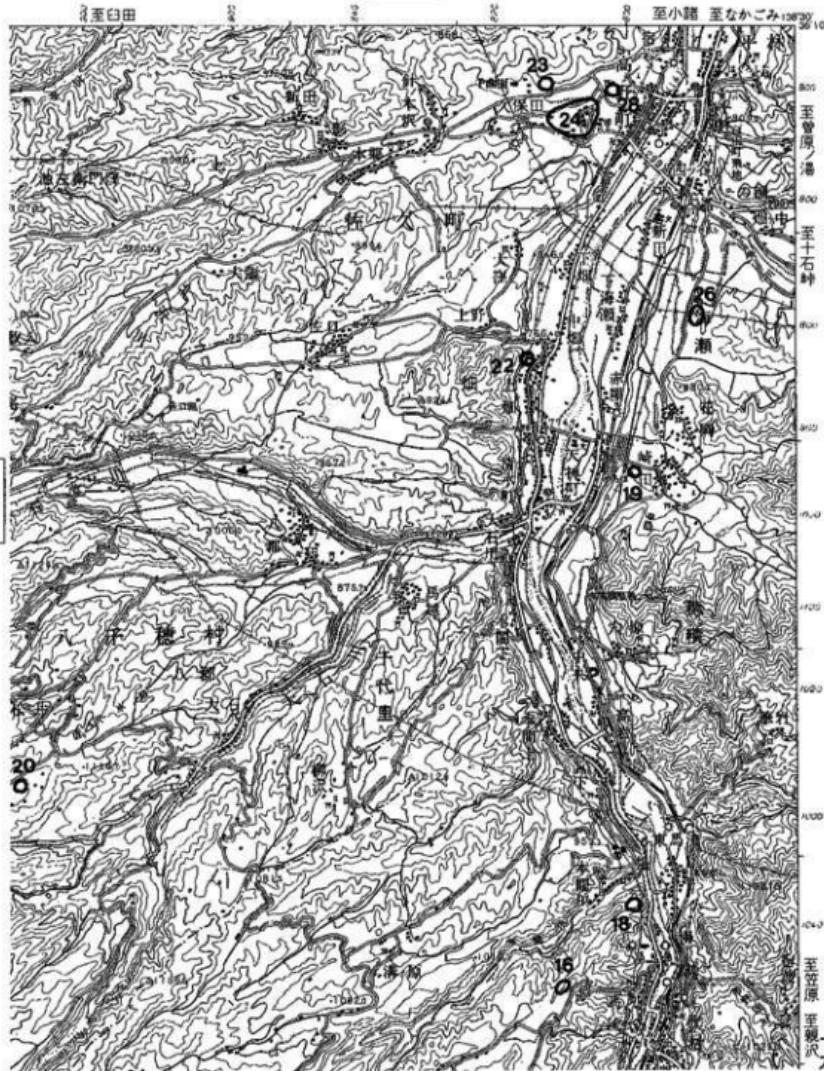
1 B

3 A

5 A

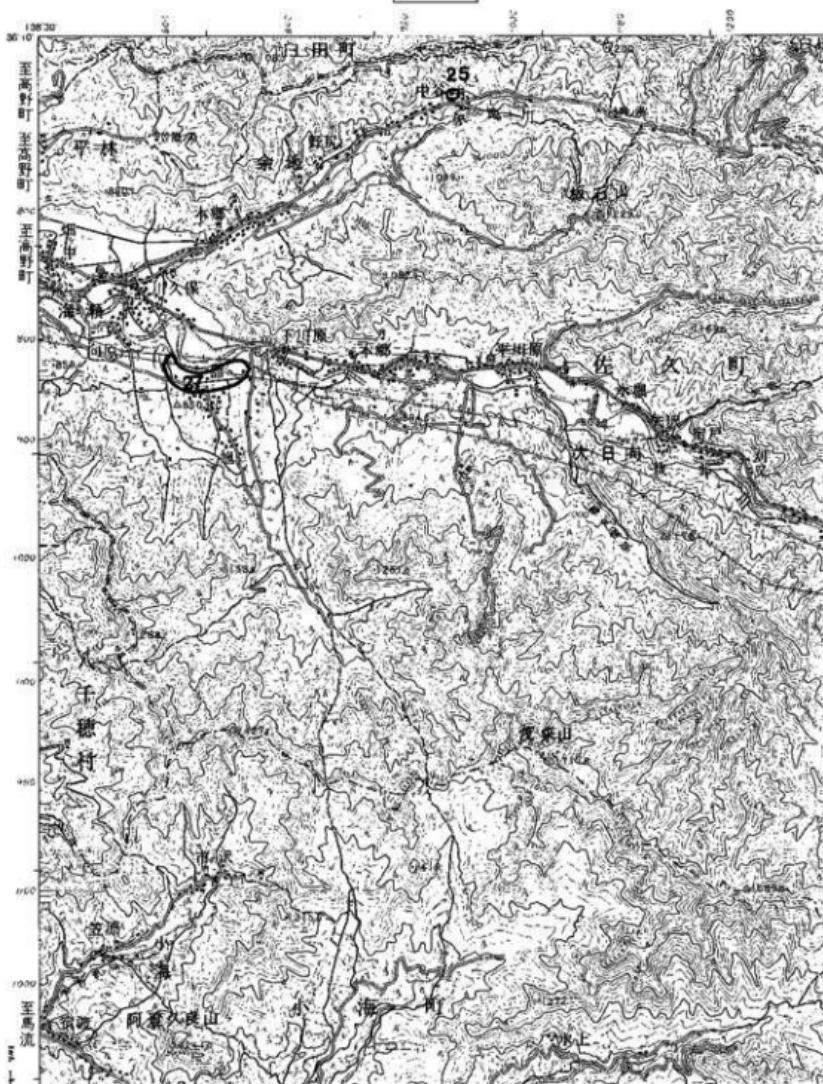
2 A

10



3 B

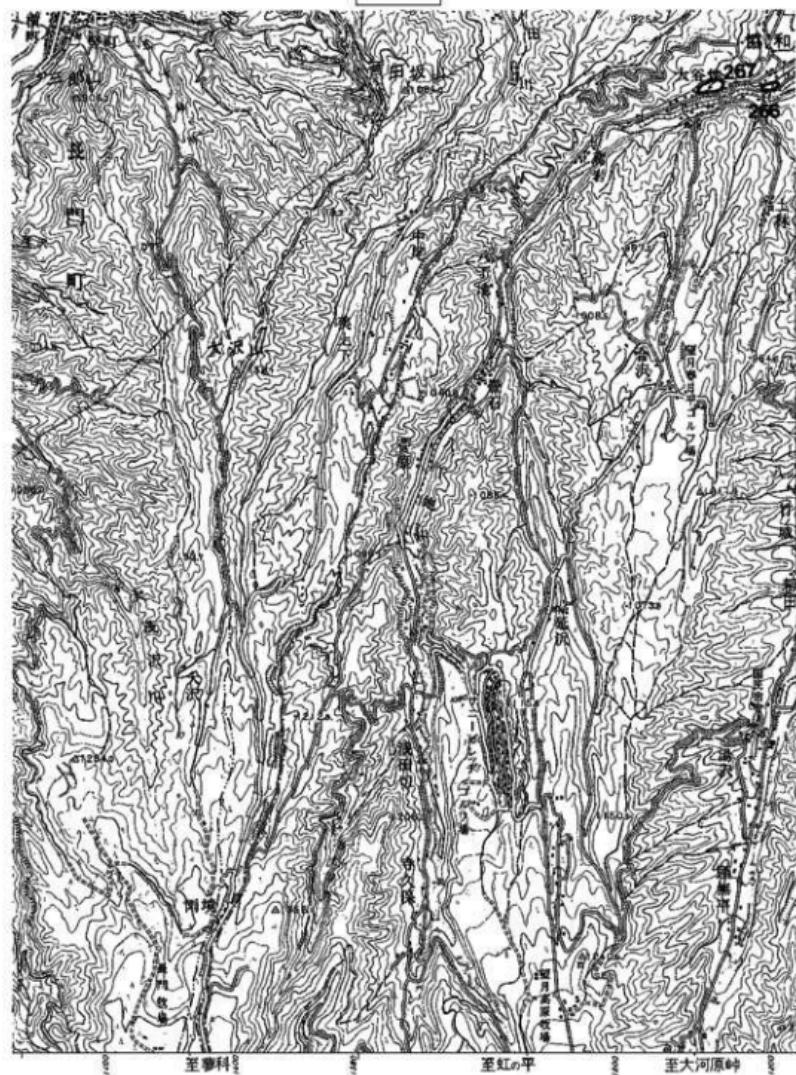
5 B



2 B

4 A

6 A



4 B

61

This figure is a topographic map showing a mountainous region with contour lines indicating elevation. The map includes numerous Japanese place names and numbers, likely representing survey points or benchmarks. Key labels include:

- Top left: 金子 (Kinsui), 上門 (Jōmon), 下門 (Shomon), 265, 284, 263, 260, 261, 259, 268, 260, 257.
- Middle left: 月山 (Tsukayama), 阿波 (Awa), 新町 (Shinmachi), 明治村 (Meiji-mura), 255, 254, 253.
- Center: 中石原 (Nakashibara), 西長者原 (Nishizanjabara), 東長者原 (Higashizanjabara), 252, 251.
- Bottom right: 64, 石見 (Iwami), 63, 62, 61, 60, 59, 58, 57, 56, 55, 54, 53, 52, 51, 50, 49, 48, 47, 46, 45, 44, 43, 42, 41, 40, 39, 38, 37, 36, 35, 34, 33, 32, 31, 30, 29, 28, 27, 26, 25, 24, 23, 22, 21, 20, 19, 18, 17, 16, 15, 14, 13, 12, 11, 10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1.

5 A

1

5 A

7 A

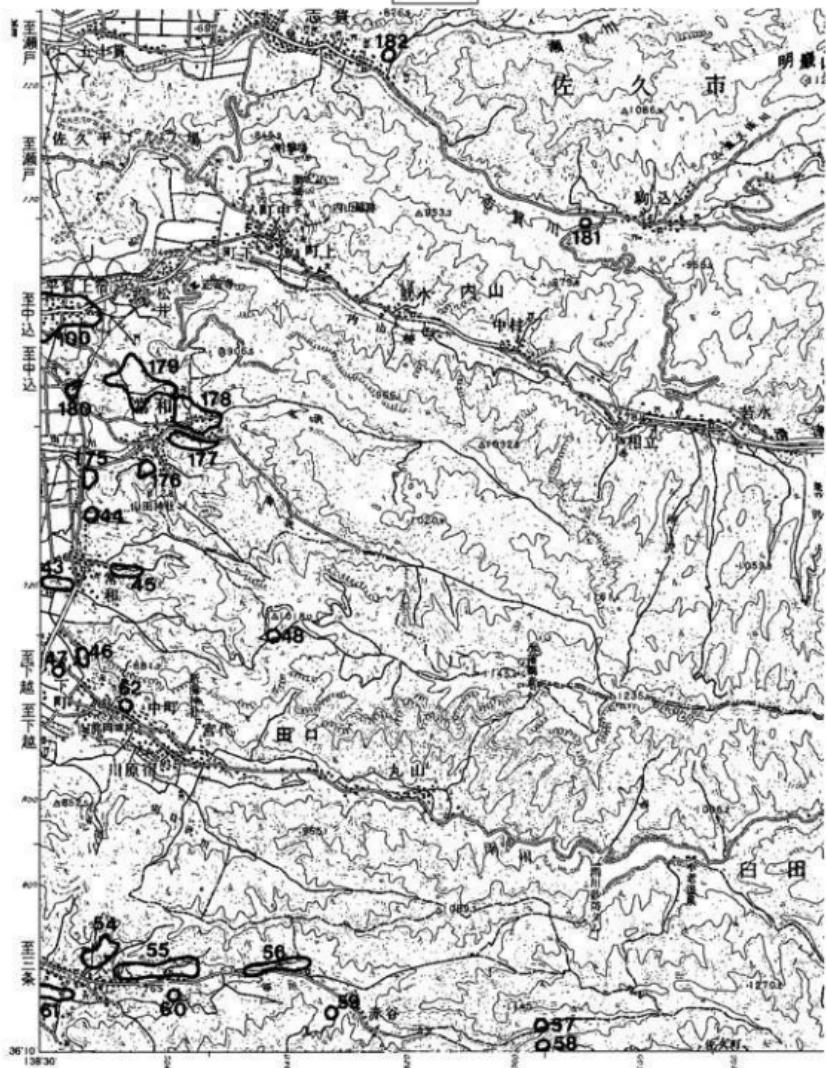
3 A

5 B

7 B

11

3 B



6 A



4 A

8 A

6 B

至羽毛山、至島川原

至島川原 上 E

至鳥川原 90

至うえだ 至上田



4 B

7 A

8 B

This figure is a topographic map of the Nagano area, specifically the region around the city of Nagano. The map features numerous contour lines indicating elevation levels. Numerous numbered points are plotted across the terrain, with labels such as:

- 229, 228, 227, 226, 225, 224, 223, 222, 221, 220, 219, 218, 217, 216, 215, 214, 213, 212, 211, 210, 209, 208, 207, 206, 205, 204, 203, 202, 201, 200, 199, 198, 197, 196, 195, 194, 193, 192, 191, 190, 189, 188, 187, 186, 185, 184, 183, 182, 181, 180, 179, 178, 177, 176, 175, 174, 173, 172, 171, 170, 169, 168, 167, 166, 165, 164, 163, 162, 161, 160, 159, 158, 157, 156, 155, 154, 153, 152, 151, 150, 149, 148, 147, 146, 145, 144, 143, 142, 141, 140, 139, 138, 137, 136, 135, 134, 133, 132, 131, 130, 129, 128, 127, 126, 125, 124, 123, 122, 121, 120, 119, 118, 117, 116, 115, 114, 113, 112, 111, 110, 109, 108, 107, 106, 105, 104, 103, 102, 101, 100, 99, 98, 97, 96, 95, 94, 93, 92, 91, 90, 89, 88, 87, 86, 85, 84, 83, 82, 81, 80, 79, 78, 77, 76, 75, 74, 73, 72, 71, 70, 69, 68, 67, 66, 65, 64, 63, 62, 61, 60, 59, 58, 57, 56, 55, 54, 53, 52, 51, 50, 49, 48, 47, 46, 45, 44, 43, 42, 41, 40, 39, 38, 37, 36, 35, 34, 33, 32, 31, 30, 29, 28, 27, 26, 25, 24, 23, 22, 21, 20, 19, 18, 17, 16, 15, 14, 13, 12, 11, 10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1.

5 A

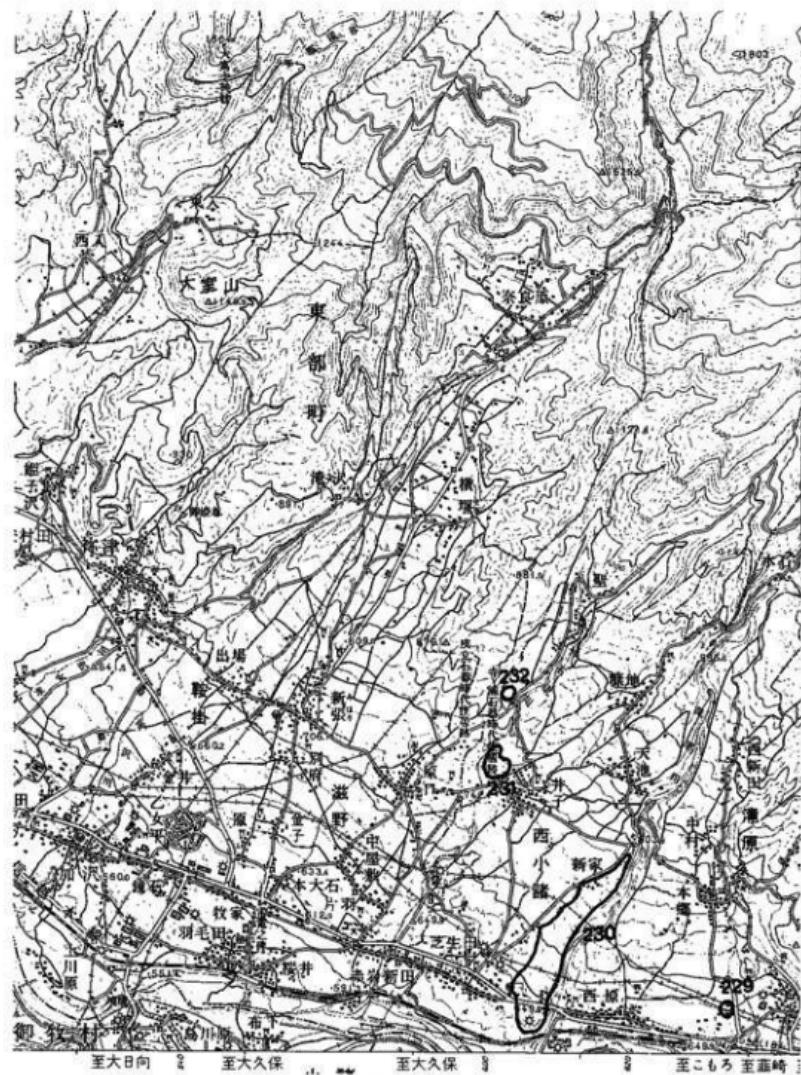
9 A

7 B

5 B

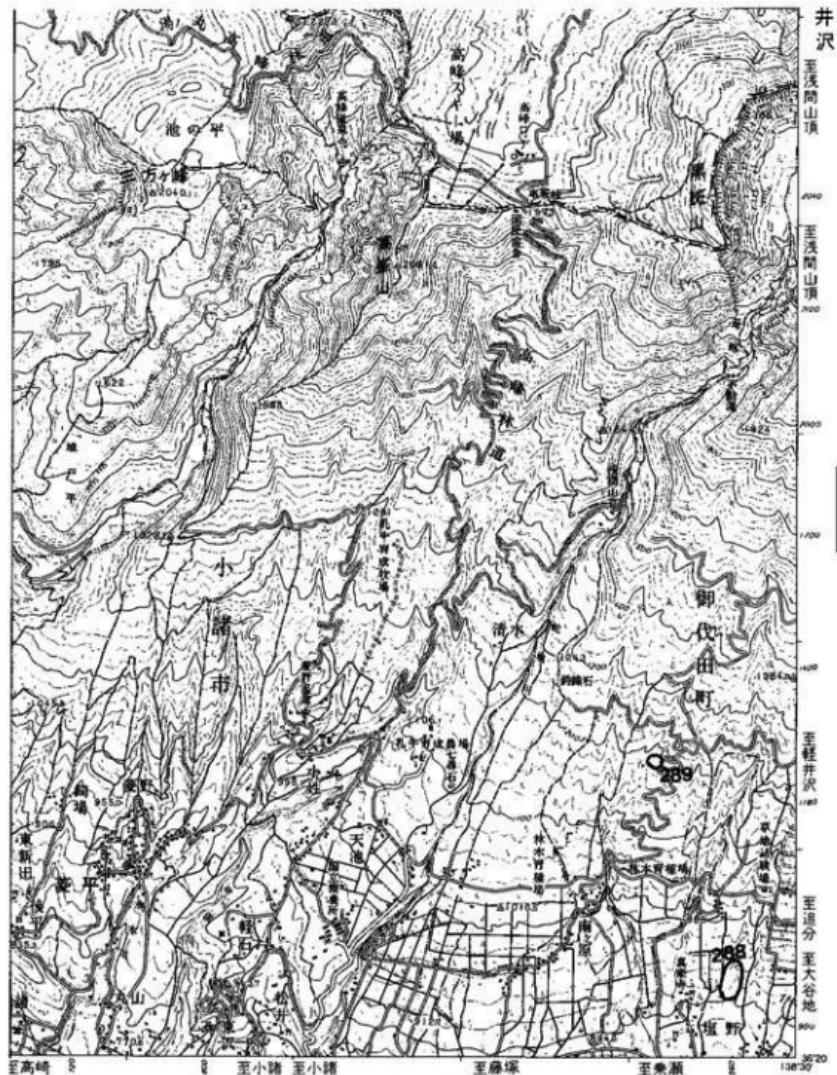
227

8 A



6 B

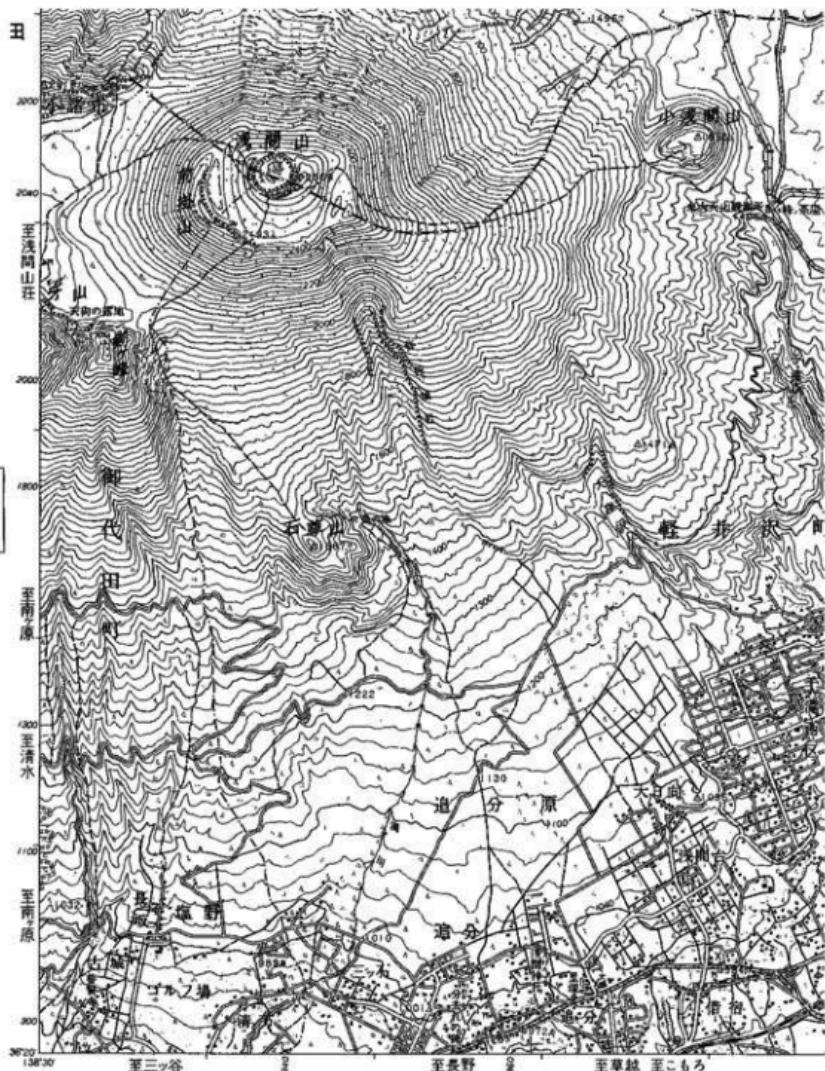
8 B



7 A

229

9 A



8 B

7 B

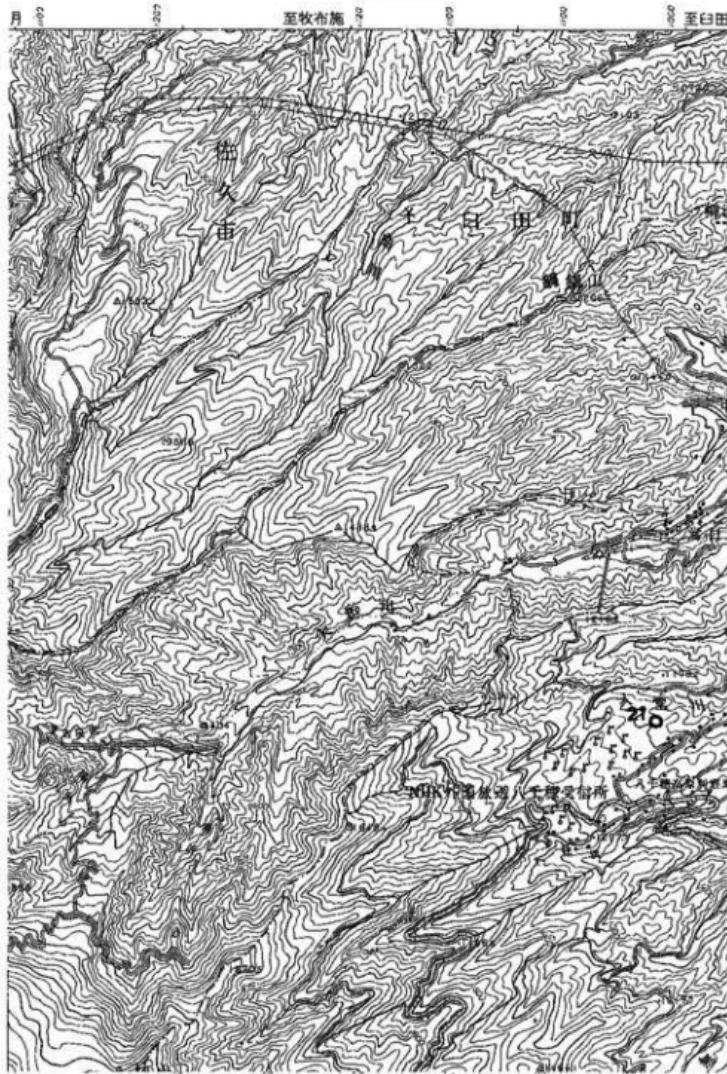
9 B



1 2

10

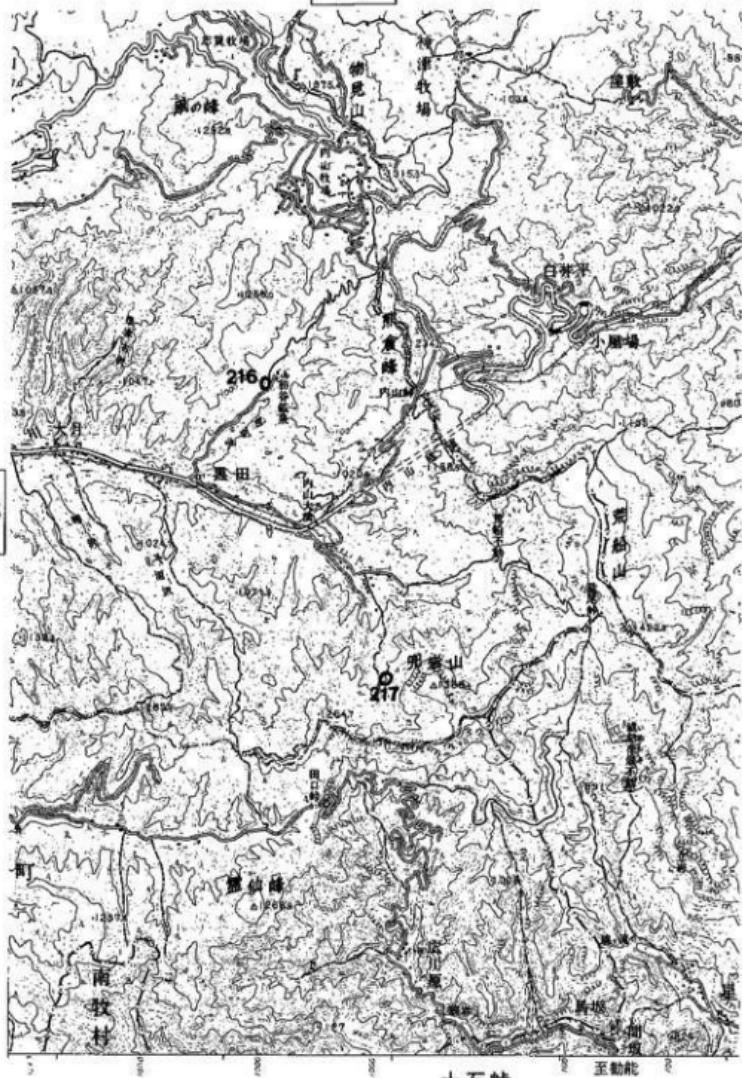
4B



1 1

1

5 B



1 2

9 B



234

11

佐久地方弥生時代遺跡一覧表

1. 川上村

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
1B	1	馬場平	御所平	台地	(?)磨製石鎌	由井茂也、由井明、由井一昭、由井祐太郎
1B	2	切草	御所平	台地	(?)磨製石鎌	由井茂也、由井明、由井一昭、由井祐太郎
1B	3	久保	橋沢	台地	(?)磨製石鎌	由井吉三郎、由井忠平
1B	4	立石	橋沢	台地	(?)土器	

2. 南牧村

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
1A	5	板橋	板橋	山麓	(?)磨製石鎌、偏平片刃石斧	
1A	6	ノミンドウ	板橋	台地	(後)箱清水式	
1A	7	ザッコの沢	板橋	台地	(?)土器、磨製石鎌	
1A	8	二ツ山	板橋	山麓	(?)土器、磨製石鎌	由井茂也
1A	9	矢出川南	野辺山	台地	(中)土器(後)土器	由井茂也、由井明、土屋忠芳

3. 北相木村

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
2B	10	京の岩	京の岩	台地	(?)土器	京の岩岩陰を含む
2B	11	柄原岩陰	柄原	岩陰	(?)柳目文土器	
2B	12	坂上	坂上	台地	後期土器?	

4. 南相木村

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
2B	13	祝平	祝平中条		(後)箱清水式	
2B	14	宮向	日向	台地	(後)箱清水式、太形蛤刃石斧	

5. 小海町

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
2A	15	五箇	千代里五箇	山麓	(?)磨製石鎌、環状石斧	有井忠雄
3A	16	蛇石	豊里・馬流	山腹	(後)箱清水式	
2B	17	塙平	塙平	山麓	(?)磨製石鎌	
3A	18	穴沢	豊里・馬流	山麓	(後)箱清水式	

6. 八千穂村

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
3 A	19	崎田原	越積・崎田原	段丘	(後)箱清水式、磨石鎌	八千穂南小
3 A	20	横道原	八郡・横道	山腹	(?)磨製石鎌	
10	21	板沢	八郡・横道	山腹	(?)土器	
3 A	22	竹の下	畠八	台地	(?)磨製石鎌	佐々木庄雄

7. 佐久町

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
3 A	23	北沢	高野町・北沢	台地	(後)箱清水式	
3 A	24	佐久西小学校裏	高野町・三本木	台地	(後)箱清水式	佐久中学校、佐久西小
3 B	25	中谷	余地・中谷	台地	(後)箱清水式	
3 A	26	中原	海瀬・中原	台地	(中)土器	佐久町公民館
3 B	27	館	海瀬・館	台地	(中)土器	草間啓助
3 A	28	宮の本	高野町・宮の本	台地	(後)土器	昭和53年調査

8. 白田町

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
5 A	29	蛇塚	白田・法印塚	平地	(?)太形蛤刃石斧	法印塚遺跡を含む
5 A	30	美里在家	白田・美里在家	平地	(中)栗林式	
5 A	31	七曲り下	加賀万	平地	(後)箱清水式	
5 A	32	下の城	白田・寺久保	山腹	(後)箱清水式	
5 A	33	横山	白田・城下	扇状地	(後)箱清水式、磨石鎌	
5 A	34	丸山	下小田切・勝間	山麓	(後)箱清水式	
5 A	35	勝間原	下小田切・勝間	山麓	(後)箱清水式	下小田切勝間と同じ 文化センター
5 A	36	栗ノ木	下小田切・栗ノ木	丘陵	(後)箱清水式	
5 A	37	五里久保	湯原	山麓	(後)箱清水式	
5 A	38	広沢	北川	山麓	(後)箱清水式	
5 A	39	難山	上中込	台地	(?)土器、銅鏡	
5 A	40	大奈良	大奈良	平地	(後)箱清水式	佐藤保、佐藤八郎、 小林耕作 金石遺跡を改名
5 A	41	原	田口原	平地	(後)箱清水式	文化センター
5 A	42	山崎	大奈良	平地	(後)箱清水式	
5 B	43	駒白山	大奈良	平地	(後)箱清水式	
5 B	44	金原	清川	山麓	(後)箱清水式	

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
5 B	45	清川入	清川	山麓	(後)箱清水式	
5 B	46	明法寺	下町	山麓	(後)箱清水式	
5 B	47	割塚	下町	平地	(?)太形蛤刃石斧	
5 B	48	芦内岩陰	清川	岩陰	(後)土器	野沢南高
5 A	49	田中	三分	平地	(中)栗林式(後)箱清水式、太形蛤刃石斧	文化センター
5 A	50	井上	三分	平地	(中)栗林式(後)箱清水式、太形蛤刃石斧	文化センター
5 A	51	遍昭寺	三分	山麓	(後)箱清水式	寺久保を改名
5 A	52	荒巻	三分	平地	(後)箱清水式	栗田遺跡を含む 文化センター
5 A	53	山際	入沢	山麓	(後)箱清水式	
5 B	54	五懸西・湯殿入	入沢	山麓	(後)箱清水式	三石延雄 清水小資料館
5 B	55	下海戸・山の前	入沢	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	56	月通沢・水石	入沢	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	57	一つ石岩陰	赤谷	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	58	滝日陰	赤谷	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	59	白庭	入沢	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	60	藤原	入沢	山麓	(後)箱清水式	三石延雄
5A-B	61	月夜平	入沢	丘陵	(後)箱清水式	三石延雄
5 B	62	神原遺場	田口下町	山麓	(後)箱清水式	神原を含む 青沼小資料館

9. 佐久市

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
4 B	63	筒井南	根岸字筒井	山麓	(?)土器	
4 B	64	大石平	大沢字大石平	山麓	(?)土器	
5 A	65	荒田	大沢字荒田	山麓	(?)土器	
5 A	66	八木本B	前山字八木本	山麓	(?)土器	
4 B	67	東立科D	東立科字立科	山麓	(?)土器	
4 B	68	東立科A	東立科字立科	山麓	(?)土器	
5 A	69	三枚平B	大沢字三枚平	山麓	(?)土器	
5 A	70	金山久保A	大沢字金山久保	山麓	(?)土器	
5 A	71	社宮司	原字社宮司他	微高地	白銅製ペンダント1、曲玉1、管玉25、鉄斧1、土器	

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
5 A	72	城 山	大沢字城山他	台 地	(後)箱清水式	
5 A	73	地 家	大沢字地家	台 地	(?)土器	
5 A	74	尾 垂	前山字尾垂	山 薦	(?)土器	
5 A	75	大 門 下	前山字大門下	微高地	(後)土器	
5 A	76	高 尾 A	前山字高尾	山 薦	(?)土器	
5 A	77	中 道	前山字中道	微高地	(?)土器	
5 A	78	一 町 田	三塚字一町田	微高地	(?)土器	
5 A	79	西 の 張	小宮山字西の張	平 地	(?)土器	
5 A	80	筒 村	根岸字筒村	山 薦	(?)土器	
4 B	81	外 輪 平	根岸字外輪平	山 薦	(?)土器	
5 A	82	後 沢	小官山字後沢	台 地	(中)住3(後)住32 方形周溝墓3	昭和51・52年調査
5 A	83	宮浦遺跡群	桜井字宮浦他	台 地	(後)箱清水式	
5 A	84	北畠遺跡群	桜井字北畠他	微高地	(?)土器	
5 A	85	西 東 山	伴野字西東山	台 地	(後)箱清水式	
5 A	86	北裏遺跡群	伴野字北裏他	台 地	(中)渠林式(後)箱清水式	
5 A	87	西裏遺跡群 西裏・竹田東	伴野字西裏他	丘 陵	(中・後)住21(後)壺棺墓1	昭和60年調査
5 A	88	居 村	根岸字居村	扇状地	(?)土器	
5 A	89	伊 势 山	根岸字伊勢山	台 地	(後)土器	
5 A	90	堀 の 内	根岸字堀の内他	丘 陵	(?)土器	
4 B	91	灘の峯 2号墳	根岸3328他	山 薦	(古・前)土器・ガラス玉 ・鉄劍他	昭和61年調査
4 B	92	上 畦	根岸字上畠	台 地	(?)土器	
5 A	93	舞 台 場	根岸字反り田	台 地	(後)土器、住13	昭和56年調査
4 B	94	小 金 平	根岸字小金平	台 地	(?)土器	
4 B	95	馬 場 平	根岸字馬場平	段 丘	(?)土器	
4 B	96	石 附	根岸字荻原	台 地	(古・前)周溝墓1	平成元年調査
6 B	97	向 ケ 原	伴野字向ヶ原	段 丘	(?)土器	
5 A	98	休 石	伴野字休石	段 丘	(?)土器	
5 A	99	東 継 井 戸	伴野字東縫井戸	段 丘	(?)土器	
5A-B	100	平賀中屋敷遺跡群	平賀字中屋敷他	段 丘	(後)土器	
5 A	101	後 家 山	平賀字後家山	山 薦	(後)土器	
5 A	102	樋村遺跡群 樋 村	平賀字樋村他	扇状地	(中)住5(後)住17	

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
5 A	103	上の台	瀬戸字上の台	扇状地	(後)住2	昭和57年調査
5 A	104 105	深堀遺跡群 深堀	瀬戸字深堀他	平地	(中・後)土器 (中・後)土器(中)住2	昭和40年調査
5 A	106	大塚遺跡群	中込字大塚	台地	(中)百瀬式(後)箱清水式	
5 A	107	梨の木	中込字梨の木	段丘	(中)土器	昭和62年調査
5A7A	108	馬瀬口遺跡群	瀬戸字馬瀬口	台地	(?)土器	
5A7A	109 110	和田上遺跡群 和田上南	瀬戸字和田上他	台地	(中)百瀬式(後)箱清水式 (中)土器、住5	昭和54年調査
5 A	111	小池	新子田字小池	台地	(?)土器	
7 A	112 113	野馬塗遺跡群 野馬塗	猿久保字野馬塗	台地	(?)土器 (後)土器、住2	昭和56年調査
7 A	114	番星前遺跡群	猿久保字番星前他	台地	(?)土器	
7 A	115	西妻神	中込字西妻神	台地	(?)土器	
7 A	116	猿久保屋敷添	猿久保字屋敷添	段丘	(?)土器	
7 A	117	寺畠遺跡群	根々井字寺畠	平地	(後)土器	
7 A	118	中原遺跡群	今井字大塚他	台地	(?)土器	
7 A	119	宮の上遺跡群	横和字宮の上他	台地	(後)土器、磨石鐵	
7 A	120	諏訪分遺跡群	根々井字諏訪分他	段丘	(?)土器	
7 A	121	赤石河原	根々井字赤石河原	段丘	(?)土器	
7 A	122	寄塚遺跡群	横和字寄塚他	段丘	(中)(後)土器	
7 A	123	鍛冶田	横和字鍛冶田	台地	(中)百瀬式(後)箱清水式	
5A7A	124	白山遺跡群	鳴瀬字白山他	台地	(?)土器	
5A7A	125	鳴瀬中里敷遺跡群	鳴瀬字中里敷他	台地	(?)土器	
7 A	126	上の平遺跡群	鳴瀬字上の平他	台地	(後)土器	
7 A	127	鳴瀬宮の前	鳴瀬字宮の前他	台地	(後)土器	
7 A	128	豊畠	鳴瀬字豊畠他	台地	(後)土器	
6 B	129	猫田	鳴瀬字猫田	段丘	(?)土器	
7 A	130	大ふけ	鳴瀬字大ふけ	段丘	(?)土器	
7 A	131	細田	鳴瀬字細田	台地	(後)土器	
7 A	132	熊の堂	鳴瀬字熊の堂	段丘	(中)百瀬式	
7 A	133	尼塚	鳴瀬字尼塚	平地	(?)土器	
7 A	134	中溝	駿原字中溝	平地	(?)土器	
7 A	135	鳴瀬神明	鳴瀬字神明	台地	(後)土器	
7 A	136	落合居屋敷	鳴瀬字居屋敷	段丘	(?)土器	
7 A	137	北道見	鳴瀬字北道見他	段丘	(後)土器	

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 A	138	大和田遺跡群	鳴瀬字大和田他	段丘	(?)土器	
7 A	139	四つ子	坂原字四つ子	段丘	(?)土器	
7 A	140	新 城	坂原字新城他	段丘	(?)土器	
7 A	141	塩名田 幅	常田字塩名田幅	段丘	(?)土器	
7 A	142	藤 塚	坂原字藤塚他	段丘	(?)土器	
7 A	143	宮の前田	坂原字宮の前田他	台地	(後)土器	
7 A	144	坂 添	常田字坂添	平地	(?)土器	
7 A	145	前田 遺跡	坂原字野岸	台地	(?)土器	
7 A	146	常田居屋敷遺跡群	常田字家地頭他	台地	(?)土器	
7 A	147	日向屋敷	根々井字日向屋敷	低地	(?)土器	
7 A	148	伊勢田	根々井字伊勢田	低地	(?)土器	
7 A	149	鳴澤遺跡群	根々井字鳴澤他	台地	(?)太形蛤刃石斧	
7 A	150	西一里坂遺跡群	岩村田字西一里坂	平地	(後)土器	昭和48年調査
	151	西一里坂 餅 田	岩村田字西一里坂他		(後)土器、住11、環濠?	昭和47年調査
	152				(後)土器、溝3(古)S字溝	
7 A	153	北西の久保	岩村田字北西の久保	台地	(中)住92(後)住38、木棺墓、方形周溝墓、銅鏡	昭和57・60年調査
7 A	154	中西の久保遺跡群	岩村田字中西の久保他	低地	(?)土器	
7 A	155	中鳴澤遺跡群	岩村田字中鳴澤	低地	(?)土器	
7 A	156	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳	台地	(後)土器、住6	昭和46年調査
	157	北一本柳	岩村田字北一本柳	台地		
7 A	158	上 砂 田	岩村田字上砂田他	台地	(?)土器	
7 A	159	松 ノ 木	岩村田字松ノ木	台地	(?)土器	
7 A	160	宮 の 西	岩村田字宮の西	台地	(後)土器	
7 A	161	宮 の 後	岩村田字宮の後	台地	(?)土器	
7 A	162	岩 井 章	岩村田字岩井章	低地	(?)土器	
7 A	163	上の城遺跡群	岩村田字丹過他	台地	(後)土器	昭和58年調査
	164	西八日町	岩村田字西八日町	台地	(中)土器、住6(後)土器、住1	
7 A	165	岩村田遺跡群	岩村田字六供後、六供、行人塚他	台地	(中・後)土器	
	166	六供後	岩村田字六供後	台地	(?)土器	
7 A	167	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊他	台地	(中)百瀬式(後)箱清水式	昭和62年調査
	168	葛 石		台地	(後)蓋棺墓	昭和53年調査
	169	清水田		台地	(中)住1(後)住10	
7 A	170	下 小 平	岩村田字下小平	台地	(後)土器、石器、住5(古・前)方形周溝墓2	昭和55年調査

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 A	171	大井城跡	岩村田字古城他	台地	(後)土器	
7 A	172	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保	段丘	(?)土器	
7 A	173	腰巻・高内	下平尾字腰巻他	段丘	(後)住1(後・末)住1 (古・前)住4	昭和62・63年調査
7 A	174	漬石	上平尾字漬石	段丘	(?)土器	
5 B	175	堤井	常和字堤井	山麓	(?)土器	
5 B	176	曲り畑	常和字曲り畑	山麓	(?)土器	
5 B	177	上向在家遺跡群	常和字上向在家他	山麓	(?)土器	
5 B	178	上官前遺跡群	常和字上官前他	山麓	(?)土器	
5 B	179	城平遺跡群	平賀字城平他	山麓	(?)土器	
5 B	180	竹原	平賀字竹原	平地	(?)土器	
5 B	181	花芝	志賀字花芝	低地	(?)土器	
5 B	182	蟻畑	志賀字蟻畑	山腹	(後)土器、人骨	
7 B	183	木戸平B	香坂字木戸平	山麓	(後)土器	
7 B	184	星敷前	香坂字星敷前	台地	(後)土器	
7 B	185	石田	志賀字石田	低地	(?)土器	
7 B	186	境内	新子田字境内	段丘	(?)土器	
7 B	187	家の前	新子田字家の前	段丘	(?)土器	
7 B	188	戸坂遺跡群	新子田字戸坂他	段丘	(後)箱清水式 (後)土器、環塗?1	昭和46・59年調査
7 B	189	戸坂	新子田字戸坂他	段丘		
7 B	190	新子田神明の木	新子田字神明の木	段丘	(後)土器	
7 B	191	池端	新子田字池端他	段丘	(?)土器	
7 B	192	筒畑遺跡群	安原字筒畑他	段丘	(後)土器 (後・末)住2、土器	昭和60年調査
7 B	192	池畑	安原字筒畑他	段丘		
7 B	193	丸山II	上平尾字丸山	斜面	(後)住?2	
7 B	194	大角	上平尾字大角	台地	(?)土器	
7 B	195	東村遺跡群	上平尾字東村他	台地	(?)土器	
7 B	196	東大久保遺跡群	上平尾字東大久保 ・古城跡他	段丘	(?)土器	
7 B	197	上の原遺跡群	横根字上の原他	段丘	(?)土器	
7 B	198	上長坂遺跡群	横根字上長坂他	台地	(?)土器	
7 B	199	芋の原遺跡群	横根字芋の原他	段丘	(?)土器	
7 B	200	唄坂	小田井字唄坂	段丘	(?)土器	
7 A	201	跡坂遺跡群	小田井字跡月他	段丘	(?)土器	
7 A	202	栗毛坂遺跡群	岩村田字東赤座他	段丘	(後・末)住1	昭和63年調査

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 A	203	西赤座	岩村田字西赤座	台地	(?)土器	
7 A	204	中久保田	岩村田字中久保田	低地	(?)土器	
7 A	205	新城	岩村田字新城	低地	(?)土器	
7 A	206	枇杷坂遺跡群	岩村田字上直路他	台地	(後)住2(後)住1	昭和60年調査上直路、琵琶坂
7 A	207	下蟹澤	長土呂字下蟹澤	低地	(?)土器	
7 A	208	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂	台地	(?)土器	
7 A	209	芝富遺跡群	長土呂字北上中原	台地	(?)土器	
7 A	210 211	周防畠遺跡群 周防畠B	長土呂字周防畠他	台地	(中・後)土器 (後)住23、周溝墓2、土坑墓17	昭和55年調査
7 A	212	西近津遺跡群 森下 西近津	長土呂字西近津他	台地	(後)住4 (後)住1	昭和63年調査 昭和46年調査
7 A	213 214	近津遺跡群 北近津	長土呂字本宮他	台地	(?)土器 (?)土器	
? 215		月明沢	?	?	(中・前)土器、石器、人骨10、鹿角等	
11 216		初谷	内山字初谷	山麓	(?)土器	
11 217		館ヶ沢B	内山字館ヶ沢	山腹	(古・前)S字甃	
? 218		町田	?	?	(中・前)筒形土器	

10. 小籠市

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 A	219	和田原遺跡群	和田・和田原他	台地	(後)土器	
7 A	220	五ヶ城	市・五加他	台地	(?)土器	
7 A	221	五領B	耳取・五領	段丘	(?)土器	
7 A	222	宮の北	耳取・宮の北	台地	(?)土器	
7 A	223	久保田	耳取・久保田	段丘	(後)箱清水式	
7 A	224	谷地原遺跡群	御影新田・池ノ上	台地	(後)箱清水式	
7 A	225	熊野塚A				
7 A	226	野岸	甲・野岸	山麓	(後)箱清水式・磨石鐵	
7 B	227	横山	丙・横山	段丘端	(後)箱清水式	
7 B	228	水	大久保・道木沢	山麓	(繩・晚)水式(後)土器	
8 A	229	諸	諸・並木他	台地	(?)土器	
8 A	230	深沢遺跡群	豊野・中宅騎馬	台地	(?)土器	
8 A	231	守の浦遺跡群	豊野・守の浦他	丘陵	(後)箱清水式	
8 A	232	日尻	豊野・日尻	山麓	(?)土器	

11. 立科町

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
6 A	233	峠反り正明寺	芦田・峠反り	台地	(後)土器	
6 A	234	古町屋敷	古町・中屋敷	台地	(後)土器	
6 A	235	古 町	芦田・野方	台地	(後)土器	
6 A	236	古町中屋敷	古町・中屋敷	台地	(後)土器、石器	
6 A	237	古町下屋敷	古町・下屋敷	台地	(後)土器	
6 A	238	大久保	茂多井・大久保	台地	(後)土器	
6 A	239	中 居	芦田・又花中居	台地	(後)土器	
6 A	240	中 村	山辺・中村	山麓	高坏1、広口壺1	
6 A	241	上 宮 地	芦田・上宮地	台地	(後)土器	
6 A	242	中 宮 地	芦田・中宮地	台地	(後)土器・太形蛤刃石斧	
6 A	243	唐 池	芦田・赤池	台地	(後)土器	
6 A	244	中原丸山	芦田・赤池	台地	(後)土器	
6 A	245	中原 上	古町・中原	台地	高坏1、広口壺1、瓢形壺2、浅鉢1、合付壺2	
6 A	246	刑 府	福原・宮の前	台地	(後)土器	
6 A	247	仏 沢	塩沢	台地	(?)太形蛤刃石斧	
? 248		池 の 平	芦田・八ヶ野	湿原	(後)土器	
? 249		古 堂 下	芦田・古堂下	台地	(後)土器	
? 250		木 宮	茂多井・大久保	台地	(後)箱清水式	

12. 望月町

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
4 B	251	五里坂	布施・五里坂	山麓	(後)箱清水式	
4 B	252	家 下	布施・家下	台地	(?)偏平片刃石斧	
4 B	253	大間々	布施・大間々	山麓	(後)箱清水式	
4 B	254	城 平	布施・城平	山麓	(?)磨製石鎌	
4 B	255	入片倉	春日・入片倉	段丘	(?)土器・磨製石鎌	
4 B	256	本 堀	春日・堀端	平地	(後)箱清水式	
4 B	257	宮 平	春日・宮平	段丘	(後)箱清水式	
4 B	258	新 小 路	春日・新小路	段丘	(後)箱清水式	
4 B	259	池 田	春日・池田	台地	(?)石包丁・環状石斧	
4 B	260	金 塚	春日・金塚	台地	(?)織文土器・磨石鎌	昭和56年調査
4 B	261	矢 那 田	春日・矢那田	段丘	(?)太形蛤刃石斧・石槌	

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
4 B	262	中道	春日・中道	段丘	(後)箱清水式・磨石鐵	
4 B	263	下ノ宮	春日・下ノ宮	台地	(後)箱清水式・石鐵	
4 B	264	神明社	春日・下ノ宮	段丘	(後)箱清水式	
4 B	265	十二平B	協和・十二平	台地	(?)櫛搔状文土器	昭和53年調査
4 A	266	山ノ神B	協和・山ノ神	段丘	(?)櫛搔状文土器	平成元年調査
4 A	267	平石	協和・平石	段丘	(?)太形蛤刃石斧・櫛搔状文土器・磨石鐵	昭和62年・平成元年調査
6 B	268	符ヶ屋敷	望月・符ヶ屋敷	段丘	(後)箱清水式	
6 B	269	楓ノ木	望月・楓ノ木	段丘	(?)土器	
6 B	270	柿ノ木	望月・柿ノ木	段丘	(後)箱清水式	
6 B	271	中平	望月・中平	台地	(後)箱清水式	
6 B	272	岩清水	望月・岩水・唐松	段丘	(?)櫛搔状文土器	昭和60年調査

13. 浅科村

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
6 B	273	上屋敷	五郎兵衛新田	丘陵	(後)箱清水式	
7 A	274	塩名田原	塩名田	段丘	(後)箱清水式	
7 A	275	砂原	塩名田	段丘	(後)箱清水式	
6 B	276	上の平	御馬寄	渓谷	(後)箱清水式	
7 A	277	田中島	御馬寄	渓谷	(後)箱清水式	
6 B	278	入道	塩名田	渓谷	(後)箱清水式	
6 B	279	大門崎	桑山	山麓	(後)箱清水式	
6 B	280	天神平	桑山	山麓	(後)箱清水式	
6 B	281	明神平	桑山	山麓	(後)箱清水式	
6 B	282	入の沢	桑山	山麓	(後)箱清水式	
6 B	283	須釜原	遠田	山麓	(後)箱清水式	

14. 北御牧村

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
6 A	284	八幡山	八重原・下八重原	段丘	(?)磨製石鐵	
6 B	285	下前田	大日向・下前田	平地	(後)箱清水式	

15. 御代田町

図版	No.	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 A	286	曾根	西星敷	台地	(後)箱清水式	
7 A	287	西島	塩野・西島	平地	(?)磨製石鐵	

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
8 B	288	城之腰	塙野・城之腰	山腹	(後)土器	
8 B	289	山穴洞穴	塙野・浅間山	山麓	(?)土器、イノシシ、シカ、サル骨	昭和47年調査
7 B	290	下屋敷	面替・下屋敷	丘陵	(後)土器、磨石斧	
7 B	291	宵平	豊村・宵平他	段丘	(?)磨製石鏃、紡錘車	

16. 軽井沢町

図版	No	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考
7 B	292	赤名木沢	発地・赤名木沢	山麓	(後)土器	
7 B	293	茂沢	茂沢	山麓	(後)精清水式	
7 B	294	杉瓜	発地・杉瓜	山麓	(後)土器	
9 B	295	長倉県	長倉・上郷他	丘陵麓	(後)住2、土器、石器、砥石	昭和51年調査
9 B	296	弁天C	長倉・二夕原	段丘	(後)土器	

基本参考文献

- 1956 「信濃史料 第一巻上・下」 信濃史料刊行会
- 1976 「北陸新幹線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」 長野県教育委員会
- 新津開三他 1977 「佐久地方における埋蔵文化財の分布」 佐久教育委員会歴史研究委員会
- 福島邦男 1981 「北佐久郡立科町埋蔵文化財分布調査報告書」 立科町教育委員会
- 1980 「佐久町遺跡詳細分布調査カード」 佐久町教育委員会
- 1981 「長野県史考古史料編 第一巻(1) 遺跡地名表」 長野県史刊行会
- 1981 「望月町遺跡詳細分布調査報告書」 望月町教育委員会
- 1981 「遺跡詳細分布調査報告書」 北相木村教育委員会
- 1984 「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」 佐久市教育委員会
- 1984 「川上村遺跡詳細分布調査報告書」 川上村教育委員会
- 1986 「軽井沢町遺跡詳細分布調査報告書」 軽井沢町教育委員会
- 1987 「小諸市遺跡詳細分布調査報告書」 小諸市教育委員会

あとがき

事務局長
井出正義

ようやく、「赤い土器を追う」ができあがった。思えば長い道程であった。赤く朱を塗られた弥生式土器は佐久だけのものではない。千曲川水系全体に亘って分布する。しかし、佐久平を覆い尽くすように出土するこの不思議な美しさをもつ赤い土器は、佐久に住む我々にとって、それが自分達のものであり、あたかも佐久の歴史の原点であるかのような親しみをおぼえる。佐久考古学会が、「赤い土器」を追って、これを一冊の本にまとめてみようと、いう考えはかなり早くよりあったが、これがはっきりとした形に示されたのは昭和53年（1987）1月31日発行の「佐久考古通信」No.9で、第2回例会の予告として「赤い土器を追おう！」の具体的検討—と記されていた。それから既に12年が経過している。この12年は長すぎたのだろうか。いつになったらできるのか、互いにいらだって議論したこともある。しかし、この間に急ピッチな佐久地方の開発に伴って遺跡の発掘調査が進んだ。

昭和52年佐久市後沢遺跡で初めて方形周溝墓発見、55年下小平遺跡で終末期のベッド状遺構をもつ住居址・古墳時代初頭の方形周溝墓から、「弥生式土器解体期の様相を示す土器」の検出、58年小諸市久保田遺跡で箱清水式土器に東海系土器を伴う住居址・周溝墓の発見、60年佐久地方弥生中期後半最大級撫点集落北西の久保遺跡の全面調査と15点の銅鏡を装着した成人骨が出土した弥生後期の上直路遺跡の発掘、61年には弥生的様相を残しながら、古墳ナイズされた前方後方形の墳墓群の第2号墳の調査等、毎年息つく暇もなく新しい資料の発見が続いた。これら一連の新資料の発見は、從来佐久地方の盲点とされた古墳時代前期の解明にも道を開くものと期待される。

我々が辛抱強く堪えていた十年余の歳月も決して無駄ではなかった。その間に蓄積された若い研究者の実力と、多数の貴重な発掘資料が集大成されて、いま「赤い土器を追う」を世に送り出すことのできる喜びはたとえようもない。編集の怠慢が結果として幸いした。こんな自己弁護を繰って編集部のお詫びにかかる次第である。

前事務局長
木内 捷

長年に亘る労苦が実を結び、ここに「赤い土器を追う」が刊行できることは、偏に関係者の努力の賜物であることは言をまちません。

願ひますと昭和53年1月例会において、高村会員の提唱により地元考古学会員による研究活動が始まり、以来13年という歳月を重ね漸くにして我国最高地点の弥生文化を、また国内に例を見

ない地域特有な「真っ赤な土器」を世に送り出せることは、共々に喜びとするところあります。

昭和55年当学会総会での記念講演で、戸沢充則氏（明治大学教授）が「信州の考古学と地域研究」というテーマで、今後の考古学研究における地域研究者の方向付けが示唆されたことも大いなる励みであったことは感謝に堪えませんでした。

幾多の軒輦曲折を乗り越えて完成を見ることができましたのも多勢の仲間の結束があったからに他ありません。

本書は、地域の考古学会による学習の集大成であることが一番の特徴であります。一人でも多くの方々に触れられることを願うものであります。

刊行を直前にして（追記）

昨年、6月頃、ふと気が向いて「赤い土器を追う」をまとめようと思いつつ立ってから1年の歳月が経過した。当初は本書の刊行に当たって、5年以上足を引っ張り続けてきた佐久市分（小山、林が担当）の原稿が出来れば簡単に上梓出来るものと思い、気楽に編集を再開したのだが、後になってそれがとんでもない見込み違いであることを思い知らされた。原稿の清書（ワープロへの打ち込み）、未実測資料の図化、図版の貼り込み・レイアウト等、今振り返ると実に気の長い作業、そして何よりもしんどかったのが考察編の原稿の催促だった。由井会長・森嶋先生始め諸先輩には幾度となく、強迫めいた事を言ってしまった非礼をお詫びしたい。

ともかく、間もなく佐久考古学会が10年余をかけて行ってきた共同研究の成果が公表されようとしている。世間の評価はどうであれ、片田舎の小さな学会が執意として一つの研究テーマに取り組み、まとめあげられることを、私は会員の一人として誇りに思うし、嬉しくて仕方がない。

最後になりますが、日頃尊敬して止まない工藤善通先生から、本書に対して心温まる推薦のお言葉をいただきました。本当にありがとうございました。

また、伴野稀一郎氏、草間吾助氏、青沼郷土館、佐久町教育委員会、望月町教育委員会、佐久市教育委員会からは歴史上重要な資料の掲載をご許可いただき、ご協力を賜った。御厚意に対し心から感謝申し上げます。

最後の最後、本書がここまでに至ったのは、貧乏学会の心意気を汲んで、無理を承知で印刷製本を引き受け下さった鬼灯書籍の木戸社長、児林さんのご尽力によるところが大きい。損な仕事を押し付けてしまい申し訳無い気持ちでいっぱいですが、お陰様で佐久考古学会に大きな財産が出来ました。

（T. K）

学長の来年のやりがいはないが、
皆所里のようないつもアシストしない
美事な地道な地域開拓の成果を
慶祝して貰う予定です。 フル



Y $\frac{1}{2}$ (2, 2, 2, 2)

二十一



赤壁上集

二年目の頃から目がめた赤い
土器は、私に考へ堂に対する
情熱をより一層かみ立てた。

卷之三

藝文志

大久文化鳥山比部

赤き工器岩村田式

久喜山
御守り
見はれを埋め立分は

林家集

工路を進む
助川用久

卷之三

木系也

卷之三

46

2

卷之三

三

卷之三

通鑑

本書についてご意見・ご批判・ご感想がありましたら下記の執筆者までお便り下さい。

氏名	住所	電話番号	執筆分担
由井茂也	〒384-14 川上村御所平389	0267(97)2401	第2章2節川上村
白倉盛男	〒385 佐久市岩村田2244	0267(67)5032	第1章佐久平の弥生時代の地形と水稲米作の変遷
小山岳夫	〒385 佐久市新子田1910-16	0267(67)1202	第2章経緯 佐久市 第3章編年 第4章佐久平 弥生文化の特質
井出正義	〒384-11 小海町東馬鹿5047	0267(92)3171	第2章2節小海町外 第4章姉路の想定
島田恵子	〒384-06 佐久町羽黒下110	0267(86)3143	第2章2節佐久町 第4章南佐久郡における弥生 時代豪農期の土器群について
三石延雄	〒384-06 白田町入沢2988	0267(82)4101	第2章2節白田町
黒岩忠男	〒384-03 白田町白田1736	0267(82)2487	第2章2節白田町
福島邦男	〒384-22 望月町協和1374	0267(53)4150	第2章2節浅科村・立科町・北御牧村・望月町
花岡 弘	〒384 小諸市御影新田1965-2	0267(23)5797	第2章2節小諸市
堤 隆	〒385 佐久市岩村田1317-1	0267(68)3696	第2章2節御代山村
渡辺重義	〒389-01 軽井沢町1148	0267(42)4014	第2章2節軽井沢町
小林英寿	〒385 佐久市岩村田3372-7	0267(68)6309	第2章3節東部町の様相
助川朋広	〒385 佐久市猿久保912-2	0267(68)6392	第4章弥生時代の炉内考
青木一男	〒381-12 長野市松代町清野1941	0262(78)6177	第4章千曲川流域における弥生後期土器群について
篠原浩江	〒384-22 立科町茂田井1611-4	0267(53)2433	第4章弥生時代の特殊住居址
竹原 学	〒385 佐久市安原1424-225	0267(68)6090	第4章赤い土器の製作技術
林 幸彦	〒385 佐久市下平尾2236	0267(67)0969	第4章赤色顔料の分析
高村博文	〒384-01 佐久市中込3734-27	0267(63)2406	分布図・一覧表
森嶋 稔	〒389-08 埼科郡戸倉町黒彦69	0267(75)2837	第4章柱現象と周辺現象

佐久考古学会20周年記念事業
佐久考古6号 赤い土器を追う

1990年7月27日発行

定価 3,500円（本体3,398円）

編集 佐久考古学会 小海町東馬鹿5047 井出正義方

発行者 由井 茂也

印刷所 ほおづき書籍



佐久地方弥生時代遺跡
分 布 図

1 : 100,000

